
第七独立機動艦隊～威風堂々!!世界の覇者～

0 0 7

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

第七独立機動艦隊〜威風堂々！！世界の覇者〜

【Nコード】

N7946F

【作者名】

007

【あらすじ】

2034年9月11日に起こった同時多発テロから、世界は狂い始めた。世界は再び二極対立となり遂には第三次世界大戦へと発展した。連合国側と中東方面側は攻防を続けるが、連合国側には無敗軍事超大国の日本がいる。2035年の技術力は日本軍を無敵軍隊に進化させていた。最強無敵軍隊が敵の国家を崩壊させていく。新たな嵐が起こる時、大和の咆哮が世界に鳴り響く！！

プロローグ

2034年9月11日

日本連邦首都東京

戦後日本の、世界の中心として発展してきた東京は、何時もと変わらぬ時間が流れていた。

しかし、今日は違うみたいだ。

東京タワー

15年前に完成した東京スカイツリーに電波塔としての役目を譲渡したが、未だに東京タワーは観光名所として名高い。

今日も、展望台には多数の観光客が来ていた。

「きゃ〜、怖い。」

「何言ってるんだよ、東京スカイツリーの方がもっと高いぞ。」

「だって怖いんだもん。」

「はいはい、分かりましたよ。」

「何よ!!!!!!」

観光名所としても名高いし、デートスポットとしても有名だ。

「おい、あの飛行機おかしくないか?」

「えっ!?!?!」

「あれだよ、あれ。」

「あっ!!!!本当だ。」

「真っ直ぐこっちに向かってくるぞ。」

「そんな事ないでしょ、こんな所は航路からズレてるんだから空軍に警告されてるはずよ。」

「いや、だからおかしいんだよ。」

「大丈夫……………」

「あっ……………」

突如、日本航空のF - 777が東京タワーに激突した。

東京タワーは、すく間に崩壊した。

霞ヶ関

「皆、逃げろッ！！！！！」

霞ヶ関の世界貿易センタービルにもF - 777が激突した。

国防総省

「救急車はまだか！！！！！」

「駄目です！！！！東京タワーと世界貿易センタービルにも航空機が激突してそちらで手一杯です。」

「糞ッ！！！！！」

2034年9月11日

この日、東京タワー・世界貿易センタービル・国防総省にF-77
7が激突する同時多発テロが発生した。

3時間後には内閣総理大臣が日本連邦非常事態宣言を発した。

そして、日本4軍に災害救助出動を命じ、救助にあたらせた。

その2時間後にはアメリカ合衆国・イギリス・神聖イスラエル神国・
ハワイ王国・日本連邦参加国（満州皇国、インド、フィリピン、イ
ンドネシア、ブルネイ、タイ、マレーシア、パプアニューギニア）・
オーストラリア・ニュージーランド・カナダ・フランス・オランダ・
スペイン・デンマーク・アイスランド・スイス等主要国が遺憾の意
を表明。

日本に対して、支援を決めた。

日本は翌9月12日にハワイ王国の国際連邦で総会を開き、テロと
の戦いを宣言した。

しかし、これが翌年の第二次世界大戦に発展しようとは誰も考えられなかった。

プロローグ（後書き）

次回からは1943年から2034年までの歴史を書きたいと思えます。それが終わっても同時多発テロから第三次世界大戦の政治状況を書きますから、戦いはまだまだ先になります。

艦魂や車魂もそれからです、しばしお待ちください。第二部は第一部より長くしますので、よろしく願います。

本文中に登場したF-77

7は中島航空機が社名変更して富嶽航空機にして、ジャンボジェット機を生産し始めた富嶽-777です。ようは旅客機です。

1943年～1950年（前書き）

今回から数話続けて時代の流れ、よつは歴史を書きます。
お付き合いください。

1943年～1950年

1943年8月10日

大日本帝國は富嶽戦略空軍によるドイツ第三帝國首都ベルリン核攻撃を行った。計画を変更し、2発の原爆をベルリンに投下。ベルリンは消滅し、ヒトラー以下ドイツ第三帝國の首脳は全員消滅した。ベルリン消滅の連絡を受けた日米英統合艦隊はイギリス・グレートブリテン島、ペンザンサス上陸作戦を開始。日米英の上陸部隊が上陸を始めた。順調に上陸を進め、全上陸部隊の殆んどが上陸を完了し、作戦が佳境を迎えた時にドイツ海軍が現れた。レーダー提督率いる大艦隊である。主力はフリードリッヒデアグロッツセ級2隻であった。このフリードリッヒデアグロッツセ級はドイツが国家の威信にかけて建造した巨大戦艦である。全長350メートル・満載排水量12500トン、主砲は51センチ砲連装4基8門。第七独立機動艦隊の大和級に迫る大きさである。このフリードリッヒデアグロッツセ級2隻に、グラーフツェッペリン級2隻、ビスマルク・ティルピッツ・シャルンホルスト・グナイゼナウの4隻、巡洋艦・駆逐艦各10隻ずつの大艦隊である。このドイツ艦隊を迎え撃つたのは、大日本帝國海軍連合艦隊第七独立機動艦隊。両艦隊の壮絶な砲撃戦が始まった。第七独立機動艦隊の戦艦は三式射撃レーダーを装備しており最大射程から射撃が可能、そしてドイツも光学技術においてはトップレベルである。両艦隊は初弾から命中弾を出した。しかし両艦隊の戦力投射数には大きな差があった。ドイツ海軍はフリードリッヒデアグロッツセ級2隻の51センチ砲16門、第七独立機動艦隊は大和級3隻の51センチ砲27門。この戦力投射数の違いがフリードリッヒデアグロッツセ級の命運を決めた。フリードリッヒデアグロッツセ級は確かに歴代のドイツ戦艦よりは強固であったが、大和級の超々重量徹甲弾は従来の砲弾とは桁違いの破壊力を有してい

た。その砲弾を受けフリードリッヒデアグロツセ級は、戦闘能力を失い大破した。ビスマルク・ティルピッツ・シャルンホルスト・グナイゼナウも近江・尾張を筆頭に、巡洋艦・駆逐艦・潜水艦の攻撃で全艦大破した。グラーフツェッペリン級は艦載機を発進させずに降伏した。ドイツ海軍最後の艦隊は全艦鹵獲という最後を遂げたのだ。

上陸を果たした日米英連合陸軍は、ロンドンへ向けて進撃を開始した。主力戦車は大日本帝國が20式重戦車・アメリカがM26パーシング・イギリスがセンチリオン。対するドイツはティーガーとパンター。連合陸軍とドイツ陸軍の両戦車師団は、イギリス南部のサウサンプトンで激突した。両戦車師団の砲撃戦は熾烈を極めたが、最終的には連合陸軍の勝利となった。戦車個体の性能はもとより、空母艦載機による空襲・イギリス海峡からの艦砲射撃。そしてアメリカ本土から出撃した、富嶽重爆撃機による空襲。これらの支援はドイツ陸軍を確実に追い込んでいった。そして8月20日、ドイツ陸軍は降伏。イギリス南部サウサンプトンにおける友軍の降伏は、イギリス各地のドイツ軍の士気を低下させた。それ以後ドイツ軍は戦わずに降伏。9月1日にはロンドンを解放。ラジオ放送でイギリス全土にロンドン解放を宣言。ドイツとその占領国に対してもロンドン解放をラジオ放送により宣言した。この放送はレジスタンスに勇気を与えた。フランスではレジスタンスが再び活発に動き始め、ドイツの混乱に拍車をかける事になった。何せ帝國の首脳陣が全員死亡し、そんな時にレジスタンスが動き始めたからだ。

そして9月13日。最後のイギリス占領軍がエディンバラで降伏。

イギリス全土が日米英連合陸軍により解放された。イギリス解放により、カナダに亡命していたチャーチル内閣と国王一家がイギリスに帰国、イギリスの復興を開始した。イギリスにはアメリカ本土駐輪の富嶽が進出。アメリカもB29をイギリスに進出させた。これによりドイツ及びその占領国への空襲が開始された。

そして10月5日。ノルマンディー上陸作戦が開始された。日米英の統合艦隊がノルマンディー沿岸に集結。ペンザンサス上陸作戦を凌ぐ日米英連合陸軍180個師団が上陸。『ドイツヨーロッパ要塞』と呼ばれていた、ヨーロッパ大陸に連合軍が足を踏み入れたのだ。ノルマンディー上陸前の事前攻撃は、ドイツ軍将兵に『この世の終わり』と呼ばれる程に熾烈であった。それに加えヒトラーが死亡し、新政権を樹立しようとしていたロンメルがベルリンにいたため、現場指揮官が不在であったのもドイツ軍の不運であった。

10月31日にはパリを解放。ドゴール大統領が帰国した。パリ市民はパリを解放した連合軍を歓迎した。レジスタンスもパリ解放により、一つの目標は達成した事になる。11月18日にはフランス全土を奪還した。10月4日にはソ連軍がヒトラー死亡で混乱していたモスクワ大公国に進行。モスクワ大公国は戦力も貧弱で、戦車はドイツの中古車I号戦車しかなかった。そんな国へ戦車大国ソ連が侵攻した。ソ連の主力戦車は、IS-3重戦車・IS-4重戦車である。戦力差は歴然としており、僅か6日で奪還した。11月3

0日にはフランクフルトで大規模戦車戦が勃発。連合陸軍とドイツ軍の熾烈な戦いが繰り広げられた。ドイツ軍は国力の総力をあげた新型戦車を投入。E-100と超重戦車 Maus である。この2種類の戦車こそ、ドイツの決戦兵器だ。国内に残るガソリンを掻き集め、最終決戦を挑んできた。連合陸軍は物資においては、遙かにゆとりがある。敵の戦車とは戦わずに、ガソリンを消費させる作戦に出た。ドイツ軍は逃げ回る敵を追い掛けるが、ガソリンが足りずにガス欠に陥る車輛が続出した。そこへ富嶽とB29の爆撃支援を受け、連合陸軍が攻撃を開始。さすがのE-100とMausもこの攻撃には耐え切れず、次々と破壊されていった。最終決戦と言われたフランクフルト戦車戦も連合軍の勝利となった。

12月5日にソ連陸軍と大日本帝國空挺師団がアウシュビッツ強制収容所を強襲。ドイツ軍にとっては予想外の場所を強襲された。強制収容所には僅か1個大隊しか配備されておらず、攻撃を受ける事を考えていなかった事がわかる。ユダヤ人達は解放されたのだ。12月20日にはドイツ第三帝國占領圏のドイツ軍が降伏。圧倒的な連合軍の侵攻に、戦争物資が欠乏したドイツ軍に残された道は降伏しか無かった。連合軍は無益な戦いをする事無く、ドイツ占領圏の全解放を達成した。そこでロンメルは降伏を決意。12月25日に連合国側に対して無条件降伏を宣言。連合国側がそれを受け入れ、第二次世界大戦は終結した。連合国側は最高のクリスマスプレゼントを受け取ったのだ。

1944年1月15日

大日本帝國の帝都東京で東京国際平和會議が開かれた。第二次世界大戦の終結を受けて、戦後世界秩序の構築を行うのが目的だ。第1回會議では、『国際連邦憲章』が採択された。この国際連邦憲章は、国際連邦の創設を表明した国際条約である。第2回會議では、第二次世界大戦の講和条約が採択された。講和會議で採択された条約は東京国際平和条約と言われている。

東京国際平和条約

一・大日本帝國はアメリカ合衆国を30年間占領統治する。軍事基地も各地に建設する。

一・米英軍は存続させる

一・日米英三国同盟を締結する

一・大日本帝國と講和条約締結各国は安全保障条約を結ぶ。

一・朝鮮半島・樺太・台湾島・南洋諸島は大日本帝國領とする

一・満州皇国・インド・フィリピン・インドネシア・ブルネイ・タイ・マレーシア・パプアニューギニアは日本連邦に入る

一・レナ川より東部、ヤクーツクを首都とした神聖イスラエル神国を建国する。

一・国際連盟に代わる国際機関として国際連邦を設立する。本部はハワイ王国ホノルル。

一・国際連邦の常任理事国は日本連邦・アメリカ合衆国・イギリス・ソビエト連邦・神聖イスラエル神国・中華民国の6カ国

以上が東京国際平和条約の内容である。

朝鮮半島は独立させようとしたが大日本帝國領のほうが良いと、当の朝鮮人が言った為こうなった。日本連邦はその国を独立させた後にその国も日本領が良いと言って来たのだ。しかしながら朝鮮半島が日本領の為、それは難しいとなった。その時に連邦国家にすれば良いと天皇陛下が仰られた為、帝國議会で『亜細亞友好国連邦化案』が満場一致で可決。日本連邦が成立した。日本連邦は事実上日本領の集まりである。日本連邦加盟国には大日本帝國軍が駐屯し治安の維持にあたる。各国は自由な政治が出来、決して傀儡国家ではない。神聖イスラエル神国は太平洋戦争中に満州を介して亡命してきたユダヤ人との約束を果たしたのである。太平洋戦争中の戦費や帝都復興費はユダヤ財閥から出ていた。そのため、神聖イスラエル神国が建国する事になった。

1944年10月5日には日本に『列島縦断高速道路』が完成した。11月10日に大日本帝國は軍の改編を行った。海軍省と陸軍省は統合され国防総省が設置され、空軍と揚陸隊が設立された。そして大日本帝國は軍需に回していた予算を内需に振り向け、驚異的な経済成長を始めた。これには神聖イスラエル神国の資金提供や占領統治のアメリカ合衆国からの資本引き上げによる力も大きい。これらのおかげで順調に発展していったが、1945年3月10日に朝鮮

半島北部に金日成率いる独立派が各地で反乱を始めた。これに対し、大日本帝國は国際連邦に『朝鮮半島の安全を脅かす脅威を排除する』と宣言し、『軍事制裁案』提出。安保理及び総会で反乱軍の鎮圧認め、『軍事制裁案』を満場一致で可決。大日本帝國も帝國議会で『反乱軍鎮圧案』が話し合われた。しかし帝國議会では法案の話し合いは行われず、これに総理となっていた山本五十六が激怒。『戦時内閣強硬法』を帝國議会で強硬採決。この強硬採決は与党の自由党議員に圧力をかけた結果だった。この戦時内閣強硬法が採決された事により、反乱軍鎮圧案を可決。これにより大日本や神聖イスラエル神国・中華民国が反乱軍鎮圧作戦を開始。朝鮮戦争が勃発した。この朝鮮戦争の主軸は、朝鮮半島駐留の大日本帝國陸軍であった。1947年5月10日に独立派は鎮圧され朝鮮戦争は終結した。この2年の間、日本列島各地で朝鮮人の暴行事件が多発。警視庁は県警に早期鎮圧を命じた。一部暴行事件の激しい地帯には、陸軍を派遣。逮捕された者は死刑に処せられた。

1949年に日本は環太平洋条約機構（K T T O）の設立を宣言した。K T T Oには大日本帝國・アメリカ合衆国・イギリス・神聖イスラエル神国・満州皇国・インド・フィリピン・インドネシア・ブルネイ・タイ・マレーシア・パプアニューギニア・オーストラリア・ニュージーランド・カナダ・ハワイ王国、オプザーバーとしてフランス・スイス・オランダ・スペイン・デンマーク・アイスランド。以上の国がK T T Oに加盟した。

1950年に揚陸隊は揚陸軍へと昇格。日本連邦4軍として活躍する事になった。

1950年～2034年

1950年2月10日

原子力機関を搭載した第七独立機動艦隊が無給油世界一周航海に出港した。アメリカ合衆国や世界各国は『オペレーション・シー・オービット』と題し、人類初の挑戦を追跡取材した。この無給油世界一周は見事に成功し3月20日に第七独立機動艦隊は帰港した。これにより、時の大日本帝國政府は連合艦隊全艦に原子力機関の搭載を決定した。その原子力機関は技術応用がなされ、1951年3月には原子力発電所が完成した。

1953年にはアメリカ合衆国及びイギリスの核実験に伴い、大日本帝國は原爆と水爆の実験を慣行。太平洋のトラック島近海に各2発、壮大な人工太陽を発生させた。

1960年には大日本帝國の経済は急激に発展し、高度経済成長が始まった。1950年代からの内需拡大が実を結び、大日本帝國の経済は右肩上がりに発展していった。高度経済成長は、池田勇人総理の『所得倍增計画』も推し進められた。高度経済成長が始まったのと同じく、大日本帝國は国名を日本と改名した。さらに1960年にJAXAが『かぐや計画』を発表した。政府との合同計画で、1号機にはフィラデルフィア理論の最新版である『空間転移機関』が搭載されていた。しかし、その1号機は空間転移に失敗。予定出

現地点に表れなかった。かぐや計画の1号機は失敗したのである。

1964年には東海道新幹線が開通し、東京オリンピックも開催された。1965年に入り、国内の自由主義者やフェミニストの運動が活発化し始めた。この同じ年、JAXAは再びかぐや計画を始動。通常宇宙船かぐや8号を月に向けて発射した。かぐや8号は無事に、月面着陸を成し遂げたのである。この、人類初の功績に全世界が熱狂した。

1968年には国民総生産が資本主義国第2位となり、1970年にはアメリカを抜き第1位となった。その1970年には国内の自由主義派に賛同した天皇陛下が憲法改正を内閣に命じた。天皇陛下からの指示により、時の内閣は憲法の改正をはじめた。そして1970年10月に昭和改正憲法を公布した。改正憲法では男女平等・20歳以上の男女への参政権などを認める等が決められた。その後技術革新により、日本全国で重化学工業が爆発的に発展。国民総生産は更に伸び、アメリカの2倍となった。この時から鈴木商店の独占が問題となったが、鈴木商店の資本力に立ち向かえる勢力は無く、政府としても黙殺するほか無かった。

1974年

この年30年間の占領統治を終え、アメリカ合衆国が独立を果たした。

1978年に青森県陸奥湾に中東合計産油量を遥かに凌ぐ、油田が発見された。油田は地下深くに存在していたため、2月の青森県大地震がなければ発見されなかっただろうと言われている。陸奥湾油田は1979年から採掘を開始した。

1980年には大々的な農地改革や品種改良の発展、政府による『自給率増加計画』が成功し、食糧自給率が200%を突破した。この年から、世界経済の安定成長を目指すため、主要先進国首脳会談（G8サミット）が毎年行われる事になった。G8の参加国は、日本・アメリカ・イギリス・ソ連（冷戦などあつて無きに等しいものであったため、ソ連時代から参加していた）・イタリア・カナダ・オーストラリア・ドイツである。

1983年に中曽根康弘氏が内閣総理大臣となると、日本の軍拡は勢いを増した。中曽根首相は軍事力の増強に力を注ぐと共に、アメリカのレーガン大統領・イギリスのサッチャー首相に軍拡を進言。

米英共に、軍拡を続けたのだ。中曽根総理はゴルバチョフ大統領にホットラインで、軍拡を進言。世界的な友好状態が続く中で、軍隊の存在意義は薄れていった。そこで形だけの冷戦を続けていたが、G8にソ連が参加しているため一般国民にも『冷戦などあってなきに等しい』と思われていた。そこで軍拡を行うため、表では対立を強めているとしながら、軍拡を続けたのだ。結果、日本はソ連が軍拡を行っているため、国防の為、軍拡を行うという大義名分を得る事ができ、軍拡を続けた。

1990年に中華民国で共産党がクーデターを決行。政権を奪取した。中華民国はその後共産党の独裁国家となり、日本との国交断絶を宣言した。

そして1991年にはイラクがソ連の援助を受け、クウェートに侵攻。このイラクのクウェート侵攻は大国間による裏取引が行われていた。イラクを潰したい日本はその考えをソ連に相談。そこでソ連がイラクに武器輸出を行い、クウェートに侵攻するように吹き込む事を受け入れた。そんな取引があったとは知らず、イラクは大国の手で蹴らされクウェートに侵攻。これに日本は直ぐ様行動に移った。国際連邦に『イラク壊滅案』を提出。安保理及び総会で満場一致で可決、多国籍軍を組織してクウェート救援を開始した。日本は中曽根首相の軍拡により更に強大になっており、イラクは半年後にクウ

エートから撤退した。これが湾岸戦争の骨子である。

1995年にはソ連の民主主義派がクーデターを起こし、ソ連を崩壊させた。1996年にはロシア連邦を成立させた。これにも裏がある。時代遅れの社会主義国家よりも、日本等と同じ資本主義国家に改革しようとするものであった。この同じ年に日本はGPSの民間への解放を行った。

2008年にアメリカのリーマンブラザーズの倒産を受け、世界中の経済が停滞し始めた。しかしながら、日本連邦はブロック経済と言える状況だったため、被害は皆無であった。リーマンブラザーズの倒産は当のアメリカに深刻な影響を与え、2009年にはビッグ3が倒産するという大惨事に見舞われた。

そこで、鈴木商店傘下のトヨタ自動車はGMとフォードの買収合併を発表した。その後には鈴木商店傘下のいすゞ自動車クライスラーの買収合併を発表した。日本は第二次世界恐慌とも言える時期も圧倒的な経済発展を遂げた。アメリカやイギリスは深刻な経済不況を日本に国債を発行する事で乗り切った。明らかに不況を乗り切れない南米国家は日本に国土を売却し、賃貸という形で乗り切った。賃貸料はその国の資源を輸出している。

2015年に日本は余り余る資本を使い、『軌道エレベーター』を完成させた。この軌道エレベーターは地球と月を結ぶエレベーターである。中間地点には宇宙ステーションが建設された。地球のエレベーター位置は、対馬である。月には基地が作られ観光地として発展している。月には地中深くに、レアメタル2と言われる超貴重物資が大量に埋蔵されている事が分かった。日本はそれらの採掘を開始した。

2025年には東京⇨鹿児島と東京⇨稚内までの間に『リニアモーターカー』を完成させた。

2028年には日本海に眠る、メタンハイドレートの採掘を開始。日本はさらに潤う事になった。

そしてプロローグの2034年9月11日の同時多発テロに繋がるのである。

1950年～2034年（後書き）

次回は………

お楽しみに

日本連邦軍總兵力

海軍

連合艦隊

第1艦隊

旗艦イージス原子力機攻戦艦長門

イージス原子力空母赤城

イージス原子力空母加賀

イージス原子力巡洋艦5隻イージス原子力駆逐艦8隻原子力強襲揚

陸艦5隻

原子力潜水艦3隻

原子力補給艦10隻

第2艦隊

旗艦イージス原子力機攻戦艦陸奥

イージス原子力空母蒼龍

イージス原子力空母飛龍

イージス原子力巡洋艦5隻イージス原子力駆逐艦8隻原子力強襲揚

陸艦5隻

原子力潜水艦3隻

原子力補給艦10隻

第3艦隊

旗艦イージス原子力機攻戦艦伊勢

イージス原子力空母翔鶴

イージス原子力空母瑞鶴

イージス原子力巡洋艦5隻イージス原子力駆逐艦8隻原子力強襲揚

陸艦5隻

原子力潜水艦3隻

原子力補給艦10隻

第4艦隊

旗艦イージス原子力機攻戦艦日向

イージス原子力空母大鳳

イージス原子力空母葛城

イージス原子力巡洋艦5隻イージス原子力駆逐艦8隻原子力強襲揚

陸艦5隻

原子力潜水艦3隻

原子力補給艦10隻

第5艦隊

旗艦イージス原子力機攻戦艦扶桑

イージス原子力空母天城

イージス原子力空母雲龍

イージス原子力巡洋艦5隻イージス原子力駆逐艦8隻原子力強襲揚

陸艦5隻

原子力潜水艦3隻

原子力補給艦10隻

第6艦隊

旗艦イージス原子力機攻戦艦山城

イージス原子力空母伊吹

イージス原子力空母富士

イージス原子力巡洋艦5隻イージス原子力駆逐艦8隻原子力強襲揚

陸艦5隻

原子力潜水艦3隻

原子力補給艦10隻

第8艦隊

旗艦イージス原子力機攻戦艦金剛

イージス原子力空母阿蘇

イージス原子力空母生駒

イージス原子力巡洋艦5隻イージス原子力駆逐艦8隻原子力強襲揚

陸艦5隻

原子力潜水艦3隻

原子力補給艦10隻

第9艦隊

旗艦イージス原子力機攻戦艦榛名

イージス原子力空母笠置

イージス原子力空母瑞鳳

イージス原子力巡洋艦5隻イージス原子力駆逐艦8隻原子力強襲揚

陸艦5隻

原子力潜水艦3隻

原子力補給艦10隻

第10艦隊

旗艦イージス原子力機攻戦艦霧島

イージス原子力空母隼鷹

イージス原子力空母飛鷹

イージス原子力巡洋艦5隻イージス原子力駆逐艦8隻原子力強襲揚

陸艦5隻

原子力潜水艦3隻

原子力補給艦10隻

第11艦隊

旗艦イージス原子力機攻戦艦比叡

イージス原子力空母千歳

イージス原子力空母千代田イージス原子力巡洋艦5隻イージス原子

力駆逐艦 8 隻 原子力強襲揚陸艦 5 隻

原子力潜水艦 3 隻

原子力補給艦 10 隻

第1遠征打撃艦隊

旗艦原子力強襲揚陸艦 旭川 原子力強襲揚陸艦 9 隻

イージス原子力巡洋艦 5 隻 イージス原子力駆逐艦 5 隻 原子力潜水艦 3 隻

原子力補給艦 10 隻

第2遠征打撃艦隊

旗艦原子力強襲揚陸艦 岩沼 原子力強襲揚陸艦 9 隻

イージス原子力巡洋艦 5 隻 イージス原子力駆逐艦 5 隻 原子力潜水艦 3 隻

原子力補給艦 10 隻

第3遠征打撃艦隊

旗艦原子力強襲揚陸艦 日立 原子力強襲揚陸艦 9 隻

イージス原子力巡洋艦 5 隻 イージス原子力駆逐艦 5 隻 原子力潜水艦 3 隻

原子力補給艦 10 隻

第1潜水艦隊

原子力潜水艦 11 隻

第七独立機動艦隊

旗艦超弩級イージス原子力機攻戦艦 大和

超弩級イージス原子力機攻戦艦 武蔵

超弩級イージス原子力機攻戦艦 信濃

超弩級イージス原子力機攻戦艦近江
超弩級イージス原子力機攻戦艦尾張
超弩級イージス原子力空母大和改
超弩級イージス原子力空母武蔵改
超弩級イージス原子力空母信濃改
超弩級イージス原子力空母海神
超弩級イージス原子力空母風神
イージス原子力巡洋艦最上イージス原子力巡洋艦鳥海イージス原子
力巡洋艦青葉イージス原子力巡洋艦松島イージス原子力巡洋艦高雄
イージス原子力駆逐艦雪風イージス原子力駆逐艦谷風イージス原子
力駆逐艦初風イージス原子力駆逐艦海風イージス原子力駆逐艦山風
原子力強襲揚陸艦久重
原子力強襲揚陸艦金蜂
原子力強襲揚陸艦由布
原子力強襲揚陸艦博多
原子力強襲揚陸艦別府
原子力強襲揚陸艦松橋
原子力強襲揚陸艦択捉
原子力強襲揚陸艦荒尾
原子力強襲揚陸艦国後
原子力強襲揚陸艦背振
原子力強襲揚陸艦堂南
原子力強襲揚陸艦八雲
原子力強襲揚陸艦志布志
原子力強襲揚陸艦久留米
原子力強襲揚陸艦伊万里
原子力潜水艦隱岐
原子力潜水艦佐渡
原子力潜水艦対馬
原子力補給艦援龍改1

原子力補給艦援龍改 2
原子力補給艦援龍改 3
原子力補給艦援龍改 4
原子力補給艦援龍改 5
原子力補給艦援龍改 6
原子力補給艦援龍改 7
原子力補給艦援龍改 8
原子力補給艦援龍改 9
原子力補給艦援龍改 10
原子力補給艦援龍改 11
原子力補給艦援龍改 12
原子力補給艦援龍改 13
原子力補給艦援龍改 14
原子力補給艦援龍改 15

第八特務機動艦隊

イージス原子力特装潜水戦艦高天原
イージス原子力特装潜水戦艦高中原
イージス原子力特装潜水戦艦高地原
イージス原子力特装潜水空母高空原
イージス原子力特装潜水空母高海原
イージス原子力特装潜水空母高陸原

海上機動要塞白鷺

第七独立機動艦隊専用の海上機動要塞

海上機動要塞秋津洲

太平洋に配備されている海上機動要塞

海上機動要塞大鳥

大西洋に配備されている海上機動要塞

海上機動要塞白鳳

インド洋に配備されている海上機動要塞

海軍特別航空隊

EZ富嶽（爆撃機・輸送機・掃射機）を配備。

陸軍

北部方面隊（北海道、樺太）・東北方面隊・東部方面隊・中部方面隊・西部方面隊（九州、沖縄、朝鮮半島・台湾）にそれぞれ展開。

90個師団・70個機甲師団・15個砲兵師団を配備。

日本連邦加盟国防衛のため、各国に50輜の移動要塞100式超戦車を配備。

空軍

作戦参加可能機3万5500機

揚陸軍

原子力強襲揚陸艦95隻保有

1艦に1個師団の搭載のため、揚陸軍95個師団配備。揚陸軍の保有する原子力強襲揚陸艦は、海軍に全て編入されている。

海軍の編成表にある、原子力強襲揚陸艦は揚陸軍のものであり、海軍・揚陸軍がそれぞれ強襲揚陸艦を保有しているわけではない。

日本連邦軍総兵力（後書き）

陸軍の師団数が多いですね……………

まあ、気にしないでください。

多ければいいじゃないですか。

それぞれの兵器解剖は『日

本連邦軍最新兵器解剖』として随時投稿予定です。

国家安全保障会議召集

2034年9月13日

同時多発テロから2日経ったこの日、首相官邸において国家安全保障会議が召集された。

1975年に立て直された首相官邸は地上2階・地下5階となっている。

最下層の地下5階は核シエルトも兼ねており、日本軍が保有するレーザー水爆にも耐えられる構造になっている。

まあ、レーザー水爆に耐えられると言う事は世界各国の保有する核水爆では破壊不可能と言うわけだ。

何はともあれ、その5階で国家安全保障会議が召集された。

国家安全保障会議のメンバーは内閣総理大臣の藤中早紀、国防大臣の天野将希、大蔵大臣の辻亜由美、総務大臣の仲野喜恵、外務大臣の大木昭、経済産業大臣の柴田光一、文部科学大臣の久保明、厚生労働大臣の田中要一、CIA長官の今井高広、国家公安委員長の寺脇構成、海軍軍令部総長の大和田純一郎、陸軍参謀総長の石原真、空軍統合総長田母神豊、揚陸軍総長の徳田正広である。

「皆さん、私達は今試されています。」

総理大臣の藤中が言った。

藤中は歴代で初めて女性として総理大臣となった人物である。

日本では25年前から総理大臣は国民投票で決めるという経緯になった。

ついでに言えば、大蔵大臣の辻亜由美と総務大臣の仲野喜恵も女性大臣だ。

「首都東京でテロが発生するという事態に我々はこの先どうするべきか、考えましょう。」

藤中が言った。

「総理、いいですか？」

天野が手を挙げた。

「国防大臣、良いでしょう。」

藤中が答えた。

「では、我々国防総省としてはイラク・イラン・アフガニスタンに対しての宣戦布告を提案いたします。」

天野が言った。

「根拠は？理由も無しに宣戦布告は無理だろう。」

外務大臣の大木が言った。

「根拠は、CIAがまだ捜査してはいますが、イラク・イラン・アフガニスタンは今回のテロを起こしたイルカイダを支援している事が分かりました。」

天野が言った。

「何故、国家がテロリストを支援するのですか？」

国家公安委員長の寺脇が聞いた。

「世界の富の頂点にたっているのは、日本を中心とする日本連邦です。彼等にとって日本連邦は目障りなんでしょう、日本連邦を攻撃するテロリストを支援して日本連邦を倒そうと考えているんですよ。」

天野が答えた。

「彼等は本当に日本連邦と事を起こす気なの？」

藤中が聞いた。

「多分ですが……………」

天野が言った。

「ふ〜ん、まあ売られた喧嘩は買わねばなりません。」

藤中が言った。

「勿論です総理、国防総省としては何時でも事を起こせるようになります。」

天野が言った。

「頼もしいわね、頼んだわよ。」

藤中が言った。

「総理、ではご裁断を。」

大蔵大臣の辻が言った。

「分かりました、それでは皆さんに頼みます。」

藤中が続ける、

「国防大臣は戦争に発展した場合の準備をしてください。大蔵大臣は今回の同時多発テロの復興費をまとめてください。総務大臣はまあ、職務を全うしてください。外務大臣はK T T Oとの情報収集を念にしてください。経済産業大臣は今回の同時多発テロの影響を出不さないよう、大蔵省と共同して頑張ってください。文部科学大臣はまあ、頑張ってください。厚生労働大臣は管轄の社会保険庁に年金の倍増を指示してください。CIA長官は日本連邦中央情報捜査局の総力をあげてイルカイダの支援国を洗い出してください。国家公安委員長は日本連邦の治安維持に総力をあげてください。4軍の長は各軍の訓練に励んでください。以上です。」

藤中は言った。

「了解いたしました。」

各大臣が答えた。

「それでは今日は以上です。」

藤中が言った。

その後、CIAが興味深い情報入手する事になるが、それは2ヶ月後のことである。

―解説―

日本連邦中央情報捜査局（CIA）

日本連邦捜査局が前進。

日本連邦捜査局は陸軍中野学校情報局を改編した。

その後、中曽根軍拡の一環として日本連邦捜査局を発展改編したが、現在の日本連邦中央情報捜査局である。

国家安全保障会議

日本連邦に重大な危機が発生した時に召集される。
過去の朝鮮戦争・湾岸戦争・中国革命時にも召集された。

国家安全保障会議召集（後書き）

もう少々お付き合いください。

第三次世界大戦はもう少しで勃発します。

後4話ぐらいですかね……………

驚愕の事実

2034年11月20日

前回の国家安全保障会議から2ヶ月たった日本連邦（あつ、よく日本や日本連邦の2種類に分けて書いてますが同じ物ですから）は活気に満ち溢れていた。

同時多発テロの被害を経済に影響させないように、給付金を支給した。

日本連邦全国民は約6億人と破格の人口だ。

その国民1人あたり500万円の給付金を支給したのだ。

まあ、それだけ支給しても大丈夫だと言う事だ。

全世帯・全国民・年齢差に関係なく、1人あたり500万円を支給したのだ。

その為、ケインズの提唱した『相乗効果』により経済に同時多発テロの影響が出るはずもなく、全国的な活性化に繋がった。

まあ、何が言いたいかと言えばアメリカが同時多発テロ後に株価が下落したが、この小説の日本連邦は逆に株価が上昇するという状況になったと言いたいのだ。

さて、本題に入るとCIAが興味深い情報を入手したのだ。

それにより、またしても国家安全保障会議が召集されたのだ。

CIAは国防総省の管轄にあり世界最大の諜報組織である。

公には出来ないが、この小説の日本連邦もエシユロンに似た盗聴装置を持っており、世界中の電話を盗聴している。

で、も1つ説明するとこの小説の日本連邦の軍組織は内閣総理大臣を最高司令官とし、その下に国防大臣がありまた下に、4軍の長がいるのだ。

一時期即応性に欠けると言われたが、これが結構上手くいったのだ。

湾岸戦争時もこの体制が有効に働いた。

首相官邸

国家安全保障会議がまたしても開かれた。

「何ですと！？それでは中国も支援国ですか？」

「はい、そうです。」

「何てこった。」

状況を説明すれば、CIA長官の今井がイルカイダの支援国を洗い出してきたのだが、それが問題だった。

中国までもが支援国だったのだ。

それを聞いた外務大臣の大木が声をあげたのだ。

「中国だけではありません、トルコ・サウジアラビア・オマーン・イエメン・パキスタン・アルゼンチン・アルジェリア・エチオピア・ソマリア・スーダン・モロッコ・ナイジェリア・チャドそして、イラク・イラク・アフガニスタンです。」

今井が言った。

「彼等は本気なの？」

藤中が聞いた。

「本気でしよう。アルゼンチンと中国もいますし、中東各国は国際連邦の支援で近代化を果たしましたし、それらの国が連合を作るとは……………」

国防大臣の天野が言った。

確かに天野の言う通り、それらの国は急激な発展を遂げた。

アルゼンチン・サウジアラビアは軽空母を各2隻保有しており、中

国に至ってはイージス原子力機攻戦艦と原子力空母を保有している。そして、中東各国はF22ラプターやF15イーグルを腐るほど保有している。

中国は自前の第5世代戦闘機を保有している。

それに未確認情報だが、中国も第6世代戦闘機の開発に成功したと言われている。

しかしながら、日本連邦やアメリカ・イギリスの大国は大型のイージス原子力空母を保有しているし、戦闘機に至っては第6世代戦闘機（第七独立機動艦隊については第7世代戦闘機）を保有しているから意味がない。

「KTTO諸国には知らせたの？」

藤中が聞いた。

「いいえ、まだです。」

大木が答えた。

「それなら、早く伝えてちょうだい。」

藤中が言った。

「了解いたしました。」

大木はそう言って部屋を出ていこうとしたが、

「ちょっと待ってください。」

「はい？」

藤中に声を掛けられ、大木は振り向いた。

「国際連邦に総会を開く手続きをしてください。」

藤中が言った。

「分かりました」

大木はそう言うと、部屋を出ていった。

「総理、国家防衛体制三の発令を進言します。」

天野が言った。

「理由は？」

藤中が聞く。

「同時多発テロが発生し、イルカイダの支援国も分かりました。その状況でのほほんとしていたら日本連邦は見下されます。そうならないためにも国家防衛体制三を発令して何時でも戦争出来る、なんなら夜絶濃鏡ヤタンカガミで攻撃が出来るという事にすれば、相手も迂闊に手を出さないでしょう。」

天野が言った。

「確かにその通りね。」

藤中は続ける、

「それでは日本連邦全軍に国家防衛体制三の発令を命じます。」

アメリカ合衆国

アメリカは非常に面白い国である。

太平洋戦争では負けたが第二次世界大戦では勝利した国だ。

その後、東京国際平和条約により在米日本軍基地を置き、軍も日本の寛大さに解体されずに残された。

その為、軍事力も日本連邦に次いで世界第二位の実力を誇る。

「以上です、大統領閣下。」

国務長官のハウエルが言った。

「そうか、中国が中東各国と手を組んだか。」

大統領のブッシュが言った。

「はあ、日本連邦は国際連邦の総会で対応を決めたいと言っています。」

ハウエルが言った。

「国連総会で圧倒的多数で制裁案は可決され、その後の常任理事国の安全保障会議でも中国は反対するが、それ以外の国が賛成し制裁案可決。世界は日本連邦を主力とする連合国側と中国を主力とする中東方面側の二極化となり、中東方面側がテロリストを更に支援し連合国側に宣戦布告。第三次世界大戦の始まりだ。まあ、出来レー

スだな。」

ブッシュが言った。

「もはや、決まりですかね。」

ハウエルが聞いた。

「そうだろ、日本連邦は攻撃されたんだぞ。しかも日本連邦は中東各国や中国が大嫌いだ、これ良しとばかりに戦争を始めるだろう。」

ブッシュは疲れたように言った。

「では、我が国も？」

ハウエルが聞いた。

「当然だ。日本連邦とは日米相互安全保障条約を結んでいるんだ、日本連邦を支持して中東方面側と戦争だ。」

ブッシュはそう言い切った。

「了解いたしました。」

ハウエルはそう答えた。

時に2034年11月21日の事である。

アメリカは日本連邦の支持を早々に決めていた。
その他の国も日本連邦を支持。

世界は確実に二極化して行くことになった。

2034年12月5日

ハワイ王国首都ホノルルの国際連邦本部で総会が開かれた。

議題は『イルカイダを支援する非人道国家に対する制裁案』

総会は紛糾しそうだ。

驚愕の事実（後書き）

新第七独立機動艦隊（最強無敵！！世界の覇者）は今年最後の投稿です。

ました。

本年もありがとうございました
来年もどう

か、良い年になるよう祈ってます。

深刻な経済不況ですが、こういう時こそ元気よくいきましょう。

それでは皆さん、よいお

年を。

国連総会

2034年12月5日

ハワイ王国首都ホノルルの国際連邦本部で総会が開かれた。

今回は総会での採択を行うのである。

その後に、常任理事国の安全保障理事会で2回目の採択を行うのである。

さてさて、本題の総会に目を向けてみよう。

「本日は国際テロ組織イルカイダを支援している中国以下16カ国に対しての制裁案を決めたいと思います。」

日本の松島国連大使が言った。

「中国以下、アフガニスタン・イラク・イラン・トルコ・サウジアラビア・オマーン・イエメン・パキスタン・アルゼンチン・エチオピア・ソマリア・スーダン・モロッコ・ナイジェリア・チャドは国際テロ組織イルカイダに支援を行い、ついにはイルカイダが我が国へのテロを起こしました。これは世界平和に対する挑戦です。中国などは第三次世界大戦に発展してもいいと思っていますのです。」
この松島国連大使の発言に中国の大使が反論した。

「世界平和を脅かしているのは明らかに日本連邦のほうです。日本

はアジア各国を連邦という中の占領下におきアジアを支配しています。我が国はそれらの国を解放する為にイルカйдаを支援しているのです。」

この発言には日本連邦の連邦加盟国の中で、日本に次いで発言力のある満州皇国が反論した。

「中国大使の発言は見事に的外れです。我々日本連邦加盟国は日本に対して、自ら日本傘下を望んだのです。そして、これは当時の日本の昭和天皇陛下が連邦国家にすれば良いと言われたので現在の日本連邦に至ります。中国大使の発言は中華思想の現れです。」

この発言にその他日本連邦加盟国の大使が拍手を送った。

そして、アメリカ合衆国の大使も発言した。

「我が合衆国は日本の意見を最優先します。中国以下中東各国は国際テロ組織のイルカйдаを支援し日本に対して間接的ですが攻撃を行いました。しかも、それだけでなくイルカйдаに対して更に支援を行っているのではないですか。これこそ、世界平和にたいする挑戦です。」

この発言にまたしても中国の大使が反論した。

「世界は騙されています。日本こそが世界を支配し、世界の富を独占している元凶です。日帝は世界の悪です。日帝は約100年前に我が国に侵略して来ました。その時も日帝は我が国民を虐殺しました。その恨みは忘れません。」

これに対し松島大使が反論した。

「中国大使の傍若無人な振る舞いには啞然とします。日中戦争を我が国の侵略と言いましたが、あれは国民党と我が国を戦わせようとした共産党が原因だというのが今では周知の事実です。それを我が国の侵略行為だというのは中国の考えを疑います。」

これに対し中国大使はこう反論した、

「日本の発言こそ疑います。あの戦争は確実に侵略戦争です。日本はその行為を正当化しようと奮闘しているのです。」

これに神聖イスラエル神国の大使が発言した、

「我が国も日中戦争の勃発原因を調査しましたが、確実に共産党の陰謀であったというのが分かっています。」

これに松島大使が更に言及した、

「もう、これ以上言う事はないでしょう。制裁案について投票を行いたいと思います。」

松島大使の提案に各国の大使が賛同し、投票が始まった。

その結果は言うまでもなく、圧倒的多数で制裁案は可決された。

総会で可決された制裁案は10日後の2034年12月15日に安全保障理事会でもう一度投票される。

まあ、安全保障理事会でも制裁案は可決されるだろう。

作者

「皆様、あけましておめでとつございます。」

早紀

「あけおめ」

亜由美

「ことよろ」

喜恵

「本年もよろしく願いします。」

作者

「昨日は更新出来ませんでした、今日は更新させていただきます。」

早紀

「まあ、元旦ぐらい許してやろう。」

作者

「ありがとうございます。」

亜由美

「だが、もうこれ以上の未更新は許さんぞ。」

作者

「分かっております。」

喜恵

「確か、第一部の時は試験の時も更新してましたよね。試験は大丈夫だったんですか？」

作者

「はい、大丈夫でしたよ。15分の電車の中で教科書を一通り読みましたから。」

早紀

「それは高校のレベルが低いのだ。」

作者

「そうでしょうね。入試の時もその15分で合格しましたからね。」

亜由美

「バカ高に通う、バカ作者。」

作者

「人をバカ呼ばわりして。」

喜恵

「毎日更新してますけど、宿題はないんですか？」

作者

「あつ、はい。ないです。」

亜由美

「完璧なバカ高だ。」

早紀

「確かに。」

作者

「うっ……………」

喜恵

「やれやれ」

作者

「けど、彼女の宿題をやってますから一概にないとは言えません。」

早紀

「女に頭が上がらないバカ作者。」

作者

「……………」

亜由美

「彼女との力関係では完璧に彼女の方が強い。」

作者

「……………」

喜恵

「まあ、頑張ってください。」

作者

「……………グスッ」

早紀

「あゝあ、泣いちゃったよ。」

亜由美

「もっと泣け。」

喜恵

「泣きましょう。」

作者

「うわ~~~~~」

早紀

「ヒヒヒ」

亜由美

「フフフ」

喜恵

「ハハハ」

沙織

「どうも、皆様。」

沙織

「作者さんはちょっとアレされてますので、出てこれませんが気にしないでください。」

沙織

「何はともあれ、本年もよろしく願いします。」

脅し

2034年12月9日

日本は連邦加盟国と東シナ海で共同演習を行った。

演習目的は中国に対しての抑止力及び圧力。

国際連邦総会での中国の挑発に激怒した藤中早紀総理が『なめんじやねえぞ』と怒鳴り、天野国防大臣を殴り付けながらこの、大演習を命じたのである。

藤中と天野の関係は、天野が藤中のストレス発散の為の殴られ役となるが多々ある。

藤中は史上初の女性内閣総理大臣であるため、ストレスを感じることが多いのである。

まあ、何はともあれ大演習が始まった。

日本海軍連合艦隊旗艦イージス原子力機攻戦艦長門

『日本海軍連合艦隊』

この名前こそ、まさに現代の無敵艦隊の代名詞となっている。

第一次世界大戦には地中海に艦隊を派遣し、ドイツ艦隊を撃破。

太平洋戦争では、当時世界最強と言われたアメリカ海軍を撃破。

その後の援欧派遣の時もドイツ第三帝国大西洋艦隊も撃破。

朝鮮戦争時にも、その圧倒的なシーパワーを見せ付けた。

湾岸戦争にも出撃。

国家も瓦解させた。

現在においても、その圧倒的なパワーは世界各国の海軍を凌駕する。

「しかし、凄いわね。」

連合艦隊司令長官の星野曜子が言った。

「そうですね」

連合艦隊参謀長の大田登が答えた。

星野曜子は歴代連合艦隊司令長官で10人目の女性司令長官だ。

この小説の日本は男性より女性の方が強いという、面白い事になっている。

「藤中総理もキレるのも無理ないよ、私だってキレてるんだもん。」

「はい。」

「このまま、中国に攻撃するのはどうかな？」

「やめてください！！！！長官がそのような事をすれば、我が身を掛けて、長官を止めます。」

「へえ〜、私を止められるとお考えですか。」

「いや、その。」

大田は焦った。

1回星野と喧嘩になった時に失神させられたのである。

その時の悪夢が頭を過る。

「めっ、滅相もない。」

「冗談よ冗談。藤中総理からは中国を脅すだけだから攻撃はするな
って言われてるのよ。大丈夫。」

「そうですか。」

「そうよ。」

「安心しました。」

「フフフ。」

「……………」

「私はちょっと甲板にでるからCICは任せたわよ。」

「了解いたしました。」

星野はそう言うと、CICを出ていった。

イージス原子力機攻戦艦長門甲板

「……………」

1人の少女が威風堂々と居並ぶ連合艦隊を見つめていた。

彼女はイージス原子力機攻戦艦長門の艦魂の『長門』である。

2034年になり、まず艦魂が見えないのが殆どだ、艦魂が見えるのは珍しい方だ。

艦魂もそれにともない、真名がなくなったのだ。

真名があるのは、第七独立機動艦隊と第八特務機動艦隊の艦魂だけである。

その彼女達は、宿る艦を代々変えてきた。

(あゝ、自分で書いてて怖いです。自分勝手なもんですね。どうか、お許してください。)

「長門、ここにいたの。」

「あつ、星野さん。」

星野は現代で艦魂が見える珍しい人だ。

「どうしたの？こんな所で」

「今更ながら凄いなあゝって思っ
て。」

「フフフ、そうね。」

「12（ヒトフタ）艦隊計画の結晶ですね。」

「そうね。でも初めて12艦隊計画を聞いた時には呆然としたわよ。」

「そうですね。私を含めイージス原子力機攻戦艦10隻とイージス原子力空母20を建造するんですからね。」

「半世紀位まえに計画された八八艦隊より酷いもんね。」

「まだ、八八艦隊計画の方が現実性がありましたよ。」

「けど、結果的に12艦隊計画は成功して、今にいたるわよ。」

「凄いです。」

さて、12艦隊計画を説明すれば。

12艦隊計画は2025年計画された。

この時は航空主兵主義から再び、大艦巨砲主義が見直され始めた時期であった。

そして、時の内閣が12艦隊計画を立案したのだ。

当時もイージス原子力機攻戦艦10隻とイージス原子力空母20隻を建造するとなった時に無理だろうという意見が多数を占めたが、やってみなきゃわからないだろうと言う内閣が計画を強硬。

5年後の2030年には全艦が就役した。

そして、同時期にその他の最新鋭補助艦（巡洋艦・駆逐艦・潜水艦・補給艦）も就役した。

第七独立機動艦隊・第八特務機動艦隊は又別の計画である。

そして、現在の無敵艦隊に至る。

「けど、凄いけど去年の連合艦隊常置100周年記念の観艦式には負けるわね。」

「星野さん、去年の観艦式とは規模が違いますよ。」

「まあね。」

「去年の連合艦隊常置100周年記念観艦式は全艦出たんですよ。」

「今回は第1艦隊と第2艦隊だけだからね。」

「けど、他の連邦加盟国も大演習に出ていますから凄いですよ。」

「確かに。」

「星野さん、今回の大演習の目的は何ですか？」

「今回の大演習の目的は中国に対する脅しね。」

「脅しですか？」

「そうよ。国際連邦総会で、中国の挑発に藤中総理がぶちギレて天野国防大臣を殴り付けながらこの大演習を命じたそうよ。」

「そうなんですか、天野国防大臣も大変ですね。」

「まあ、あの大臣もMだからね。」

「Mですか？」

「そうよ、よくテレビとか国会で見るあの威厳ある大臣とは大違いよ。」

「そうなんですか、あの観艦式でみた威厳は幻だったのでしょうか？」

「まあ、気にしないのよ。男ってそんな物よ。」

「そうですね、気にしてられませんね。」

「そうよ、今から大演習が待ってるんだから。」

「分かりました。中国を驚かせて見せましょう。」

「その意気よ、長門。チャイニーズ何てバカの集まりなんだから。」

「はい。」

大演習はまだまだ始まったばかり。

（後書きコーナー）

早紀

「お前はアホか？」

作者

「はい？」

亜由美

「昨日、更新しなかったじゃないか。ええこら！！！！！！」

作者

「そんなやーさんが使いそうな事言って。」

喜恵

「死にますか？」

作者

「遠慮します。」

早紀

「いや、許さん。」

作者

「お許しを~~~~~」

一同

「死ねえ~~~~」

作者

「ぎゃ~~~~」

長門

「皆様、初めまして。イージス原子力機攻艦長門の艦魂の長門です。」

長門

「色々ありましたが、作者さんは私達連合艦隊の艦魂も出すと決めてくれました。」

長門

「出来れば、真名も出してもらいたかったんですが……………」

長門

「まあ、出してくれたのですから良いです。」

長門

「それでは、皆様。今後ともよろしく願います。」

齋し（後書き）

作者「うう、酷い目にあいました。」

早紀「当然よ。」

作者「何はともあれ、連合艦隊の艦魂は出す事になりました。」

早紀「けど、真名がない。」

作者「それは、

ノータッチで。」

早

紀「ちよつと、好きな女の子から年賀状が来たからって喜びやがって。」

作者「うう、では皆様今後と

もよろしくお願いします。」

演習？

日本海軍連合艦隊は連邦加盟国との大演習を始めた。

日本海軍からは連合艦隊の第1・第2艦隊が参加。

連邦加盟国からは全加盟国が参加した。

しかし、それでも連合艦隊である。

第二次世界大戦に単独かつ完全な勝利を成し遂げた日本は今や、世界一の軍事大国となっている。

これは国民の生活を最優先にしての金額である。

勿論、国民の生活の最優先とは年金・医療などの事である。

ついでに言えば、この小説の日本は年金も1人あたり毎月30万円であり、医療費も全て無料である。

その他、教育費・高速料金も無料である。

消費税など存在しない。

石油とメタンタイドレートを輸出しているだけで、ここまで儲かるとは……………

まあ、銭はあるだけあればいいけどね。

で、本題だが。

日本海軍連合艦隊。

海軍連合艦隊だけでなく、陸軍・空軍・揚陸軍も世界最強である。

今や世界各国が束になっても日本軍に太刀打ち出来る軍は存在しないだろう。

海軍ではアメリカの合衆国艦隊が、空軍ではアメリカ空軍のF25レックスが、陸軍はドイツの第3・8世代戦車のレオポルド3がそれぞれ日本軍に歯向かえるかな？と言った所だ。

そして、今回は中国に対する脅しが目的であるため演習場は中国の領海ギリギリで行う。

空軍からもGZ飛鳥やEX富嶽が参加したため、空軍や空母艦載機も領空ギリギリを飛行する。

一歩間違えば戦争に発展する恐れもある今回の大演習だが、日本の意思を伝えるにはこうするしかないのが現状だ。

連合艦隊旗艦イージス原子力機攻戦艦長門

「全く、演習で言うわりには演習になってないような気がするのは気のせいでしょうか？長官。」

参謀長の大田が言った。

「そうね、でも気にしないの。ただの射撃演習なんだから。」

星野が言った。

確かに、星野の言うとおりだ。

今回は大演習とはかつこいい響きだが、簡単に言えば中国の領海に有りつたけの砲弾・ミサイルを打ち込むだけなのだ。

しかし、国交のない国の領海に砲弾・ミサイルを打ち込むだけでも問題だが、まあ日本連邦の領海から打ち込むのでどうにでもなると考えているのだろう。

「しかし、長官。」

「ああ！……！文句ある？」

「いつ、いいえ……！……！」

「そう、ならいいわ。」

「……………」

「それじゃ、ＣＩＣは任せたわよ。」

「りよ、了解いたしました。」

「私は甲板にいるからね。」

「分かりました。」

星野はそう言うと、甲板に向かった。

イージス原子力機攻戦艦長門甲板

「長門お〜」

星野が手を振りながら走ってきた。

「あっ、星野さん。」

長門も手を振った。

「長門、あなたが喜ぶ事があるわよ。」

「喜ぶ事？」

「あなた、真名がないって落ち込んでたわね。」

「はい。」

「それで私はあなたの真名を考えたのよ。」

「えっ！？星野さんがですか？」

「そうよ。」

「ありがとうございます。」

「いいのよ、可愛いあなたの為なもの。」

「嬉しいです。」

「陸奥も呼んであげて。」

「陸奥もですか？」

「そうよ、私は連合艦隊全員の真名を考えてあげたの。」

「ありがとうございます……！」

「さっ、早く。」

「分かりました。」

長門はそう言つと轉移した。

「フフ、可愛い。」

星野は思った。

「星野お姉ちゃん!!!」

「なっ!!!」

陸奥が轉移と共に星野に抱きついた。

「えへへ、星野お姉ちゃん。」

「陸奥!!!…!あなたどこ触ってるの!!!…!」

「へっ?星野お姉ちゃんの巨乳。」

「もっっ!!!…!陸奥は!!!…!」

「陸奥、やめなさい。」

「えへへ、もうちょっとだけ。」

「仕方ないわね、少しだけよ。」

「えっ！？長門？」

「星野お姉ちゃん。」

「やつ！……！……！……！……！……！……！」

「星野お姉ちゃん。」

「~~~~~」

「もう、長門と陸奥は。」

「へへへ、星野お姉ちゃん可愛いかったよ。」

「陸奥も落ち着きなさい。」

「ごめんなさい。」

「星野さん、すいませんでした。」

「いいのよ、別に。」

「ところで、星野お姉ちゃん。用事って何？」

「ああ、そうだった。まずはあなた達に真名を付けてあげる。」

「真名？」

「陸奥は知らないと思うけど、艦魂には真名があるのよ。第七独立機動艦隊の早紀閣下以下、全員には真名があるのよ。」

「早紀閣下もですか……!!」

「そうよ。」

「凄いです……!!」

「（そうか、この娘たちにとっては早紀達は英雄だもんね。）」

星野は心の中でそう思った。

星野の思った通り、早紀達は現在では英雄だ。

約100年前に勃発した太平洋戦争で、第七独立機動艦隊はアメリカ艦隊を壊滅させ援欧派遣時には、ドイツ第三帝国の大西洋艦隊を壊滅させた伝説の艦隊だ。

その為、連合艦隊の編成表に第7艦隊がないのは第七独立機動艦隊があるため、永久欠番となったのだ。

第八特務機動艦隊はそのような活躍がなかった為、連合艦隊にも第8艦隊がある。

戦力は雲泥の差だが……………

「早紀閣下に真名はあるけど、私達には真名がない。」

「時代の流れ？」

「そうね、時代の流れね。」

「説明は終わったかしら？」

「はい、終わりました。」

「じゃ、発表するわね。」

「はい。」

「はい。」

「それじゃ、長門。」

「はい。」

「あなたの真名は、」

「……………」

「由佳よ。」

「ありがとうございます。」

「由佳姉え。」

「さ、陸奥も。」

「はい。」

「陸奥、あなたの真名は」

「……………」

「真希よ。」

「やった〜真希だって。由佳姉え聞いた。」

「勿論よ、真希。」

「やった〜……………」

「真希、落ち着きなさい。」

「はーい、由佳姉え。」

「フッフ、喜んでもらって嬉しいわ。」

「ありがとうございます、星野さん。」

「ありがとうね、星野お姉ちゃん。」

「フッフ、それじゃあ日本に帰りましょう。」

「もう帰るの?。」

「そうよ、もう砲弾・ミサイルは全部撃ったからね。長居は無用よ。」

「演習って感じがしないね。」

「まあ、いいんじゃない?。」

「そうだね由佳姉え。」

「それじゃ、私はCICへ行くから。」

「分かりました。」

「じゃ、私も自分の艦に戻るね。」

「バイバイ。」

こうして、演習(?)は終わり各艦隊は帰路に着いた。

6日後、安全保障理事会で中国が猛抗議したのはまた、後の話。

演習？（後書き）

次回はいよいよ、安全保障理事会です。

次回から第三次世界大戦へ一直線です。

一直線といってもまだ始まりませんが…

……

安全保障理事会

2034年12月15日

国際連邦本部で、安全保障理事会が開かれた。

円形のテーブルに各国代表が位置した。

アメリカの国連事務総長が安全保障理事会の開会を宣言し、会議が始まった。

最初に手を挙げたのは、中国の大使だった。

「我が国は日本の行動に遺憾の意を表明します。」

中国の大使は淡々と話し始めた。

「日本は鬼畜とも言える事を起こしました。我が国の領海に砲弾・ミサイルを打ち込んだのです。これがもし内陸部に撃たれていれば一般市民に死傷者が出ていたかも知れません。このような行動はまさに鬼畜。日本の大使に謝罪を要求します。」

この発言に松島大使がキレた。

「謝罪するのは中国の方です。中国は中東各国と徒党を組み、イルカイダを支援しその輩が我が国に攻撃を行いました。中国は間接的

に我が国を攻撃した事と言えます。その攻撃で我が国の一般市民8000人が死にました。それについて謝罪もせず我が国に謝罪を求めるとは、中国の神経を疑います。」

松島大使の発言にその他の理事国が拍手を送った。

「我がイギリスは日本を支持いたします。日本の行動は誠に持つて正当です。中国は死者が出ていないのに謝罪を要求するとは理解に苦しみます。」

イギリスの大使が言った。

「何を言うか!!!!!!我が中国は日本に恫喝されたのだぞ。謝罪を要求するのは当然だ!!!!!!」

この発言にロシア連邦の大使が呆れ顔で発言した。

「中国の考えはまさに被害妄想。中国のトップは日本のドクターに検査してもらったらいいと思いますよ。」

この発言に中国以外の大使に笑みが零れた。

国連事務総長も笑いを堪えるのに必死だ。

「っ!!!!!!」

中国の大使は唇を噛み締めた。

「まあ、ドクターに検査してもらうのは言い過ぎでも中国のトップは被害妄想が大きいですな。領海に打ち込まれた位で謝罪しろとははなはな呆れます。」

アメリカの大使が言った。

「しかしながら、日本の行動に中国人民は酷く怯えています。彼等に普段通りの生活を取り戻してもらうためにも、日本の大使に謝罪してもらおうのです。」

中国の大使は言った。

「何が普段通りの生活だ！！！！貴様らがイルカイダを支援したせいで、日本国民こそが被害を受けたんだ！！！！あのテロで結婚を約束していたカップルも東京タワーで死んだんだ。子供やお年寄りも死んだ。世界貿易センタービルでのテロでは数多くの人が瓦礫の下敷きになって圧死したんだ。それなのに、誰一人死んでないのに謝罪だあ？ふざけるな！！！！貴様らに頭を下げる筋合いはない！！！！」

松島が怒りを込めて言い放った。

この松島の発言は中国以外の大使に届いたが、中国の大使には届かなかったみたいだ。

「世界の平和を妨害し、世界の富を独占した日本に罰を与えただけ

だ。」

この発言に松島は冷静にこう言った。

「中国はとんでもない相手と本気で事を起こす気だ。我が国としても真剣に考えねばいかな。」

その発言に中国は驚きの発言をした。

「我が大中華帝國は核兵器を持っている」

と。

〈後書きコーナー〉

作者

「あれ、早紀様がない。」

作者

「おかしいな……………」

早紀

「死ね！！！！！」

作者

「あつ、あれは！！！！！」

ドガアアアアアアアン！！！！！！

作者

「ギャ……………」

早紀

「この、鳳火巡航ミサイルは凄いい命中率ね。」

亜由美

「バカ作者が粉微塵に。」

喜恵

「未来にした弊害がここで露呈するとは。」

早紀

「まあ、このバカもこれに懲りて毎日の更新を頑張るだろう。」

亜由美

「一昨日は更新しなかったんだからな。」

喜恵

「けど、毎日の更新って言っても明日から学校が始まるって言うってけど、大丈夫かな？」

早紀

「大丈夫。バカ高なんだからテスト前でも更新するわよ。」

亜由美

「明日が始業式で明後日が休み明け一発目のテストだそうだ。」

喜恵

「呑気なもんですね、作者さんも。」

早紀

「だから、大丈夫。」

亜由美

「さて、帰るか。」

喜恵

「早く帰ってゆっくりしよ〜と。」

早紀

「じゃ、帰るぞ。私達は本編に出るのはまだまだ先だからな。」

亜由美

「まだ出れないの？」

喜恵

「嘘」

早紀

「本当よ。作者は後もう少し引つ張るみたいよ。」

亜由美

「さすがに本命の第三次世界大戦は違うわね。」

喜恵

「これなら、本当に100部越えるかも。」

早紀

「まあ、何はともあれ帰りましょう」

亜由美

「了解。」

喜恵

「それでは、皆様また次回に。」

安全保障理事会（後書き）

次回、中国大使の発言に安保理が……………

可決、そして……

中国大使の爆弾発言に全ての理事国の大使が啞然とした。

勿論日本に向けての発言だったのだろうが、安全保障理事会の場、というのが問題だった。

松島大使はすかさず切り込んで、各国大使の理解を更に深めようとした。

「核の脅威をちらつかせるとは、もはや開いた口が塞がりません。このような無法国家を野放しにしている良いのでしょうか？我が国は早急なる中国以下中東各国への制裁案の可決を望みます。」

この松島大使の発言に中国以外の大使は盛大な拍手を送った。

「我がアメリカも日本の大使と同意見です。中国という無法国家の存在は、世界平和を脅かす存在です。もはや話し合いの必要はないでしょう。」

アメリカの大使が言った。

「我がロシア連邦も今まで、中国と友好的だと言われていましたが断言します。中国など糞国家です。」

ロシア連邦の大使も声を大にして言った。

「イギリスとしても中国との友好的関係はもう、築けないでしょう。」

「神聖イスラエル神国は中国との国交断絶をも視野に入れなければ
いけませんな。」

各国大使の発言に松島大使はだめ押しとも言える事を言った。

「我が日本は現在、核兵器は生産していませんが本国に再生産を
検討しよう連絡したいと思います。」

松島大使の発言は効いた。

中国大使の顔には焦りが見えた。

核兵器の生産を一時停止していた日本を再び生産させる事にしてし
まったのだ。

日本の技術力なら1週間も必要とせずに、数千発と生産出来るだろ
う。

現在日本が保有しているのは約1億発、全世界の7割である。

国連事務総長は潮時だろうと考え、挙手による制裁案の採決を採っ
た。

結果は言うまでもなく賛成多数。

制裁案は可決された。

制裁案は来年1月1日を持って中国以下中東各国への宣戦布告が決まった。

何故、来年かといえれば日本が楽しむために中国以下中東各国の兵器増産を待つためである。

今の日本の軍事力では中国以下中東各国など一蹴できる。

そうなれば面白くないと言う事になり兵器増産を待つ事になった。

まあ、無敗軍事大国日本と言う看板を掲げているから為せる業だ。

2034年12月17日

首都東京にて驚愕の事件が発生した。

鈴木商店傘下の鈴木保険本社ビルにテロリスト30名が立てこもったのだ。

この事態に首相官邸の危機管理センターは揺れ動いた。

「ちょっと、テロリスト30名が立てこもりってどういふ事よ。」
総理大臣の藤中が言った。

「どうやら、中国がイルカイダをまたしても支援してこのよつな事に……………」

国防大臣の天野が答えた。

藤中

「侵入路は分かったの？」

天野

「現在、国家公安委員会の特捜部が調査中です。」

藤中

「特捜部……………」

天野

「大丈夫です、何とか特定出来るはずですよ。」

藤中

「もしもの時は日本連邦中央情報捜査局にも調査させるのよ。」

天野

「了解いたしました。」

天野はそう言うと、電話をかけた。

「早急なる鎮圧が必要ね。」

藤中はそう言った。

「総理。」

天野が聞いた。

藤中

「何？」

天野

「思ったんですが、あの決議案の時点で宣戦布告していればこのよ
うな事態にはならなかったと思いますが。」

藤中

「そうね。ただその時点で宣戦布告したら面白くないじゃない。」

天野

「はあ。」

藤中

「それにごうなるとは思ってたからね。」

天野

「そうなんですか？」

藤中

「簡単よ。あの中国がぼろくそ言われて何もしないわけないもの。」

天野

「確かにそうですね。」

藤中

「それにこのテロリストにはパスワードスーツのテスト相手になってもらうわ。」

天野

「では、特攻隊を出撃させるんですか？」

藤中

「勿論。」

天野

「了解いたしました。」

藤中

「お願いね。」

天野

「はい!!!!!!」

藤中

「それとね、もう一つ。」

天野

「何でしょうか？」

藤中

「公安にはね、テロリストの侵入路を調べだした後に全国の密入国中国人の摘発を命じておいてね。」

天野

「了解いたしました。まず、テロリストの制圧と侵入路の洗い出しを行ってから、密入国中国人の摘発という順番になりますか……」

藤中

「いいよ、それで。」

天野

「ありがとうございます。」

藤中

「けど特捜部から1人位腕の立つ人に密入国中国人の摘発を始めさせておいて。」

天野

「分かりました。1人腕の立つ女性がいるので言っておきます。」

藤中

「分かったわ、頑張ってね。」

天野

「了解いたしました。」

鈴木保険本社ビルのテロリスト制圧とテロリストの侵入路の洗い出しが始まった。

別行動として公安特捜部の生田恵が密入国中国人の摘発を始めた。

次々と色々な事件が起こるものだ……………

可決、そして……（後書き）

しつこいようですが、まだ第三次世界大戦は勃発しません。

何話が続けてテロリスト制

圧と侵入路の洗い出し、そして密入国中国人の摘発をお書きします。

今しばらくお待ちください。

特攻隊出撃

イルカイダがビルを占拠してから2時間たった。

警察隊が完全にビルの出入口を封鎖しており、緊迫した状況になっている。

「特攻隊はまだか？」

初老の警部が部下に聞いた。

「もうすぐ到着すると思いますが……」

聞かれた部下が答えた。

「全く、今日で定年退職だと言うのに……」

「すみません警部、最後の最後まで頼ってばかりで。」

若い刑事が謝った。

「なあに、気にするな。特攻隊が到着すればすぐにカタが着く。どうだ、その後皆で飲みに行くか。」

初老の警部が言った。

「いいですね。皆で飲みましょう。」

他の者にも自然と笑みが零れる。

「よし、決まりだ。」

警部は言った。

「そうと決まれば早く解決しないと。」

若い刑事が言ったその時、

「警部。特攻隊が到着しました。」

「うむ、分かった。」

警部はそう言うのと、特攻隊の車列に歩いていった。

特攻隊。

特殊攻撃機動隊の略。

朝鮮戦争時の朝鮮人暴動の鎮圧目的で設立された。

暴動鎮圧や籠城事件の時に出動する。

あの、浅間山荘事件にも出動した。

暴動鎮圧時には非殺傷兵器（ゴム弾や音波兵器）を使用するが籠城事件では問答無用で殺傷兵器を使用する。

今回のイルカイダ鎮圧作戦では新型のパワードスーツの実験も兼ねている。

このパワードスーツは特攻隊用と軍用の２種類に分けられる。

まあ、相対的に特攻隊用のほうが性能は低いが。

「よく来てくれました。」

警部が言った。

「いえいえ、我が国の内部にテロリストがいる事態おかしいですから、早急なる鎮圧の為、駆け付けたのです。」

特攻隊副隊長の小山田が言った。

「そうですか、それでは頼みましたよ。」

警部はそう言うに戻っていった。

「早くしろ、サッサと待機場所へ行くのよ。」

隊長の高根薫が言った。

「了解いたしました。」

小山田は答えた。

特攻隊の車列はビルの地下駐車場へと入っていった。

地下駐車場

ここに特攻隊が集結した。

「はい、皆こっち見て。」

隊長の高根が言った。

高根
「皆も知ってると思うけど、イルカイダがこのビルを占拠したわ。今からこのビルの奪還作戦を行うわ。」

小山田

「それでは皆に今回試験的に導入された装甲服を紹介する。」

高根

「これがそうよ。」

一同

「凄い。」

高根

「小山田、着てみなさい。」

小山田

「了解しました。」

高根

「この式十式装甲服は人工筋肉内臓の装甲式パワードスーツよ。耐久性は対人地雷なら余裕で耐えられるわ。オプシヨンの飛行ユニットを装着すればパラシュート無しでの空挺降下も可能よ。だけど装着時間は2時間が限界だからすみやかな行動が必要よ。」

小山田

「着ましたよ、隊長。」

高根

「それじゃ、紹介するわ。まずはグレネードマシンガンだけどこれは小型のグレネード弾を広範囲に撃つことで面制圧を可能としたわ。だけど、今回はビルの中だから使用には注意するのよ。敵の腹を狙うように。そして次の参式戦斧だけど、これは両刃式のトマホークね。銃火器が迂闊に使えない場所で重宝するわ。今回の作戦はこれを多用すること。まあ、グレネードマシンガンを使ってもいいけど。参式戦斧には高圧電流が流れているから威力はあるわよ。」

小山田

「凄いですね。」

高根

「それじゃ、全員この式十式装甲服を着用して。作戦開始よ。」

一同

「了解!!!!!!」

イルカイダ鎮圧作戦が始まった。

東京駅

「全く危なかったぜ。」
「危ないじゃないでしょ、たかが記者のくせにあんな所に行くなんて。」

状況を説明すると、前者がジャパンタイムズの記者二宮行雄であり、後者が密入国中国人の摘発のため捜査を行っている生田恵である。

二宮が中国人街にこの日の日中関係について取材に行ったところ、熱烈な反日活動中だった為あわや殺されかけた。

そこを生田に助けられ、本社に生田に護衛されながら向かっているところである。

二宮

「そうでした、あの時はありがとうございました。」

生田

「まあ、気にしないの。私の仕事なんだから。」

二宮

「うっ、冷たいね」。仕事なんだから、他に何か理由なかったの？」

生田

「例えば？」

二宮

「俺に一目惚れしたとか。」

生田

「黙れっ！……！」

二宮

「そんな即答しなくても……！」

生田

「ふん。」

二宮

「まあいいさ、ここでいいよ。世話になった。」

生田

「ダメよ、本社に入るまで離れないわ。」

二宮

「はいはい、分かりました。」

二宮は内心勝手にしろと思った。

二宮

「よく混んでるな。」

生田

「仕方ないわね、タクシーで行きましょう。」

二宮

「タクシー!？」

生田

「ええそうよ、何か?」

二宮

「俺の出張費はもうないんだよ、だからタクシーは……………」

生田

「なに、気にしないの。特捜部からちゃんと出るから。」

二宮

「ふう、ならいいか。」

こうして長くいると、生田の事もだんだん分かってきた。

最初はツンツンしていたが、なかなか情のある一面も持っている。

おまけに美人で独身ときているのだから、独身である二宮にとっては、渋谷の本社に到着してしまうのがいささか惜しかった。

二宮

「なあ、その前に何か食べれる所無いかな?腹減っちゃって。」

生田

「そうね。いいわ、近くに食堂があるから寄りましょう。」

行き先を生田恵に任せたところ、タクシーが着けたのは、繁華街でも何でもない普通の住宅地にあるうどん屋だった。

彼女のような女性に接点があるとは思えない。

案の定、店のいたのは中年のおばちゃんと呼べる女性であった。

が、二宮は恵の言葉に驚いた。

生田

「母さん、何でもいいから作ってよ。それから、温いお茶もね。」

二宮

「母親なのかい？」

生田

「ええそうよ。」

恵が語った所によれば、恵は一人っ子だという。

父親は生田が生まれてすぐに他界し、母親が一人で育て上げそうだ。

「はい、特製うどんよ。」

母親は意にも介さずに作ったものをテーブルの上に置いた。

「なるほど、うまそうだな。」

特製だと言っただけあって、油揚げがあり海老天までのっていた。

本当においしかった。

10人ほど掛けられるカウンターの他に4人掛けテーブルが2つきの小さな店なのだが、綺麗に整頓されている。

この場所なら、二宮の勤務先にもさほど遠くない。

食べ終わったとき、恵が母親に言った。

「母さん、紹介しておくわ。こちら二宮さんよ。新聞記者なの。これからもきつと付き合いが続くと思うから、親切にしてあげてね。」
付き合いと聞いてドキリとしたが、なるほど、仕事上の付き合いなら情報交換などをする事もあるだろう。

こんな美人が若造の二宮などに心を奪われるわけがないのだ。

だが、母親が意外な事を言った。

「恵ちゃんが男の人を連れて来たのは初めてだったわよね。ええ、母さんは賛成しますよ。あなたが選んだ人に間違いあるわけないもの。二宮さん、娘の事をよろしく願います。」

勘違いもはなはだしと恵をみると、頬が少し赤らんでいた。

特攻隊出撃（後書き）

イルカイダ鎮圧作戦は次回で終わりです。

ですが、密入国中国人摘発についてはまあまあ、続きます。
よろしくお願
いします。

鎮圧作戦

高根

「このパワードスーツは2時間が限界よ。それ以上かかると、体がどうなるか知らないから早急なる鎮圧が要求されるわ。」

小山田

「了解。各班ビルの外側にまわれ。最上階を四方から狙うぞ。」

一同

「了解!!!!!!」

ビル最上階

「おい、今回の目的は何だ？」

「知らねえよ、リーダーの考える事は分かんねえ。」

「まあ、いいか。」

「見回りをしてりゃいいんだよ、だから気にするな。」

「そうだな。」

カタン

「何だ!？」

ガシヤーン

「うおっ!……!」

「うわあ!……!」

ドン!ドン!ドン!

「ギャ〜!……!」

「グレネードだ!……!下がれ下がれ!……!」

隊員

「隊長。西方面制圧完了しました。」

ビル東方面

カタン

「何だ？」

ガシャーン

「……………何だこいつは」

「いいから撃て！！！！」

ダダダダダッ

「ライフルが効かない！？」

小山田

「残念だなイルカイダさん。おまえらのAK47なんぞ豆鉄砲だ。」

「引け～～～」

小山田

「おっと、逃がしはしないよ。」

ドンー！ドンー！

「グハッ！！！！！！」

「ギャ～～！！！！！！」

小山田

「お〜お〜内臓をぶちまけて。」

高根

「小山田！！！！後15人いるんだから油売ってる場合じゃないんだよ。」

小山田

「へい。」

高根

「東方面も制圧か……………」

隊員

「隊長、北方面制圧しました。」

隊員

「南方面も制圧完了しました。」

2034年12月18日

生田の母が経営するうどん屋

二宮

「『立てこもりのテロリスト全員射殺。特攻隊の快拳。その後の警察の現場検証に立ち合った警部は

「散々な定年退職の日だよ」と言っていた。この警部は今日で定年退職だったそうだ。飲み会の予定だったみたいなので我々は密着取材を慣行したい。』」

生田

「記者なのに何呑気に新聞読んでるの。」

二宮

「あれ、言いませんでしたか？俺はネット新聞の記者ですよ。」

生田

「けど、いくらネット新聞の記者でも全国紙の鈴木新聞（簡単に言えば読売新聞みたいな物です）を読まなくても……」

二宮

「何々、『テロリスト全員は特攻隊に見事射殺された。隊長の高根

さんによれば射撃訓練みたいな物だそうだ。『まあ、全員射殺出来て良かったです。』

生田

「人の話聞いてないし……………」

二宮

「生田さん、イルカイダは全員射殺出来たんですよ。」

生田

「……………」

二宮

「どうしたんですか？」

生田

「ここだけの話、全員じゃないの。」

二宮

「全員じゃない!?!」

生田

「声が大きい!?!?!」

二宮

「すみません。」

生田

「まあ、いいわ。」

二宮

「教えてください。」

生田

「今回のテロリスト30人のうち、死体は28体しかないの。」

二宮

「けど、この新聞には『30名全員射殺。』って書いていますよ。」

生田

「バカね、そんなの政府がマスコミに全員射殺って言ったからよ。」

二宮

「てことは……………」

生田

「まだ2人生き残っているのよ。だから、いま特捜部では躍起になって捜査してるわ。」

二宮

「じゃあ、何故生田さんはここで呑気にしてるんですか？」

生田

「（あなたと一緒に居たいなんて言えないし……………」

二宮

「？」

生田

「まあ、私は密入国中国人摘発を任されているからね。」

二宮

「そうですか。」

生田

「そつよ。」

二宮

「それじゃ、もうちよいゆっくりしていきますか。」

生田

「そつね。母さん、特製うどん2つお願い。」

母

「ちよつと待っててね」

二宮

「いえいえ、いくらでも待ちますよ。」

その後、二宮が寝てしまい生田に襲われたのはまた別の話……………

同時刻

東京横田空軍基地

首都防空の要として展開する空軍の拠点。

国内の基地で有るが為、警備は気休め程度しかない。

ここへ、2人のイルカイダがいた。

「リーダー、本当にやるんですか？」

「勿論だ。本来の目的はこれなんだからな。」

「えっ！？それじゃ、あのビル占拠は？」

「囿だよ。」

「そんな……………」

「コラテラルダメージ、目的の為の犠牲だ。」

「酷すぎる。」

「じゃあ、お前は死ぬ。」

パンツ！！！！！！

「グハツ！！！！！！」

「じゃあな。」

格納庫

「あれだ。」

イルカイダのリーダーは心神に向かった。

「よし、5分もあれば十分だ。」

カタカタカタカタ

5分後

「よし、後は逃げるだけだな。」

男は格納庫を出ようとしたが、

「止まれ！……！」

ついに巡回中の警備に見付かった。

「糞っ！……！」

ダダダダダ

「緊急事態、緊急事態。敵だ。至急応援を。」

「了解。」

「何てやつだ。おれ1人殺すのに基地要員全員引っ張りだしてきた

か。
「

「無駄な抵抗は止める。」
日本軍は降伏を呼びかける。

「もう終わりだ。」

ドン

「おい、銃声がしたぞ。」

「掛かれッ！！！！」

「覚悟の自殺だろう。」

「どうしますか？」

「丁重に葬ってやれ。」

「了解いたしました。」

格納庫

「シュツゲキシマス」

「おい、誰か心神に出撃コードを入力したか？」

「いえ、してませんが。」

「じゃ、何故。」

スーパーマン

「ニホンジンヲコロセ、ニホンジンヲコロセ。」

「司令！……！緊急事態です。」

「何だ？もうイルカイダは自殺しただろ。」

「心神が勝手に出撃しました。」

「何！……！遂に自我に目覚めたか！……！」

「多分、あのイルカイダが心神に日本人を攻撃するようなコードを入力したのでしょう。出撃前に、日本人を殺せ、日本人を殺せと言いながら飛んで行ったみたいです。」

「それが、さっきの爆発か。」

「はい。」

「被害は？」

「格納庫の扉がミサイルで破壊された模様です。」

「そうか。」

「はい。」

「首相官邸には」

「まだ言ってません。」

「大至急、首相官邸と国防総省に連絡だ。」

「了解いたしました。」

無人ステルス攻撃機心神、暴走。

〈後書きコーナー〉

早紀

「作者、覚悟。」

作者

「落ち着いてください。」

亜由美

「また、昨日更新しなかったらろう。」

作者

「だって昨日は誕生日だったんですから友達がパーティーを開いてくれたんですよ。」

喜恵

「それで更新しなかったのか……………」

作者

「はい。」

早紀

「ならよい。」

作者

「へっ!？」

早紀

「誕生日なら良からう。」

作者

「ありがとうございます。」

亜由美

「まあ、いいよ。」

喜恵

「じゃあね。」

作者

「ふう、命拾いしました。」

作者

「それでは失礼します。」

鎮圧作戦（後書き）

心神暴走事件は次回で終わります。

イルカイダの侵入路もわかりますから……

二宮と生田、両者の話をちよつと書いて

いきます。

あつ、密入国

中国人摘発もちゃんと書きますので……

ステルスを捕捉せよ

2034年12月18日

首相官邸危機管理センター

藤中

「天野ちゃん、死にたい？」

天野

「総理、落ち着いてください。」

藤中

「ふざけてるの？」

天野

「まさか、そのような事は……………」

藤中

「じゃ、これはどういふことよ……………」

天野

「……………」

藤中

「心神のプログラムデータを書き替えられたせいで、私達に攻撃を

始めたじゃない。」

天野

「申し訳ありません、ですがその心配はありません。」

藤中

「何故そう言えるの?」

天野

「軍用探査衛星天空がありますし、偵察衛星の天界がありますから探知出来るのも時間の問題です。」

藤中

「レーダーに移らないのに、何故分かるの?」

天野

「確かにレーダーには映りませんが、大気の変化やエンジン部の熱源を消すことは出来ません。」

藤中

「そうね、大気の変化ね。けどエンジン部の熱源は難しいんじゃないの?」

天野

「大丈夫です、エンジン部の熱源も完璧に探知出来ます。」

藤中

「そう、それならいいけど……」

天野

「ありがとうございます。」

藤中

「心神の件はどうにかなるとして、イルカイダの侵入路は洗い出せたの？」

天野

「はい、ちゃんと分かりました。」

藤中

「教えて。」

天野

「結論から言えば密入国中国人がイルカイダ入国を支援していました。」

藤中

「……………」

天野

「密入国中国人が偽造パスポートを作り、それを持って中国に行き、中国に待機していたイルカイダにパスポートを渡したと思われます。」

藤中

「て事は、密入国中国人が偽造パスポートを作ったて事は日本人も何人が協力していると考えていいのよね。」

天野

「残念ながら、そう考えていけないといけません。」

藤中

「そう、残念ね。」

天野

「はい。」

藤中

「まあ、いいわ。まずは心神の撃墜を最優先してね。」

天野

「了解いたしました。」

首都上空

NAL国内線F-777

今日も今日とて、何事もなく航路を飛行していた。

この時までには……………

副機長

「機長、もうすぐ到着です。」

機長

「そうだな、よし自動操縦を解除しろ。」

副機長

「了解。」

レーダー員

「機長、おかしな機影を捉えたのですが……………」

機長

「おかしな機影？そんな事はないだ……………」

ズドーーーーー

機長の言葉はそこで途切れた。

心神の機銃掃射により空中で爆散したのだ。

「ニホンジンヲコロセ、モットコロセ。」

危機管理センター

天野

「総理、心神を捕捉しました。」

藤中

「よくやった、して状況は？」

天野

「NAL航空のF-777が撃墜されました。」

藤中

「早急に撃墜しなさい。」

天野

「了解いたしました、横田基地から出撃した陣風隊に向かわせます。」

藤中

「ここからの断続的な情報提供を行うのよ。」

天野

「勿論です、パイロットが捕捉するまで心神の位置を教えていかな
いといけませんから。」

藤中

「早く撃墜するのよ。」

天野

「勿論ですよ。」

陣風隊

世界最強の第6世代戦闘機が高空に行く。

「各機共に細心の注意をしろ。まだ、心神は捕捉出来ていながらな。」

隊長の岩田が言った。

岩田

「今回は何があっても油断するなよ。相手は無人の機体だ。どんなパイロットもびっくりのアクロバット飛行を行うからな。」

只野

「了解、皆も気を付けろよ。」

一同

「了解……!!」

岩田

「只野、おまえこそ気を付けろよ。」

只野

「分かってますよ、隊長。」

岩田

「よし、それならいい。」

只野

「隊長こそ、お気を付けください。」

岩田

「ふっ、ありがとう。」

只野

「いえいえ、それでは隊長も……………」

岩田

「どうした只野？」

只野

「心神です！！！！」

岩田

「何！？……………」

岩田は心神を捕捉した。

岩田

「全機散開！！！！心神を撃墜しろ！！！！」

機械VS人間

30数年前に公開されたターミネーターみたいな光景がそこにはあ

った。

その頃、生田と二宮はと言つと……

二宮

「生田さん！！！！人をいきなり犯すなんて何してるんですか！！！！」

生田

「だって、あなたの可愛い寝顔みてたら我慢出来なくて。」

二宮

「それでも犯すなんて……」

生田

「文句ある!？」

二宮

「いえ…………まさかそんな…………」

生田

「そうよね、あなたは私の物だからね。」

二宮

「はい…………」

生田

「フッフ」

何かおかしいような……………

まあ、いいか。

（後書きコーナー）

早紀

「作者君、死になさい。」

作者

「そう言われても……………」

亜由美

「何日更新しなかった？」

作者

「しよугがないじゃないですか、弓道部に入ってるんですが、ゴルフ部にも入ったんですよ？」

早紀

「入らなきゃいいじゃない。」

作者

「だってゴルフ部の女の先輩に入ってよって言われましたから……………」

亜由美

「甘すぎる……!!」

作者

「……………」

早紀

「大体貴様は彼女がいるのに浮気者が……!!」

作者

「すみません」

亜由美

「いや、許さん。」

早紀

「ちよつと、こっちに来い。」

作者

「お許しを……」

喜恵

「それでは皆さん、また次回に。」

ステルスを捕捉せよ（後書き）

結局、2話になってしまいました。

何か今回は無駄に長いですね……

それではまた、

次回に。

機械VS人間

岩田は全機に散開命令を下すと、自分は心神の背後を取るためにスピードを上げた。

「いくら機械といっても、5機も戦闘機を相手にするとなれば辛いだろう。」

岩田はそう言いながら更にスピードを上げる。

「よし、ロックオンだ。」

岩田はそう言うのと長距離桜花改空対空ミサイルの発射ボタンを押した。

ウエポンベイに内蔵されていた長距離桜花改空対空ミサイルが岩田機から飛び出していく。

長距離桜花改空対空ミサイルは全長5メートルと小型だが、その命中率は凄まじくチャフ等の妨害にも動じない。

日本が世界に誇る技術力は完璧な百発百中のミサイルを完成させたのだ。

かつての湾岸戦争時のニンテンドーウォーと同じく、日本のミサイル全般はニンテンドーミサイルと呼ばれている。

だが、岩田の願い虚しくミサイルは心神には命中しなかった。

只野

「隊長！……！何なんですか、あの動きは！……！」

岩田

「落ち着け！……！只野！……！無人攻撃機なんだから、あのよう
な動きも納得出来るだろう。」

只野

「了解！……！まだミサイルで攻撃しますか？」

岩田

「いや、ガトリングガンで戦え。ミサイルは撃っても命中しないだ
ろう。」

只野

「了解！……！」

岩田

「各機、ガトリングガンで空中戦だ！……！」

一同

「了解！……！」

先に、岩田機が発射したミサイルだが、

心神の驚異的な機動力の前に、ロックオンが外れ、明後日の方向に飛んで行った。

その為、岩田はミサイルではなくガトリングガンでの攻撃を命じたのだ。

只野機

「糞ッ！……！……！……！……！……！……！……！……！」

只野は苛立っていた。

5機によるガトリングガン攻撃を心神は鮮やかに避けるのであった。

その為、岩田と只野以外の3機はガトリングガンを撃ち尽くし、補

給するために基地に離脱して行ったのだ。

「糞ッ！！！！埒があかない。当たれよ、この野郎！！！！」

只野は心神を罵った。

岩田

「只野、心神を罵っても意味がないだろう。」

只野

「しかし、隊長。」

岩田

「俺に考えがある。」

只野

「なんですか？」

岩田

「俺が心神を引き付けるから、お前はその心神の背後を狙え！！！！」

只野

「しかし、隊長。」

岩田

「只野！！！！もし心神を逃せば首都は誘導爆弾とクラスター爆弾の攻撃を受けるんだぞ！！！！そんな事させるわけにはいかんだろ！！！！さっさと準備しろ！！！！」

只野

「了解しました。」

岩田

「よし、頼んだぞ。俺が落とされる前に撃ち落とせよ。」

只野

「勿論です。」

岩田はそう言うと、心神を引き付ける為に心神の前を飛び始めた。

心神

「モクヒヨウヘンコウ、モクヒヨウヘンコウ。ゲキツイセヨ、ゲキツイセヨ。」

岩田機

「よし、バカめ。俺に付いてくると言う事は、お前は撃墜される

と言つことだ。」

岩田はそう言いながら、心神のガトリングガンを避け続けた。

只野機

「糞ッ！！！！なんて野郎だ！！！！隊長に攻撃しながらでも俺の攻撃を避けるとは……………」

只野はそう言いながらも攻撃を続ける。

隊長は心神を引き付ける為に急上昇、急降下、急旋回を繰り返しながら心神を引き付ける。

心神もそれに伴い、飛行する。

その後ろを只野が攻撃するのだが、心神はその攻撃も巧みに避ける。

無人機恐るべし。

岩田機

「糞ッ！……！只野早くしろ！……！」

岩田は焦っていた。

心神の攻撃は避けているが、やはり全て避けれる訳が無い。

やはり、何発かは命中していた。

そのせいで、エンジンの調子が悪い。

早く蹴を着けないと、墜落の恐れがある。

岩田

「只野、聞こえるか？」

只野

「何ですか隊長？」

岩田

「早く落としてくれ、そうしないと俺が落とされる。」

只野

「分かってますが隊長、心神の奴がちょこまかちょこまかとするから、当たらないんですよ。」

岩田

「そうか、だが急いでくれよ。この機体もいつまでウツ……!」

只野

「隊長!……!どうしたんですか!??」

岩田

「糞ッ!……!また命中した。そろそろ潮時かもしれんな。」

只野

「大丈夫ですか!?無理そうなら離脱してください。」

岩田

「そうだな。後を頼んだドガアアアン!……!」

只野

「た、隊長!?隊長!……!」

岩田

「……………」

只野

「隊長お……………」

心神

「コロセ、コロセ。」

只野機

「糞ッ！！！！野郎、覚悟しろ！！！！」

只野は心神にガトリングガンを発射するが。

「なっ！？逃げる気か！！！！！」

心神は急上昇を始めた。

慌てて追い掛ける只野。

「バカメ」

急上昇中に心神はエンジンを止めた。

「何っ！？？」

呆気にとられる只野。

重力を見方に付け、落下していく心神。

「ケイセイギャクテンダ。」

心神は只野機の後ろに付くと再びエンジンを始動した。

「糞ッ！！！！何て奴だ！！！！！」

只野の後ろに付く心神。

「ドウスル、ニホンジン」

心神はまたしてもガトリングガンを発射する。

「チャンスを待つしかないでしょ。」

只野はスピードを上げる。

「ムダダ。」

心神のガトリングガンが只野機のエンジンに命中した。

「糞ッ！……！やられた！……！逃げるが勝ち。」

只野は脱出レバーを引いた。

「ハハハ、バカメ」

「なっ、野郎！……！」

只野はパラシュートで降下しながら叫んだ。

「トドメダ。」

心神は只野に向かって突っ込んできた。

「……………おい、何するきだ。」

「コロセ、ニホンジンヲコロセ。イキテカエスナ。」

心神が只野にせまる。

「糞ッ！……！機械野郎め。そんな事をするのか！……！」

只野にせまる心神。

「シネツ！……！」

「糞ッ！……！……！……！……！……！……！」

心神がガトリングガンを発射しようとしたその時、

ブイイイイーン

ズガアアアアン！……！！

「……？」

只野は恐る恐る目を開けた。

そこには爆発して微塵となった心神があった。

「大丈夫？空軍さん？」

ヘルメットのインカムから女性の声が聞こえた。

「ああ、大丈夫だ。」

只野は言った。

「そう、良かったわ。」

女性が答える。

「所で何処から喋ってるんだ？」

只野が聞くと。

「あら、ごめんなさい。光学迷彩を使ってるから見えないのね、今から見えるわ。」

只野にはよく分からなかったが、その後目の前にジェット戦闘機が現れた。

「私は第七独立機動艦隊大和改轟天ステルス戦闘機隊隊長の桜木と言います。以後お見知りおきを。」

「……………」

只野は呆気に取られた。

その後、只野は無事救出された。

岩田も脱出レバーを引いて脱出していた事が分かり、只野を安心させた。

心神暴走事件は解決した。

機械VS人間（後書き）

さて、心神暴走事件も一件落着です。

今回は密入国中国人を全員摘発します。

お楽しみに。

一斉摘発

2034年12月20日

藤中総理はこの日、閣議を召集した。

開戦まで2週間を切っていたが、いまだに国家防衛体制は三のままだ。

開戦前日の31日に国家防衛体制を二に繰り上げる事になっている。

そうすれば軍は即応待機状態に入り、総理の一声で攻撃が可能になる。

この小説の中の内閣総理大臣は非常に権限が強大である。

総理大臣の直接選挙制度が始まった時に、総理大臣の権限集中を考えたのだ。

その為、総理大臣は国会の法案にも拒否権を持ち、各大臣（勿論、副大臣や事務次官、その下に続く細かい部門も）の任命・罷免権、日本4軍の指揮権も持つ非常に強大な立場になった。

総理大臣の任期は決まっておらず、国民の支持率が任期に影響してくる。

支持率が高ければ高いほど、任期は長くなる。

現在の藤中総理の支持率は83%である。

開戦となれば、100%になるかもしれない。

まあ、何はともあれ閣議が始まった。

「皆さん、私は決めました。」

藤中総理が話始めた。

「度重なるイルカイダのテロ行為。この行為には目を見張る必要があります。9・11は中東からの飛行機をそのまま使い、ビルに突っ込んできたからどうしようもありませんでした。しかしながら鈴木保険ビルの立てこもり事件は防げたはずです。そうすれば心神暴走事件も起きなかった。後者の鈴木保険ビルの立てこもり事件でイルカイダが日本に入国していました。このイルカイダは日本にいる密入国中国人からパスポートを受け取り、日本に入国していました。このようなテロ行為をなくすには、中東人の入国を禁止すると共に日本にいる密入国中国人の摘発を行わねばいけないと思います。いかがでしょうか？」

藤中は言った。

確かにその通りだ、国内から敵対する輩を排除すれば何も起きやしない。

誠に持つて、単純明快である。

「確かにそうですね。敵対する輩を排除すればこの国の治安も良くなると思います。私は賛成です。」

国防大臣の天野はそう言った。

その他の大臣も天野の言葉に頷く。

「それでは、閣議決定と言う事でいいですね。」

藤中の言葉に意義なしとの声があった為、藤中は国会公安委員会委員長に各道府県警への密入国中国人一斉摘発を命じた。

東京某ビルの地下

新人

「生田さん、本当にここですか？」

初の任務に緊張している新人の男が震え声で言った。

生田

「勿論よ、この地下に密入国中国人がいるって前々から情報があったの。だから今回の一斉摘発で逮捕しようて言う事になったの。」

生田はそう言ったが、新人はまだ震えている。

新人

「了解しました。」

生田

「全く、情けないわね。二宮の方がまだましよ。」

新人

「ああ、生田さんの彼氏ですね。」

生田

「あん！？もう一度言ってみろ、鉛玉打ちこむぞ！！！！！！」

新人

「す、すいません。」

生田

「分かればよろしい。」

生田はそう言つと、また歩き始めた。

生田

「ねえ、何か聞こえない？」

新人

「確かに、何か聞こえますね生田さん。」

生田

「何だと思う？」

新人

「喘ぎ声ですから……」

生田

「まあ、見たら分かるわ。」

生田は銃を構え、ドアノブに手を掛けた。

生田

「いい？」

新人

「大丈夫です。」

生田は勢い良くドアを開けた。

中国人男

「おい！！！！何だよ。」

中国人女

「きゃ〜〜〜」

生田

「ね、思った通り。」

新人

「そうですね。」

中国人の男女は行為に及んでいた。

明言は避けます。

中国人男

「出ていけよ。」

生田

「そう言われても、仕事だから。」

中国人女

「何しに来たのよ。」

新人

「あなた達を逮捕します。」

中国人女

「何だよ！！！！」

生田

「中国との開戦まで2週間を切ったわ、だからそれまでに敵対国の輩は排除することが決まったの。」

中国人男

「不当逮捕だ！！！！」

新人

「どうだかね？」

中国人女

「そつよ！！！！」

中国人男

「気に食わねえ！！！！死ね！！！！」

そう言うと、男はナイフを振りかざしながら生田に切り掛かった。

ドンッ！！！！

中国人男

「グハッ！！！！」

中国人の男は生田に撃たれ、死んだ。

中国人女

「酷いっ！！！！何も殺すことないじゃない！！！！」

女は泣き叫ぶ。

生田

「中国人は嫌いなの。」

生田はそう言うと、新人に女を任せて部屋を後にした。

この全国一斉摘発で密入国中国人は180万人逮捕された。

このうち、2500人が公務執行妨害等の理由で射殺された。

しかし、政府はこの事を秘匿した。

一斉摘発（後書き）

次回、残念ながらまたしてもテロが起きます。

第三次世界大戦勃発までいよいよです。

もう少しだけ、お付き合いください。

N R 東海道線脱線事故（前書き）

.....短いですね。

N R 東海道線脱線事故

2034年12月25日

年の瀬も迫ったこの日、N R（日本鉄道。1989年に旧国鉄から民間への業務委託が行われた。東日本・西日本・東海の三社に分かれ、その全てが例によって鈴木商店傘下の企業となった。）東海道線の乗車率は100%を超え、150%に達していた。

我々の世界（2009年の現在ですね）はクリスマスを盛大に祝うのだが、この小説ではそのような事はない。

太平洋戦争で日本が完勝した為、アメリカからクリスマスを盛大に祝うという習慣が入らなかった。

逆にアメリカでは新年を盛大に祝う（クリスマスと同規模。お年玉の習慣もアメリカに浸透した。）習慣が定着したのだ。

勿論、日本も完全にクリスマスを祝わないと言うことはないから一概にイベントがないとは言えない。

まあ、何はともあれUターンラッシュはこの日、ピークを迎えた。

N Rは休日返上で業務を行っている。

しかし、まさかこのような事故が起こるとは……

午後3時

東海道線を走っているN850系は定刻よりも2分遅れで、一路新潟を目指していた。

冬休みを利用して故郷に帰る乗客で、新幹線のなかは溢れ返っていた。

こういう、すし詰めの際に限って痴漢等の行為をする輩がいるため、警察は私服警官を車内に配置していた。

順調に走っていたN850系だが、突如先頭車両が脱線した。

線路上に横倒しになった先頭車両に後続の車両が次々と激突していく。

その光景は凄まじく、N850系は鉄屑の山となっていく。

1時間後

ようやく、救急隊が駆け付けたがその鉄屑の山を見て呆然とした。

自分達にはその鉄屑の山を取り除く手段を持ち得ていなかったのだ

……

午後7時

首相官邸では、またしても閣議が召集された。

「……………全く。」

藤中総理はため息を吐いた。

藤中

「天野ちゃん、この事故の死傷者は？」

天野

「現在、分かっているところで死者は200人です。負傷者は800人です。死傷者共に今後も増えると予想されます。」

藤中

「やってしまったわね。」

一同

「……………」

藤中

「国交大臣、事故原因は分かったの？」

国交大臣

「現在、航空鉄道事故調査委員会を派遣しましたので深夜には原因究明となるでしょう。」

藤中

「そう、それならいいけど。」

辻（大蔵大臣）

「どういう事ですか？」

藤中

「イルカイダはないと思うけど、中国人の犯行かもしれないしね。」

天野

「……………確かにそうですね。」

藤中

「なきにしもあらずだからね。」

辻

「確かに。」

天野

「ですが、総理。もしも中国人の仕業ならどうされますか？」

藤中

「勿論、全員捕まえて死刑よ。」

天野

「了解いたしました。」

陸軍も投入された救助作業だが、最終的な死傷者数合計は以下の通り。

死者530人

負傷者1300人

東海道線の復旧作業は1ヶ月掛かるとの報告があがった。

（後書きコーナー）

イージス原子力機攻戦艦治餌異牟洲盆弩
ジエームスボンド

作者

「艦長！！！！桜花対空ミサイル発射！！！！」

艦長

「了解！！！！射官、全弾発射せよ。」

早紀

「状況を説明すれば、作者が草薙を助けるために転移させた烈火対艦ミサイルの報復の為、敵がミサイルと艦隊を派遣してきたの。それを要塞好きさんが報告してくれた為、頑張って迎撃してるのよ。」

作者

「艦長、ミサイルはどうかね？」

艦長

「現在、4割を撃墜しました。」

作者

「よし、全力をあげて迎撃に努めよ……！」

艦長

「了解……！」

早紀

「ミサイルは良いとして、艦隊が来たらどう戦うの？治餌異牟洲盆
弩1隻で勝てるの？」

作者

「大丈夫です。要塞好きさんも支援してくれますし、戦っているの
は私の小説の時空間ですから草薙先生のところのように、神の効力
はありません。ですから、治餌異牟洲盆弩1隻でも勝てます。」

亜由美

「治餌異牟洲盆弩、治餌異牟洲盆弩って言うけどスペックぐらい教
えてよ。」

作者

「うーん、早紀様・亜由美様・喜恵様と同じようなスペックですか
ね？」

喜恵

「大体、私達のスペックはまだ分からないじゃないですか！……！」

作者

「まあ、いつか語る時が来ます。」

早紀

「まあ、良いわ。それより、ミサイルは？」

作者

「あつ！……！本当だ！……！艦長、ミサイルは！？」

艦長

「全弾撃墜しました。」

作者

「そうか、良かった。」

早紀

「さて、そろそろ敵艦隊が来るんじゃない？」

作者

「本当だ！……！」

亜由美

「全く。」

作者

「艦長、要塞好きさんに電文だ。『貴官率イル陸軍部隊八戦闘態勢
二入ラレタシ。決戦八近イ』だ。」

艦長

「了解！……！至急送ります。」

作者

「決戦だ。」

本編に出張して来ましたが、感想コーナーでの話ですので、よろしくお願いします。

NR東海道線脱線事故（後書き）

次回はちょっと、鈴木商店のトップとの会談を書きたいと思います。

まあ、気分転換ですかね……

……

暇潰し

2034年12月28日

兵庫県神戸市新神戸国際空港

ここに、政府専用機が着陸した。

藤中総理と天野国防大臣が鈴木商店の最高経営責任者との会談のため、神戸にやってきたのだ。

政府公用車内にて

「総理、何故に鈴木商店本社までに行くんですか？」

天野が率直な疑問をぶつけた。

藤中

「まあ、暇潰しね。」

天野

「暇潰し!?!」

藤中

「まあ、それは冗談だけど。」

天野

「じゃあ、何ですか？」

藤中

「色々あるのよ。」

天野

「そうですね。」

藤中

「そうよ。あっ、運転手さん、マクドに寄ってくれない?」

運転手

「マクドですか!?!」

藤中

「そうよ、ちょっと必要なのよ。」

運転手

「了解いたしました。」

藤中

「これで、大丈夫ね。天野ちゃん、あなたが買ってきてね。」

天野

「私ですか!?!」

藤中

「勿論、私はダブルチーズバーガーセットね。」

天野

「了解しました、もしかして鈴木商店の最高経営責任者へのお土産

ですか？」

藤中

「当たり前、あの娘は照り焼きバーガーが好きだから頼んだわよ。」

天野

「分かりました。」

運転手

「着きましたよ。」

藤中

「それじゃ、買ってきてね。」

天野

「ちょっと待っててくださいね。」

天野はそう言うと、店に入ってしまった。

「もしかして、天野さんですか？」

天野

「はい、そうですよ。」

「おお！！！！国防大臣じゃないですか！！！！」

「本当だ！！！！国防大臣だ！！！！」

天野

「いやあ、有り難いですね。私も有名になったものですね。」

「何でこんな所にいるんですか？」

天野

「何かね、藤中総理に買ってきてねって言われましたからね。」

「藤中総理がですか！？」

天野

「ええ、そうですよ。外の公用車の中に……」

「藤中総理は公用車の中だ！！！！」

「走れッ！！！！」

外に走っていく客達。

天野

「……………」

店員

「……………」

天野

「ダブルチーズバーガーセットと照り焼きバーガーセットとビッグマックセットを頼みたいんだが……」

店員

「あっ、分かりました。」

天野

「スッキリしたね。」

店員

「そうですね。」

天野

「何かあったら国防総省に電話してくれ。軍を派遣するよ。」

店員

「あ、ありがとうございます。」

天野

「ハハハ、気にしないでくれよ。」

店員

「お待たせしました。ダブルチーズバーガーセットと照り焼きバーガーセットとビッグマックセットです。」

天野

「あっ、ありがとう。はい、これ。」

店員

「こんなにですか？」

天野

「今出ていったお客さん達の方だよ。」

店員

「て事は……………」

天野

「私の奢りだよ。それじゃあ失礼するよ。」

店員

「ありがとうございます。」

天野はマクドの袋を片手に、公用車に戻ってきたのだが……………

「よくまあこんなに……………」

天野はそう言うと、ため息を吐いた。

公用車の周囲は総理を一目見ようと集まった群衆で溢れていた。

「はいはい、すみませんね。通してください。」

天野は群衆を押し退けながら公用車の中に入った。

天野

「総理、買ってきましたよ。」

藤中

「……………」

天野

「総理？」

藤中

「……………遅い」

天野

「すみません。」

藤中

「覚えてなさい。」

天野

「すみません。」

藤中

「まあいいわ、運転手さん鈴木商店本社ビルに急いで。」

運転手

「分かりました。」

公用車は群衆を蹴散らしながら鈴木商店本社ビルを目指していった。

暇潰し（後書き）

NR脱線事故の真相は次回に明らかになります。

色々、お待ちください。

明日は007の新作の公開日です。

私的に、ジエームズボンド

の役は先代の方が良かったような……………

資本主義の頂点

藤中総理と天野国防大臣を乗せた公用車は、鈴木商店本社ビルに到着した。

「しかし、いつ見ても凄いすな。」

天野が言った。

「そうね、でもそんな事はいいの。早く行くわよ。」

藤中はそう言うと、ビルの中へと入っていった。

「了解しました。」

天野もビルの中へと入っていった。

さて、何が凄いかと言うと鈴木商店本社ビルの事だ。

それもそのはず、鈴木商店本社ビルは地上500階建てだからだ。

兵庫県神戸市に地上500階建てのビルが建っているのだから凄いものだ。

何故に500階建てかといえば、鈴木商店本社ビルには鈴木商店傘

下の企業が、本社を移すか、何かしらの部署を置いている為である。鈴木商店本社ビルには2階から450階までに傘下企業が入っている。

1階は受付やカフェ・レストランがあり、451階から499階は鈴木商店の企業が入っている。

500階は鈴木商店最高経営責任者室だ。

2階からの傘下企業の階数はその企業の順位となっており、年度末決算時の収益により変化する。

昨年度末（2033年度）の決算収益のトップ3は、トヨタ自動車・任天堂・松下電器産業となっている。

その為、450階（1位）にトヨタ自動車・449階に任天堂・448階に松下電器産業が入っている。

この3社は本社を鈴木商店本社ビルに入れるのではなく、地元にいる。

まあ、中には本社を移している企業があるが、9割方何かしらの部署を置いているだけだ。

第2話で書いたと思うがアメリカのビッグ3も鈴木商店傘下（正確には、GM・フォードはトヨタ自動車、クライスラーはいすゞ自動車の傘下）になっている。

その他、諸外国の有名ブランド（ルイヴィトン等ですね）や世界的

なファーストフード店も鈴木商店傘下になっている。マクドとかですな

鈴木商店は世界に展開する大企業から町工場等を合わせれば1万社を超える企業を傘下に入れている。

鈴木商店グループだけの収益は数百兆円は超えている。

鈴木商店は鈴木建設・鈴木自動車・鈴木保険・鈴木重工・鈴木商事・鈴木銀行・鈴木電気・鈴木不動産・日本航路保障会社等を筆頭に500社程ある。

そして、その鈴木商店傘下にトヨタ自動車・任天堂・松下電器産業・いすゞ自動車・本田技研工業・日産自動車・日立製作所・NR（東日本・西日本・東海）・JAXA（宇宙航空研究開発機構）・富嶽航空機・川崎重工・三菱電機・三菱商事・三菱地所・三菱自動車・三菱重工・三菱東京銀行・三井住友銀行・三井生命・三井不動産・三井物産・GM・フォード・クライスラー・メルガンスタンレー・ボーイング・USスチール・ロールスロイス・エクソン・モービル・メリルリンチ・ゴールドマンサックス等を筆頭に9500社ある。

これで分かるとおり、鈴木商店は日本は元より世界中の企業を傘下に入れた、資本主義の象徴となっている。

そして、その鈴木商店の最高経営責任者というのが……………

鈴木商店500階最高経営責任者室

「総理、まだでしょうかね？」

天野が聞いた。

藤中

「もう少し待たないとね、美好ちゃんは今学校から向かってるからね。」

天野

「うん、そうですね。まだ高校生ですからね。」

藤中

「そうよ、高校生よ。でもその高校生が世界最大の会社の最高経営責任者だからね。」

天野

「凄いものですね、18歳の女子高生が最高経営責任者ですもんね。」

藤中

「確かにね、あの娘はたいしたものよ。」

天野

「そうですね。」

天野がそう答えると、

「失礼します。」

男の声が聞こえた。

「お嬢様が入られます。」

その声と共に、いかにもお嬢様ですよと言わんばかりの女性が入ってきた。

「天野国防大臣初めまして、早紀総理大臣久しぶりです。」

鈴木商店最高経営責任者の上戸美好が入ってきた。

藤中

「美好ちゃん久しぶりね。」

上戸

「はい、最後にあったのは9・11テロの後ですからね。」

藤中

「学校の調子はどじつ？」

上戸

「まあまあと言ったところですかね。執事が付いてるけどね。」

天野

「執事!？」

上戸

「はい、私の専属執事です。」

天野

「はあ……………」

藤中

「そっだ!…!!美好ちゃんにお土産よ、はいマクドね。」

上戸

「やった〜〜〜」

藤中

「貴女の好きな照り焼きバーガーセットよ。」

上戸

「ありがとうございます。」

天野

「(本当に好きなんだな。)」

その後、3人は各人マクドのセットを食した。

上戸

「……………早紀総理。用件は何ですか？」

藤中

「用件？」

上戸

「そうです、早紀総理がわざわざ私の所に来るのは絶対何かあるもの。」

藤中

「流石ね。美好ちゃんにはかなわないわ。」

上戸

「で、何ですか？」

藤中

「用件と言うのは……………」

藤中総理は上戸最高経営責任者に用件を伝えた。

藤中

「？」

上戸

「連邦商路護衛艦隊が危ない……………」

藤中

「そうよ、日本と連邦加盟国とのシーレーンを守る連邦商路護衛艦隊は第三次世界大戦。真つ先に中国との戦いになるけど、中国はシーレーンの遮断を狙ってくるわ。連邦商路護衛艦隊にはくれぐれも注意しろと言つといてね」

上戸

「そうですね、確かに第三次世界大戦となれば中国との戦いが最初にありますからね。これには気を付けないといけませんね。」

藤中

「そうよ、連邦商路護衛艦隊には今までも今もこれからも連邦内の海運を守ってもらわないといけないの。だから被害を被るのはいけないの。鈴木商店の合言葉は『儲かりまっか？ぼちぼちでんな』、『利益最優先』だからね。」

上戸

「そうです。先代の金子直吉大番頭が言っていた合言葉です。確か

に1艦でも沈めば大損害ですからね。艦そのものも大切ですが、乗員の命もあります。」

藤中

「そうでしょ、気を付けないと。」

上戸

「ありがとうございます。早速会議を開きたいと思います。」

藤中

「そうしてね、美好ちゃんの人に被害が出たらいけないからね。」

上戸

「フッフ、ありがとうございます。」

藤中

「じゃ、そう言う事ね。」

上戸

「わざわざ、ありがとうございます。」

藤中

「それじゃ、私達は失礼するわね。」

上戸

「はい。」

藤中

「バイバイ。」

上戸

「ありがとうございました。」

天野

「失礼します。」

こうして、藤中総理と天野国防大臣は鈴木商店本社ビルを後にした。

資本主義の頂点（後書き）

500階……………

耐震強度は大

丈夫ですのでご心配なく。

次々回によいよ第三次世界大戦が勃発します。

もう少しお付き合いください。

開戦直前演説

2034年12月31日

生田の母が経営するうどん屋

「『藤中総理、今日正午に国会議事堂前にて演説。遂に第三次世界大戦勃発！！！！』後3時間か。」

二宮が新聞を読みながら言った。

生田

「そうね、正午に演説ね。」

二宮

「大丈夫ですかね。」

生田

「何が？」

二宮

「第三次世界大戦ですよ？核戦争にならないとは言えないじゃないですか。」

生田

「大丈夫よ、海軍のほぼ全艦は弾道ミサイルを迎撃出来るんだから。」

「

二宮

「けど、それに失敗したらどうするんですか？」

生田

「陸軍の330ミリ自走多連装ミサイル・システム（ペトリオット PAC3みたいな物です）があるから大丈夫よ。」

二宮

「なら安心ですね。」

生田

「と言うより、日本は核兵器を保有してるのよ？しかも世界最強のレーザー水爆も保有してるのよ？空軍もGZ飛鳥やEX富嶽を保有してるから発射する前に弾道ミサイル基地が破壊されるかもしれないわ。まず、日本に歯向かうこと自体が自殺行為よ。」

二宮

「そう言われればそうですね。中国や中東各国は滅ぶでしょうね。」

生田

「シヨーゴ事。」

二宮

「……………古くないですか？20数年前のギャグですよ？」

生田

「そうよ！……！私はあなたより年寄りですよ！……！何か文句あったって！？」

二宮

「いえ、ありません。生田お姉様。」

生田

「そつよ、行雄ちゃん。可愛がってあげる。」

二宮

「何で拳銃を出すんですか！……！」

生田

「大丈夫よ、弾は痺れ弾を装填してるから体が動かなくなるだけよ。」

「

二宮

「やめてください！……！」

バンツ！……！！

二宮

「うっ！……！！」

生田

「さあ、行雄ちゃん。2階へ行きましょう。」

二宮

「ち……ち……やめ……！」

生田

「ろれつも回らなくなったわね。」

二宮

「ゆ……ゆ……ゆ……！」

生田

「大丈夫、優しくするから。」

その後、2階から二宮の悲鳴と生田の笑い声が聞こえたという……
……

2034年12月31日正午国会議事堂前

「皆様、長らくお待たせしました。第115代内閣総理大臣藤中早紀閣下です。総理どうぞ。」

衆議院議長の言葉の後に藤中総理が国会議事堂の正面玄関から颯爽と現れた。

あつと、この小説の日本の国会は衆議院だけの1院制議会となっている。

2005年当時の総理大臣である小泉純一郎（ライオンヘアーの似合うカリスマ総理大臣だった）が郵政民営化ではなく、衆議院・参議院の統合に力を入れたのだ。

純ちゃんは衆議院・参議院の統合のみに力を入れ、2007年には衆議院だけの1院制議会を実現させたのだ。

その後純ちゃんは2008年に海賊退治として、ソマリア沖に連合艦隊を派遣した。

この時はまだ、中東各国と貿易を行っていたため連邦商路護衛艦隊との共同で海賊退治を行った。

その後も年末から翌年の2009年にかけて、神聖イスラエル神国と共同でガザへの空爆を行った。

空爆理由はガザ（この小説では我々の世界のイスラエルのある所にガザが建国されてある）が聖地エルサレムを汚したのが理由である。

このいちやもんを純ちゃんは受け入れ、イスラエルで共同で空爆を行ったのだ。

この戦いは2009年に停戦となったが、現在も停戦のまま決着が

付いていない。

今度の第三次世界大戦では中立を宣言したが、滑り込みで連合国側に宣戦布告してくるかもしれない……………

話が脱線したが、藤中総理の演説が始まった。

「皆様、寒い中集まっていたいただきありがとうございます。」

藤中総理は礼を述べた。

この演説を聞くために国会議事堂前に集まった群衆は100万人。

この正午からの演説はNHKや民放各局（筆頭は鈴木テレビ）が生放送で放送している。

その為、どのチャンネルでも藤中総理の演説が聞けるのだ。

全国民が見守る中、藤中総理は演説を始めた。

「約3ヶ月前、東京タワー・国防総省・世界貿易センタービルにイルカイダのテログループが占拠したF-777が突撃しました。イルカイダだけの犯行ならばすぐにでも攻撃しましたが、CIAの調査した所によると中国をはじめ中東各国がイルカイダを支援している事が分かりました。この行為はまさに鬼畜の為せる業。我が国は国際連邦に制裁案を提出しました。結果は言うまでもなく、可決です。中国及び中東各国は自滅への道突き進んでいます。我が国に

歯向かうこと自体が自殺行為です。愚かなバカどもに教えてやりましょう。」

藤中総理の演説に群衆は酔い痴れていた。

「私は20日に密入国中国人の一斉摘発を内閣総理大臣の下に指示致しました。そして、摘発を行った所、180万人もの薄汚い人間の屑がいたことが分かりました。その屑は全員太平洋の底へコンクリで固め、沈めました。ところがまだ薄汚い人間の屑はいたのです。その輩はNR東海道線の新幹線を脱線させ、またしても罪のない市民を殺戮しました。この行為は鬼畜です。犯人グループは全員逮捕し軍の演習標的として処刑しました。人を殺せば何があるうとも死刑です。」

1985年から刑事裁判ではこのように決まっています（解説参照）。殺人を犯せば犯人は死刑。この鉄則を適用しただけであり、何ら問題はないと考えます。中国人・中東各国の人種は日本からの排除は終わりました。次は地球上からの排除です。薄汚い人間の屑である中国人・中東各国の人種は排除しなければいけません。中国・中東各国に宣言します。降伏するなら今のうちです、さもないとあなたたちの国は崩壊するでしょう。まあ、降伏すると言っても受け入れませんが。」

藤中総理はここで息を大きく吸ってこういった。

「第三次世界大戦が終結した暁には世界地図から中国と中東各国を削除しないといけませんね。」

藤中総理の演説は終わった。

演説終了後、各放送局及び新聞社は藤中内閣の支持率を調査し、夜10時に発表した。

支持率は99%であった。

―解説―

1985年に起こった連続強姦事件がきっかけである。

犯人は逮捕されたが、その犯人が未成年であった為軽い執行猶予付きの判決ですんだのだ。

これに遺族がぶちギレた。

この強姦事件で30名の女性が犯され、5名が自殺したのだ。

実際問題として、この少年が殺した事になる。

その遺族が中曽根首相に訴え掛け、中曽根首相が涙を流しながらそれを受け入れた。

その後は早かった。

中曽根首相はすぐさま法案の改正を国民投票で議決した。

結果は9割以上が改正に賛成。

次の日には改正法案が議決された。

その内容は、明らかな証拠があれば殺人犯（直接・間接双方）は有無を言わず死刑に処す。

その少年は即日死刑が執行され、陸軍機甲師団の標的とされた。

この法案により、犯罪率はビックリするほど激減した。

開戦直前演説（後書き）

皆様、次回遂に第三次世界大戦が勃発します。

いよいよです、長らくお待ちせしました。

次回投稿は2月1日です、しばしお待ちください。

第三次世界大戦勃発（前書き）

いやはや、驚きました。

何と20話目

で第一部よりも多い192万人を殺戮していました。

まあ、これもまだ可愛いほうです。

第三次世界大戦勃発

2035年1月1日午前9時

この日、日本全国に非常に発達した雨雲が覆いかぶさり雨を降らせていた。

新年1発目の天気は雨とは、非常に暗くなる気分だ。

それでも、政治家や軍人には仕事があるのだから辛いだらう。

国際連邦総会及び安全保障理事会の決定で、日本が2035年1月1日の正午になったら、連合国側と中東方面側がそれぞれ宣戦布告する事になっている。

後3時間……………

首相官邸

藤中早紀は朝から緊張と興奮を押さえられずにいた。

去年の9・11同時多発テロから4ヶ月、中国及び中東各国を滅ぼす事を考えていた。

2年前の内閣総理大臣就任から圧倒的な支持率で政治を行ってきた。昨日（去年と言った方がいいかな？）の開戦直前演説後の支持率は99%に跳ね上がった、国民のほぼ全員が開戦を支持してくれている。

これには感謝しても、感謝し尽くせない。

まあ、それほど国民が怒り狂っているのが分かったと言えるかもしれない。

「後3時間か……………」

藤中総理はそう言うと、いつまでも降り続ける雨を眺めていた。

鈴木商店本社ビル最高経営責任者室

上戸美好最高経営責任者もいつまでも降り続ける雨を眺めていた。

この前の藤中総理からの指摘された通り、連邦商路護衛艦隊の警戒

レベルを最大にして今日を迎えた。

上戸は正直怖かった。

戦争、しかも世界大戦となれば死傷者も少ないながらも出るはずだ。

まあ、戦争になれば先代の金子直吉の遺言通り採算度外視で国家に奉仕するが、さすがに、長期化するのは痛い。

長期化すると、利益最優先が信条なのに利益がないと意味が無い。

まあ、あの国防大臣の話によれば『早くて1年、長くても2年で全てカタが付くでしょう』と言っていたからそれを信じてみよう。

何はともあれ、後3時間。

3時間で世界はまたしても3度目の世界大戦を迎える。

11時45分

世界は恐れ、恐怖していた。

あと15分、あと15分で第三次世界大戦が勃発するのだ。

連合国側の国民は中国及び中東各国が苦し紛れに核ミサイルを発射しないか怯えている。

中国及び中東各国の国民はもはや敗北・国家崩壊・民族消滅を覚悟していた。

何せ世界最強の日本と戦争を起こすのだ。

世界の一般常識として『日本と戦争を起こすのは自殺行為』と知られていたのだ。

事実、日本に情けを求めてはいけない。

軍人・民間人問わず、日本に敵対した国家は殺戮される定めなのだ。

世界各国の研究機関が調査した所、第三次世界大戦が終結した暁には世界の人口は現在の90億から60億に激減するだろうとの調査結果がある。

驚異的数字だ。

まあ、見方を変えれば人口が減って無駄が無くなると考えれば良い

だろう。

2035年1月1日正午

遂に世界はその時を迎えた。

正午と同時に連合国側と中東方面側はそれぞれ宣戦布告を行った。

最終的な各陣営の国家は以下の通り。

連合国側

日本・アメリカ合衆国・イギリス・神聖イスラエル神国・ロシア連邦・ハワイ王国・オーストラリア・ニュージーランド・カナダ・フランス・スイス・オランダ・スペイン・デンマーク・アイスランド・ブラジル・満州皇国・インド・フィリピン・インドネシア・ブルネイ・タイ・マレーシア・パプアニューギニア

中東方面側

アフガニスタン・イラク・イラン・トルコ・サウジアラビア・オマーン・イエメン・パキスタン・アルゼンチン・エチオピア・ソマリア・スーダン・モロッコ・ナイジェリア・チャド・ガザ・中国

ガザはやはりと言おうか、当然と言おうか、連合国側に立ち向かってきた。

空爆の蹴を付けると言っていたが、これも自殺行為。

前回は地理的観点から、本土での戦いはなかったが、今回は中国を崩壊させてからになるが、中東にも遠征予定だ。

その時こそ、ガザは崩壊するだろう。

宣戦布告、第三次世界大戦が勃発してから10分たった12時10分。

日本の偵察衛星『天界』が中国四川省からの弾道ミサイル発射を捉えた。

第三次世界大戦最初の攻撃は中国からのミサイル攻撃から幕を開けた。

首相官邸地下5階オペレーション・ルーム

地下5階は国家安全保障会議も開かれるが、オペレーション・ルームも設置されている。

オペレーション・ルームには光ファイバーケーブルが引かれ、国防総省から逐次情報が伝わる。

その他、国防総省から陸海空揚陸の担当武官がオペレーション・ルームに詰めている。

そして、オペレーション・ルームには大型の液晶モニターが設置されており日本を中心とした世界地図が映し出されている。

自軍は黒色で、同盟軍は青色、敵対勢力は赤色で表示され事にあたる。

想定されるだろう戦闘経緯は以下の通りで、

第三次世界大戦勃発がコード2035

第1段階の対中国戦がコード2038

第二段階の中東方面側爆撃戦がコード2040

最終段階の中東方面側進攻戦がコード2049

全3段階で第三次世界大戦に望むのだ。

そして、第三次世界大戦が勃発してコード2035を発動した所への中国による弾道ミサイル攻撃であった。

「全く、チャイニーズもバカね。」

総理大臣の藤中が言った。

天野

「そうですね、バカとしか言いようがないですね。」

藤中

「そうよ、夜絶濃鏡で撃墜されるのがオチなのに。」

天野

「まあ、そうなりますね。」

藤中

「バカよ。」

天野

「そうですね。」

藤中

「天野ちゃん、夜絶濃鏡で打ち落とすのも芸がないわね。日本の技術力は世界一だと言う事を見せ付けてやらないと。」

天野

「そうですね、どうしますか？」

藤中

「海軍の連合艦隊はどうよ？」

天野

「連合艦隊は現在出撃準備中ですが……………」

藤中

「世界大戦が勃発だつて時に……………温いわね。」

天野

「すいません、ですが第七独立機動艦隊が日本海に待機中です。」

藤中

「でも白鷺のドッグに入つてたら意味ないんじゃない？」

天野

「大丈夫です、すでに戦時態勢に移行していますから準備万端です。」

「

藤中

「流石ね、それじゃさつさと撃墜するよう命令して。」

天野

「了解いたしました。総理、それともう一つ。」

藤中

「何？」

天野

「国家防衛体制を最大レベルにアップしてください。」

藤中

「あれ？国家防衛体制は二になってたよね？」

天野

「はい、二になっていましたが軍最高司令官の命令がないと戦時態勢に移行出来ません。」

藤中

「ありやま！？それじゃ、

早く国家防衛体制を最大レベルにアップして！！！！！」

天野

「了解いたしました、国家防衛体制一発動！！！！これにより正式に戦時態勢に移行する、各員気合いを入れて掛かれ！！！！！」

一同

「了解！！！！！」

藤中

「さて、これで正式に第二次世界大戦が勃発した事になるわね。」

大丈夫か？

こんな感じで？

第三次世界大戦勃発（後書き）

本編にも書きましたが、この小説の人口は第三次世界大戦終結した
暁には90億から60億になります。

と言う事は……………
殺戮します。

私は30億人

日本海に君臨し艦隊

2035年1月1日午後12時15分

日本海に巨大な島がある、いや島ほどの大きさの船である。

その名を『海上機動要塞白鷺』と言う。

何故に島と間違えそうになるかと言うと、白鷺は全長35キロ（誤記ではない）、最大幅20キロという超超超弩級なのだ。

海上機動要塞白鷺級は合計4隻建造された。

白鷺以外は太平洋・大西洋・インド洋に配備されている。

白鷺は第七独立機動艦隊専用の海上機動要塞なのだ。

白鷺級はびっくりするほど高額である。

それは中流国の国家予算が吹っ飛ぶくらい高額である。

今回の対戦国である中東方面側が国家予算を全て出しても建造出来ないだろう。

いくら産油国であっても石油を買ってくれる国がなければ意味が無い。

その点、日本は世界最大の石油・メタンハイドレート・天然ガス・レアメタルの輸出国である。

天然ガス・レアメタルは連邦加盟国分も含むが。

話が反れた、白鷺の話に戻す。

今、白鷺の艦船補修用ドックはてんでこ舞いとなっている。

確かに戦時態勢には入っていたが、ミサイルが撃たれるとは思っていなかった為にドックに入りっぱなしだった。

なお、白鷺級は艦船補修用ドックを始めミサイル、魚雷生産工場・海水ろ過淡水工場・食品工場・水耕農場・病院・娯楽施設・飲食施設そして何より、隊内外の風紀維持の為、公認の風俗施設と人員が確保されているのだ。

滑走路も8本設置されている為、まさに島といえる。

さて、そんな白鷺の甲板で1人の女性が海を見つめていた。

現代2035年では馴染みのない、十二単を身にまとい艶やかな髪は長く腰まで伸びていた。

この女性こそ、海上機動要塞白鷺の艦魂『おひかく刑部』である。

実は彼女、元は姫路城の守護神である。

遠い昔から姫路城に宿り、世の行く末を見守ってきた。

所が海上機動要塞白鷺の命名式の時、何が彼女を導いたのか姫路城と白鷺の波長が一致し刑部は白鷺の艦魂として宿ったのだ。

そして、数々の紆余曲折を経て白鷺の艦魂としてまたしても世の行く末を見守っている。

「平和やの〜誠にもって平和や。平和が1番」

刑部が言った。

「御前様〜」

誰かが走ってきた。

「おや、赤穂どうした？」

刑部が赤穂に聞いた。

「御前様、早紀様達の出撃準備が整いました。ドックでお待ちです。」

赤穂は刑部に用件を伝えた。

「そうか、早紀ちゃん達の出撃が出来たか。それじゃ妾もドックに行こうかの。」

刑部がそう言っていると、

「了解いたしました、御前様。」

赤穂もそう言った為、刑部はドックへと歩いていった。

赤穂とは刑部の侍従で、刑部に一生の忠誠を誓っている。

赤穂は白鷺と結合している強襲揚陸艦の艦魂である。

海上機動要塞白鷺級は海上機動要塞としての役目と、結合している強襲揚陸艦としての役目がある。

まあ、別に海上機動要塞1隻で戦争するわけでもないので分離して

まで戦う理由はない。

艦隊にも強襲揚陸艦がある訳で、それだけでも十分な戦力となる。

もしもの場合は艦首部からLCACでピストン輸送するまでだ（海上機動要塞内部には強襲揚陸艦用の戦車・装甲車・自走リニアガン・自走ロケット砲などが搭載されている）。

白鷺艦船補修用ドック

刑部と赤穂はドックにいた。

赤穂

「御前様、早紀様達は出撃ですが大丈夫でしょうか？」

刑部

「大丈夫よ、赤穂。早紀ちゃん達は世界最強の艦隊よ、しかも中国の弾道ミサイルを迎撃するだけだから簡単よ。」

赤穂

「それなら安心ですが。」

刑部

「妾の言葉を信じなさい。」

赤穂

「わかりました。」

刑部

「よろしい。」

「刑部さん、赤穂ちゃん。」

誰かが、声をかけてきた。

刑部

「あら、早紀ちゃん。」

赤穂

「早紀様。」

早紀

「刑部さん、わざわざありがとうございます。出撃するのを見送っていただけとは。」

刑部

「いいのよ、私はあなた達専用の海上機動要塞なんだからね。」

早紀

「ありがとうございます。」

赤穂

「早紀様、大丈夫なんですか？」

早紀

「何？赤穂ちゃん。」

赤穂

「弾道ミサイル迎撃ですが……………」

早紀

「大丈夫よ、チャイニーズのポンコツミサイル何て私のSM4龍鬼対空ミサイルで叩き落としてやるわ。」

刑部

「フッフ、早紀ちゃん期待してるわよ。」

早紀

「ありがとうございます。必ずやご期待に答えるよう努力いたします。」

刑部

「けど、無理はしたらダメよ。」

早紀

「了解、それでは行ってきます。」

早紀はそう言うと、自艦へと戻っていった。

赤穂

「御前様、早紀様は大丈夫ですかね？」

刑部

「大丈夫よ、安心しなさい。」

赤穂

「そうですね。」

刑部

「さて、それじゃお茶でもしましょう。」

赤穂

「了解いたしました。準備します。」

刑部

「ありがとうございます。」

刑部と赤穂はお茶を飲み始めた。

早紀は中国の弾道ミサイル迎撃に出撃した。

果たして迎撃は間に合うのか？

日本海に君臨し艦隊（後書き）

やっぱり色々引っ張っていきます。

さてさて、ただか弾道ミサイルごときにここまで引

っ張るとは……

とっくと迎撃

しましゅう。

それでは。

迎撃作戦

第七独立機動艦隊は白鷺から出撃し、弾道ミサイル迎撃を開始した。

「けど、チャイニーズのポンコツミサイルを迎撃するのは簡単だけどもあ、素早く終わらせましょう。」

CICに女性の声がした。

「まあそうですね、SM4龍鬼で迎撃しますか？」

男の声がした。

さて、ここで説明すれば前者の女性が第七独立機動艦隊司令長官菅原水香大將。

後者が第七独立機動艦隊参謀長の吉田貴史中将。

世界最強の第七独立機動艦隊の首脳である。

菅原

「はい、SM4龍鬼発射!!!!!!」

吉田

「了解!!!!!!魔射と天空のリンクも完了してますのでさっさと迎撃します。」

第4主砲塔前方のVLSからスタンダードSM4龍鬼対空ミサイルが100発発射された。

VLS式スタンダードSM4龍鬼対空ミサイル

連合艦隊のSM3の発展版である。

命中率が物凄く高く、空中を飛行する物体全てを迎撃出来る。

日本の工学エレクトロニクス・テクノロジーの結晶である。

吉田

「長官、全弾迎撃完了しました。」

菅原

「分かったわ、藤中総理に連絡して。」

吉田

「了解。」

菅原

「全く、作者が変な事書かなければ前のままでよかったのに。」

吉田

「次回から頑張ってもらいましょう。」

中国の発射した弾道ミサイルは全弾迎撃に成功した。

首相官邸地下5階オペレーション・ルーム

藤中

「迎撃出来たのね。」

天野

「はい、全弾迎撃できました。」

藤中

「それじゃ、報復しないとね。」

天野

「はい。」

藤中

「夜絶濃鏡で焼き尽くしなさい。」

天野

「了解いたしました。」

藤中総理の命令により、中国四川省が壊滅する事が決定的となった。

この瞬間、日本の殺戮戦が始まった。

内閣のトップが命令し、ナンバー2がそれに賛同したため、中国と中東諸国の命運は決した。

その後、夜絶濃鏡の攻撃で中国四川省が地上から消滅した。

黒色に塗られた潜水艦が浮上した。

艦長

「核弾道ミサイル発射！！！！」

中国海軍の原子力潜水艦冬級がブラジルの首都に向けて核弾道ミサイルを発射した。

～お詫び～

さすがに調子に乗り過ぎました。

次回からは節度ある文書を書いていきますので、以後よろしくお願
いします。

迎撃作戦（後書き）

さてさて、日本は防衛できましたが今度はブラジルが危ないですね。
八八八、別にブラジルが壊滅
しようが知った事じゃないですが。

言っておきますがまだ時系列では1月1日の12時〜1
3時のあたりですよ。
1日で色々おこ
りますね。

首都消滅

冬級原子力潜水艦が発射した核弾道ミサイルはブラジルの首都へ1直線に飛んでいく。

50キロトンの核弾道ミサイルが刻一刻と首都に向けて、首都を滅ぼそうとしている。

だが、誰も気付かない。

首都が滅ぼうと、しているのに………

2035年1月1日午後12時48分

第三次世界大戦勃発から48分……

ブラジルの首都ブラジリアは地球上から消滅した。

日本首都東京霞が関首相官邸地下5階オペレーション・ルーム

大型液晶モニターを前に日本の頭脳は一時思考停止に陥っている。

「なんて事……………」

偵察衛星天界が捉えた映像は想像を絶するものだった。

「総理、これは……………」

天野国防大臣も声を絞りだしながら言った。

それほどブラジリアは酷かったのだ。

瓦礫の山と課した高層ビル郡。

火の海と課した火事は生存者を更に死に追いやる。

天界は駆け付けた消防車を捉えたがあまりの規模に消防車も近付けない。

天野

「総理、中国は開戦早々禁断の兵器を使用しましたぞ……………」

藤中

「分かってるわ、中国は国家滅亡を望んでるみたいね。」

天野

「と言いますと?」

藤中

「この第三次世界大戦の第1幕、第二次日中戦争は中国が滅ぶまで終わらせないわよ!!!!!!」

天野

「了解!!!!!!」

藤中

「国家占領から、国家崩壊にシフトチェンジよ。」

天野

「そうなるよ。」

藤中

「そう、第三次世界大戦終結の暁には中国と中東諸国を世界地図から抹消し、中国人と中東諸国人を絶滅種として登録しないとイケないわ。」

天野

「……………」

藤中

「分かったの？」

天野

「勿論です、了解いたしました。」

藤中

「演説の準備をしてちょうだい。」

天野

「かしこまりました、直ぐ準備します。」

午後2時から緊急の総理演説が始まった。

急な演説にもかかわらず、50万を超える群衆が集まった。

それほど、藤中総理の人気の高いと言う事か。

藤中総理は険しい表情で訥々と話し始めた。

「皆さん、明けましておめでとございます。今年もよろしく願
いします。」

何を言うかと思ったら、新年の挨拶から始まった。

「しかしながら、あまりのんびりとは出来ません。新年早々第三次世界大戦が勃発しました。」

「正味、1年ほど長くて2年は戦時態勢が続きます。それについては申し訳ありません。」

藤中総理は話すのを中断し群衆に一礼した。

「しかし、国民生活及び経済への影響は皆無でありますのでご安心ください。」

「戦争経緯は日夜ニュース番組及び新聞で報告させていただきます。」

「さて、本題ですが第三次世界大戦勃発から2時間。中国の発射した弾道ミサイルを迎撃し、夜絶濃鏡で中国四川省を焼き尽くした位で大したことはありませんが、我が同胞連合国であるブラジルの首都ブラジリアが地球上から消滅しました。」

藤中総理は一呼吸置くとまた話はじめた。

「中国がブラジルの首都を核弾道ミサイルで破壊した事に対して我が国としても重大な決意をしなければなりません。中国は国家滅亡を自ら望んだのです。」

群衆は藤中総理の一言一言を真剣に聞いている。

「我が国はここに宣言します。中国及び中東諸国を崩壊させるまで戦い続けます。」

藤中総理はそう言い切った。

開戦から8時間

2035年1月1日20時

首相官邸2階総理執務室

藤中総理はある書類を読んでいた。

「全く………」

藤中総理はそう言つと、また書類を読み始めた。

「総理、失礼します。」

天野国防大臣が執務室に入ってきた。

「天野ちゃん、まあ座って。」

藤中総理は天野国防大臣を座らせた。

「はい。」

天野国防大臣はそう言つと席に付いた。

藤中

「早速だけど、天野ちゃん。オンブレラを知ってる？」

天野

「勿論です、表向きは全米1の製薬会社ですがウイルス研究が主な会社でしたよね。」

藤中

「そう、最悪のウイルス兵器を開発して数々の問題を発生させ、2013年に崩壊した会社よ。」

天野

「それが今更どうしたんですか？」

藤中

「確かに、オンブレラは崩壊したわ。でもオンブレラの頭脳とも言える研究者達が死んだわけじゃないわ。彼等はオンブレラ崩壊時にアメリカ国籍を剥奪されたわ、その国籍を剥奪された彼等がどこに亡命したかわかる？」

天野

「まさか、中国にですか？」

藤中

「そのまさかよ、大変な事になるわ。」

天野

「何てこった！！！！」

さて、オンブレラについて説明すると。

勘の良い読者方々ならお分りだと思いが、某サバイバルホラーゲームのアレである。

まあ、オンブレラとはアメリカ合衆国の中西部のコクーンシティを企業城下町とし、全米1の製薬会社となった会社だ。

で、なぜ中国に亡命したら大変なのかだが。

それは、1998年の『黒道特急事件』『洋館事件』1999年の『コクーンシティ消滅事件』2001年の『欧州山村事件』の各事

件で発生したウイルス兵器である。

『黒道特急事件』はオンブレラの本社から山中の幹部養成所での変死事件を調査に行った調査隊が黒道特急で消息を絶ち、続く第2調査隊が幹部養成所でウイルス感染生物兵器との死闘を繰り広げた事件である。

まあ、事件は無事解決したが。

続く『洋館事件』は失踪した陸軍特殊チームの搜索の為、海兵隊特殊チーム（デルタフォース）がオンブレラ所有の洋館に出動した。この『洋館事件』でもウイルス感染生物兵器の襲撃があったが、無事ことなきを得た。

『コクーンシティ消滅事件』はオンブレラの企業城下町地下の研究所から新型ウイルスが流出し、街全域がバイオハザードに見舞われ合衆国政府が滅菌作戦を実施し核ミサイルを発射してコクーンシティを消滅させた事件だ。

『欧州山村事件』は合衆国大統領の娘が誘拐され、それを救出するため欧州のある山村で起こった事件である。結果から言えば無事合衆国大統領の娘は救出出来たが。

計4つの事件で共通しているのはウイルス感染生物兵器が出現している事だ。

このウイルスを開発した研究者が中国に亡命した為、中国進攻時にウイルス感染生物兵器にぶち当たらないとは限らない。

それを藤中総理は恐れていたのだ。

天野

「オンブレラの研究者が中国に亡命したと言う事は最悪の事態を想定しなければいけませんね。」

藤中

「そうよ、ウイルス感染生物兵器がうようよ出てきたらそれこそ厄介極まりないわぬ。」

天野

「そうなればクラスター爆弾や気化爆弾を使うまでです。」

藤中

「普通のゾンビにも気を付けないとね。」

天野

「めんどくさいですね。」

藤中

「めんどくさかたらアメリカにやらせれば良いんじゃない?」

天野

「我が国の問題です。」

藤中

「まあね、それじゃちゃんと考えておいてね。」

天野

「了解いたしました、それでは失礼します。」

藤中

「はい、おやすみ。」

ゾンビとも戦わなくてはならなくなった日本軍。

中国進攻はややこしそうだ。

飛鳥改の悲運

2035年1月19日

第三次世界大戦勃発から18日、戦争は膠着状態となった。

兵庫県神戸市県立高校

鈴木商店最高経営責任者の上戸美好は教室にて授業を受けていた。

鈴木商店最高経営責任者である上戸美好はまだ18歳であり、高校3年である。

そんな彼女も昨日の始業式から通常の授業が始まっている。

今受けているのは、『戦争』の授業だ。

日清戦争から最近のガザ空爆までの日本の戦争史が載っている。

今勃発している第三次世界大戦も終結後に、載るはずだ。

『戦争』の教科書には各戦争の原因・参加兵力等が事細かに書かれている。

軍事マニア・ヲタクには人気の授業である。

「1943年9月1日に日米英連合軍はノルマンディー上陸作戦を敢行したのだ、この上陸作戦にも第七独立機動艦隊は活躍したのだ。テストに出るからよく覚えているように。」

上戸の担任が言った。

（そう言われても、知ってるのにな。）

上戸は心のなかでほくそ笑んだ。

上戸は軍事マニアである。

連邦商路護衛艦隊には莫大な金を投入している。

上戸がそう思っていると、突然扉が開き男が入ってきた。

「お嬢様！！！！飛鳥改が中国原潜に雷撃されました！！！！！！」

上戸の執事は入ってくるなり、そう叫んだ。

「飛鳥改の被害は？」

上戸は冷静に聞いた。

「速力が25ノットから15ノットに低下しただけです。邪龍と同じ船体構造が功を征しました。」

執事は安堵のため息と共にそう答えた。

「そう、それじゃ連邦商路護衛艦隊を飛鳥改の護衛に付けて。やっぱり世界1周でも護衛を付けてたら良かったわね、」

上戸もそう言った。

「了解いたしました。それでは失礼します。」

執事はそう言って去ろうとしたが、

「あっ、ヘリコプターを大至急呼んで。本社ビルに戻るわ。」

上戸は突拍子にそう言った。

「学校はどうするんですか？まだ2時間目ですよ？」

心配そうに聞く執事であったが

「大丈夫よ。先生、こういう訳ですので帰らせて下さい。中国原潜に雷撃されたとなると藤中総理も心配しているはずですから。」

「そうだな、よしOKだ。」

担任が許可した為、執事はヘリコプターを呼びに行った。

「美好ちゃん、忙しそうね。」

「うん、学校が始まったばかりなのに大変よ。」

上戸は同級生にそう答えた。

「上戸さん、頑張ってるね。」

「待ってるよ。」

他の同級生も上戸にそう言った。

「お嬢様、ヘリコプターの用意が出来ました。」

執事が言いに来た。

「うん、ありがとう。それじゃ屋上へ行きましょう。」

上戸はそう言うと、屋上へ向かった。

屋上には深山大型輸送ヘリコプターが待機していた。

上空には邪鬼Z戦闘ヘリコプター10機と、雷電ステルス垂直離艦戦闘攻撃機5機、陣風ステルス戦闘機5機が警戒飛行を続けている。

「いつ見ても、凄い護衛ね。」

上戸は半ば呆れたように言った。

確かにそうだ、通常の登下校時には95式戦車5輛と、20式装甲車3輛が護衛に付く。

ある意味、藤中総理より護衛されている。

「お嬢様、早くお乗り下さい。本社ビルに帰りませんと。」

執事が急かす。

「そうね、分かったわ。」

上戸はそう言うと、ヘリコプターに乗った。

上戸は早速、会議を始めた。

「それじゃ、説明して。」

上戸の求めに、男が立ち上がり説明を始めた。

「それでは失礼します、我が『商船鈴木客船株式会社』保有の『飛鳥改』が中国原潜冬級に雷撃されました。命中した魚雷は1本だけでしたので、速力が低下しただけですみました。」

商船鈴木客船株式会社の代表が説明を終えた。

「修理期間及び修理費はなんぼぐらい？」

上戸が書類を読みながら聞いた。

「修理期間は長くて1週間です、上戸嬢の言われた通り邪龍と同じ船体構造が沈まずにするだけです。もし通常のままでしたら確実に沈んでいたでしょう。そして、今回の修理を利用して『飛鳥改』の内装を大幅に変更しようと思います。修理費と改装費で合計380億円、期間は1ヶ月半です。」

上戸は会社では上戸嬢と呼ばれている。

「分かったわ、沈まなかっただけでも儲け物ね。早急に修理と改装工事を始めて。」

上戸はそう言うと、会議を終わらせた。

2時間30分後

上戸は首相官邸にいた。

あの会議の後、F-777で東京の横田空軍基地に向かい、そこから首相官邸に出向いたのだ。

総理執務室

「美好ちゃん、いらっしやい。」

藤中が満面の笑みで執務室に入ってきた。

上戸

「早紀総理、めんどくさくなりました。」

藤中

「どうしたの美好ちゃん、心配する事はないわ。もうその冬級は沈んだから。」

上戸

「そうなんですか、一安心です。」

藤中

「『飛鳥改』は大丈夫なの？」

上戸

「はい、380億円で修理と改装をします。1ヶ月半ですべてを終わらせます。」

藤中

「そう良かったわ、それじゃ今年の納税額は少なくしようか？」

上戸

「いえ、大丈夫です。国家に奉仕するのが我が鈴木商店の役目です。」

藤中

「そう、それならいいけど。」

上戸

「それじゃ……」

上戸が話していると、天野が慌てて入ってきた。

藤中

「どうしたの？天野ちゃん。」

天野

「中国黄海艦隊が日本海に待機中の第七独立機動艦隊攻撃に出撃しました。」

藤中

「水香ちゃんに連絡して。」

日本海にて、嵐の予感。

飛鳥改の悲運（後書き）

やりました、遂に次回から本格的な海戦です。

黄海艦隊を可愛がってあげましょう。

最強艦隊

日本海に悠々と停泊する艦隊。

その名を『第七独立機動艦隊』と言う。

太平洋戦争で宿敵アメリカ太平洋艦隊を叩き潰した第七独立機動艦隊は核兵器も恐れぬ無敵艦隊であった。

太平洋戦争終結後は大西洋に遠征し、ドイツ艦隊を壊滅させた。

第二次世界大戦終結から数年後の朝鮮戦争にも出撃。

湾岸戦争にも出撃した。

その後も、第七独立機動艦隊は世界最強と言う名を欲しいままにした。

そして、2025年の連合艦隊『12艦隊計画』と平行して第七独立機動艦隊と第八特務機動艦隊の再編である『無敵艦隊計画』。

けっぴいな名前だが、名前の通り無敵艦隊である。

連合艦隊各艦の装甲に使用しているレアメタルより更に硬度の高いレアメタル2を装甲に使用し、イージスシステムも最新鋭の物を装備、地球上何処にでも空間移動出来る飛翔も装備。

第七独立機動艦隊と第八特務機動艦隊は世界最強の艦隊として、君臨し続けるのだ。

海上機動要塞白鷺

第七独立機動艦隊旗艦イージス原子力機攻戦艦大和艦長の東郷忠勝大佐は食堂に向かっていた。

藤中総理直々に中国黄海艦隊攻撃に出撃しろ、と命令があり出撃しようと思ったら長官と参謀長がないのだ。

しかし、これは何時もの事だ。

東郷も慣れたもので、白鷺の食堂に向かっているのだ。

この東郷忠勝大佐は名前から分かる通り、あの故東郷平八郎の子孫である。

めぐりめぐって、自分も日本海海戦に出撃するとは思ってもいなかったらう。

白鷺食堂

「やっぱりここに居ましたか、藤中総理直々に出撃命令が出ましたよ。」

東郷がそう言いながら、菅原の元へ歩いていった。

菅原

「ありや、総理から命令が来たの？」

吉田

「長官、それでしたら早速出撃しませんと。」

菅原

「でもアレでしょ、中国黄海艦隊が私達の所にくるまで10何時間。正確な介在時間は明日の1月20日6時でしょ？そんなに焦る必要はないでしょう。」

吉田

「確かにそうですね。大佐、気にする事はない。」

東郷

「そうですね、それならいいですが。」

菅原

「……………簡単に折れるわね。」

吉田

「着任した時から成長しましたね。」

菅原

「そうね、あの時はどうなるかと思ったけど。」

東郷

「もう、いいじゃないですか。あの時の事は。」

東郷はイージス原子力機攻戦艦大和艦長に着任した時は、それはそれは血の気の多い男であった。

何かあると、菅原や吉田に食って掛かった東郷である。

今とはエライ違いだ。

それが着任した時の3年前……………

その後祖父と仲の良かった三笠の艦魂大奄にさんざんしごかれた。

東郷はその後も食って掛かる事があつたが、大奄と刑部・赤穂に体に教え込まれた為、大分ましになった。

それ以前に、東郷は刑部を怒らせた為死にかけた事がある。

その時の東郷の教訓が、刑部様を怒らせるなであった。

話はそれるが、女性は怒らせない方が良い。

生死に関わる。

おとなしくしていた方が良いと私は思う。

話を戻したい。

菅原

「それじゃ、ちょっとばかり準備しますか。」

吉田

「了解いたしました。大佐、行こうか。」

東郷

「了解。」

菅原

「けど、中国黄海艦隊はおもちゃみたいな艦隊だから張り合いがないわね。」

吉田

「確かにそうですね、骨董品のワリヤーグ原子力空母を旗艦とする艦隊ですからね。」

菅原

「そうですね、あんな骨董品今でも使ってるなんてね。」

吉田

「ロシア連邦とまだ国交のあった1985年に中国が購入したんだつたわね。」

菅原

「そうですね、ロシアも金が欲しかったからね。」

吉田

「中国も空母が欲しかった。双方の利益が一致して実現したのね。」

菅原

「けど所詮は、雑魚の集まりね。集合してもナンボよ。」

早紀

「私に齒向かうのは自殺行為。」

東郷

「さっ、さっ、さ、早紀、早紀様!!!!!!」

早紀

「あら、東郷じゃない。どうしたの？また死にたい？」

東郷

「まっ、まさか!!!!!!」

早紀

「そうよね、この前で良く分かったもんね。」

東郷

「勿論です。」

早紀

「うんうん、良く分かってるわね。」

菅原

「早紀ちゃんも中々のものね。」

吉田

「凄いです。」

刑部

「妾も忘れてもらっては困る。」

赤穂

「御前様、お茶を。」

刑部

「うむ、礼を言う。」

赤穂

「いえ、お構い無く。」

菅原

「さてと、無駄話はこれまで出撃準備にかかるわよ。」

吉田

「了解。」

東郷

「分かりました。」

早紀

「中国を叩き潰すわよ。」

刑部

「旨いな、緑茶は旨いな。」

赤穂

「誠にそうです。」

第七独立機動艦隊は出撃準備に入った。

介在まで、10時間。

最強艦隊（後書き）

すいません、次回が本格的な海戦です。

1話延びました。

前哨戦

2035年1月20日6時

朝日と共に白鷺から出撃した第七独立機動艦隊は中国黄海艦隊へ向け、進路を採った。

ここで、両艦隊の兵力を見てみると……………

第七独立機動艦隊

超弩級イージス原子力機攻戦艦大和級5隻

超弩級イージス原子力空母大和改級5隻

イージス原子力巡洋艦最上級5隻

イージス原子力駆逐艦雪風級5隻

原子力強襲揚陸艦久重級15隻

原子力補給艦援龍改級15隻

原子力潜水艦隱岐級3隻

海上機動要塞白鷺

中国黄海艦隊

原子力空母ワリヤーグ

広州級ミサイル巡洋艦4隻蘭州級ミサイル駆逐艦6隻

これで分かるとおり、中国黄海艦隊の出撃は完全に自殺行為だ。

イージス原子力駆逐艦雪風級1隻でも、中国黄海艦隊を壊滅させられるだろう。

それほど、第七独立機動艦隊と中国黄海艦隊の戦力はかけ離れているのだ。

そして、その雲泥の差の戦力であるからして、今の第七独立機動艦隊の余裕があるのだ。

イージス原子力機攻戦艦大和CIC

司令長官の菅原と参謀長の吉田は液晶モニターを見つめていた。

吉田

「嶺花ステルス電子攻撃機からの映像です。」

菅原

「ふん、ただか11隻でよく出てきたわね。」

吉田

「全くです。」

菅原

「嶺花ステルス電子攻撃機は何機飛ばしたの？」

吉田

「5機です。」

菅原

「なら、対レーダーミサイルは合計100発ね。」

吉田

「そうですね、1機20発搭載ですから。」

菅原

「それなら、全機に命令よ。対レーダーミサイルを満遍なく発射して。」

吉田

「了解いたしました。」

嶺花ステルス電子攻撃機隊に攻撃命令が下った。

嶺花ステルス電子攻撃機隊長・長谷川結城機

「よし皆、長官から攻撃命令が下ったぞ。全機対レーダーミサイル発射用意。」

長谷川が各機に言った。

一同

「了解。」

「さてと、どうしますかな……………」

長谷川はそう言うと、考え始めた。

「俺の嶺花には20発の対レーダーミサイルが搭載されている。あいつらと合わせれば100発だ。長官は100発で中国黄海艦隊のレーダーを壊滅させろと思っているだろう。だが正味、ややこしいぞ。」

長谷川がそう考えていると。

「隊長、お先に失礼しますよ。」

インカムにそう聞こえたと思うと、1機が垂直に降下し始めた。

「全く、あいつは。よし始めるか。」

長谷川も降下を始めた。

「旗艦さんのレーダーを壊滅させるか。」

長谷川はそう言うと、対レーダーミサイルの発射ボタンを押した。

ウエポンベイに内蔵されていたミサイルがワリヤーグのレーダーを破壊する為、飛び出して行った。

重力を味方に付け、凄まじいスピードで降下するミサイル。

ワリヤーグのトップにあるレーダーに衝突する寸前に、ミサイルが飛散した。

すると、内部から凄まじい威力の電磁波が発生。

ワリヤーグのレーダーを破壊した。

「よしよし。完璧だ。」

長谷川は笑みを浮かべた。

長谷川

「全機、攻撃は完了したか？」

隊員

「完了しました。広州級及び蘭州級のレーダーも完全におじゃんです。」

長谷川

「よし、全機帰還せよ。」

隊員

「了解、隊長は？」

長谷川

「先に帰ってきてくれ、ワリヤーグの艦載機のレーダーも破壊したい。」

隊員

「了解。」

長谷川機

「さて、ワリヤーグの艦載機さんも大変だな。」

長谷川はそう言うと、自動操縦のボタンを押した。

「よし、これでOKだ。対レーダーミサイル発射。」

長谷川機から勢いよく、飛び出して行くミサイル。

「全く、ラジコンって奴はこんなに難しいのか!？」

長谷川はそう言いながら対レーダーミサイルの操縦を続ける。

そうである。

長谷川は機体を自動操縦に切り替え、対レーダーミサイルを操縦し、ワリヤーグのエレベーターから侵入して、艦載機を破壊しようと考えているのだ。

「ふん、アホ共が。レーダーが使えないからって適当に撃ちやがって。」

長谷川はそう言いながらミサイルを操縦する。

「よし、もう少しだ。」

長谷川のミサイルはフリヤークのエレベーターに侵入した。

「チエスト〜〜」

対レーダーミサイルは飛散して、電磁波が発生した。

「こちら長谷川機。今から帰還する。」

長谷川は帰還した。

前哨戦にて、中国黄海艦隊の出鼻を挫く事に成功した第七独立機動艦隊。

続く、戦いは艦載機による戦いだ。

2世代の差は大きすぎる

第七独立機動艦隊旗艦超弩級イージス原子力機攻戦艦大和CIC

第七独立機動艦隊司令長官の菅原水香は参謀長の吉田貴史と話し合っていた。

菅原

「貴史くん、この後どうする？」

吉田

「どっしましょっ？」

菅原

「……………」

吉田

「空母艦載機で攻撃しますか。」

菅原

「そっね。」

吉田

「では、早速。」

菅原

「大和改に命令よ、空母艦載機により中国黄海艦隊を攻撃しなさい。」

吉田

「了解。」

大和改に命令が飛んだ。

超弩級イージス原子力空母大和改CIC

菅原長官からの命令を受け、大和改は艦載機の出撃準備を始めた。

「さあ皆、頑張るのよ。」

イージス原子力空母大和改の艦長である菅野栄子大佐が各員に気合を入れている。

「菅原長官が空母艦載機を出撃させなさいと言ってるから急がないとね。」

大和改飛行甲板

今まさにカタパルトに向かうため、エレベーターを昇ってきた航空機がある。

第七独立機動艦隊の艦隊カラーである真っ黒な塗装をしており、ステルスを極限まで意識した構造となっている。

その機体はゆっくりとしかし着実にカタパルトに向かっている。

「さてと、頑張らないとね。ねえ、恋。」

大和改轟天ステルス戦闘機隊長の桜木愛大佐が言った。

「そうね、けど落とされないでね。大丈夫だと思うけど。」

さて、この恋と呼ばれた女性は誰かと言うと

轟天ステルス戦闘機の『飛魂』である。

飛魂は真のエースにしか見えないと言われているが、桜木には見えたのだ。

それは、心神事件を境にしてから見えるようになったのだ。

その心神を撃墜するまでに訓練（心神に轟天を攻撃するようプロگرامして本格的な空戦を行うのだ）で49機を撃墜し、中東に派遣されていた（第三次世界大戦勃発前に中東の反日勢力…イルカイダ傘下のテログループ…を壊滅させる為に派遣）時に100機。

心神事件で撃墜したので合計150機となったのだ。

多分それで見えるようになったのだろう。

で、轟天ステルス戦闘機の飛魂の恋と言う名前だが桜木が愛と言う名前だから恋と言う名前になったのだ。

まあ、適当だな。

「恋、行くわよ。」

桜木が後部座席に座る恋に言った。

「了解。」

恋が言った。

轟天ステルス戦闘機は本来1人乗りであるが、恋が出現した為に特注で作ったのだ。

全ての性能はそのまま2人乗りにしたのだ。

リニアカタパルトに載せられた轟天ステルス戦闘機が凄まじいスピードで射出された。

第七独立機動艦隊の空母艦載機による空襲が始まった。

「皆、頑張っていくわよ。」

桜木が他の隊員に言った。

「了解です、隊長。」

「イクうう〜」

前者が大和改轟天ステルス戦闘機隊隊員の京本有加少佐。

後者が同隊の隊員である折原明美少佐である。

「……………明美、まじめにしないで。」

桜木が呆れたように言った。

折原

「すいません、中佐。」

桜木

「まあいいわ。」

京本

「中佐、今回の作戦は？」

桜木

「まあ、作戦というよりただ単に敵の艦載機を叩き落としてワリヤ
ーグ以外の艦にダメージを与えて終わりよ。」

折原

「沈めないんですか？」

桜木

「そうよ、何か長官に考えがあるみたい。」

京本

「了解しました。」

桜木

「そう言う事。由希ちゃん分かった？」

平野

「分かってるわよ。」

彼女は大和改海王ステルス攻撃機隊隊長の平野由希中佐である。

桜木

「それならいいけどね。」

平野

「愛ちゃんも頑張るのよ。私達を守ってもらわないとね。」

桜木

「任せなさい。」

京本

「隊長、敵機発見です。」

桜木

「フッフ、落とされに来たわね。」

中国黄海艦隊原子力空母ワリヤーグ艦載機・ホウライ戦闘攻撃機蓬萊隊

隊長

「全機注意しろ、相手は日帝の最新鋭機種だ。なめてかかるな！！
！！」

隊員一同

「了解。」

隊員

「隊長、敵機を発見しました。」

隊長

「そうか………うん？遅いな。」

隊員

「確かにそうですね、見たところマッハ1・9ですかね。」

隊長

「だがなめてかかるな、相手は無敗軍事超大国の日本だ。しかも第七独立機動艦隊の艦載機だ。油断大敵と言っ言葉があるからな。つておい！！！！！」

隊員

「大丈夫ですよ、隊長。俺がちゃっっちゃっちやと片付けますよ。」

隊長

「勝手な行動は謹め。」

隊員

「大丈夫ですよ。」

しかし、その隊員は悪夢を見ることになる。

隊員

「へっ！！！！ロックオンだ。」

蓬萊が轟天にロックオンするが……………

隊員

「おい！！！！何だっつてんだ！！！！」

轟天は突如としてスピードを上げた。

そのスピードはみるみる加速する。

それもそのはず、轟天の最高速度はマツハ3・8である。

蓬萊のマツハ2とは雲泥の差だ。

隊員

「おい！！！！何て速さだよ！！！！」

蓬萊隊の隊員は混乱していた。

だが、それでも気を取り直す。

隊員

「まだロックオンが生きて……………おい！！！！何でロックオンが外れてるんだ！！！！しかも何処にもいないじゃないか！！！！」

陣風ステルス戦闘機等はレーダーには写らない。

第七独立機動艦隊の各機はレーダーにも写らないし、光学迷彩を装備しているため肉眼でも捕捉不可能だ。

隊員

「何処にいるんだ！……！卑怯だぞ！……！出てこい……！」

ドガアアアアアアン

彼が喋れたのはそこまでであった。

轟天に包囲され、レーザー砲の集中攻撃を受け爆散したのだ。

隊長

「何て奴だ、やはりなめてかかっては駄目だ。」

隊員

「隊長……！」

隊長

「……！」

隊員

「隊長。」

隊長

「動き回れ！……動きまわって敵の姿を見付けろ！……！」

隊員

「了解しまドガアアアン」

隊長

「おい！……糞！……！」

隊員

「隊長！……！」

隊長

「逃げろ！……！」

隊員

「逃げろっ たってドガアアアアン」

隊長

「何て奴だ。残りは俺だけか……………」

蓬萊隊の隊長は嘆いた。

蓬萊隊は現在、この隊長だけが生き残った。

隊長

「もう駄目だな。」

隊長

「ワリヤーグ、聞こえるかワリヤーグ？」

通信員

「こちらワリヤーグ、何だ？」

隊長

「敵は強力だ、この後艦隊に向かうかもしれないから最大限注意をされたし。」

通信員

「了解だ。」

隊長

「それとな、これだけを言わせてくれ。」

通信員

「何だ？」

隊長

「家族に愛していると……………」

通信員

「分かった……………」

隊長

「ありがとうございます……………ドガアアアアアン」

通信員

「……………必ず伝える。」

ワリヤーグ艦載機は壊滅した。

― 解説 ―

戦闘攻撃機蓬萊

中国が開発した第5世代航空機。

自称、世界最強航空機。

しかしながら、日本の第6世代戦闘機の陣風やアメリカのF25等には足元にも及ばない。

今回の戦闘でも相手は第7世代戦闘機の轟天が相手であった為、呆気なく壊滅した。

2世代の差は大きすぎる(後書き)

次回は轟天・海王による中国黄海艦隊空襲です。

艦隊空襲

「呆気なかったわね、恋。」

桜木が後ろに座る恋に言った。

恋

「敵は2世代も遅れたポンコツだから当然と言えば当然ね。」

桜木

「確かにね、それにレーダーも使えないから勝って当然ね。」

恋

「そう言う事。だけど、次はあれだよ。」

桜木

「そうね、次は艦隊空襲だからね。」

恋

「レーダーは破壊したけど、下手な鉄砲数撃ちや当たるだから心配ね。」

桜木

「大丈夫よ、光学迷彩を使って近づくから敵には見えない。そこを私達はレーザーや誘導爆弾・クラスター爆弾を叩きつけて、由希ちゃん達は対艦ミサイルや誘導爆弾・クラスター爆弾を叩きつけると言う事よ。」

恋

「余裕満開ね。」

桜木

「当然。」

平野

「愛ちゃんもつづく中国黄海艦隊が見えるから頑張ろつね。」

桜木

「由希ちゃんも頑張るのよ。」

中国黄海艦隊旗艦原子力空母ワリヤーグ

司令長官

「レーダーが壊滅したから全く分からん。」

参謀長

「確かにそうですな。」

司令長官

「しかし問題はレーダーだ。それに向かっていてる敵艦載機は姿も見えないらしいじゃないか。」

参謀長

「我が蓬萊隊も壊滅しましたからね。」

司令長官

「そもそも、相手が悪すぎる。こんな悪魔が相手なんだから負けるに……………」

見張り員

「長官！！！！左舷よりミサイルです！！！！！」

司令長官

「糞！！！！艦長、面舵だ！！！！！」

艦長

「面舵一杯！！！！！」

ワリヤークは右へと舵を取る。

見張り員

「早すぎます！！！！！」

ドガアアアアン！！！！！！

司令長官

「糞！！！！艦長被害は？」

艦長

「飛行甲板に馬鹿デカイ穴があいたぐらいです。」

司令長官

「何て奴だ。」

桜木

「全機帰還よ。」

桜木の言葉に全員が驚いた。

京本

「中佐、なぜ帰還ですか？」

桜木

「長官の命令よ。何か面白い事を思い付いたみたい。」

折原

「面白い事？」

桜木

「詳しくは聞けなかったけどね。」

京本

「それで帰還ですか。」

桜木

「そつよ。」

京本・折原

「了解。」

桜木

「そつ言つ事で由希ちゃんも帰還しないとね。」

平野

「分かつてるわよ、愛ちゃん。」

桜木

「了解。」

恋

「面白い事ってなんでしようね。」

桜木

「分からないわ、けど何か思い付いたのは確実ね。」

恋

「まあ、帰還すれば分かりますね。」

桜木

「そうそう、分かる事よ。」

攻撃隊は全機帰還した。

超弩級イージス原子力機攻戦艦大和CIC

菅原

「さてと、貴史君面白い事になるわよ。」

菅原が笑いながら言った。

吉田

「……………分かりました。」

第七独立機動艦隊は全艦最高速度の45ノットで中国黄海艦隊に向かっている。

中国黄海艦隊との距離は180キロとなった。

中国黄海艦隊旗艦原子力空母ワリヤーク

1人の少女が艦尾の飛行甲板に寝転がっていた。

少女のわき腹はえぐれ、血が流れていた。

「日本海軍……………私を鹵獲して。」

少女はそう呟いた。

彼女はかつてロシア海軍にいたが中国に売却され、現在の所属となっている。

彼女は大の親日家だ。

星新一の本を片時も離さずに持っている。

その本も血で滲んでいた。

彼女、アリアは強く願っていた。

鹵獲してくれど。

司令長官

「参謀長、全艦に命令だ。」

参謀長

「何でしょう。」

司令長官

「ヘリコプターからの情報を元に、SSN22サンバーンを発射せよ。」

参謀長

「了解です。」

司令長官

「レーダーが使えなくてもヘリコプターを使えば命中させれるだろう。」

参謀長

「長官、全艦発射準備完了です。」

司令長官

「よし、発射！……！」

中国黄海艦隊配下の広州ミサイル巡洋艦及び蘭州ミサイル駆逐艦からSSN22サンバーン対艦ミサイルが発射された。

その数は実に200発。

それらが全て、第七独立機動艦隊に向かっている。

だが、第七独立機動艦隊は迎撃しようともしない。

VLS式スタンダードSM4龍鬼対空ミサイルや桜花対空ミサイル等で迎撃出来る距離だが……………

距離はすでに目の前となった。

CIWSの射程に入っている。

早く迎撃しなければ手遅れになる……………

ドガアアアアアア

SSN22サンバーン対艦ミサイルは全弾命中した。

第七独立機動艦隊の各艦は火だるまとなっている。

第七独立機動艦隊よ……………

同時刻・第七独立機動艦隊専用の海上機動要塞白鷺

第七独立機動艦隊が出撃した為、空となっている港湾に2隻の潜水艦がいた。

隊長

「よし、全員そろったな。」

隊員

「はい。」

隊長

「では作戦を開始する。」

中国海軍が潜水艦でコマンドを送り込んできた。

海上機動要塞白鷺CIC

荒神が異常を知らせた。

荒神

「港湾部二敵部隊上陸。数八120名ホド。」

黒田

「非常迎撃態勢に入るわよ!!!!!!白兵戦よ。」

池田

「娯楽施設・飲食施設・病院・各種工場へのルートを閉鎖。非戦闘員は避難せよ。揚陸軍師団は戦闘準備。」

黒田と池田が命令を下す横で、刑部がいた。

「妾の城へよう参った。妾の城の見物料はそなた達の命で払ってもらうぞ。」

刑部は薙刀を片手に、笑みを浮かべていた。

艦隊空襲（後書き）

さて、第七独立機動艦隊はどうなるのでしょうか？

空間転移はしていませんよ

アルティメットワン

SSN22サンバーン対艦ミサイルは全弾命中した。

端から見れば、全艦大破していてもおかしくないほどの爆発だ。

事実、中国黄海艦隊の各艦はヘリコプターから送られてきた映像を見て勝利を確信した。

中国黄海艦隊旗艦原子力空母ワリヤーク

参謀長

「やりましたね、長官。」

司令長官

「……………」

参謀長

「あの艦隊を倒したんですから、もっと胸を張ってくださいよ。」

司令長官

「だが何か上手く行きすぎている。」

参謀長

「そつですか？」

司令長官

「ああ、何かあるぞ……………」

ドガアアアアアアン

司令長官

「何!?!」

参謀長

「そ……………そんな……………」

司令長官

「蘭州が……………」

参謀長

「何て奴だ……………」

爆風が外れ、黒煙の奥から巨体を表す。

5隻の20万トン級戦艦の姿がある。

まるで、赤茶けた岩石を粉碎しつつ浮上するかのようだ。

その5隻の戦艦の主砲及び副砲全てがこちらに向かっている。

司令長官

「撃て。」

参謀長

「は？」

司令長官

「持てる火力を使い、あいつらを沈めろ！！！！！」

参謀長

「了解！！！！！」

超弩級イージス原子力機攻戦艦大和CIC

吉田

「中国黄海艦隊は驚いているでしょうね。」

菅原

「フッフ、そうね。ねえ、早紀ちゃん。」

早紀

「チャイニーズとの格の違いを見せ付けたから良いけどね。」

菅原

「技術力が違うからね。」

早紀

「極式電磁装甲の勝利。」

吉田

「さて、早く終わらせましょうか。」

菅原

「そだね、主砲・副砲発射!!!!!!」

早紀

「バイバイ、チャイニーズ。」

キュイイイイイン

シュパーーーーン

58センチリアガンが唸りを上げて砲弾を発射した。

ここで説明すると、第七独立機動艦隊には『極式電磁装甲』と呼ばれる装甲が採用されている。

これはレアメタル2の装甲に砲弾が命中する直前に大電流を流し、砲弾を溶解破壊するものである。

これにより、機銃弾1発からミサイル・砲弾に至まで溶解破壊出来るのだ。

陸軍の95式戦車にも『電磁装甲』が採用されている。

超弩級イージス原子力機攻戦艦大和以下武蔵・信濃・近江・尾張、超弩級イージス原子力空母大和改・武蔵改・信濃改・海神・風神、イージス巡洋艦最上・鳥海・青葉・松島・高雄、イージス駆逐艦雪風・谷風・初風・海風・山風がリニアガンで攻撃を開始。

原子力潜水艦隠岐・佐渡・対馬も音響ホーミング魚雷で攻撃を始めた。

砲弾が中国黄海艦隊の蘭州級に叩きつけられる。

リニアガンの威力は凄まじく、大和のリニアガン1発で駆逐艦など吹っ飛ぶ。

そのような砲弾が雨あられと降り注ぐ。

蘭州級ミサイル駆逐艦は全艦大爆発を起こして沈んだ。

奇跡的に脱出した者もいたが、すぐに地獄を見ることになる。

リニアガンは生存者も攻撃し始めた。

超弩級イージス原子力機攻戦艦大和CIC

吉田

「さて、蘭州級は片付きましたね。」

菅原

「そうね。」

この横では未だにリニアガンは発射され続けている。

衛星リンク射撃システムの魔射が軍事用探査衛星天空とリンクし、生存者も1名単位で殺戮していく。

液晶モニターには偵察衛星天界からのミリ単位での映像が高画質で映し出され、中国兵がリニアガンの砲弾で四散する瞬間が捉えられている。

凄まじい映像だ。

着弾するたびに吹き飛ぶ手足。

何でカラーで映すかなっ！！！！とツッコミたい位の高画質な為、吹き飛ばす手足や血も生々しく映っている。

吉田

「しかし長官、酷くないですか？」

菅原

「何が？」

吉田

「生存者を救出せずに殺して。」

早紀

「降伏しないほうが悪い。しかもチャイニーズが何人死のうが関係ない。」

菅原

「早紀ちゃんの言つとおり。」

吉田

「そうですね。」

東郷

「長官、参謀長。全員死にましたよ。」

菅原

「よし、次は広州ミサイル巡洋艦4隻ね。」

吉田

「了解、艦長。攻撃目標変更広州ミサイル巡洋艦4隻だ。」

東郷

「了解。リニアガン発射!!!!!!」

キュイイイイイイイン

シュパアーーーーー

次の獲物は広州ミサイル巡洋艦4隻

広州級ミサイル巡洋艦はある程度の装甲強度があるため、イージス原子力駆逐艦雪風級のリニアガン攻撃には何とか耐えられるが、やはり無駄であった。

大和級の58センチリニアガンには耐えられなかった。

何せ、初速が秒速13・5キロで着弾時の終速が秒速8・5キロもある。

脅威的な破壊力だ。

そのような破壊力の主砲をもつ戦艦は地球上他に存在しない。

イージス原子力機攻戦艦大和級こそ、怪物・野獣。

戦艦として究極の存在アルティメットワンなのである。

大和級に太刀打ち出来る艦など存在しない。

そんな戦艦5隻に袋叩きにされている広州級ミサイル巡洋艦。

彼等は自殺志願者だ。

中国黄海艦隊

艦隊とは名ばかりで、現状は中破のポンコツ原子力空母1隻だけだ。

参謀長

「長官。」

司令長官

「うむ。」

参謀長

「では。」

司令長官

「日本艦隊に打電、『我降伏ノ意志アリ』だ。」

参謀長

「了解。」

司令長官

「終わったんだ、やっと終わった。」

参謀長

「……………」

艦長

「長官、日本艦隊より返信です。」

司令長官

「何だ。」

艦長

「読みます、『戦イハ終ワツタ。貴空母ハ鹵獲スル。』です。」

参謀長

「こんな骨董品鹵獲してどうするのでしょうか?」

司令長官

「さあな、北海道の海軍湖に浮かべるんじゃないか?」

参謀長

「まあ、何でも良いです。」

司令長官

「そうだな。」

2人は安堵のため息を吐いた。

アリア

「ありがとう日本軍。」

ワリヤーグの艦魂は感謝した。

第二次日本海海戦は終結した。

海上機動要塞白鷺CIC

黒田

「揚陸軍師団は到着したの？」

池田

「はい。」

黒田

「なら、包囲網を締めあげて下手な動きをすればすぐさま殺しなさい。」

池田

「了解、そのように言います。」

白鷺港湾部

コマンド部隊隊長

「全員、例の物はあるな？」

隊員一同

「勿論です。」

そう言つと懐から小瓶を取り出す。

その中には液体が。

隊長

「これを飲めば東洋鬼の弾も怖くない、凄まじい肉体が手に入る。」

隊員

「了解。」

隊長

「それでは、祖国の為に!!!!!!」

隊員

「祖国の為に……!!」

のちに『地獄の攻防戦』と言われる戦いの始まりであった。

アルティメットワン（後書き）

次回からは白鷺港湾決戦が続きます。

あの液体は……………

帝國ホテルにて

第二次日本海海戦が第七独立機動艦隊の完勝で終わってから2時間後。

第二次日本海海戦が2035年1月20日の6時に始まり、3時間で終結……………

その2時間後であるから11時ですね。

だから今は、2035年1月20日11時帝國ホテルにて、藤中総理大臣と上戸鈴木商店最高経営責任者が昼食を取っていた。

藤中・上戸の両者は前菜のサラダを食べてから、メインディッシュの神戸牛230gステーキを食べていた。

藤中

「美好ちゃん、学校の調子はどう?」

上戸

「まずまずと言った所です。」

藤中

「そう、なら会社の方は?」

上戸

「そっちの方は良いですよ。年度末決算では予想で前年比28%の増収です。」

藤中

「流石は鈴木商店ね。第三次世界大戦の影響も皆無ね。」

上戸

「ええ。だけど……」

上戸が喋ろうとした時に、男が慌てて部屋に入ってきた。

藤中

「天野ちゃん、どうしたの?」

部屋に入ってきたのは天野国防大臣であった。

上戸

「どうしたんですか?そんなに慌てて。」

天野

「第七独立機動艦隊の大勝利ですよ。第二次日本海海戦は第七独立機動艦隊の大勝利に終わりました。」

藤中

「当然よ、水香ちゃんの艦隊が負けるはずないわ。」

上戸

「そうですね。日本最強、世界最強の第七独立機動艦隊ですからね。」

天野

「それともう一つあります。」

藤中・上戸

「何？」

天野

「中国黄海艦隊の唯一の生き残り艦である原子力空母ワリヤークを鹵獲しましたが、その艦魂………確かアリアと言いましたが……その艦魂が親日家ですから是非とも北海道の海軍湖に保管してほしいと。」

藤中

「良いんじゃない。」

上戸

「確かにそうですね、ちょっと修理して海軍湖に浮かべればいいんですからね。」

藤中

「そう。」

天野

「修理費は？」

上戸

「私の会社が出しましょうか？」

藤中

「良いの?」

上戸

「良いですよ。修理費ぐらい安いものです。」

藤中

「ありがとうね。」

上戸

「いえ、国家に奉仕するのが我が社の使命です。」

天野

「了解いたしました、菅原長官に連絡します。」

藤中

「そうしてね。」

天野

「それともう一つ。」

藤中・上戸

「あん!?!」

天野

「ひっ!?!?!」

藤中

「早く言いなさい。」

天野

「第七独立機動艦隊が生存者を助けずに全員殺したという件ですが
……………」

藤中

「ああ、それは私が命令したわ。」

天野

「そうなんですか？」

藤中

「そうよ。けどまさか本当にやるとはね。」

天野

「……………」

藤中

「第七独立機動艦隊全員にボーナスを出さないとね。」

天野

「……………」

上戸

「そのボーナスも私が出しましょうか？」

藤中

「本当？ありがとうございます。」

上戸

「いえいえ。」

天野

「それでは藤中総理、上戸さん。失礼します。」

藤中

「うん、また後でね。」

上戸

「バイバイ。」

天野は部屋を後にした。

日本海・海上機動要塞白鷺

黒田

「何？今度は航空機が来たの？」

池田

「そうです。」

黒田

「まあ、いいわ。」

池田

「どござねます?」

黒田

「勿論、迎撃するわよ。魔射とのリンクを始めてとっとと迎撃する。」

池田

「了解。」

池田はそう言つと命令を下し始めた。

黒田

「お〜い、聞こえる?」

黒田は動力制御室に電話を掛けた。

少佐

「はい、聞こえます。」

黒田

「天照からエネルギー投射をしてもらつて。」

少佐

「天照からですか?」

黒田

「そう、エネルギーは大丈夫だけど。ちょっとあるのよ。」

少佐

「了解。」

黒田

「頼んだわよ。」

池田

「攻撃開始！……！」

池田の命令で白鷺は全てのリニアガンを発射した。

その光景は凄まじいの一言だ。

中国航空機隊

隊長

「おい！……！日帝の熱烈な歓迎だ。あたるなよ。」

一同

「了解！！！！」

中国航空機隊はリニアガンの砲弾を避けるが、1ヶ所に集まっている事にまだ気付いていない。

白鷺CIC

黒田

「フッフ、天照にエネルギーを投射させて。」

池田

「了解。動力制御室、開始だ。」

天照からエネルギーを投射される時はその間、天照から白鷺の間に何も存在しない事が望ましい。

なぜなら……………

中国航空機隊

隊員

「ぐっ……体……パンツ」

隊員

「体が……パンツ……」

隊長

「おい……これ……は……パンツ」

天照はエネルギー投射物体にエネルギーを投射する時に1度強力な
プラズマ波にする。

それを投射物体に投射するのであるから、その間には何も存在しな
い事が大前提だ。

もし存在すると、先程のように人体の水分が蒸発し『破裂』してし
まうのだ。

黒田はそれを狙っているのだ。

白鷺CIC

CICは暗澹たる空気が支配していた。

気の効かしたオペレーターが天界からの映像をシャットアウトしたが、黒田がそれを考えて天照にエネルギーを投射した事に驚いていたのだ。

刑部

「ホホホ、流石は黒田だ。良くやった。」

黒田

「ありがとうございます。」

刑部

「中国人に我が軍の恐ろしさを知らしめる事が出来ただろう。」

白鷺のCIECは刑部の笑い声に包まれた。

帝國ホテル

藤中

「でね美好ちゃん、天野ちゃんをしばいてあげたの。」

上戸

「早紀総理もドSですね。」

藤中

「フフフ。」

2人の会話はまだまだ続きそつだ。

帝國ホテルにて（後書き）

いろいろありますが、これもまた人生。

マラソン大会で50分以内で帰ってこれなかったから
ってもう1回走らすのは酷いでしょ。

何か理由付けて休んでやる。

大体50分じゃなくて1時間にしろよ!!!!!!

バイオハザード発生

日本海・海上機動要塞白鷺CIC

刑部

「時に黒田。侵入してきた中国コマンド部隊はどつした？」

黒田

「今、鎮圧作戦をはじめています。」

刑部

「そうか、早急に対処するのだぞ。」

黒田

「分かっております。」

刑部

「ならよい。」

赤穂

「御前様、お茶が入りました。」

刑部

「うむ、ありがたい。」

赤穂

「いえいえ。」

刑部

「ところで赤穂。」

赤穂

「何でございませう？」

刑部

「そちの真名はなんだ？」

赤穂

「私にはありませんが。」

刑部

「ない？」

赤穂

「はい。私は新型艦ですので真名はないのです。」

刑部

「そうか、妾は遙か昔から存在するから『刑部』と言つ名前があるのじゃな。」

赤穂

「そつであります。」

刑部

「なら、妾がそちに付けてあげよう。」

赤穂

「ありがとうございます。」

刑部

「うんうん、気にするでない。」

赤穂

「……………」

刑部

「阿久里あぐりはどうじゃ？」

赤穂

「阿久里……………良い名前です。」

刑部

「そうか。ならそちは阿久里じゃ。」

赤穂改め『阿久里』

「ありがとうございます、御前様。」

刑部

「うんうん。」

時間は少し戻って

白鷺港湾部

中国コマンド部隊の侵攻に揚陸軍師団は港湾部に出動した。

が、睨み合いが続いていた。

師団長

「さあ〜とと、どうするかねえ……………」

師団長の柳原中佐は、場合によっては殺害もやむ無しと命じてきた黒田司令を優先するか、可能な限り生かしたまま捕らえよと言ってきた、参謀長の池田少将の命に従うか悩んでいた。

部下

「師団長、い……………」

そんな上官に何か言おうとした部下の軍曹の言葉を遮る様に、白鷺の火器の轟音が辺りに響き渡った。

それが合図であったかのように、こちらでも銃撃戦が始まった。

中国コマンド部隊サイド

隊長

「突貫！……！」

隊員

「才!!!!!!!!!!」

揚陸軍

部下

「侵入者発砲つ!!!!!!!!!!」

柳原

「よし、こちらも銃撃開始!!!!!!!!!!2、3人、戦闘不能にすれば良い!!!!!!!!!!後は全て排除せよ!!!!!!!!!!」

揚陸軍師団も全員が八式小銃と十式機関銃を撃ち始めた。

八式小銃はアメリカ軍のM16を参考に日本軍が開発した小銃である。

銃口の下にグレネードランチャーの発射筒を取り付けたものだ。

十式機関銃もアメリカ軍のM60を参考に開発したものだ。

銃撃開始後、程なくして相手方に射殺される者が続出し始めた。

皆、投与した薬を信じたのか次々に無謀な突撃を繰り返しては防衛勢の銃弾の前に倒れていった。

白鷺CIC

港湾部の様子は此処のメインスクリーンにも艦内監視カメラから映像が回されていた。

池田

「何なんだ、連中は？これじゃ自殺じゃないか……………」

映像を見た副司令官がそう言ったのと前後して、司令部に港湾施設監視司令部より緊急通信が入った。

曰く、『銃撃現場一帯にバイオハザード発生、原因は不明。』と…

……

港湾施設監視司令部の報告は、白鷺首脳部の間に激震を走らせた。

蒼白な顔色になった幕僚達が何も言えずにいる中、黒田大将だけが言葉を発する事が出来た。

黒田

「……………バイオハザードの詳細は？」

その問い掛けに、港湾施設監視司令部付の防疫官を勤める、軍医大尉は事務的に答えた。

軍医

「Xウイルスによる物としか……………ちなみに本土の医療用データバンクに該当するデータはありませんでした。」

黒田

「そう、分かったわ。……………（まさかね）そのデータを一応、此処のCICに回してくれる？天神にかけてみるから。」

軍医

「了解しました。」

司令官と防疫官のやり取りの後、そのデータがCICに転送され、オペレーター達が天神相手に照合作業に入った。

これと前後して第七独立機動艦隊にも緊急通信が飛び、菅原長官に港湾部への入港の差し止めと現海域に留まる様にと報せた。

オペレーター達の奮闘から10分後、該当データがヒットした。

オペレーター

「該当データ確認。オンブレラ事件関連で検出された死体変質ウイルスとパターンが一致。」黒田

「……………やっぱり（当たって欲しくなかったわ……………）」

オペレーターの報告に暗くなっている黒田大将の耳にスクリーンを通じて港湾部の様子を監視していた士官の恐怖に引きつった声が入

った。

射殺された連中が揚陸軍師団に襲い掛かってきた、と。

―解説―

八式小銃

アメリカ軍のM16を参考に開発された。

銃口の下にグレネードランチャーの発射筒を装備。

口径は5・8ミリ。

全長が1015ミリで、重量は約4・3キロ（35発弾倉を装填）である。

そのほとんどが、ナイロン系の高強度プラスチックの材質を採用しており、野戦で優れた耐久性を示す。

戦闘時には発射モードを、単発か3連発に切り替えられる。

450メートル程度までなら不自由を感じずに射撃が出来る。

十式機関銃

アメリカ軍のM60機関銃を参考に開発された。

口径は7・82ミリ。

ベルト給弾式で、6850発装填可能。

発射速度は毎分850発に達する。

全長が1630ミリ、重量は6・8キロ（6850発装填）である。

徐々に降下する弾道を描きながらも3800メートル以上離れた標的を撃ち抜ける。

Xウイルス

オンブレラ事件関連で必ず使用されたウイルス。

死者を蘇らせ、凶暴化させて人を襲わせる。

凶暴化した死者（通称ゾンビ）に噛み付かれれば、その人間もゾンビになってしまう。

オンブレラの開発したウイルスはこのXウイルスの他に。

人の理性を奪い同性異性問わずに犯させる、Gウイルス。

感染すれば寄生虫に体を侵食されて人間として崩壊させる、Rウイルス。

大まかにこの3種に分けられる。

Gウイルスは半日程で効果が切れる為、大丈夫であるが犯された人の精神を傷付ける。

XウイルスとRウイルスこそ、えげつないウイルスである。

だがこの3種とも、抗ウイルス剤を投与すれば効果はなくなる。

バイオハザード発生（後書き）

Yさんの支援より完成したこの話。

バイオハザードが発生した白鷺内で揚陸軍はどう戦うか？

果たして、抗

ウイルス剤は白鷺にあるのか？
次回をお楽しみに。

バイオハザード終結

ゾンビと化した中国コマンド部隊相手に、揚陸軍師団はちょっとしたパニックに陥った。

何せ侵入して来た中国コマンド部隊120名全員がゾンビと化し、襲い掛かってくるのだ。

しかも八式小銃や十式機関銃を撃ち込んでも死なないのだ。

これにより、装備している弾丸も心許なくなってきた。

柳原

「糞っ！！！！奴らは何故死なないんだ！！！！」

軍曹

「中佐、奴らの生命力は尋常じゃないほど上昇しています。」

柳原

「そうだな。」

柳原はそう答えながら八式小銃を撃ち続ける。

柳原

「チッ！！！！軍曹、他の者を連れて弾丸を取ってこい！！！！」

軍曹

「了解しました。」

柳原
「それと軍曹、抗ウイルス剤も取ってきてくれ。味方に感染されたくないからな。」

軍曹

「了解！……！」

軍曹は近くにいた4名の部下を引き連れ、港湾部から出ていった。

柳原

「よし、全員退却だ！……！」

部下

「了解！……！」

部下

「では、このゾンビは？」

柳原

「港湾部を封鎖する。全ての通路を封鎖し、海水面も封鎖する。」

部下

「了解。」

ゾンビ

「オオ〜ン」

部下

「死ね！！！！！」

ドガガガガッ！！！！！！

十式機関銃を乱射するが、ゾンビはそれでも倒れない。

部下

「糞っ！！！！！」

柳原

「おい！！！！弾の無駄だ。退却するぞ。」

部下

「了解。」

白鷺CIC

池田

「司令、柳原中佐から港湾部封鎖の要請が。」

黒田

「封鎖理由は？」

池田

「弾丸が少なくなり、その補給及び抗ウイルス剤の投与の為だそうです。その後には反撃を開始するとの事です。」

黒田

「分かったわ。港湾部の全面封鎖よ。」

池田

「了解。」

港湾部封鎖された隔壁前

港湾部に向かう通路は全て封鎖された。

柳原達がいるのは封鎖してある隔壁の前である。

柳原

「よし、全員いるな。」

部下

「はい。」

柳原

「後は軍曹が帰ってくるのを待つだけだな。それから……………」

柳原が続きを喋ろうとした時、隔壁を強く殴る音がした。

ドン！！！！ドン！！！！

部下

「中佐、大丈夫ですか？」

柳原

「大丈夫だ。あんなゾンビが殴った位で破られるわけではない。」

部下

「そうですが……………」

ドコッ！！！！！！

柳原

「！？？」

部下

「！？？」

ドコッ！！！！！！

柳原

「何て野郎だ。」

部下

「隔壁を……………」

柳原

「まだか！！！！！」

キュラキュラキュラ

部下

「おっ！？もしかして。」

柳原

「95式か！？」

柳原が目を向けると、そこには95式戦車がいた。

「おい、柳原。大変だな。」

先頭の95式戦車から男が乗り出して、言った。

柳原

「おお、仲山か。話は後にしろ。援護してくれ。」

仲山

「任せろ、その為に来たのだ。白石も来てるぞ。」

白石

「おい、早く始めよう。」

仲山

「柳原、行くぞ。」

柳原

「よし、95式戦車・20式装甲車で一網打尽にするぞ。全員20式装甲車に乗車しろ！！！！」

白石

「急げ。」

仲山

「早くゾンビを倒そう。刑部様にぶち殺されるぞ。」

柳原

「そりゃ大変だな。急げ。」

柳原もそう言うと、仲山の戦車に乗り込んだ。

他の部下達も20式装甲車に乗車する。

海上機動要塞白鷺は強襲揚陸艦としての役割もあると書いた。

その能力が今、最大限に活用されている。

95式戦車120輜と20式装甲車150輜がここに集結している。

ゾンビを叩き潰すという目的の為。

白鷺CIC

池田

「隔壁を開け。」

黒田

「早く、片付けてもらわないと。」

刑部

「妾を怒らす前に片付けるのじゃぞ。柳原・仲山・白石。」

阿久里

「御前様、お茶を。」

刑部

「うむ、すまない。」

港湾部封鎖された隔壁前

港湾部を封鎖していた隔壁が揚陸軍の位置する前の部分だけ開かれた。

柳原

「……………注意しろ。」

仲山

「ああ。」

95式戦車と20式装甲車の隊列はゆっくりと進んでいく。

柳原

「弾は補給したから大丈夫だが……………」

仲山

「ゾンビがない、そう言いたいんだろ。」

柳原

「そつだ。」

仲山

「さつきまでは隔壁を殴り続けていたが、今はいい。」

柳原

「抗ウイルス剤は投与したから何とか大丈夫だが、どうしたものか。」

「

白石

「おい、お2人さん前方に集団があるが。」

白石に言われ、前方を見る2人の目にゾンビの集団がいた。

仲山

「よし、砲撃開始だ！！！！」

95式戦車の2門の138ミリリアガンが発射された。

95式戦車は任天堂のファミコンウォーズのウエスタンフロンティア軍の重戦車と同じです。

20式装甲車の38ミリガトリングガンやAGM114流鬼対戦車ミサイルも同時に発射された。

白石

「野郎ども、全員降りてぶっ放せ。」

20式装甲車から続々と下車して八式小銃（銃口のグレネードランチャーも）や十式機関銃をぶっ放す。

キュイイイイイン

シュパーーン

シュパーーン

138ミリリアガンもこれよしとばかりに、撃ち込む。

仲山

「撃ち方止め。」

白石

「止め。」

柳原

「前進だ。」

柳原は部下を引き連れ、集団の位置に向かう。

仲山

「援護射撃の準備だ。」

白石

「ガトリングガンの発射準備を怠るな。」

柳原

「うっ、何て匂いだ。」

柳原は倒れているゾンビを見て、顔をしかめた。

軍曹

「中佐、数が足りません。」

軍曹が死体(?)を前に言った。

柳原

「そつだな。侵入してきたコマンド部隊は120名。111にあるのは90体の死体だ。30足りない。」

軍曹

「どこにいったのしょう?。」

柳原

「この中にいるはずだ。」

軍曹

「そうですね。」

柳原

「警戒網を広げる。見つけ次第、周囲の者と協力してぶっ放せ。」

軍曹

「了解。」

ゾンビ

「オオ〜ン」

柳原

「おい、攻撃だ！……！！」

軍曹

「了解、ぶっ放せ。」

ドガガガガガ！！……！！

ヒューーーーーーン

ゾンビ

「オオーン」

キュイイイイイイン

シューパーーーーーーン

ドグワアアアアン

柳原

「流星は仲山だ。良い援護だ。」

軍曹

「確かに。」

仲山

「おい、柳原。終わったのか？」

柳原

「ああ。」

白石

「全く、これだからゾンビは。」

柳原

「そう言うな。」

仲山

「そつだ、この戦いは済んだがまだ第三次世界大戦は続いてるんだ。」

白石

「そつだった。」

柳原

「戦いは、始まったばかりだ。」

白鷺のバイオハザードは終息した。

バイオハザード終結（後書き）

スターウォーズ。

面白いですね。

連合艦隊

2035年1月21日

日本東京湾

ここに、日本海軍の主力である連合艦隊が集結している。

日本海軍連合艦隊旗艦イージス原子力機攻戦艦長門甲板

藤中

「うーん、爽快ね。非常に気分が良いわ。」

藤中総理は目の前に位置する連合艦隊の迫力に感激している。

天野

「こんなに集結して。民間船の邪魔にならなければ良いが。」

天野国防大臣は妙な所が気になるみたいだ。

上戸

「大丈夫ですよ、天野国防大臣。私の所の連邦商路護衛艦隊が完全誘導しますので、邪魔にはなりません。」

天野

「それなら良いですが。」

上戸

「大丈夫ですよ、天野さん。」

天野

「そうですね、分かりました。」

鼻の下を伸ばしながら答える天野国防大臣であったが、藤中総理の殺気にすぐさま気を取り直す。

藤中

「美好ちゃんに手を出したら殺すわよ!？」

天野

「も、勿論でございます。藤中様。」

藤中

「分かればよろしい。」

最近、この2人が妙に仲が良いと噂になっているがもしかして付き合ってるのか？

国民の間では第三次世界大戦よりこっちの方が話題性は高いらしい。

星野

「ねえ、由佳。あの2人の力関係が分かったでしょ？」

由佳

「やっぱり、あの時の天野国防大臣は幻だったんだ。」

星野

「まあ、どおでもいいけどね。」

「報告です。第七独立機動艦隊及び海上機動要塞白鷺が空間転移してきます。」

スピーカーから突如として声がした。

それが終わった途端に、前方の空間が歪み始めた。

空間転移の前触れだ。

その歪みが無くなると、そこには海上機動要塞白鷺とその前方に第七独立機動艦隊。

上空には轟天と海王が悠々と空を飛んでいた。

「第八特務機動艦隊『浮上』します。」

またしてもスピーカーから声がした。

藤中

「第八特務機動艦隊。」

天野

「第七独立機動艦隊の妹みたいな物ですね。」

藤中

「ちよつと違うかな？」

連合艦隊の前方の海面から6隻の軍艦が浮上した。

浮上と表記したから潜水艦かと思われるが、実は違う。

イージス原子力特装潜水戦艦高天原級3隻と、イージス原子力特装潜水空母高空原級3隻である。

計6隻と言う、小規模な艦隊であるがこの第八特務機動艦隊は神出鬼没・奇襲戦を主とする為、小規模なのである。

詳細はいつか説明する。

藤中

「さて、我が国の艦隊は全部集結したわね。」

天野

「そうですね。」

藤中

「さて、後はアメリカ・イギリス・フランス・ロシア・インドの艦隊を待っただけね。」

天野

「はい。」

星野

「総理、国防大臣。見えてきましたよ。」

連合艦隊司令長官の星野が指を指した所を見ると、そこには大艦隊があつた。

藤中

「来たわね。」

藤中総理はそう言つと、不適な笑みを浮かべた。

さて、ここからは各国の艦隊を説明していきたい。

アメリカ合衆国艦隊第1艦隊

司令長官クレアモントリー大将

旗艦イージス原子力機攻戦艦モンタナ

原子力空母ジェラルド・R・フォード

原子力空母ロナルド・レーガン

イージス巡洋艦プリンストン

イージス巡洋艦モントレイイージス巡洋艦レイクシャンプレーン

イージス駆逐艦ズムウォルト

イージス駆逐艦ラッセル

イージス駆逐艦ステザム

イージス駆逐艦ヒギンズ

イージス駆逐艦メイスン

原子力潜水艦ヴァージニア

アメリカ合衆国艦隊第4艦隊

艦隊司令ニコルマリア中将旗艦イージス原子力機攻戦艦オハイオ

原子力空母エイブラハム・リンカーン

原子力空母ジョージ・H・W・ブッシュ

イージス巡洋艦ポート・ロイヤル

イージス巡洋艦レイク・シャレン

イージス巡洋艦カウペンスイージス駆逐艦ラーセン

イージス駆逐艦マステインイージス駆逐艦マツキャンベル

イージス駆逐艦フィッツジェラルド

イージス駆逐艦ディケーター

原子力潜水艦グリーンヴィル

イギリス本国艦隊第1艦隊司令長官クスカアーチエ大将

旗艦イージス原子力機攻戦艦ヴァンガード

原子力空母クイーンエリザベス

イージス駆逐艦デアリング
イージス駆逐艦カウンティ
イージス駆逐艦グランジ

フリゲート艦ロスシー

フリゲート艦リアンダー

原子力潜水艦アスチュート

イギリス本国艦隊第2艦隊艦隊司令アンジェラクレア中将

旗艦イージス原子力機攻戦艦ライオン

原子力空母プリンス・オブ・ウェールズ

イージス駆逐艦フィアレス
イージス駆逐艦ホライゾン
イージス駆逐艦ナイト

フリゲート艦カリーフ

フリゲート艦ジェラムバク
原子力潜水艦チャーチル

フランス艦隊第1艦隊

司令長官アンドレファアラ大将

旗艦原子力空母パリ

イージス駆逐艦フォルバン
イージス駆逐艦ミサイル
イージス駆逐艦カサール

フリゲート艦セーヌ

フリゲート艦トゥール

原子力潜水艦バラクーダ

ロシア艦隊第1艦隊

司令長官ユグノマーチ大将旗艦イージス原子力機攻戦艦ソヴィエツ
キー・ソユーズ

原子力空母アドミラル・クズネツォフ

イージス巡洋艦キーロフ

イージス巡洋艦スラヴァ

ミサイル駆逐艦ソヴレメンヌイ

ミサイル駆逐艦ムンマンスク

ミサイル駆逐艦スヴェルドロフ

原子力潜水艦セヴァロドヴィンスク

インド艦隊第1艦隊

司令長官アクラレイ大将

旗艦原子力空母ヴィクラマディチャ

イージス駆逐艦デリー

ミサイル駆逐艦コルカタ

ミサイル駆逐艦アディテイヤ

原子力潜水艦スコルペヌ

各艦隊の詳細な説明は次回に。

連合艦隊（後書き）

詳細は次回に

集計し黒鉄の巨竜（前書き）

くそ長つたらしいです。

集計し黒鉄の巨竜

アメリカ合衆国艦隊第1艦隊旗艦イージス原子力機攻戦艦モンタナ
C I C

「前方に日本海軍です。」

C I Cのオペレーターが合衆国艦隊司令長官のクレアモンロー大将に言った。

「やっぱり日本海軍は凄いわね。私のモンタナが巡洋艦みたいだわ。」

モンロー大將はモニターを見ながらそう言った。

「確かにそうですね。日本海軍のスーパーキャリアーとスーパーBには目を見張ります。」

参謀長のキャサリン中將が答えた。

モンロー

「そうね。私のモンタナやモンタナの妹達は日本の支援があって建造出来たんだからね。」

キャサリン

「はい、日本の技術力は凄いです。」

モンロー

「もし、何か歴史の歯車が変わって日本と戦争になったら私はすぐさま合衆国艦隊司令長官から引退するわ。」

キャサリンは黙って頷いた。

モンロー

「それほど日本は強いのよ。」

キャサリン

「その時は私もお供します。」

モンロー

「フッフ、ありがとう。だけどそんなバカな事を大統領はしないわよ。」

キャサリン

「確かにそうですね。」

2人は笑った。

リサ

「2人共、笑ってばかりしないで命令を出さないと。まだ停船してないのよ?」

モンタナの艦魂であるリサが言った。

彼女も真名がなく、モンローに付けてもらった名前だ。

モンロー

「分かったわ、リサ。キャサリン、全艦に停船命令を。」

キャサリン

「了解。全艦日本海軍連合艦隊の横に停船せよ。」

合衆国艦隊全艦に命令が飛んだ。

さて、ここで合衆国艦隊の各艦について説明したい。

日本連邦軍最新兵器解剖はその名の通り、日本の兵器を解剖するだけであるから、この場で説明したい。

イージス原子力機攻戦艦モンタナ級

BB-78モンタナ・BB-79オハイオ・BB-80ニュージャ
ージー・BB-81ミズーリ・BB-82ウイスコンシン・BB-
83イリノイ

全長380メートル

全幅50メートル

速力33ノット

武装45センチリニアガン3連装3基9門

ハープーン対艦ミサイル4連装発射機40基

トマホーク巡航ミサイル4連装発射機40基

Mk44VLS式スタンダードSM3対空ミサイル120セル

シースパロー8連装発射機40基

28ミリCIWS20基

搭載機SH-65シーホーク10機

満載排水量148500トン

特殊装備イージスシステム・バルバスバウ・バウスラスタ
アメリカ海軍の新型イージス機攻戦艦。

日本海軍の12艦隊計画艦竣工前の2028年に完成した。

しかし2年後に、12艦隊計画が完成し長門級が竣工すると、モン
タナ級は一挙に旧式艦の烙印を押された。

この事件は『21世紀のドレッドノート事件』として海軍関係者に
語り継がれている。

原子力空母ジェラルド・R・フォード級

CVN-80 ジェラルド・R・フォード

CVN-81 ロナルド・レーガン

CVN-82 ジョージ・ワシントン

CVN-83 ハリー・S・トルーマン

CVN-84 ジョン・C・ステニス

CVN-85 セオドア・ルーズベルト

CVN-86 エイブラハム・リンカーン

CVN-87 ジョージ・H・W・ブッシュ

CVN-88 ドワイト・D・アイゼンハウアー

CVN-89 カール・ヴィンソン

CVN-90 ジョン・F・ケネディ

CVN - 91 フランクリン・D・ルーズベルト

全長 350メートル

全幅 78メートル

速力 33ノット

武装 シースパロー 8連装発射機 20基

SAM 22連装発射機 20基

25ミリCIWS 20基

搭載機 F25レックスステルス戦闘機 35機

F35 ライトニングステルス攻撃機 35機

E-2C 早期警戒機 10機 E A - 20 G 電子偵察機 5機

SH - 65 シーホーク 5機 満載排水量 125000トン

特殊装備 アングルドデッキ・バルバスバウ・バウスラスタ・電磁

カタパルト

アメリカ海軍の威信を賭けて建造された。

世界各国の空母で1番ステルス性を追求した空母となっている。

日本海軍はステルス性は航空機にしか、追求していない。

日本海軍は攻撃出来るならしてみろやっ！！！！という構えだ。

戦闘機 F25レックス

全長 20メートル

全幅 14メートル

最大速度 マッハ 2.8

巡航速度 マッハ 1.2

武装 25ミリガトリングガン

ウエポンベイ内蔵兵器

BJN - 8 サイドワインダー 4発

BJN - 210 DBNRBBM スパロー 6発

両翼装備兵器

OKM誘導爆弾4発

航続距離5800キロ

実用上昇限度18000メートル

乗員2名

米海空軍の最新鋭戦闘機

F22ラプターの発展改良型で完成時には世界最強であったが、日本軍の陣風戦闘機と轟天戦闘機に世界最強の座を明け渡した。

戦闘攻撃機E35ライトニング

全長16メートル

全幅13メートル

最大速度マツハ2・5

巡航速度マツハ1・2

武装23ミリガトリングガン

ウエポンベイ内蔵兵器

BJN-8サイドワインダー6発

GBU-3Z1000ポンド爆弾4発

両翼装備兵器

SUGB空対艦ミサイル8発

航続距離5500キロ

実用上昇限度15000メートル

乗員2名

米英軍の戦闘攻撃機。

アメリカ海軍とイギリス海軍の空母艦載機として活躍している。

米英軍仕様であるが、その開発には鈴木商店傘下会社が9割開発に関わっている。

イギリス本国艦隊第1艦隊旗艦イージス原子力機攻戦艦ヴァンガードCIC

「ふう、やっと着いたわね。」

イギリス本国艦隊司令長官のクスカアーチエ大将が言った。

「そうね、遥々日本までやってきた甲斐があるわ。」

イージス原子力機攻戦艦ヴァンガードの艦魂であるキャメロン（司令長官のクスカアーチエ大将命名）が答えた。

アーチエ

「そうね、私達は遠く極東に世界最強の同盟国がいるわね。」

キャメロン

「日本が味方で良かった。」

アーチエ

「敵だったら、第七独立機動艦隊に叩き潰されてるわね。」

キャメロン

「中国と中東各国はアホね。」

アーチエ

「フフフ。」

キヤメロン

「本当に良かった。」

アーチエ

「所でキヤメロン。」

キヤメロン

「？」

アーチエ

「あなたは第七独立機動艦隊の近江に行くの？」

キヤメロン

「勿論。私達ロイヤルネイビーの先輩達だもん。」

アーチエ

「そうね。」

キヤメロン

「マリー（イギリス本国艦隊第2艦隊原子力空母プリンス・オブ・ウェールズの艦魂）は絶対行くって言ったもん。」

アーチエ

「そうね、同じ名前だもんね。」

キヤメロン
「そう言う事。」

イギリス本国艦隊の解説。

イギリス原子力機攻戦艦ヴァンガード級

ヴァンガード

ライオン

コンカラー

サンダラー

全長350メートル

全幅43メートル

速力30ノット

武装43センチリニアガン連装4基8門

VLS式ハープーン対艦ミサイル50セル

VLS式トマホーク巡航ミサイル50セル

VLS式MBDAアスター対空ミサイル50セル

シーダート4連装対空ミサイル発射機20基

25ミリCIWS16基

満載排水量128000トン

特殊装備イギリスシステム・バウストラスター・バルバスバウ

イギリス海軍の最新鋭イギリス原子力機攻戦艦（しかしイギリス海軍も『21世紀のドレッドノート事件』をまともに食らった）。

イギリスは日本の好意により、技術支援された。

原子力空母クイーンエリザベス級
クイーンエリザベス
プリンス・オブ・ウェールズ
アークロイヤル
イラストリアス

全長330メートル

全幅75メートル

速力30ノット

武装シーダート4連装対空ミサイル発射機20基

23ミリCIWS8基

搭載機F35ステルス戦闘攻撃機50機

マーリン対潜ヘリコプター15機

MV-22オスプレイ早期警戒機10機

満載排水量105800トン

特殊装備バウスタスター・バルバスバウ・アングルドデッキ・電磁カタパルト

イギリス海軍の最新鋭原子力空母。

日本の技術支援により、アングルドデッキや電磁カタパルト・原子炉を装備した正規空母となった。

フランス艦隊第1艦隊旗艦原子力空母パリCIC

フランス艦隊も遙々日本にやってきた。

「やれやれ、やっと着いたわ。」

艦隊司令長官のアンドレファール大将が言った。

「そうね。」

原子力空母パリの艦魂ベティー（もう説明するまでもないだろう）が答えた。

ファール

「日本軍と共同作戦だから気を引き締めてやっていかないとね。」

ベティー

「そうね、下手にやって日本軍に恥を曝す訳には行かないからね。」

ファール

「その通り。」

ベティー

「本国の威信にも関わるからね。」

ファール

「気を付けていかないと。」

ベティー

「了解。」

フランス海軍の空母解説

原子力空母パリ級

パリ

シャルルドゴール

全長280メートル

全幅73メートル

速力30ノット

武装ジアット20ミリ砲4基

搭載機戦闘攻撃機ラファールZ40機

E-2C早期警戒機6機

マーリン対潜ヘリコプター5機

満載排水量95000トン特殊装備バウスタター・バルバスバウ・

アングルドデッキ・スチームカタパルト

フランス海軍の最新鋭原子力空母。

イギリスと同じく、日本軍の技術支援により完成した。

戦闘攻撃機ラファールZ

全長15メートル

全幅10メートル

最大速度マツハ2

巡航速度980キロ

武装20ミリガトリングガン

ウエポンベイ内蔵兵器

ミールティアノX空対空ミサイル6発

AGMエグゼ空対艦ミサイル4発

両翼装備兵器

ASZPB核ミサイル2発航続距離5000キロ

実用上昇限度14800メートル

乗員1名

フランスの最新鋭戦闘攻撃機。

この開発にも鈴木商店傘下会社が関わっているとされている。

しかしタレス（フランスの軍需企業）はそれを否定している。

ロシア艦隊第1艦隊旗艦イージス原子力機攻戦艦ソヴィエツキー・
ソユーズCIC

艦隊司令長官のユグノマーチ大將は前方に集結している、日本海軍・
アメリカ海軍・イギリス海軍・フランス海軍・インド海軍を見て一
言言った。

「友邦日本の危機に世界の列強が集結した。」

確かにその通りだ。

インドは日本連邦加盟国であるからそうであるが、それ以外の国は
日本の危機にすぐさま艦隊を派遣した。

神聖イスラエル神国は陸軍で支援することだ。

海軍は沿岸警備のフリゲートしかないため、大した戦力にならないからだ。

ハワイ王国も同様の理由で、強襲揚陸艦（揚陸隊搭載）を派遣しただけだ。

「そうね、その友邦日本の危機にペーチン大統領の命令で私達も派遣されたんだもんね。」

イギリス原子力機攻戦艦ソヴィエツキー・ソユーズの艦魂スターシアが言った。

マーチ
「友邦の危機にすぐさま駆け付ける。当然の事よ。」

スターシア
「確かに。」

マーチ
「それを考えずに日本に攻撃した中国は馬鹿ね。」

スターシア
「フフフ、殺し甲斐があるわね。」

マーチ
「フフフ。」

ロシア艦隊を解説。

イージス原子力機攻戦艦ソヴィエツキー・ソユーズ級
ソヴィエツキー・ソユーズソヴィエツカヤ・ウクライナ

全長330メートル

全幅43メートル

速力30ノット

武装40センチリニアガン3連装3基9門

VLS式P-270モスキート対艦ミサイル50セルVLS式P-

200モスク巡航ミサイル50セル

SAM18連装発射機20基

RBU-6000対潜ミサイル発射機4基

23ミリCIWS16基

搭載機Ka32哨戒ヘリコプター5機

満載排水量119850トン

特殊装備イージスシステム・バルバスバウ・バウスラスタ

ロシア海軍の最新鋭イージス原子力機攻戦艦（お馴染み『21世紀のドレッドノート事件』被害にあったが）。

日本の技術・経済支援により建造された。

ロシア海軍期待の星。

原子力空母アドミラル・クズネツォフ級
アドミラル・クズネツォフキエフ

全長300メートル

全幅75メートル

速力30ノット

武装VLS式P-270モスキート対艦ミサイル10セル

SAM10連装発射機18基

20ミリCIWS10基

搭載機戦闘攻撃機Su-47ファークン50機

Ka32哨戒ヘリコプター10機

満載排水量102850トン

特殊装備バウスタスター・バルバスバウ・アングルドデッキ・電磁カタパルト

アドミラル・クズネツォフ級も日本の技術・経済支援により建造された。

電磁カタパルトやアングルドデッキも日本の技術支援の産物である。

戦闘攻撃機Su-47ファークン

全長22メートル

全幅18メートル

最大速度マツハ2・5

巡航速度マツハ1・2

武装25ミリ機関砲

ウエポンベイ内蔵兵器

R G 7 7 - 8 空対空ミサイル6発

K 7 4 8 空対艦ミサイル4発

両翼装備兵器

Z B U 5 0 0 誘導爆弾4発航続距離5000キロ

実用上昇限度15000メートル

乗員1名

旧ソ連時代にスホーイ設計局が開発した戦闘機（当時）。

しかし、残存機種のS u 2 7やM i g 2 9の改良により開発計画が中止された。

その後2010年に『ロシア新機動艦隊』が計画され再び計画が進められた。

スホーイ設計局と鈴木商店傘下会社の共同開発機体。

世界唯一の前進翼機。

ファークンはK T T Oのコードネームだが鈴木商店傘下会社により変更された。

インド艦隊第1艦隊旗艦原子力空母ヴィクラマディチャC I C

アクラレイ大將は緊張していた。

何せ、連邦加盟国を代表して派遣されて来たのだ。

「アルス、怖いわ。」

レイはヴィクラマディチャの艦魂アルスに言った。

アルス

「そう言われても。」

レイ

「そうね。じゃ作者、進めちゃって。」

インド艦隊解説

原子力空母ヴィクラマディチャ級

ヴィクラマディチャ

ヴィラート

全長268メートル

全幅63メートル

速力28ノット

武装バラク対空ミサイル10セル

20ミリCIWS8基

搭載機戦闘攻撃機MiG34K30機

ハリアー2改20機

シーキング哨戒ヘリコプター5機

満載排水量78500トン特殊装備バウスラスタ・バルバスバウ・
アングルドデッキ・スチームカタパルト

日本が資材資金を出して建造した原子力空母。

インド海軍の戦力を飛躍的に上昇させた。

戦闘攻撃機Mig34K

全長15メートル

全幅10メートル

最大速度マッハ2

巡航速度950キロ

武装20ミリ機関砲

ウエポンベイ内蔵兵器

UGR空対空ミサイル4発Kn30空対艦ミサイル4発

両翼装備兵器

TGB-500誘導爆弾4発

航続距離4800キロ

実用上昇限度12950メートル

乗員1名

ロシアのミグ設計局の新型戦闘攻撃機。

インド海軍のための特注品である。

事後計画について

東京湾に集結した連合艦隊は全艦共に日本艦隊を囲むようにして停船した。

これから各国の司令長官は連合艦隊旗艦に乗艦し、事後計画について話し合うのだ。

と言っても、すでに大まかな所は決まっているためそんなに話す内容は濃くない。

その大まかな所は出撃前に各艦隊は聞いているので、ただのお茶会（？）になるかもしれない。

全艦隊の司令長官が女性だから余計だろう。

さて、連合艦隊旗艦イージス原子力機攻戦艦長門の会議室を覗いてみよう。

各国の司令長官は揃っているが、まだ連合艦隊司令長官の星野が来ていない。

アメリカ合衆国艦隊司令長官クレア・モンロー

「アーチエちゃん。星野ちゃんはまだかな？」

イギリス本国艦隊司令長官クスカ・アーチエ

「まだですね。」

モンロー

「もう、遅いんだから。早く来ないと食べちゃっわよ。」

勿論、会議の為ケーキなど出されていないが、この場合は星野連合艦隊司令長官を指す。

アーチエ

「別に良いんじゃないですか？」

モンロー

「そうね。星野ちゃんを食べちゃいましょう。」

アーチエ

「良いことです。」

モンロー

「フッフ、星野ちゃんのをそこをこうして。ここはこうしましょう。

あの所も……」

これ以上言わせると危ないので早々に視線を移したい。

こちらではアメリカ合衆国艦隊第4艦隊艦隊司令のニコル・マリア中将とイギリス本国艦隊第2艦隊艦隊司令のアンジェラ・クレア中将が話していた。

マリア

「色々あったけどこれからが大変ね。」

クレア

「そうですね、」からがやり時です。」

マリア

「それにしてもいつになったら始まるのかしらっ..」

クレア

「もうすぐじゃないですか?」

マリア

「そうですね。だけど.....」

クレア

「何ですか?」

マリア

「大きいわね。」

クレア

「?」

マリア

「クレアちゃんの胸よ!?!?!」

クレア

「いやっ!?!?!?!何するんですか!?!?!?!」

マリア

「フッフ、だって大きくて可愛いんだもん。」

クレア

「いや〜〜」

ここからも視線を移したい。

さて、こちらではフランス艦隊司令長官アンドレ・ファアラ大将が
コーヒーを飲んでいた。

「騒がしいの。まあそれもよからう。」

大人の対応だ。

さて続いては。

「レイ大将。頑張りましたよ。」

「マーチ大将も頑張りましたよ。」

ロシア艦隊司令長官ユグノ・マーチ大将とインド艦隊司令長官アク
ラ・レイ大将がお互いを励ましていた。

さて、それでは星野連合艦隊司令長官を出すか。

会議室の扉が開き1人の女性が颯爽と入ってきた。

「皆さん、お久しぶりです。」

連合艦隊司令長官の星野曜子が開口1発目に言った。

「早速ですが、会議を始めたいと思います。大田、書類を」

星野の命令で大田が書類を配り始めた。

モンロー

「星野ちゃん！ん！！！！」

星野

「モ、モンローちゃん。」

モンロー

「フフフ、覚悟しなさい。遅れて来た罰よ。」

星野

「まっ、待って。後でね。」

モンロー

「わかったわ。フフフ。」

モンローは席に着いた。

星野

「ふう。それじゃ書類も行き届いたと思うから会議を始めるわ。」

あつと、言い忘れたがこの小説の世界では国際的な会議（国際連邦総会・国際連邦安全保障理事会・G8（解説参照）・日本連邦連邦会議等）での会話は『日本語』が原則である。

これは第二次世界大戦終結後の東京国際平和会議で世界各国が日本語を使い、会議を行ったからだ。

それ以後、国際的な会議では日本語が原則となった。

日本連邦加盟国やハワイ王国・神聖イスラエル神国等は日本語を第二母国語としている。

星野

「書類を見て分かるとおり、今後は合同訓練を行い来たるべき2月1日に中国本土の上海に上陸作戦を決行するわ。その為各員気合いを入れて訓練に励んでね。」

星野は書類を参考に説明を始めた。

星野

「で、その上海上陸作戦だけどね。私達連合艦隊で1点集中で上陸するから分散とかは無しね。」

これにフランスのファースト大將が質問した。

ファースト

「分散とかは無しで1点集中何ですか？」

星野

「そうよ。」

ファースト

「陽動作戦とか多地点上陸は行わないんですか？」

星野

「そう。正々堂々上陸作戦を行うのよ。」

ファースト

「了解しました。」

ファースト大將は納得（？）して席に着いた。

星野

「その上海上陸作戦に先立ち、1月24日に海軍特別航空隊EX富嶽と空軍のGZ飛鳥が中国本土空襲を行うわ。空竜Xレーザー水爆弾道ミサイルも発射するわ。」

今、星野大將はさらりと恐ろしい事を言った。

EX富嶽とGZ飛鳥が中国本土空襲を行うと言う事は原爆・水爆・レーザー水爆を投下する事になる。

しかも空竜Xレーザー水爆弾道ミサイルも発射するとは……………

マーチ

「残留放射能は大丈夫ですか？」

ロシアのマーチ大将が当然と言える事を聞いてきた。

星野

「大丈夫です。放射能融和弾を核兵器を搭載していないEX富嶽とGZ飛鳥に搭載させて、核兵器を投下した後には投下。残留放射能を融和させるわ。空竜Xも弾頭部を放射能融和弾に変更した物を発射するわ。だから大丈夫。」

これを聞いてマーチ大将は安堵の溜め息を吐いた。

マーチ

「分かりました。」

星野

「さて色々あるけど、これこそ話し合わないとね。『フランス陸軍のクーデター計画』をね。」

星野の発言に各国の司令長官に動揺が走るなか、ファースト大将だけがゆっくりと頷いた。

ファアラ

「我が国では急速に共産党が議席を延ばしています。その勢力は陸軍・海軍・空軍の将校にもおよび、大変危険な状態になっています。そんな時に我がフランスの陸軍がクーデターを計画している事がわかりました。海軍・空軍にも同調者が出ており、何時事が起きてもおかしくありません。今回の我が艦隊派遣もそのクーデターに巻き込まれない為に派遣された経緯もあります。そして、ここからが極秘事項ですが我が海軍の秘宝である……………」

ファアラ大将が言おうとしたその時。

「フランス陸軍の秘宝であるイージス原子力機攻戦艦リシュリーが日本に急派されたのね。」

2人の女性が会議室の扉に立っていた。

星野

「あら、菅原長官に七海長官。」

会議室の扉には第七独立機動艦隊司令長官の菅原水香大将と第八特務機動艦隊司令長官の七海優香大将が立っていた。

ファアラ

「何故我が国の機密情報を知ってるんですか？」

菅原

「私達の日本を甘く見てもらったら困るわよ。世界各国の情報なんか手に取るように分かるわ。」

フアラ

「凄いですね。日本は……………」

菅原

「そうですね。」

星野

「けど何で七海長官の服が乱れてるんですか？」

菅原

「フッフ、知りたい？」

七海

「あう……………やめてください」

菅原

「だって。星野ちゃん自分で考えてみてね。」

星野

「はあ……………」

星野はそう言われて七海の服を見る。

上着のボタンは外れ、乱れに乱れている。

髪の毛もボサボサになっている為、予想は付くと思う。

星野

「七海長官、頑張ってください。」

七海

「うっ……酷い……」

菅原

「優香ちゃん、また後で楽しみましょう。」

星野

「あの………続けていいでしょうか？」

菅原

「良いわよ。」

星野

「それでは……」

その後、数多くの事が話し合わせ最後に『連合艦隊結集報告書』に各国の司令長官が署名し、星野曜子大將が連合軍最高司令長官に就任して、会議は終わった。

事後計画について（後書き）

次回は艦魂の会議です。

宴の準備（前書き）

Yさんのネタ提供があり、完成しました。

少しばかり書き換えました。

Yさん、ご了承ください。

宴の準備

人間達が会議を行っていたが、艦魂達も会議を行おうとしていたが、ちよつとばかり準備が出来たみたいだ。

海上機動要塞白鷺の艦魂である刑部は自身の侍従役と言える阿久里に対し、次の様に命じた。

刑部

「阿久里よ、妾の名で参集した艦魂達の慰労の席を設けてくれぬか？」

阿久里

「勿論です、御前様。私が最高の料理をお作りします。」

刑部

「うむ。そちの作る料理は最高だからな。」

阿久里

「ありがとうございます。」

刑部

「頼んだぞ。」

阿久里

「はい。」

阿久里は早速料理に取り掛かった。

敬愛する御前様の命に彼女は奮起した。

料理は敵を食らうとの意味を込め、中華料理中心に世界に冠たる和牛を使った料理に新鮮な近海物の魚介料理、彼女が今までに味わった洋の東西を問わない最高の菓子類を取り寄せ、飲み物もラムネ・各種ソフトドリンク、日本各地の銘酒、今回参加の連合国の代表的な酒類を用意した。

料理は阿久里が食材を艦魂の力で出し、自らが作るのだ。

―料理―

中華

フカヒレの姿煮・干し鮑の煮込み・エビチリ・北京ダック・子豚の丸焼き・燕の巣のスープ・八宝菜・揚げ魚の餡かけ等々

和牛

神戸牛サーロインのローストビーフ・タンの赤ワイン煮込み・松阪牛のタタキ・宮崎牛のしゃぶしゃぶ・ほほ肉の煮込み

その他

刺身数十点・煮魚数十点・江戸前握り寿司・押し寿司数十点・鍋物数十点・カレー数十点・漬物数十点

スイーツ類

果物以外のお菓子関係は数が多すぎて表記不能

この宴の準備状況が要塞司令部から各艦隊へ漏れ、更に藤中総理達にも知れ渡った。

首相官邸

藤中

「天野ちゃん。白鷺で艦魂の宴があるみたいね。」

天野

「そうみたいです。」

藤中

「うらやましいわね。」

天野

「はい。」

藤中

「私達も参加しない？」

天野

「はい？」

藤中

「決めた!!!!天野ちゃん、私達も参加するわよ!!!!!!」

天野

「了解いたしました。」

藤中

「それじゃあ、早く言ってきて。」

藤中総理の鶴の一声で宴会参加の要望が天野国防大臣を通じて艦魂達に知らされた。

海上機動要塞白鷺

阿久里

「御前様、藤中総理閣下達が宴に参加したいと。」

刑部

「そうか。数は多いほうが盛り上がるぞ。」

阿久里

「了解いたしました。」

刑部

「参加は良いとして、料理はどうするのじゃ？阿久里、そちが作る料理は艦魂にしか食せないぞ。如何いたす？」

阿久里

「大丈夫です。藤中総理閣下に言った所、最高の料理人を連れていくので人間の料理は大丈夫とのことです。」

刑部

「ならよい。」

阿久里

「しかし、その料理が出来るまでしばしの時間が………」

刑部

「分かっておる。それくらいまてるぞ。」

阿久里

「分かりました。」

その後、人間用料理のための料理人が派遣され急ピッチで料理が作られた。

その料理は阿久里の作った料理と同じ物であった。

ちなみに上戸鈴木商店最高経営責任者の希望により白鷺にマクド（鈴木商店は遂に日本マクドナルドの買収を行った。これにより上戸鈴木商店最高経営責任者は無料でマクドを食べる事が出来る。）白鷺店が用意された。

そして、人間用料理が完成した午後19時。

艦魂と人間の合同の宴が始まった。

1月は宴で酒が飲めるぞ〜(前書き)

酒が飲める飲めるぞ〜酒が飲めるぞ〜

1月は宴で酒が飲めるぞ

さてさて、準備の整った海上機動要塞白鷺では宴が始まるうとしていた。

しかし、豪華である。

中華料理・和牛料理・デザート・酒類等どれを取っても至高の一品だ。

宴の始まりは刑部の言葉から始まった。

刑部

「さて諸君。遠路遙々よくぞ参つてくれた。そんな諸君の為に今回は慰労の席を用意した。存分に楽しんでくれ。それと今回は早紀総理の要望で人間と艦魂の合同となった。勿論、そち達の司令長官も参っているし、その他も皆艦魂が見える者だけじゃ。安心せい。それじゃ乾杯。」

一同

「かんぱい」

今回の宴は立食ではなく、各員テーブルに座るものだ。

中華料理・和牛料理が順番に次々と運ばれて、その後はバイキング方式での食事になる。

まあ、今回の宴は慰労の為であるつえに各国との友好を更に深めるという目的もある。

しかし、それでも関係なく食べるのが居るのも事実だ。

藤中総理大臣のテーブル

藤中

「天野ちゃん。よく食べるわね。」

藤中総理は天野国防大臣の食べっぷりに驚いていた。

天野

「腹が減っては戦は出来ぬってやつですね。」

天野国防大臣は大トコの握りを口に入れた。

藤中

「やれやれ。」

辻（大蔵大臣）

「早紀さん、良いじゃないですか。ねえ喜恵ちゃん。」

中野（総務大臣）

「そうですね。まだまだ子供何ですから。」

藤中

「そうですね。天野ちゃん、今日の夜は楽しみなね。しつげをしないと。」

フフフ」

辻

「その時は私も行くつと」

中野

「私も行きます。フフフ。」

天野国防大臣はこの時、遺書を書こうと心に決めた。

藤中総理1人でも半殺しにされるのに、3人にもなると死ぬだろう。

しかし、今後の人生を3人に捧げますと言えば自由は失われるが、死ぬ事はないだろう。

天野国防大臣は遺書を書くのを止め、自由を差し出す事にした。

その夜、首相官邸で官邸スタッフ全員を帰らせ3人は天野国防大臣を呼び出した。

天野国防大臣の泣き声が聞こえ、3人の笑い声が聞こえたという。

自由の国日本で、自由を捧げ生き長らえた天野国防大臣。

彼の人生に注目したい。

第七独立機動艦隊テーブル

早紀

「由美」

由美

「早紀司令。」

早紀

「フフフ、由美ちゃん。私の膝においで。」

由美

「はい。」

早紀

「フフフ、良い胸してる。」

由美

「あんっ！！！！！そんな所」

早紀

「フフフ。」

由美

「いやん。」

早紀

「気持ちいい？」

由美

「は……………」

早紀

「由美ちゃん、可愛い。」

しかし長い付き合いだ。

1942年から93年にもなる。

由美も早紀の愛を全て受け入れ、相思相愛の関係になっている。

そりゃ93年もそうだった肉体的関係になっていれば由美も受け入れなきゃいけないでしょ。

レナ

「由美さんもあれですね。」

リンダ

「……………」

亜由美

「姉のレズは一生ものだな。」

喜恵

「しょうがないです。」

レナ

「やれやれ。」

レナが言ったその時。

「イージス原子力機攻戦艦近江の艦魂レナ閣下ですか？」

レナ

「いかにも。」「はじめまして。私は原子力空母クイーンエリザベス2番艦プリンス・オブ・ウェールズの艦魂マリーと言います。」

レナ

「プリンス・オブ・ウェールズ……………」

マリー

「はい。」

レナ

「懐かしいな。」

マリー

「かつて我がロイヤルネイビーの東洋艦隊の旗艦でありました、レナ閣下に挨拶に参りました。」

レナ

「ありがとう。しかし私はもう日本に忠誠を誓っている。今の日本海軍連合艦隊のどの艦魂よりもながく海軍に位置している。私の祖国はもはや日本だ。」

マリー

「分かっております。かつては同じロイヤルネイビーの一員でありましたレナ閣下、リンダ閣下、ルリ閣下、ルナ閣下に挨拶に参りましただけです。」

レナ

「そうか、ありがとう。また何時でも私の所に来なさい。何時でも歓迎するよ。」

マリー

「ありがとうございます。それでは失礼します。」

マリーはそう言うと、戻っていった。

レナ

「……………ロイヤルネイビーか」

亜由美

「やっぱり懐かしいのか？」

レナ

「あつ、はい。」

喜恵

「すいません。私達がセイロン島へ行っただけに。」

喜恵はそう言うと頭を下げた。

レナ

「いえいえ。そんな喜恵さんが誤る事はないですよ。」

レナは喜恵にあわてて頭を上げてもらった。

亜由美

「かつてのロイヤルネイビー東洋艦隊の旗艦だ。だけどそれが日本海軍の1艦隊の1戦艦だ。かつての栄光をもう1度って訳だ。」

レナ

「いえいえ、私はいまの日本海軍第七独立機動艦隊の立場に誇りをもっています。先程も言いましたが私は日本に忠誠を誓っています。」

亜由美

「フッフ、そう言っていると信じてたわ。」

レナ

「ありがとう。」

亜由美

「まあ、そう言う事だ。乾杯でもしよう。」

レナ

「分かりました。」

亜由美

「乾杯。」

白鷺での宴は夜中の午前0時まで行われた。

その後に、天野国防大臣の悲劇があった。

1月は宴で酒が飲めるぞ〜（後書き）

次回、宴が終わってから9時間後にある地域にて大規模な地上戦が起きます。

香港侵攻

香港。

1842年にアヘン戦争でイギリスに敗れた清が南京条約を締結した。

その南京条約でイギリスは清から香港を割譲し、イギリス領となったのだ。

2035年になっても香港はイギリス領であり、中国へは返還されていない。

そんな中、2035年1月22日。

香港に暗雲が立ちこめていた。

香港防衛を担当するのは、イギリス第5方面軍。

チャレンジャー3戦車・ルーデン歩兵戦闘車・BS120アイルハート185ミリ自走榴弾砲・M290MLRSの4個機甲師団と4個歩兵師団の8個師団で方面軍を形成している。

第三次世界大戦勃発で、いち早く侵攻される連合国側拠点として常に最高警戒態勢に入っていたが。

開戦から21日経過し、精神面・肉体面でイギリス軍は限界を迎えていた。

その為、イギリス方面軍司令官は全軍に対して20時間の慰労時間を許可した。

しかしその時間が問題であった。

そして、午後19時。

中国軍の侵攻が始まった。

最初の動きは、イギリス軍監視塔から動きが見れた。

イギリス軍監視塔

「おい、やけに向こう側の戦車の数が多くないか？」

監視塔にいた少尉は同僚にそういった。

「そんな事ないだろう。」

同僚は『プレイボーイ』を見ながら答えた。

「呑気に『プレイボーイ』何か見てる場合か。見てみる。」

「はいはい。見りゃ良いんでしょ。見りゃ。」

同僚は赤外線スコープ付きの双眼鏡に目をあてた。

「……………!？」

「何だ？」

「こつちに向かっている。」

「何？見せる。」

少尉も双眼鏡に目をあてた。

「なんて奴だ。完璧な侵攻じゃないか。方面軍司令部に連絡だ。」

「分かった。」

「急げ!……!」

「分かっているよ!……!ちょっとまで。」

「糞っ!……!」

「あっ、繋がった。方面軍司令部。こちら監視塔。敵中国軍が……
……………」

ドグワアアアアン

彼が言えたのはそこまでだった。

中国軍の100式戦車の攻撃により、監視塔は見るも無残に崩壊した。

焼け跡にはプレイボーイの金髪美女のヘアヌード写真が残っていた。

中国軍の侵攻は素早かった。

100式戦車・95式装甲兵員輸送車が雪崩を打って香港に侵入した。

100式戦車・95式装甲兵員輸送車は優に1万輜に達し、歩兵も数十万人はいる。

中国軍お得意の人海戦術である。

それを、155ミリ自走榴弾砲や91式122ミリ多連装ロケットシステム・WM273ミリ多連装ロケットシステム・B300ミリ多連装ロケットシステムが支援。

猛龍J-18戦闘攻撃機が爆弾の雨を降らす。

イギリス第5方面軍の被害は急激に上昇していった。

方面軍司令部では被害の大きさに頭を抱えていた。

「司令。このまま座して死を待つつもりですか？」

若い参謀が司令官に詰め寄った。

「分かっている。しかし航空支援の無い今の状況で攻撃すればそれこそ無駄死にだ。」

「しかし、我々は誇り高きイギリス軍として何もせずに死ぬのが嫌なのです。」

「……………」

「誇り高きイギリス軍として、女王陛下のため。死ぬ覚悟は出来ています。」

「貴様は良いとして、他の者はどうなんだ？」

司令官の問いに、他の者も口を揃えて言った。

「我々も覚悟は出来ています。」

「……………そうか。」

司令官はそう言うと、目を閉じた。

「……………」

暫しの沈黙が訪れる。

「……………」

参謀達は司令官の言葉を待っている。

「……………皆死ぬぞ？」

司令官は口を開いた。

「この反撃は中国軍の物量で圧倒されるだろう。それでも良いんだな。」

「勿論です。敵に太刀打ち出来れば十分です。」

参謀達は言った。

「よし。なら最後の一戦だ。」

司令官の命令で出撃準備が始められた。

基地格納庫

ここにイギリス第5方面軍の生き残りが集結した。

残された兵力はチャレンジャー3戦車師団と2個歩兵師団だけであ

った。

歩兵は全員ルーデン歩兵戦闘車に乗車する。

ここで方面軍司令官の最後の演説が始まった。

「諸君、我々イギリス陸軍香港防衛第5方面軍はほぼ壊滅した。中国軍の侵攻は激しい物だ。このまま此処に立てこもっていても死を待つだけだ。それなら最後の攻撃を行い、誇り高きイギリス軍として最期を迎え様ではないか。諸君には最後の戦いになる。しかし勇気を持つて戦え。香港には未だ多数の同胞がいるのだ。特に女子供を守るため、命をかけよう。我々は誇り高きイギリス軍だ。最期まで諦めない。諸君、共に行こう！！！！以上だ。各員乗車しろ。出撃だ。」

司令官の命令で各員がチャレンジャー3やルーデン歩兵戦闘車に乗り込む。

方面軍司令官用チャレンジャー3戦車

「司令。」

司令官がチャレンジャー3に乗り込むと、少女が声をかけてきた。

「おお、シャーリー。」

少女はチャレンジャー3戦車の車魂だ。

「最後の戦いね。」

「そうだな、シャーリー。」

「よく参謀が出撃を認めたわね。」

「いや、私が許可した。」

「そうなの？」

シャーリーは驚いた。

司令官は人命を大切にと常々言っていたのだ。

それなのに、許可をだしたとは。

「何もそんなに驚かなくても良いだろう。誇り高きイギリス軍として最期を飾ろうと思っただけ。」

「そうなの。」

「ああ。」

「なら仕方ないわね。私も頑張るわ。」

「シャーリーにも苦勞をかけたな。」

「良いのよ。」

「シャーリー。」

「司令。出撃命令を。」

「うむ、分かった。全軍出撃！！！！香港防衛第5方面軍の最終戦争だ。」

「イエッサー！！！！！」

チャレンジャー3戦車師団と2個歩兵師団の計3個師団は最終戦争に身を投じた。

己の信じた、道に従い。

誇り高いイギリス軍として。

女王陛下のために。

彼らは国の誇りのために、最終戦争に身を投じた。

香港侵攻（後書き）

次回は第5方面軍最後の戦いです。

私事ではあり

ますが、先日再編なる『極上艦魂会』への加入を辞退する旨、黒鉄元帥閣下に報告してきました。

これにより、艦魂についてももう一度考える機会とし、もしかしたら更新が途絶えるかもしれません。

その場合でも、怒らずにお待ちくださいませ。

もしかしたらですので

2日考えて

どうも皆様。

007です。

アホみたいな書き出し文は書かないで、いきなり本題に入りますが、黒鉄元帥閣下に新編成なる極上艦魂会への再入会を辞退する旨を報告（言わなくても私は一番に除名されたでしょう）してから2日経ちました。

2日の間、私は艦魂について考えていました。

昨日の更新は書き上げていたのをアップしただけです。

その今日までの2日で、感想にはなくメールに直接皆様からの意見を13件ほど頂きました。

その全てが『もう引退しろ。』『もう小説を書くな。』でした。

正直それを読んだ途端、全ての小説を削除して、引退しようと思いましたが。

本気で思いました。

後、ワンクリックで削除する所までいきましたね。

しかし、そこで考えなおしたのです（何で削除せえへんねん！！！！
！って思った人もいるでしょう）。

たとえば、削除しろと言う読者の方がいても続きが読みたいと思っ
ている方が1人はいるのではないか？（完全に自分に酔ってますね。）
と。

またしても、自分勝手に小説を終わらすのか？と。

この2つが頭を過り、考え直しました。

そして、その考えを私の良き相談役である女性（私の小説に絶大な
影響力を持つ御方です）に聞いてもらいました。

すると、彼女はこう言ったのです。

「確かに読者の方の言い分は分かる。他の奴と比べてもあなたのん
は、艦魂を蔑ろにしとる。だけどそれでも読んでくれとる人はおる
んや。（中略）その読んどう1人に私も入っとる。その考えでもう
1回自分の結論を出し。それで削除するんやったら良い。また書く
のも良い。あなたの自由や。」

こう言ってくれました。

非常に嬉しかったです。

この喜びはWiiを買えた時の喜びに勝とも劣らずです。

あの御方の言葉で私はもう1回、2日間考える事にしました。

2日後に全部削除されていれば私の事は忘れて下さい。

では皆様。

これで失礼します。

ありがとうございました。

あつ、もし2日経つても更新されずに削除もされてなければまだ考えてるんだな〜って思っていただければ幸いです。

では、失礼します。

乱文をお読みいただき、ありがとうございました。

それぞれの思い

香港防衛第5方面軍は最終戦争に身を投じた。

基地格納庫から出撃した香港防衛第5方面軍は爆弾の雨が降る中、敵中国軍の主力に侵攻を開始した。

「シャーリー。こりゃ全滅するな。」

方面軍司令官はもはや笑うしかないと言って笑っている。

「よく言うわよ。私の生産ラインは廃止されて今はチャレンジャー4が生産されてるのよ。て事は、私も死ぬのよ。」

「そうか。なら負けられないな。」

「まあ、いいわよ。こんな状況で勝てるはずないわよ。」

「そう言うな、シャーリー。勝てなくても敵に被害を与えれば良いだろう。」

「そうね。如何にして全滅するのを長引かせるかね。」

「そつだ。良い負け方を考えようじゃないか。」

「良い負け方つて。航空支援の無い今じゃ難しいわよ。」

「そうなんだよ。空軍が飛び立つ前に破壊されたのが痛いな。自走

榴弾砲やMLRSが破壊されたのもキツイ。」

「何で、F35やハリヤー4が猛龍J-18にやられるかな」

「仕方ないだろ。パイロットは慰労時間を与えて街に出てたし、帰ろうとしたジープごとパイロットが殺されたしな。」

「じゃあ、慰労時間なんて出さなきゃ良かったんじゃない？」

「しょうがないだろ。開戦以来精神面・肉体面で限界だったんだから。」

「そうね。仕方ないわね。」

「そうだ。」

「なら、最後まで頑張りましょう。」

「ああ。頑張ろう。」

2人は会話を続けるが、その間も中国軍の攻撃により第5方面軍は被害を受け続けている。

しかし、そんな中でも第5方面軍は進撃を続ける。

中国軍に少しでも打撃を与えるために。

中国軍侵攻部隊

「しかし、あれだな。こんなにイギリス軍が脆いとはな。」

中国軍侵攻部隊の司令官が言った。

「しよせんイギリス軍よ。我が大中華帝國の領土を不法占拠してたんだからその罪よ。」

少女が言った。

「そうだな、ヤンの言うとおりだ。」

中国軍司令官は少女に言った。

少女…ヤン…は100式戦車の車魂だ。

「さあ、さっさと出ていってもらいましょ。」

「そうだな、だけど勝敗はもはや決したぞ。」

「そうね。あんな二流の軍隊が何時まで保つかね。」

「……………」

「私達一流の軍隊相手に戦争吹っ掛けてくるのは自殺行為よ。」

「あの……ヤン嬢様。」

「な・に・か・な」

「いえ、何も。」

「そうよね。あんたが私に指図出来るわけないものね。」

「はい。」

「じゃあ行きましょうか。」

「了解しました。」

イギリス軍と中国軍、お互いに自己の目的を達しようとする奮闘している。

この戦いを制覇するのは？

お礼

鳥海洋翔様・KYOU様・波戸様・和希様・独楽犬様・蒼叡様・麗
様・クニ様・八山様・蒼月様・たこ様・こた様・一般読者様・ヘリ
オン様・いそかぜ様・ノルン様・竜心様・要塞好き様・高校生様

誠にありがとうございました。

今後も、自分の作品を信じて最後まで書き続けます。

そして第三部・第四部・第五部の根本的な見直しも始め、皆様にご
満足いただけるよう頑張っていきたいと思えます。

勿論、現在の第二部に力を入れますのでご心配なく。

では、ありがとうございました。

感想欄は、随時返信させていただきます。

激突！！香港決戦

イギリス第5方面軍と中国軍侵攻部隊は遂に激突した。

イギリス第5方面軍はチャレンジャー3戦車による火力で中国軍100式戦車を撃破していくが、如何せん数に差がありすぎる。

中国軍は今回の侵攻に100式戦車6800輛・95式装甲兵員輸送車4200輛・155ミリ自走榴弾砲、91式122ミリ多連装ロケットシステム、WM273ミリ多連装ロケットシステム、B300ミリ多連装ロケットシステム各800輛・猛龍J-18戦闘攻撃機280機を投入している。

これはもはや数の暴力だ。

対するイギリス第5方面軍はチャレンジャー3戦車が975輛・ルーデン歩兵戦闘車1250輛・歩兵4万8000人（2個歩兵師団）。

これはイギリス第5方面軍の不利にも程がある。

中国軍は歩兵だけでも数十万人を投入している。

何処のどいつだ！！！！こんな酷い割合にしたのは！！！！

………すみません。

ちよつとおかしな方向へ行つてしまいましたね。

では。

イギリス第5方面軍司令官の所へいつてみよう。

「司令、我が軍は個々の戦いでは優勢ですが、全体的に見ると劣勢です。」

戦車長が司令官に言った。

「そつだな、これだけ数があるとな。」

司令官は狭い車内に広げられた地図を見ながら言った。

その地図は非常に面白いものである。

普通にしていれば、平面の地名等が書かれたごく一般的な地図である。

だが、スイッチを押すことで地図は一変する。

衛星からの映像を立体映像に切り替え、地図にある建物を出現させ衛星が捉えた映像を描写する。

その為、司令官や戦車長が見ている地図は端からみればテレビゲームと間違えるかもしれない。

それほど、目の前の地図は凄いものであった。

「これは非常に危ないな。」

「司令、どうしました？」

「これを見る。」

司令官はそう言うと、スイッチを押した。

すると映像が今後の経過を予想したシミュレーションになる。

「なっ！！！！！」

戦車長は絶句した。

「分かるだろう。」

司令官は口元に笑みを浮かべながら、言った。

「司令……………」

戦車長が地図に指をさす。

「そつだ。」

地図には大きく文字が出ていた。

『敗北』

と。

「お前も日本語は知ってるだろう。」

「はい。」

「なら意味も分かるな？」

「はい。」

「この戦い、我々の負けだ。」

「……………」

「なに、そう暗くなるな。」

「……………」

「これはシミュレーションだ。パナソニックの製品でも間違えるかもしれない。」

「ですが、MADE in JAPANは完璧無比ですよ？」

「そうだが、俺たちが落ち込んだら他の兵達にしめしがつかんだろ
う。」

「そうですね。」

「そうだ。たとえ負けようと最後まで諦めるな。」

「分かりました。」

「うむ。」

そこへ、転移の光が立ちこめた。

「おや、シャーリーが帰ってきたか？」

「シャーリー？」

「ああ、このチャレンジャー3の車魂だよ。」

「そうですね。」

「ふう、転移してた戦車が中国に袋叩きにされて大破したから戻っ
てきた。」

「そうか。大変だな。」

「司令、誰に喋ってるんですか？」

戦車長が呆然と聞いた

「君には見えんか？」

「はい。」

「まあ仕方ないな。」

「仕方ないわよ。」

「そうだなシャーリー。」

「それより司令、出撃しませんと。」

「よし。シャーリー、戻ってきて早々あれだが出撃するぞ。」

「分かったわ。」

「よし、イギリス第5方面軍最後の意地だ。中国軍に見せ付けてやれ。」

イギリス第5方面軍司令官指揮の残存チャレンジャー3戦車部隊は、中国軍100式戦車部隊と対峙していた。

「シャーリー、始まるぞ。」

「そうね。」

「なら、突撃開始！！！！コンバット開始だ！！！！！」

ドガアアアアアン！！！！！！

チャレンジャー3戦車は120ミリ砲を撃ちながら突撃を開始した。

「進め！！！！個々の性能では我がチャレンジャー3のほうが上だ

！！！！！！」

「そうよ、私は強いんだから。」

「戦車長、落ちついて各個撃破を狙え。」

「了解。」

ズガアアアアアアン！！！！！！

「どうした？」

「敵機の空襲です、司令。」

「糞っ！！！！！！」

「ギヤーギヤー言ってもしょうがないでしょ。」

「そうだな、シャーリー。」

「私を信じて戦いなさい。」

英中軍は激しい撃ち合いを続けた。

イギリス軍はチャレンジャー3という、高性能の戦車で事に及んだ。

しかし、敵中国軍は圧倒的な物量でチャレンジャー3を迎撃した。

制空権を手中に納め、圧倒的な物量を投入した。

それに、中国は地の利というものがある。

補給も万全だ。

海路も中国海軍により封鎖され、海軍の攻撃も加わっている。

これが、中国軍の侵攻を早める事になった。

イギリス第5方面軍司令官車内

「司令、残る戦車は我がチャレンジャー3を合わせても8輜だけです。」

「そうだな。そろそろ潮時かな。」

「そうね、私もしんどくなってきたわ。」

「そうか、シャーリーもこれでおしまいか？」

「よく言っわよ。」

「ハハ、そうだな。」

ドグワアアアアン！！！！！

「5輜爆散。」

「グハッ！！！！そろそろ、かな。」

「そう言っな。」

「だけど、もう無理。」

ドグワアアアアン！！！！！！

「だってほら、今でも。」

「司令、残るは我がチャレンジャー3を残すのみです。」

「うむ、では戦車長。」

「はい。」

「他の者を連れて下車しろ。」

「司令！……！」

「早くしろ。もう死人が出る必要はない。」

「………」

「早くしろ。」

「了解しました。」

戦車長は砲手と運転手を連れて下車した。

「司令、どうかご無事で。」

「ああ、良ければまた会おう。」

「イエッサー。」

3人は敬礼をしてチャレンジャー3から離れていった。

「さて、これで2人つきりになれたな。」

「何考えてるの？」

「まあ、いいじゃないか。」

「フフフ、そうね。」

「まあ、もうすぐ楽になるだろう。」

「しかし、落ちたものね。」

「そうだな。」

「1993年の香港統治に終止符ってね。」

「負けて目醒めるってか」

「何に？」

「色々だよ。」

「ふん。」

「さて、シャーリー。」

「なに？」

「世話になったな。」

「フッフ、何よ今更。」

「いや、もう終わりだと思ってな。」

「そうね、潮時ね。」

「ありがとうな。」

「こっちこそ。」

2人は見つめあった。

2人の時間を永遠のものにするかのように……

シャーリーが司令官にキスをした。

その瞬間、中国軍の砲撃がチャレンジャー3に集中。

チャレンジャー3は爆発して果てた。

イギリス第5方面軍司令官とシャーリーはこの世から消えた。

香港防衛イギリス第5方面軍は全滅。

香港は中国軍の手に落ちた。

2035年1月22日午後23時香港陥落。

連合国の最初の拠点が占領された。

日本を操る者

香港陥落から一夜明けた2035年1月23日午前9時。

日本中が香港陥落の報で持ちきりだった。

何せ、開戦以来これといった被害もなく中国軍を撃破していたのだから、同盟国の拠点が陥落した衝撃は大きい。

その衝撃は日本の政治中枢にも少なからずの動揺を与えている。

日本首都東京霞ヶ関首相官邸

閣議室では緊急の閣議が開かれていた。

「さて皆さん。遂に中国軍がやらかしましたね。」

藤中早紀総理大臣が閣僚に向かって言った。

藤中

「遂に連合国の拠点が陥落しました。今回の香港防衛でイギリス軍

の香港防衛を担当していた第5方面軍は全滅しました。この行動にも日本としては断固とした態度を見せなければいけません。」

天野国防大臣

「そうです。日本も連合国の盟主として香港は見捨てないとアピールしなければいけません。」

藤中

「そうよ。私も香港が陥落した後、すぐにブレア首相に伝えたからね。」

大木外務大臣

「外務省としても、イギリスに香港は見捨てないと通達しました。」

藤中

「そう、早いわね。」

辻大蔵大臣

「それも良いですけど未だに戦費予想が出来ていませんが。」

藤中

「大丈夫よ。別に出来てなくてもゆっくり考えればいいのよ。」

中野総務大臣

「けど午後からの防衛委員会で野党がうるさいですよ。」

藤中

「騒がしておけばいいわよ。」

中野

「分かりました。」

天野

「あの馬鹿共は開戦した今でも世界平和と世界平和と叫んでいますか
らね。」

藤中

「まったくよ、頭おかしいんじゃない？」

辻

「あのような輩が、我が国の政治家とは驚きです。」

中野

「そうよ。さっさと辞めればいいのに。」

藤中

「そうね。『戦時内閣強硬法』を適用してこの際失職させようかし
ら。」

辻

「良いんじゃないですか。」

中野

「賛成です。」

天野

「あゝ」

藤中

「それじゃ、決まりね。午後の防衛委員会は馬鹿共の話聞いて適

当に答えて、最後に失職させると。」

辻

「意義なし。」

中野

「賛成です。」

藤中

「決まりね。それじゃあ皆さんそう言う事で、また午後の防衛委員
会に。」

藤中総理はそう言うと、辻大蔵大臣と中野総務大臣を連れて閣議室
を出ていった。

大木

「天野国防大臣。」

天野

「何でしょうか？」

大木

「女性は強いですね。」

天野

「はい。私の声なんか無視でしたね。」

大木

「けど、反対出来ない。」

天野

「そうですね。」

大木

「日本はあの3人の女性に操られているんですね。」

天野

「はい。この国が勝つも負けるも3人の女性次第……………」

大木

「どうしようもないですね。」

天野

「そうです。我々には何もする事はないです。藤中総理達に命令される事をやるだけです。」

天野国防大臣と大木外務大臣も閣議室を出ていった。

その他の閣僚も閣議室を後にした。

午後からは防衛委員会だ。

― 解説 ―

戦時内閣強硬法

1945年の朝鮮戦争時に当時の山本五十六総理大臣が制定した法案。

戦時において、内閣の力を増大させるのが目的。

朝鮮戦争が勃発したが、素早く決められなかった為に山本総理が制定した。

あくまで、戦時において適応される法案。

日本を操る者（後書き）

次回は午後の防衛委員会です。

防衛委員会

閣議が終了してから3時間後、国会議事堂第1会議場にて防衛委員会が開かれた。

防衛委員会は日本・日本連邦加盟国の安全保障と軍整備について話し合われる。

防衛委員会もそうであるが、国会議員は必ず委員会に入らなければいけない。

防衛委員会の他に重要な物は国交委員会・厚生委員会・労働委員会・社会保険委員会等がある。

小さい、重要度の低い物も含めればまだあるが、ここでは割愛する。

さて、防衛委員会が始まりそうなので第1会議場を見てみよう。

国会議事堂第1会議場

防衛委員会は参加議員全員の国歌斉唱から始まった。

この国歌斉唱は日本国憲法（正式名称：昭和改正憲法）の第4章第42条国会及び委員会開催目録に書かれている。

日本国憲法は全111章100条におよぶものである。

さて、説明をしていれば国歌斉唱が終わったようだ。

また話がそれるが、国歌斉唱ぐらいは真面目にしてもらいたい。

WBCの決勝戦で日本国の代表として出場しているのに国歌の演奏中にガムを噛んでいるとは。

いくらWBC連覇したとはいえそれは許せない。

まあ、連覇したから今回だけは目を粒りましょう。

しかしイチローは凄い。

よくぞあそこで打った。

世界のイチロー。

……話を戻す。

委員長の開会宣言で防衛委員会は始まった。

すると、野党の社民党党首が手をあげた。

「社民党党首福島君。」

委員長の指名で福島党首が質疑を始めた。

「藤中総理に聞きます。講和する意志はありますか？」

福島党首の間に藤中総理が答えた。

「全くありません。中東方面側を消滅させるまで第三次世界大戦は
終結させません。」

藤中総理に福島党首が食い付いた。

「なぜですか？」

「なぜ？一度始めた戦争を引き分けや敗北で終わらせる訳にはいき
ません。日本の威厳にかかります。」

「威厳。威厳の為なら戦争をしても良いんですか？」

「向こうが仕掛けてきたんです。これは防衛戦争です。」

「しかし、2月1日には上海上陸作戦を計画しているみたいですが？これは明らかな侵略行為です。」

「侵略行為？向こうから攻撃してきたから日本に攻撃すればどうなるか教えるのよ。」

「人を殺してですか？」

「そう。こっちも同時多発テロで殺されたんだから、別にどつって事ないわよ。」

「どつって事ないと言いましたね。」

「言ったわよ。」

「人の命をなんだと思ってるんですか！！！！！」

「別に中国人の命なんて屁でもないわよ」

あつと、2人は拳手をして委員長が指名するという順序で喋っています。

しかし、ここでは割愛します。

「しかし、藤中総理。中国人とは言え我々と同じ人類です。」

「それがどうしました？人類皆家族なんて言わないでくださいよ。」

「そうです、人類皆家族です。世界平和を実現するために今すぐにも講和するべきです。」

「このご時世世界平和何てアホみたいな事を言う輩がいるとは驚きです。」

「いいえ、アホみたいな事とは思いません。」

「なら馬鹿な事ね。」

「なっ!?!?」

「それともう一つ面白い事があるわよ。」

「何ですか?」

「明日、海軍特別航空隊EZ富嶽と空軍GZ飛鳥による中国本土空襲を行うわ。それと核攻撃もね。」

「何ですって!!!!!!」

会議場に衝撃が走った。

まだまだ続きそうだ。

防衛委員会（後書き）

さてさて、まだまだ続きそうですね。

戦時内閣強硬法発動

藤中総理の発言に会議場が揺れた。

すかさず社民党の福島党首が食らい付いた。

「総理、それは本当ですか？」

「そうですよ。天野ちゃん、これに説明してあげて。」

藤中総理が天野国防大臣に言うと、天野国防大臣が手を挙げた。

「天野国防大臣。」

委員長の指名で天野国防大臣が話し始めた。

「確かにそうです。明日の2035年1月24日1500時に海軍特別航空隊E-X富嶽爆撃機・掃射機及び空軍GZ飛鳥による中国本土空襲を行います。通常爆撃に加え、原爆・水爆・レーザー水爆を各20発合計60発投下します。それと陸軍空竜Xレーザー水爆弾道ミサイルも40発発射します。ご心配なく放射能融和弾を核攻撃後に撃ち込みます。今回の爆撃は中国本土の西部壊滅を目的としています。」

天野国防大臣は淡々と説明した。

「それは許されませんね。」

福島党首が声を荒げた。

「どうしたの？まさか中国人何かに同情したわけじゃないわよね。」

藤中総理が笑いながら言った。

「そう言うわけではないです。」

「じゃあ何？」

「核兵器は使用してはいけません。」

「何で？」

「人が死ぬからです。」

「じゃあ、核兵器を使わずに普通の爆弾なら良いのね。」

「はい。」

福島党首の答えに藤中総理が笑った。

これを見た福島党首は顔が青ざめた。

「フッフ、さっき核兵器を使うと人が死ぬからって言ったのに私が普通の爆弾なら良いのねって聞いたらはいって言ったわね。矛盾してるわよ。」

「……………」

「反論しないって事はあなたも戦争を支持するのね。」

「いえ……………」

「もういいわ。委員長、これから私が何しても止めない事。わかった？」

藤中総理は委員長を睨み付けた。

「わ、わかりました。藤中総理のご自由に。」

委員長は汗を拭きながら藤中総理に答えた。

「ありがとう。じゃあ言うわよ。我が内閣は戦時内閣強硬法を発動させ、社民党議員を全員失職させます。」

藤中総理が高らかと宣言した。

その宣言に内閣の閣僚以外の全員が騒然とした。

「それはあまりにも独裁的ではないですか？」

福島党首はなおも食い付く。

「うるさいわね。もう戦時内閣強硬法は発動されてあなた達は国会議員ではないんだから早く出ていきなさい。」

藤中総理は跳ねとばした。

「それともう1つ天野ちゃん、始めて。」

藤中総理が天野国防大臣に言った。

「了解しました。全員開始だ。」

天野国防大臣の命令で会議場に銃を構えた特殊部隊が突入してきた。

「なっ！？何ですか？」

委員長が叫ぶ。

「日本共産党員は全員国家反逆罪で逮捕だ。」

天野国防大臣が言った。

「聞いてないぞ。」

「我々の自由を奪う気か？」

共産党員が口々に叫ぶ。

「日本に共産党が在る事じたいおかしいのです。今まで何もされなかつただけ喜びなさい。それに共産党員には重罰を与えますのでその気で。」

藤中総理はそう言つと、閣僚を引きつれて会議場を出ていった。

委員長が慌てて閉会を宣言し、防衛委員会は終わった。

同時刻生田のうどん屋

『あつ只今閉会宣言が出されました。今回の防衛委員会は社民党議員の失職と共産党員の国家反逆罪での逮捕が目的だったと思われるます。』

生田恵と二宮行雄は防衛委員会の中継を見ていた。

二宮

「恵さん、藤中総理もやりますね。」

生田

「そつね行雄ちゃん。」

二宮

「けどやり過ぎじゃないですか？」

生田

「何で？社民党議員はアホみたいな事考えてるから失職されて当然。共産党黨員なんか国家反逆罪が適応されて当然よ。」

二宮

「そう言われてみればそうですね。」

生田

「そうよ、行雄ちゃん。」

『それでは只今より、緊急の世論調査を行います。今回の藤中総理のやり方は適切かどうか？リモコンのデータボタンを押してから表示されるボタンを押して投票してください。』

二宮

「恵さん、世論調査ですよ。」

生田

「そう、なら適切なほうに入れといて。」

二宮

「了解しました。」

生田

「行雄ちゃん、ちょっと来て。」

二宮

「ちょっと待って下さい……………はい、投票出来ました。何ですか。」

生田

「横に来て。」

二宮

「まさかこんな時間からするんですか？」

生田

「だって昨日はしてくれなかったじゃない。」

二宮

「昨日は香港陥落の件で忙しかったんです。」

生田

「昨日してくれなかったから今日は朝から体が熱いの。襲うのを頑張って我慢したんだから良いじゃない？」

二宮

「いや、そう言われても。」

生田

「もう我慢出来ない。行雄ちゃん、覚悟！……！」

二宮

「いや、そんな。ギャ~~~~」

首相官邸2階総理執務室午後20時

藤中総理と中野総務大臣、辻大蔵大臣が話をしていると天野国防大臣が入ってきた。

「藤中総理、最新の世論調査の結果が出ました。」

天野国防大臣は書類を3人の女性に渡した。

中野総務大臣

「今回の社民党議員失職及び共産党員逮捕は適切かどうか、適切97%・適切ではない2%」

辻大蔵大臣

「内閣支持率が99%」

藤中総理

「当然よ。」

天野国防大臣

「しかし、大したもんですね。ブラックベレー（天野国防大臣が防衛委員会に突入させた特殊部隊）で逮捕させた時はどうかと思いま

したが、大丈夫でしたね。」

中野総務大臣

「大丈夫にきまってるじゃないですか。」

天野国防大臣

「そうですね。」

辻大蔵大臣

「けど、その言い方は何ですか？」

天野国防大臣

「いや、その。」

藤中総理

「天野ちゃん、まさか私の計画を疑ってたの？」

天野国防大臣

「そ、そんな事はないです。」

藤中総理

「私達に自由を差し出したくせに良い度胸ね。」

中野総務大臣

「もう1回じっくり教えてあげましょう。」

辻大蔵大臣

「体でね。」

藤中総理

「覚悟しなさい。」

天野国防大臣

「お許しください!!!」

一同

「問答無用!!!」

天野国防大臣

「ギャ~~~~」

ー解説ー

日本陸軍特殊部隊群。

通称ブラックベレーで知られる。

第二次世界大戦最終決戦の欧州戦に初投入された。

部隊結成は太平洋戦争中であつたが、訓練終了間近に太平洋戦争が
終結。

そのため、欧州戦に投入された。

現在世界中に存在する特殊部隊のモデルとなった。

世界最強の特殊部隊。

戦時内閣強硬法発動（後書き）

さて、次回は中国本土空襲です。

何億死ぬか？

中国本土へ向けて

2035年1月24日13時。

中国本土空襲に出撃する呉第18航空艦隊EX富嶽ステルス爆撃機・EX富嶽ステルス掃射機は最終点検を行っていた。

ここの呉第18航空艦隊だけでもEX富嶽ステルス爆撃機が80機とEX富嶽ステルス掃射機80機が出撃する。

それに加え、厚木第5航空艦隊からEX富嶽ステルス爆撃機50機・EX富嶽ステルス掃射機50機。

鹿屋第20航空艦隊からEX富嶽ステルス爆撃機50機・EX富嶽ステルス掃射機30機が出撃する。

そして空軍の嘉手納第5爆撃航空団からGZ飛鳥無尾翼全翼ステルス爆撃機60機が出撃する。

この海軍・空軍合計400機が15時に出撃し、中国本土空襲を行う。

そして、止めとばかりに陸軍空竜Xレーザー水爆弾道ミサイルを40発発射する。

この空竜Xレーザー水爆弾道ミサイルは基地配備型と車輻搭載型の2つある。

今回は車輛搭載型から発射される。

さて、ここで最終点検中の呉第18航空艦隊を見てみよう。

呉第18航空艦隊EX富嶽ステルス爆撃機隊長角田治夫中佐は愛機を眺めていた。

「中佐、全兵器の搭載を完了しました。」

武器科の少尉が角田に言った。

「そうか、ありがとう。」

角田はそう言うと、愛機の中に入っていった。

EX富嶽ステルス爆撃機内

角田

「おい、エンジンの調子はどうか。」

機関士

「大丈夫です。すこぶる調子が良いです。」

角田

「そうか、良くやってくれよ。ダブルターボ核融合エンジンはややこしいからな。」

機関士

「ご心配なく。整備は完璧です。」

角田

「そうか。」

さて、ここでエンジンの説明も併せてEX富嶽ステルス爆撃機とGZ飛鳥無尾翼全翼ステルス爆撃機を説明しよう。

まずはEX富嶽であるが、この機体は1951年の初飛行以来約80数年活躍する爆撃機である。

実用上昇限度は65000メートルであり特殊装備として光学迷彩を装備。

特筆すべきがダブルターボ核融合エンジンを装備しているため、航続距離が となった事だ。

これは凄い事である。

航続距離が となった事で、世界中に攻撃することが可能になったのだ。

なお、核融合エンジンを搭載しているのはEX富嶽ステルス爆撃機・EX富嶽ステルス掃射機・EX富嶽ステルス輸送機・GZ飛鳥無尾

翼全翼ステルス爆撃機・轟天ステルス戦闘機・海王ステルス攻撃機・
嶺花ステルス電子攻撃機・星雲早期警戒機・心神ステルス攻撃機（
これはGF・空軍用は除く）・雷電ステルス垂直離艦戦闘攻撃機（
これもGF・空軍用は除く）がある。

これらの機体は驚くほどに高価となっている。

これら高性能の機体を保有出来るのは日本だけである。

さて、この説明をしているうちに、出撃時間となった。

15時

四ヶ所の基地から爆撃機・掃射機が中国本土空襲に出撃した。

マッハ2の速度で3時間後の空襲を予定している。

中国西部が核の洗礼を受け、焼け野原になるのはもうすぐだ。

（後書き）

北朝鮮のテポドン2発射を受け、今こそ日本の安全保障について考えなおす時ではなかるうか？

1 主権国家の領空を通過させる弾道を決めた事じたいがおかしいのである。

それにイージス艦を派遣したくせに迎撃しなかった事も疑問点である。

発射したことだけに非難声明を出すだけなもの、おかしいだろう。

発射は宣戦布告だ、とでも言えば良かったものを……………

自国の防衛もろくに出来ない国など世界中で日本だけだ。

いまからでも遅くない。

憲法第9条の改正と非核三原則の破棄を始める時だろう。

日本の再軍備と核武装を切に願う。

だいたい、自衛隊の兵力を強化した時に軍国主義の復活だと騒ぐのもどうかと思う。

第一軍隊は国家を防衛するためのものであるから、侵略のためのものではない。

これをよく分かってもらわなければいけない。

そして、憲法第9条を改正しようとする時に騒ぐ輩によく考えてもらいたい。

日本という国家、国民の生命財産を守るよりもたかが紙にかかれた文字の方が大事なのか？

これでも憲法第9条を守るのはこれこそ非国民だ。

中国西部空襲

中国西部爆撃隊は中国領空に侵入した。

EX富嶽ステルス爆撃機隊隊長角田機

レーダー員

「隊長、敵のお出迎えです。」

角田

「そうか、人気者は辛いな。」

機長

「迎撃しますか？」

角田

「そうだな。迎撃用意！！！！それと大川に連絡だ。」

機長

「了解。」

角田

「おい、大川聞こえるか？」

大川「おお、聞こえるぞ。」

角田

「おまえの所でもキャッチしてると思うが、敵のお出迎えた。」

大川「おお、分かってるぞ。言われなくても叩き落とすぞ。」

角田

「頼んだぞ。俺達はまだ50ミリレーザーガトリングガンをも6門装備してるから良いが、空軍さんの飛鳥は何も装備してないからな。いくら光学迷彩を起動させていてもうつつとつしいぞ。」

大川「そうだな。あいつらに見えない敵の恐怖を教えてやろうじゃないか。」

角田

「頼んだぞ。」

大川「任せろ。」

EX富嶽ステルス掃射機隊隊長大川機

機関員

「光学迷彩100%起動中。」

機長

「50ミリレーザーガトリングガン発射用意。」

大川

「よし。蓬莱だか野菜だか知らんが、叩き落とせ!!!!!!」

その瞬間、EX富嶽ステルス掃射機の機体下部に装備されている200門の50ミリレーザーガトリングガンが攻撃を始めた。

中国空軍蓬莱迎撃隊

隊員

「隊長、日帝の爆撃機がどこにも見当たりません。」

隊長

「うむ。我が国の領空に入った時までは捕捉出来ていたがな。」

隊員

「隊長、もしかして日本海海戦での敵機みたいに光学迷彩を装備しているかも知れません。」

隊長

「うむ、お前もそう思うか。俺も同じ事を考えていた。日本のエレクトロニクス技術は世界一だ。我が国はそんな国と戦争を始めてしまった。この戦争が終わった時には我が国は消滅しているかも知れんぞ。」

隊員

「しかし隊長……………」

彼らが話せたのはそこまでであった。

その瞬間、32000門（160機の掃射機×1機2000門）の50ミリレーザーガトリングガンが中国空軍蓬萊迎撃隊を攻撃。

中国空軍蓬萊迎撃隊は150機全機が叩き落とされた。

邪魔者がいなくなった海軍・空軍合同爆撃隊は一路中国西部を目指した。

28分後。

爆撃隊は既定の針路を進んでいた。

爆撃士

「……最初の目標まであと1分。」

角田

「よろしい。高度40000メートルまで降下する。」

EX富嶽ステルス爆撃機はレーザーをもちいた全天候型照準装置を装備しており、それは目標記憶装置やGPSと連動している。

角田

「機長、目標1への爆撃針路に入る。」

EX富嶽ステルス爆撃機は高度を落としながら、爆撃進路に侵入していった。

この時は、雲の遙か上空だ。

しかし照準システムのコンピューター画面には、赤外線でとらえた目標がくっきりと映し出されている。

角田

「投下!!!!!!」

角田の命令で、全機が攻撃を始めた。

富嶽には衛星誘導爆弾・クラスター爆弾・超々重量徹甲爆弾・800ポンド爆弾・2トン気化爆弾そしてレーザー水爆が搭載されている。

現在、レーザー水爆の全ての爆弾を投下している。

角田

「この下には居りたくないな。」

機長

「そうですね。」

角田

「気化爆弾まで投下しているし、だめ押しに核攻撃だろ？悪夢だな。」

機長

「中国人に今回ばかりは同情します。」

角田

「そうだが、これは戦争だ。私情を入れるなよ。我々職業軍人は上に命令されれば攻撃するだけだ。」

機長

「わかっています。」

角田

「ならいい。それじゃ高度を上げる。核攻撃だ。」

機長

「了解。」

全爆撃機に命令が飛んだ。

大川機

大川

「さて、何人だ？」

機長

「現在、コンピューター連動50ミリレーザーガトリングガンの殺戮数は18万人を超えています。」

大川

「ハハハ、これは殺りすぎだな。」

機長

「そうですね。ですが……………」

通信員

「隊長。角田中佐から電話です。」

大川

「そうか、おい角田なんだ。」

角田『おお、大川か。今すぐ高度を上げる。核攻撃が始まるぞ。』

大川

「そうか、なら高度を上げる。後は頼んだぞ。」

角田『了解だ。』

その後、角田達は核攻撃を慣行。

原爆・水爆・レーザー水爆各20発。

それに加え、陸軍空竜Xレーザー水爆弾道ミサイル40発発射。

合計100発の核を投下。

中国西部は粉塵に帰した。

核攻撃後に放射能融和弾を投下。

残留放射能は気化された。

中国西部爆撃戦果

中国

死者12億4千万人（中国総人口21億8千万人）

日本

被害皆無

緊急安全保障理事会

2035年1月25日。

ハワイ王国首都ホノルルの国際連邦本部で緊急の安全保障理事会が召集された。

今回の安全保障理事会は中国大使たつての希望で召集された。

しかし、その中国大使がまだ来ない。

各国の大使は苛立ちを隠せずにした。

「皆さん、イライラする気持ちはよく分かりますが、どうか落ち着いて下さい。」

議長でもある、アメリカの国連事務総長が空気を察してか、各国大使に声を掛けた。

しかし、そのような事を言って落ち着くはずがない。

何せ、1時間も遅れているのだ。

これは、イライラするはずだ。

それでは、各国大使がイライラしているあいだに今回の安全保障理事会参加国を紹介しよう。

通常、安全保障理事会は常任理事国だけで行われるが今回だけは、非常任理事国と日本連邦加盟国も安全保障理事会に参加する事になった。

これも中国大使の根回しにより、決められた。

常任理事国

日本・アメリカ合衆国・イギリス・ロシア連邦・神聖イスラエル神国・中華人民共和国

非常任理事国

フランス・スペイン・オランダ・オーストラリア・ニュージーランド・カナダ

日本連邦加盟国

満州皇国・インド・フィリピン・インドネシア・ブルネイ・タイ・マレーシア・パプアニューギニア

以上の20カ国で安全保障理事会が開かれる。

日本であるが近頃、道州制の導入が進められている。

地方分権を掲げ、行われるがどうなる事か？

藤中総理は2月1日までに道州制導入を目指している。

さて、無駄話が過ぎた。

安全保障理事会に戻そう。

「そう言うが、遅すぎる。我々の事を考えずに平気で遅刻するとは！！！！非常識にも程がある！！！！」

アメリカ大使が声を荒げながら立ち上がった。

他の大使も怒りを堪えているようだ。

「大体、何故中国の為に安全保障理事会を開かなければいけないのだ？」

イギリス大使がため息混じりに言った。

「まあ、召集した理由は分かりませんがね。」

松島大使が笑いながら言った。

ロシア大使

「しかし、我々は中国と戦争中だ。敵国の言う事になぜ耳を傾けなければならぬのだ？」

フランス大使

「まあまあ、話ぐらい聞いても減るもんじゃないですから。」

フランス大使がロシア大使を宥める。

「今回我が国が中国に核攻撃を行ったばかりに皆さんにはご迷惑をおかけします。」

松島大使はそう言うと、席を立ち、頭を下げた。

これには他の国の大使も困惑した。

イスラエル大使

「いえいえ、中国への核攻撃はちゃんとした大義があるのですから。それに開戦の初っぱなに日本は核攻撃を受けたんですから、当然ですよ。」

さて読者の方々の中には日本が核攻撃？と思われた人が多い事だろう。

そう思われた方はもう一度この小説を読んでもらえれば幸いだ。

しかし、説明すると。

第2話、第二次世界恐慌で不況を抜け出せない南米各国は国土を日本に売却したと書きました。

と言う事は南米大陸は日本領と言う事になります。

そこに何とか賃貸で国が存続している事になります。

さて第23話で中国海軍の冬級がブラジルの首都を核攻撃しました。と言う事は、南米大陸は日本領ですので中国海軍の冬級は日本に核攻撃を行った事になります。

これが有ったから、日本は中国に核攻撃を行ったのです。

近々この小説の各国国土や政治形態等々説明したいと思います。

まあ、まずは登場人物と登場艦魂紹介が先ですが。

松島大使

「いやはや、ありがとうございます。我が国の行動には常に大義名分があります。」

満州皇国大使

「そうです。我が日本連邦加盟国は日本の意志を尊重します。」

満州皇国大使の発言に、その他日本連邦加盟国が拍手を送った。

インド大使

「その通り、日本連邦加盟国は日本の意志を尊重する。」

松島大使

「有り難い。我が国と日本連邦加盟国の仲は永久に安泰ですね。」

松島大使が安堵の溜め息を吐いた時、扉が開いた。

中国大使

「いやはや、遅れてすまない。」

中国大使が堂々と入ってきた。

国連事務総長

「中国大使、席に着いて下さい。」

中国大使

「分かりました。」

中国大使は国連事務総長の指差す席に着いた。

国連事務総長

「さて、役者が揃ったので只今より、緊急の安全保障理事会を開催したいと思います。」

くあとがき

さて、またしてもメッセージが沢山届きました。

結論から言って、馬鹿につける薬はないと言う事ですね。

私はこの前、某先生の作品でコメントをしましたが、それに対してのメッセージが多かったです。

私は海上自衛隊の空母保有のため、ODAの廃止や地方交付金の抑制・陸上自衛隊の縮小を唱えました。

この3つに対しての批判が多かったです。

『ODA外交って知っとう？日本が孤立しても良いん？』 『地方のインフラがガタガタになっても良いん？』 『馬鹿野郎』等々、50数件頂きました。

……………暇ですね

ODA外交つてまずおかしいでしょ。

自分の国に金を使わず、他国に金をあげるって……………

うん、馬鹿だね。

そこまでして仲良くしたい？

金払ってまで……………

地方交付金を抑制すれば、地方のインフラがガタガタになるって。

だからその為にメタンハイドレートを発掘するんですよ。

そこをピックアップせずに違う所を批判する……………

まあ、良いです。

暇なんですネ。

投稿して小1時間もすれば批判メッセージの嵐。

これは100件いくかな？

もう、反論するのが疲れました。

言いたければ勝手にどうぞ。

もう私は反論いたしません。

冷静に考えれば我々が語っているのは所詮夢物語。

実現したければ総理大臣になれよ。

私はそう結論付けた。

所詮夢物語………

中国孤立

議長であるアメリカの国連事務総長の宣言で安全保障理事会が始まった。

事務総長

「今回の緊急安全保障理事会は中国大使の希望で開かれました。」

事務総長は各国大使の顔を見回しながら言った。

事務総長

「しかしながら、現在我々は第三次世界大戦の最中です。いわば中国は敵国、中国大使は敵国民です。そんな時に緊急の安全保障理事会とは………召集理由を尋ねます。」

事務総長は自分の疑問をストレートにぶつけた。

中国大使

「国連事務総長の疑問にお答えします。今回の緊急安全保障理事会召集理由は日本軍の核攻撃に対する議長声明を出していただくために召集させてもらいました。このたびの核攻撃で我が中国の同胞が億の単位で殺されました。この人道上許されない行為に対して世界各国は日本に対して非難するべきです。我々は核攻撃を受けた国家として日本に報復も辞さない構えを表明します。」

中国大使の堂々とした返答に各国大使は呆れ返った。

松島大使

「中国大使にお聞きします。我が国がなぜ核攻撃を行ったか分かりますか？」

中国大使

「ただの自慢でしょう。」

中国大使がめんどくさそうに答えた。

「ハハハ、中国はいささか鎖国体制が長すぎましたね。」

松島大使が笑いながら言った。

中国大使

「何を言ってるんですか？」

松島大使

「我が国が核攻撃を行ったのは貴国が我が国に核攻撃を行ったからだ。」

松島大使のはっきりとした言い分に中国大使は啞然とした。

中国大使

「我が国が何時日本に対して核攻撃を行いましたか？我が国はブラジルしか核攻撃を行っていません。ふざけた事を言わないでいただ

きたい。」

松島大使

「これは面白い事を言われる。貴国は何もわかっていないようだ。事務総長、説明してあげて下さい。」

松島大使が国連事務総長に言った。

「それでは、南米各国は2008年の第二次世界恐慌の時に不況を抜け出せませんでした。そこで南米各国は国土を日本に売却しました。と言う事は南米大陸は日本領となります。その時中国は共産政権下になったばかりですので資本主義国の情報に耳を傾けませんでした。ようは自業自得です。」

事務総長の発言に中国大使の顔に焦りが見え始める。

松島大使

「おや、さっきまでの元気は何処へ？」

中国大使

「……………騙したな。」

松島大使

「我々は世界中に宣言しましたよ。何せ国家が国家を買い取るんですから。にもかかわらず貴国はそれに耳を傾けなかった。馬鹿だね。」

中国大使

「つ……………!!」

中国大使は唇を噛み締める。

アメリカ大使

「さて、そろそろ良いのでは？」

イギリス大使

「そうですね。松島大使。」

松島大使

「分かりました。」

松島大使はわざわざ中国大使の前に向かった。

中国大使

「なんだ？」

松島大使

「安保理決議第3580号『中華人民共和国及び中東各国を国際連邦から除名する。』以上です。」

中国大使

「なっ!？」

中国大使は驚愕の声を上げた。

イスラエル大使

「と言う事だ、さっさと出ていけ。」

満州皇国大使

「そつだ。」

非常任理事国と日本連邦加盟国の大使が一同に中国大使を非難する。

松島大使

「中華人民共和国の代わりに常任理事国になるのはフランスです。」

松島大使はフランス大使に拍手を送った。

各国の大使もそれにならう。

中国大使

「なぜだ、なぜ日本の独裁が罷り通るのだ。」

松島大使

「独裁ではない。貴国を除いた、常任理事国の会議で全会一致で決められたのだ。勿論、国連は全会一致でなくても良いから貴国がいる時に投票しても良かったんだ。何処かの世界みたいに『拒否権』なんてものはなく、多数決で決めるからな。」

松島大使は勝ち誇ったように言い放った。

中国大使

「糞っ！！！！覚えてろ。」

松島大使

「さあ、皆さん。今日で永遠に孤立する事になる中国大使に盛大な拍手を。」

松島大使の音頭に各国大使が盛大な拍手を送る。

「糞っ！！！！！」

中国大使はそれだけ言うと、議場から出ていった。

緊急の安全保障理事会はこれをもって閉幕した。

日本首都東京某所

「フッフ、藤中総理。私を失脚させた事、後悔させてやる。あの世で泣き叫べ。フッフ」

元社民党の党首である福島女史は、不敵な笑みを浮かべていた。

中国孤立（後書き）

福島女史は一体何を考えているのか？

白昼の悲劇

2035年1月26日

藤中総理は渋谷で戦意高騰演説を行っていた。

「皆さん！！！！今こそ気を引き締める時です。敵中国は孤立しましたが、油断してはいけません。孤立した時こそ、中国は核兵器を使ってくるかもしれません。勿論、我々のテクノロジーは世界一です。迎撃態勢は完璧です。ハエの一匹でも撃ち落としてみせます。国民の皆様には分かっていると思われませんが、混乱せずに対応して下さい。一応ニュース速報等でお知らせしますが、何も心配しなくてもいいです。全弾大気圏再突入前に迎撃しますから。」

藤中総理は演説を聞きに集まった群衆に語り掛ける。

「開戦から早いもので25日経ちました。この間に我が国が受けた被害は皆無です。まあ、我が国の領土である南米大陸が核攻撃を受けましたが。しかし日本人の死者は出ていません。当然です。私達は、開戦前に数千人がイルカイダと密入国中国人に虐殺されました。」

藤中総理の言葉に群衆は沈痛な面持ちになる。

「やられたらやり返す。目には目を、歯には歯をです。核攻撃は少

し倍返し過ぎましたが。」

藤中総理の演説を後ろの椅子に座りながら聞いていた天野国防大臣は、ビルの屋上で何かが光を反射したのを見つけた。

「もしかして……」

天野国防大臣は考えるよりも早く、体が動いていた。

軍に居た時と同じく、瞬発力は衰えていなかった。

「早紀総理、危ない！！！！」

天野国防大臣が藤中総理を押し倒した、瞬間。

パン

ビルの屋上から銃弾が放たれた。

騒然とする演説会場。

藤中総理を天野国防大臣が押し倒した瞬間に、銃声があった。

「将希ちゃん？」

藤中総理は動かない天野国防大臣に声を掛ける。

「……………」

反応しない天野国防大臣。

藤中総理は天野国防大臣の横腹が赤くなっているのに気付いた。

それは明らかに血であった。

「ケチャップであって……………」

藤中総理はそう言うと、赤い物を舐めた。

それは確かに血であった。

「救急車よ！！！！救急車を呼んで！！！！」

藤中総理の言葉よりも先に救急車の音が近づいていた。

天野国防大臣は救急車で運ばれていった。

「総理！！！！」

辻大蔵大臣と中野総務大臣が声を掛ける。

藤中総理

「今すぐ、車を用意して。」

辻大蔵大臣

「もうすぐ着きます。」

藤中総理

「それなら良いわ。」

中野総務大臣

「将希ちゃんは大丈夫でしょうか？」

藤中総理

「大丈夫よ。私達と婚約したんだから。」

辻大蔵大臣

「そうですね。」

中野総務大臣

「信じましょう。」

3人はそう言うと、車に乗り込み病院へと向かった。

この状況で説明するのもあれだが、説明すると。

この小説の日本では、お互いの了承を得れば一夫多妻制（その反対の一妻多夫）も可能である。

渋谷国立総合病院

藤中総理一向を乗せた政府公用車は、国立総合病院に着いた。

天野国防大臣は到着と同時に、集中治療室に入っている。

3人は集中治療室にたどり着いた。

未だに『手術中』の赤いランプが着いている。

どれだけ待っただろうか？

かれこれ3時間になる。

そんな中で『手術中』のランプは赤々しく光り輝いていた。

辻大蔵大臣

「総理……………」

藤中総理

「今は誰もいないんだから、普通に呼んでよ。」

辻大蔵大臣

「ごめん、早紀ちゃん。」

藤中総理

「良いのよ。で、何？」

辻大蔵大臣

「将希ちゃんですよ。」

藤中総理

「そうね、長いわね。」

中野総務大臣

「大丈夫よね。」

辻大蔵大臣

「大丈夫よ。でも、もしもの事があれば。」

中野総務大臣

「もう、亜由美ちゃんも物騒な事言わないで。」

辻大蔵大臣

「ごめんごめん。」

藤中総理

「まあ、大丈夫よ。将希ちゃんはそんな男じゃないわ。」

藤中総理が言い終わると同時に、『手術中』のランプが消えた。

自動ドアが開き、医者が出てきた。

藤中総理

「先生、将希ちゃんはどうなんですか？」

医者

「……………」

辻大蔵大臣

「どうなんですか？」

中野総務大臣

「何とか言ってください。」

医者

「……………残念ながら。」

藤中総理

「本気なの？」

辻大蔵大臣

「嘘よね。」

中野総務大臣

「嘘と言ってください。」

医者

「本当です。国防大臣はもう手遅れです。」

医者
の言葉に啞然とする3人。

医者

「もう少し早く搬送してくれれば、良かったんですが。残念です。」

藤中総理

「嘘よ！……！」

藤中総理はそう言うと、集中治療室に入っていくた。

集中治療室には白い布を顔に被せられた天野国防大臣の姿が。

藤中総理

「……………将希ちゃん」

辻大蔵大臣

「そんな。」

中野総務大臣

「嘘よ。」

藤中総理

「将希ちゃん!!!!!!」

藤中総理は天野国防大臣の傍らに駆け寄る。

藤中総理

「目を開けなさい!!!!!!」

天野国防大臣に叫ぶ。

しかし天野国防大臣は目を開けない。

辻大蔵大臣

「そんな、そんな事。」

中野総務大臣

「嘘よ！！！！」

3人の願い虚しく、天野国防大臣は集中治療室から運ばれていった。

「許さない。」

藤中総理は拳を強く握り締めた。

藤中総理

「犯人は必ず見つける。そして死刑にしてやる。」

辻大蔵大臣

「私達を怒らせたらどうなるか、思い知らせてやる。」

中野総務大臣

「ぶっ殺してやる!!!」

3人はもはや、修羅と化した。

復讐が始まる（前書き）

今更ですが、この小説に登場する人物は架空のものです。

名前が同じな人がいても何
役職同士の関
も言わないで下さい。

係は最初から決まっていたので、今後それについての意見は言わな
いで下さい。

復讐が始まる

2035年1月27日

天野国防大臣暗殺事件から一夜明けた。

一部始終は、藤中総理の演説をテレビ放送されていたため、国民の知る事となった。

藤中内閣の人気閣僚の1人であったため、ショックは大きい。

朝から天野国防大臣暗殺事件の報道がどのチャンネルでも行われていた。

『昨日の悲劇は今見ても悔やまれます。』

『そうですね、天野国防大臣は藤中内閣の人気閣僚でしたからね。』

『しかし、この事件は本当は藤中総理を狙ったものではないのでしょうか？』

『そうですね。この映像を良く見ると、天野国防大臣は藤中総理を押し倒しています。と言う事は、天野国防大臣は藤中総理が狙われていると見抜き、自分の命を捨てても藤中総理を守った事になります。』

『天野国防大臣は、海軍時代も優秀な軍人でしたからね。』

『はい。天野国防大臣は将来の連合艦隊司令長官と言われていたからね。艦隊戦から、陸戦隊の地上戦まで何でも来いでしたからね。』

『藤中総理は今後、どうするのでしょうか？』

『多分、いや確実に犯人を見付けだすでしょう。』

『そうですか。』

『确实でしょう。藤中総理も自分が狙われたと分かり、しかも婚約者である天野国防大臣を殺されたんですから復讐に燃えているでしょう。4軍も天野国防大臣の指導力が強烈に行き届いていましたし、CIAも天野国防大臣の元に活躍していましたから犯人は日本を敵に回したと言っていていいですね。』

「そうよ、犯人は国家を敵に回したわ。」

藤中総理はそう言うと、テレビの電源を切った。

首相官邸の総理執務室には藤中総理以外に、辻大蔵大臣・中野総務大臣・上戸鈴木商店最高経営責任者がいた。

藤中総理

「美好ちゃん、情報は手に入ったの？」

上戸CEO

「手に入ったけど、伯母様。色々、大変な事になったわよ。」

上戸鈴木商店最高経営責任者は普通の時は話し方は普通であるが、知り合いだけになると話し方が崩れる。

まあ、女4人仲が良いから別に良いだろう。

藤中総理

「何なの？」

上戸CEO

「まず、犯人は元社民党党首福島ね。」

辻大蔵大臣

「福島!？」

上戸CEO

「はい、そいつが犯人です。」

中野総務大臣

「そいつが犯人なのね。」

上戸CEO

「我が社の諜報機関が掴んだ確実な情報よ。」

藤中総理

「その馬鹿が、私を殺そうとしたのね。」

上戸CEO

「そう言う事。」

中野総務大臣

「居場所は判ったの？」

上戸CEO

「ええ、渋谷の高層マンションに居たわ。」

藤中総理

「もしかして、狙撃ポイントは……」

上戸CEO

「伯母様当たり。狙撃ポイントはその福島が居る階よ。」

中野総務大臣

「なら早く、逮捕しましょう。」

辻大蔵大臣

「そうです。将希ちゃんを殺した奴にこれ以上生かす理由はないです。」

上戸CEO

「伯母様、皆さんの言う通りです。」

藤中総理

「分かってるわ、だけど普通に捕まえるのも面白くないわね。皆、『特攻野郎Aチーム』知ってる。」

辻大蔵大臣

「パナマ運河侵攻で、濡れ衣をきせられた軍人がMPから逃亡するやつですね。」

藤中総理

「そう、私はそのDVDシリーズを持つてるんだけど、その中でハニバル大佐が敵にわざと殺されたフリをして、敵を葬式に誘い出して捕まえるって話があったわ。」

上戸CEO

「伯母様、それがどう関係してるの?」

藤中総理

「それをやるのよ。」

辻大蔵大臣

「つまり、天野国防大臣の葬式をやって福島を誘い出すと。」

藤中総理

「そう。けど、将希ちゃんは本当に死んじゃったけどね。」

上戸CEO

「伯母様の考えは凄い。」

藤中総理

「まあ、福島を捕まえて死刑にする事が将希ちゃんの供養になるわね。」

上戸CEO

「伯母様……………」

4人は暫し、天野国防大臣に対して黙祷を捧げた。

藤中総理

「と言う事で、将希ちゃんの葬式をやって、福島を誘い出して捕まえる。これが今後の計画ね。」

上戸CEO

「分かったわ、伯母様。」

辻大蔵大臣

「フッフ、葬式の時が福島の最後ね。」

中野総務大臣

「今度はどんな方法で死刑にするかな。」

藤中総理

「まあ、その時がくれば……………」

「失礼します。」

藤中総理が話した時、女性が1人執務室に入ってきた。

藤中総理

「何？」

秘書官

「天野国防大臣の処置に当たった医師が是非とも、お話したい事があると。」

藤中総理

「ふ〜ん、まあ良いわ。来てもらって。」

秘書官

「分かりました。」

秘書官はそう言うと、医師を呼びに言った。

中野総務大臣

「今更何でしょう。」

辻大蔵大臣

「まあ、何かあるのでしょうか。」

上戸CEO

「良い話だと良いけど。」

藤中総理

「まあ、聞いてからのお楽しみよ。」

この後の話が、驚くべき内容だったなど4人は思ってもいなかった。

復讐が始まる（後書き）

さて、気になる展開になってきました。

次回をお楽しみに。

驚くべき事実

2035年1月28日

首都東京の中央区にある、大和会館にて天野国防大臣の葬式が行われていた。

ここの大和会館は日本最大の葬式場である。

ここでは、あの宗教団体のS学会の名誉会長の葬式も行われた。

まあ、別段S学会がどうかは別だが、作者も入ってるとういうわけだ。

……話がそれた。

天野国防大臣の葬式には、政府関係者はい、軍関係者・鈴木商店関係者が出席した。

NHKや各民放局も生中継で放送している。

今は出席者が行列を成して会場入りしている。

「さてと、計画始動よ。」

藤中総理が3人に言った。

辻大蔵大臣

「もちろんです。」

中野総務大臣

「天野国防大臣の仇を取りましょう。」

上戸CEO

「早紀総理、そろそろ席に着かないと。」

上戸CEOは他に人がいるため、話し方が戻っている。

藤中総理

「そうですね。行きましょう。」

4人は席に着いた。

受付

係員

「福島さんですね。」

福島

「はい、そうです。」

係員

「ではどうぞ。」

福島

「ありがとうございます。」

元社民党党首福島女史が、会場入りした。

天野国防大臣の葬式が始まった。

葬儀委員長は例によって、藤中総理だ。

藤中総理

「皆さん、本日は天野国防大臣の葬儀にご出席いただきまして、ありがとうございます。」

藤中総理は一言、礼を述べた。

藤中総理

「天野国防大臣は、命を捨てて私を助けてくれました。私はそんな天野国防大臣の行動に感謝します。しかし彼は死んでしまいました。」

「
藤中総理はハンカチを取り出すと、目に当てて涙を拭くフリをする。

藤中総理

「彼は、偉大です。」

藤中総理の言葉に辻大蔵大臣・中野総務大臣・上戸CEO以外の出席者は涙を流す。

藤中総理

「皆さん、この事件の犯人を私は知っています。」

藤中総理の言葉に動揺する出席者。

藤中総理

「それは、元社民党党首福島です。」

藤中総理の言葉に出席者全員が福島女史に視線を向ける。

福島

「な、何よ。私が？」

藤中総理

「そつよ、美好ちゃん。」

上戸CEO

「はい。」

藤中総理

「説明してあげて。」

上戸CEO

「元社民党党首福島は早紀総理に戦時内閣強硬法で失職させられました。これに福島は激怒。早紀総理暗殺計画を企てた。計画は万全だった、戦意高騰演説で渋谷行われると知っていたから、自宅のマンションから早紀総理狙撃を行った。しかし、天野国防大臣が早紀総理を押し倒したため、失敗した。そのため、知らぬフリをしてこの葬式に出席したと。」

上戸CEOに本当の事を次々と言われる、福島女史。

しかし、福島女史は想定内と言わんばかりの顔をしている。

福島

「流石は、鈴木商店の最高経営責任者だわ。良く調べたわ。誉めてあげる。」

福島は反省する素振りを見せずに答える。

福島

「まさか、天野なんかに邪魔されるとは思っていなかったわ。けど、天野も私は嫌いだったから死んでくれて良かったわ。」

これを聞いて、近くに座っていた海軍の下士官が福島に飛び掛かる。しかし、その下士官は頸動脈を福島女史に噛みちぎられて、息絶えた。

「な、何なの？」

藤中総理が啞然とする。

福島

「フフフ、驚いたみたいね。私の歯は特殊なものよ。」

福島女史はそう言うと、歯を見せた。

確かにその歯は、人間離れしたものであった。

会場は更に騒然とする。

福島

「フフフ、今ここであんたを殺してやる。」

福島女史はそう言うと、藤中総理に飛び掛かった。

藤中総理は目を閉じたが、そこで。

パーン

銃声がした。

福島女史は肩を押さえて、倒れこんだ。

全員が銃声のした方を見る。

そこは、棺桶の置かれた祭壇であった。

棺桶の蓋が横にズレ、男が棺桶から出て来た。

「早紀総理を死なす訳にはいかない。」

藤中総理

「将希ちゃん！！！！」

そうである。

我らが天野国防大臣は生きていたのだ。

天野国防大臣の右手には零式拳銃があった。

会場は歓声に包まれた。

福島

「なんで、なんで生きてるのよ。」

天野国防大臣

「私は運が良いみたいです。貴女が撃った銃弾は確かに命中しまし

だが、弾は貫通。急所を外れていました。」

藤中総理

「まあ、私達も昨日知っただけだね。」

辻大蔵大臣

「生きてて良かったです。」

中野総務大臣

「良かったです。」

上戸CEO

「けど、わざわざ自分で2日間眠らせてくれなんて。」

天野国防大臣

「ハハハ、早紀総理達なら私の葬式で、犯人を捕まえてくれると思っただですよ。」

藤中総理

「なら、そのまま火葬してあげれば良かった。」

辻大蔵大臣

「私達を心配させて。」

中野総務大臣

「当分、あれですよ。」

天野国防大臣

「うう、もう少しあの先生に頼んで眠らせてもらおうかな。」

天野国防大臣は怯えていた。

さて、天野国防大臣生還の真相を語らせてもらおう。

確かに、天野国防大臣は凶弾に倒れて、病院に運ばれた。

しかし、先程天野国防大臣が言った通り、弾は貫通しており、急所を外れていた。

医者処置により、気を取り直した天野国防大臣は医者に睡眠薬の投与をお願いした。

医者も困惑したが、天野国防大臣の望みを受け入れ、睡眠薬を投与したのだ。

医者は頃合いを見て、藤中総理達の元へ行き、手遅れだと伝えた。

そして、天野国防大臣の考え通りに、藤中総理達は復讐を計画。

今日にいたる。

そして葬式。

棺桶に零式拳銃を片手に入り。

再び、藤中総理の命を救ったのだ。

「このクズ女を逮捕しろ。」

藤中総理の命令で、ブラックベレーが会場に突入。

福島女史を逮捕した。

首相官邸総理執務室

「将希ちゃん。」

天野国防大臣が総理執務室に入るなり、藤中総理・辻大蔵大臣・中野総務大臣の3人が抱きついてきた。

天野国防大臣

「どうしたんですか？」

藤中総理

「どうしたんですかじゃ、ないわよ。」

辻大蔵大臣

「私達を心配させて。」

中野総務大臣

「本当に死んだと思ったんですから。」

3人は思いを天野国防大臣に言った。

「すみませんでした。ご心配をおかけしました。」

天野国防大臣は3人を強く抱き締める。

「お3人さん。」

天野国防大臣は優しく囁いた。

3人の美女は、顔を上げた。

「天国がどんな所か、知りたくないですか？」

4人の夜は長くなりそうだ。

驚くべき事実（後書き）

さて、次回は欧州で大変な事がおきます。

出来れば、道州制導入の詳しい描写を書きたいです。

欧州連合分裂

2035年1月29日

天野国防大臣は朝の5時に起きた。

彼はベッドの上に目をやった。

そこには生まれたままの姿の美女3人が、気持ちよさそうな眠りに
ついていた。

「可愛いですね。」

天野国防大臣は一声、そう言った。

あきらかに鼻の下が伸びている。

この光景は非常に面白い。

ベッドの上に生まれたままの姿で眠りについている美女3人である
が。

1人は世界一の大国の指導者で、もう1人はその大国の財政を操作
し、最後の1人も、その大国の行政管理を行う。

そして、鼻の下が伸びている男は世界最強の軍隊を操る立場にある。

「まだ5時ですからね。まかり間違えて起こしてしまえば、後が怖いですからね。」

天野国防大臣は、そう言うと静かに寝室を出た。

天野国防大臣は寝室の隣にある、応接間で着替えをすませた。

彼の服装は、年がら年中黒一色である。

古畑任三郎と同じ服装であると言えば、分かりやすいだろう。

天野国防大臣は、コーヒーを飲みながら新聞を読み始めた。

「2日飲んでなかったから、うまいな。」

2日ぶりのコーヒーを楽しんでいる。

「さて、2日の間に世間では何か変わったのかな？」

鈴木新聞に目を通す。

『天野国防大臣生還』

一面はこの記事だった。

「いやはや、私の事を心配してくれているんですね。」

天野国防大臣は嬉しそうだ。

気分よく、一面を捲り二面を見た瞬間。

天野国防大臣に衝撃が走った。

「なっ!?!」

『フランス陸海空軍によるクーデターから一夜あけた。フランスでは共産党政権が樹立され、連合国側へ宣戦布告した。同時にドイツも連合国側へ宣戦布告を行った。』

新聞にはこう書いてあった。

「何てこった。」

天野国防大臣は一声そう言った。

午前10時

天野国防大臣は起きてきた、藤中総理・辻大蔵大臣・中野総務大臣とコーヒーを飲んでいた。

話は自然と、フランスとドイツの話になった。

天野国防大臣

「早紀総理、フランスとドイツが大変な事になってしまいましたね。」

藤中総理

「そうね将希ちゃん。ヨーロッパは絶対に戦争に巻き込まれるのね。」

辻大蔵大臣

「けど、早紀ちゃん。なぜ今さらクーデターを起こして、連合国側に宣戦布告したのかな？」

藤中総理

「確かに、自殺行為ね。」

中野総務大臣

「理由が見付かりませんね。中東方面側が勝つと思っただのかな？」

天野国防大臣

「まあ、理由はなんであれ。敵は叩き潰すだけです。」

藤中総理

「あら、やけに強気ね。昨日はあんなに泣き叫んでたのに？」

天野国防大臣

「いや、その。」

辻大蔵大臣

「ムチで叩いただけであんなに泣き叫ぶなんて。」

中野総務大臣

「まあ、そこが可愛いんですけどね。」

天野国防大臣

「八八、八八八。」

天野国防大臣は苦笑いするしかなかった。

その時、ドアが開き秘書官が入ってきた。

秘書官

「緊急連絡です。」

藤中総理

「どうしたの？そんなに慌てて。」

秘書官

「イタリアが連合国側に付いて中東方面側、特にフランスとドイツに宣戦布告しました。」

天野国防大臣

「早紀総理。」

藤中総理

「これはややこしくなったわね。」

藤中総理以下、4人は深くため息を吐いた。

「ところで早紀総理。」

天野国防大臣が突拍子に、藤中総理に尋ねた。

藤中総理

「なに？」

天野国防大臣

「道州制はどうなったんですか？」

藤中総理

「ああ、それね。あれはまたしても戦時内閣強硬法を使って、2月1日をもって発動されるようになったわ。」

天野国防大臣

「そうなんですか。」

藤中総理

「そうよ。」

天野国防大臣

「細かい所は決まったんですか？」

藤中総理

「もちろん。でも今は言わないわ。」

天野国防大臣

「わかりました。」

さてさて、この世界ではまたしてもヨーロッパにおいて大戦の火が飛び火した。

これにより欧州連合は分裂。

これにより、世界三大経済圏の1つが崩壊するかもしれない。

世界は今、3ヶ所で戦いが行われている。

1つめは、日本と中国。

2つめは、中東各国とインド等周辺国。

3つめは、新しくフランス・ドイツとスイス・オランダ・スペイン・デンマーク・アイスランド。

これからの戦いに目が離せない。

連邦制導入

2035年2月1日午前6時

首相官邸応接間

午前9時から国会議事堂前にて藤中総理の演説がある。

演説内容は正午から始まる、道州制についての説明だ。

上海上陸作戦は1500時に開始である。

「将希ちゃん、眠い。」

藤中総理が目を擦りながら天野国防大臣の膝の上に乗った。

「私も。」

と、辻大蔵大臣。

「私もです。」

と、中野総務大臣。

膝の上に藤中総理、右肩に辻大蔵大臣、左肩に中野総務大臣。

朝の6時から、刺激が強すぎる。

特に、藤中総理は天野国防大臣の膝の上に乗っているため、その巨乳に天野国防大臣の顔が埋もれている。

辻大蔵大臣と中野総務大臣の巨乳も、天野国防大臣の両腕に触れている。

これで興奮するな、と言うのは無理だろう。

天野国防大臣

「あの、お3人さん。」

藤中総理

「何かな？」

辻大蔵大臣

「何でしょうか？」

中野総務大臣

「何ですか？」

天野国防大臣

「はっきり言います、朝から刺激が強すぎます。」

藤中総理

「あら、興奮しちゃた？」

天野国防大臣

「いや、その。」

辻大蔵大臣

「隠さなくてもいいのよ。」

中野総務大臣

「可愛がってあげますよ。」

天野国防大臣

「いやいや、そう言う意味じゃなくて。」

藤中総理

「^どどう言う意味。」

天野国防大臣

「うん。」

中野総務大臣

「フッフ」

天野国防大臣

「いやいや。」

藤中総理

「何も逃げる事ないわよ。」

天野国防大臣

「あつ、仕事を思い出しました。」

天野国防大臣はソファから立ち上がって、ドアに向かおうとしたが。

天野国防大臣

「なっ!？」

天野国防大臣は首に何かが、着いているのに気付く。

天野国防大臣

「なっ、何で首輪が着いてるんですか。」

藤中総理

「あら、今更気付いたの。やっぱり特注品は高かったけどそれだけの価値はあるわね。」

辻大蔵大臣

「フッフ、これをつけている間は将希ちゃんも私達のペットよ。」

天野国防大臣

「そんな、バカな。」

中野総務大臣

「バカじゃないですよ。あなたは私達のペットです。」

天野国防大臣

「いやいや、そんな事言わないで下さい。」

藤中総理

「フッフ、まだ時間があるわね。」

天野国防大臣

「まさか、こんな時間からやるんですか？」

辻大蔵大臣

「そうよ。」

天野国防大臣

「何ですか。」

中野総務大臣

「こんな時間からやっち駄目だって言う決まりはないわ。」

天野国防大臣

「いやいや。」

藤中総理

「フッフ」

辻大蔵大臣

「覚悟」

中野総務大臣

「楽しみましょう。」

天野国防大臣

「やめてください。ギャ~~~~」

いやはや、天野国防大臣も大変ですね。

けど、巨乳の美女3人に囲まれている天野国防大臣は羨ましいですね。

午前8時50分

国会議事堂前にはたくさんの人が藤中総理の演説が始まるのを、今か今かと待っていた。

「めんどくさいわね。」

藤中総理がため息混じりに言った。

現在藤中総理達がいるのは国会議事堂の正面玄関内である。

あと10分で演説開始なので、ここで待機しているのだ。

天野国防大臣

「めんどくさい何て言わないでください。朝、あんなにストレス発散したじゃないですか。私で。」

藤中総理

「それとこれは、別なの。」

辻大蔵大臣

「そう。一緒にしないでください。」

中野総務大臣

「面白い事言っていると、やってまじわよ。」

天野国防大臣

「す、すいませんでした。」

天野国防大臣は慌てて土下座した。

世界最強の日本軍を操る立場にある男が、土下座している。

ハハハ、もう笑うしかない。

そうこうしている間に、演説開始時間となった。

天野国防大臣

「総理、時間です。」

藤中総理

「分かったわ。」

辻大蔵大臣

「頑張ってね。」

中野総務大臣

「頑張ってください。」

藤中総理

「それじゃ、行ってくるね。」

藤中総理は国会議事堂前の演説台に向かった。

「皆さん、本日もお集まりいただきありがとうございます。」

藤中総理は冒頭に、集まった観衆に礼を述べた。

観衆は100万人集まっている。

「本日は、皆さんに重要なお知らせがあります。」

あつと、今回の演説もテレビで生中継されている。

「本日正午から、道州制が導入されます。道州制と言っても正式名称は『連邦制』です。」

藤中総理は笑いながら言った。

「それでは最初に、各地方の州名を発表します。」

観衆の注目が集まる。

「まずは、樺太です。これは樺太全土が範囲で『樺太州』。次に北海道ですが野寒布岬から襟裳岬で分断し、北海道東部・国後島・択捉島・ウルップ島・ケイト島・ラシヨワ島・マツワ島・シャシコタン島・ハルムコタン島・オンネコタン島・マカルン島・パルムシル島・占守島で『道東州』。北海道西部で『道西州』。青森県・秋田

県・岩手県・山形県・宮城県・福島県で『羽山州』。栃木県・群馬県・埼玉県・茨城県・神奈川県・千葉県・東京都で『関東州』。新潟県・長野県・山梨県・静岡県で『富士州』。石川県・富山県・福井県・岐阜県・愛知県で『飛騨州』。兵庫県・京都府・大阪府・和歌山県・奈良県・滋賀県・三重県で『播磨州』。岡山県・鳥取県・広島県・島根県・山口県で『吉備州』。徳島県・香川県・愛媛県・高知県で『四国州』。大分県・福岡県・佐賀県・長崎県で『筑紫州』。宮崎県・熊本県・鹿児島県で『阿蘇州』。沖縄県・奄美島・喜界島・徳之島・与論島・沖永良部島で『琉球州』。台湾島・尖閣諸島・与那国島・西表島・石垣島・宮古島で『台湾州』朝鮮半島は38度線より北部の北朝鮮で『北朝鮮』。38度線より南部の南朝鮮で『南朝鮮』。以上のように決めました。」

この発表に観衆が拍手を送る。

「さて、次は何故今になって連邦制を導入するかを説明します。現在の日本は中央依存の体質が大いにあります。中央があればこれもやっているのが現状でした。約20数年前に大阪府知事だった橋上知事も地方分権を唱えていました。私も小さい頃でしたが、橋上知事の話覚えています。今、その構想が現実のものになります。」

藤中総理の話は続く。

「国家の成立初期の意義は夜警国家でした。国家は、外敵から国民の生命財産を守り、国内秩序を維持するために基本法の遵守に努めればよかったです。しかし貧富の差が拡大し、急激な都市化・工業化、経済恐慌や戦争、そうした変化が国民の予想を遙かに超えた規模と速度で襲ってくる。これが20世紀の特徴でした。ここから、国民国家の第2段階である福祉国家が生まれてくるわけです。国家は単に夜警国家であってはならず、国家福祉を担うことが求められ

てくるのです。国家は単に立法だけでは足りず、行政を充実させなければならなくなつたわけです。」

藤中総理の説明に観衆は、熱心に聞き入る。

なかにはメモを執っているものもいる。

「こうして、政府機構も最初は小さな政府から、大きな政府へ転換していったのです。巨大官僚機構の登場です。しかし、官僚機構の肥大化は、国家を管理社会化します。国民の自主的意欲を阻害し、経済的な破綻を来す恐れもあります。そこで、連邦制なのです。これはつまり、夜警国家と福祉国家の良いところ取りです。国民への生活サービスは州政府に任せる。つまり州は、福祉国家となります。」

一方、中央政府は夜警国家となつて、軍事・外交・基本的立法のみを負担する。これが連邦制の構想だったので。アメリカ合衆国の制度もそうです。しかし、我が国と違う所は州兵が無いところですね。徴税権・州債発行権・立法権等々多くの権限を州に委譲します。私達、政府関係者は各州を見守り、育成していきたいと思えます。まあ、こうなると税金が安くて、よいサービスを受けられる州に人氣が集まりますね。こうなると、州同士が競争します。住民は、他州と比較して自分の州の尻を叩く事になります。必然的に、州・地方官僚は、身近に住む住民たちの直接の批判にさらされる事になり、うかつか過ごせなくなるでしょう。地方は住民と密着した政治を行うでしょう。」

「次に連邦制導入の利点を説明します。第1は、議員・各省官僚を地方に帰させたためにゆとりが出来て、中央政界・官庁の負担が軽減されます。これが連邦地方分権制の最大の利点ですね。第2の利点は、内政問題の大半を地方に任せて、国は本来の仕事に専念できるようになつたのです。国の本来の仕事とは、軍事・外交・海外協

力事業ですね。大国に従う追従外交なら話は別ですが、我が国は世界最強の大国です。国際社会の中で、大きな役割を果たす義務と責任があります。そして、第3の利点は首都圏人口の抑制効果です。土地の値段も連邦制導入を宣言してから、下落してきました。逆に地方の拠点都市の地価は少しずつ、上昇してきました。連邦制導入になれば、首都は政治都市となり、神戸・大阪・仙台・札幌・福岡等は大規模経済都市となりつつあります。」

「さて、これが最後です。我が国は連邦制を導入すると同時に、国名を『日本連邦』に改名します。これにより、満州皇国等の加盟国を入れた名称は『大日本帝國連邦』に改名されます。」

藤中総理の発言に衝撃が走った。

このご時世に、帝國と付いたのだ。

「皆さんの驚きは、わかります。いまさら帝國ですからね。ですが今回の『大日本帝國連邦』は帝國主義の帝國ではありません。何も心配しないでください。むしろ、大日本帝國が付いたので皆さんは誇りをもつべきです。かつての大国、アメリカ合衆国を叩き潰したんですから。ですので新しい国名『日本連邦』と新名称『大日本帝國連邦』を皆さんには、ご理解いただきたいと思えます。よろしくお願いします。」

藤中総理の演説は終わった。

天野国防大臣

「早紀総理、良い演説でしたよ。」

藤中総理

「ありがとうございます。」

辻大蔵大臣

「良かったよ。」

中野総務大臣

「これで、仕事が1つ終わりましたね。」

藤中総理

「そうね。1500時の上海上陸作戦まで時間があるから、朝の続きをしましょうか。」

天野国防大臣

「えっ!?!」

辻大蔵大臣

「フフフ。」

中野総務大臣

「今度は何で、いたぶってやろうかしら。」

藤中総理

「可愛がってあげる。」

天野国防大臣

「お助けを〜」

天野国防大臣は政府専用車に引きずり込まれた。

3人の性欲は納まっていなかった。

2035年2月1日正午

連邦制導入。

日本は国名を『日本連邦』に改名。

加盟国の総称は『大日本帝國連邦』に改名された。

連邦制導入（後書き）

今回は、紺碧の艦隊を参考にしました。

大集結

2035年2月1日

現在時刻は14時30分。

上海上陸作戦発動まで、30分である。

日本連邦首都東京霞ヶ関首相官邸地下5階オペレーションルーム

藤中総理・天野国防大臣・辻大蔵大臣・中野総務大臣は大型液晶モニターを見ながらコーヒーを飲んでいた。

576

天野国防大臣

「しかし、おぞましい数ですね。」

藤中総理

「そうね、これは。」

辻大蔵大臣

「凄すぎ。」

中野総務大臣

「こりゃ凄い。」

4人とも、大型液晶モニターを見ながら驚いている。

大型液晶モニターには上海周辺の地図が映し出されていた。

そして、上海沖80キロに日本連邦海軍の艦船を示す黒色のマークと同盟軍を示す青色のマークが大量に映し出されていた。

何せ、今回の上海上陸作戦は日本連邦軍と同盟軍の全ての戦力を投入する。

しかも、鈴木商店の自衛隊も参加している。

勿論、その自衛隊の主力は海上自衛隊の連邦商路護衛艦隊である。

藤中総理

「さてさて、この上海上陸作戦が成功するか否か。」

天野国防大臣

「大丈夫でしょう。日本連邦軍を全て投入し、同盟軍も参加。鈴木商店の自衛隊も参加するんですから。それにインドとタイの陸軍も同時侵攻します。これだけの兵力を投入すれば失敗するわけありません。」

辻大蔵大臣

「そうね。」

中野総務大臣

「まあ、後はプロに任せればいいでしょう。私達はこの大型液晶モニターを見てればいいのですから。」

藤中総理

「なら良いわ。上海上陸作戦は成功したも同然。」

天野国防大臣

「見守りましょう。」

確かに首相官邸地下5階オペレーションルームにいる藤中総理達に出来る事はない。

唯一出来るのは、1500時に作戦開始を宣言するだけだ。

それでは、上海沖80キロに目を向けてみよう。

日本連邦海軍連合艦隊旗艦イージス原子力機攻戦艦長門CIC

連合艦隊司令長官の星野曜子大將はコーヒーを飲みながら、報告書を読んでいた。

「これから忙しくなるわよ。」

報告書を机の上に投げつけ、星野司令長官は参謀長の大田登中將に言った。

大田参謀長

「そうですね長官。この上海上陸作戦は歴史上最大規模となる上陸作戦ですからね。」

星野司令長官

「アメリカ本土ロサンゼルス上陸作戦・イギリス本土ペンザンサス上陸作戦・ノルマンディー上陸作戦を遥かに凌ぐ規模の上陸作戦ね。」

大田参謀長

「歴史上類を見ないものとなりますな。」

星野司令長官

「その通り。この上海上陸作戦は後世に語り継がれるわね。」

大田参謀長

「そろそろ、作戦開始時刻です。」

星野司令長官

「わかったわ。全員気を引き締めて今回の作戦にあたるように。」

一同

「了解!!!!!!」

第七独立機動艦隊旗艦イージス原子力機攻戦艦大和CIC

「フッフ、水香ちゃん。負けを認めなさい。」

「うっ、負けました。」

さて、状況を説明すれば大和の艦魂の早紀様と第七独立機動艦隊司令長官の菅原大將が将棋をしているのだ。

早紀

「私に将棋で勝とうなんて、甘い!!!!!!」

菅原司令長官

「流石は90余年生きていただけあるわ。」

早紀

「フッフ、だてに歳はとってないわ。」

菅原司令長官

「すみませんでした。」

吉田参謀長

「長官、早紀様。そろそろ気を引き締めてください。作戦開始まであと少しですよ。」

菅原司令長官

「はいはい、わかりました。」

早紀

「わかったわよ。」

「しかし、余裕ですね。」

菅原司令長官

「そうよ、成華ちゃん。我が第七独立機動艦隊のモットーは余裕をもって戦う。だから。」

「そうですね。」

さて、この女性を説明すると。

彼女は新しくイージス原子力機攻戦艦大和の艦長となった岸成華少

将だ。

少将が艦長であるが、まあそれだけ組織が柔軟と言う事だ。

菅原司令長官

「けど、成華ちゃんも大変ね。艦長として初めての戦いが上海上陸作戦という史上最大の作戦とはね。」

岸艦長

「いえ、初任務が史上最大の作戦と言う事で、誇りに思います。」

早紀

「あなたは、東郷なんかより頼りになりそうね。」

岸艦長

「ありがとうございます。頑張ります。」

菅原司令長官

「フッフ、第七独立機動艦隊最大の作戦ね。」

吉田参謀長

「いえ、日本連邦軍史上最大です。」

菅原司令長官

「まあ良いわ。どちみち史上最大の作戦なんだから。」

吉田参謀長

「了解、では長官。命令を。」

菅原司令長官

「分かったわ。第七独立機動艦隊全艦は全兵装発射用意。連合国軍最高司令長官の命令をもって、攻撃を開始します。全員気を引き締めてかかるように。」

一同

「了解。」

第八特務機動艦隊旗艦イージス原子力特装潜水戦艦高天原CIC

徳田参謀長

「長官、現在我が艦隊は深度1000メートルの地点ですが如何しますか？」

七海司令長官

「……………浮上してください。上陸作戦なんですから、潜航していたら意味がないです。」

徳田参謀長

「了解いたしました。バラストタンクブロー、毎秒50メートルで浮上しろ。」

航海長

「了解、毎秒50メートルで浮上。」

七海司令長官

「うう……………はやく浮上しないと、水香ちゃんに苛められる。」

徳田参謀長

「はあ……………」

鈴木商店日本航路保証会社海上自衛隊連邦商路護衛艦隊旗艦イージ
ス原子力空母邪龍CIC

藤原司令長官

「本社の上戸美好CEOから連絡があったわ。連合国軍最高司令長官星野曜子大将の命令で攻撃開始となるよう、準備しとおくようにとのことよ。それに破壊した数に応じて報酬が出るみたい。評価報告は確実にお願いね。」

五十嵐参謀長

「みんな、頑張ろうではないか。」

一同

「了解！……！」

1500時

日本連邦海軍連合艦隊旗艦イージス原子力機攻戦艦長門CIC

星野司令長官

「日本連邦軍全軍及び同盟軍艦隊、鈴木商店日本航路保証会社海上自衛隊連邦商路護衛艦隊に命令です。1500時、上海上陸作戦開始です。攻撃開始！！！！」

上海上陸作戦が始まった。

大集結（後書き）

次回、史上最大の作戦です。

上海上陸作戦（前書き）

駅に着いたら、新型インフルエンザのために臨時休校にする。

との連絡。

それが0630時。

その後家に帰り、0730時に24日までの臨時休校
となったとの連絡。
tenを見て

たら姫路市でも1人新型インフルエンザの感染者が……

皆様、お気を付け下さい。

上海上陸作戦

1500時上海上陸作戦が始まった。

日本連邦海軍連合艦隊旗艦イージス原子力機攻戦艦長門CIC

「全艦、鳳火巡航ミサイル発射！！！！」

星野曜子連合艦隊司令長官兼連合国軍最高司令長官の命令で、連合艦隊・同盟国艦隊・第七独立機動艦隊・第八特務機動艦隊・連邦商路護衛艦隊が対地攻撃を始めた。

数百、いや数千発の巡航ミサイルが上海に雨あられと降り注ぐ。

ビルは倒壊し、道路は寸断され、軍の基地も壊滅した。

「リニアガン砲撃開始。」

リニアガンも次々と火を吹く。

星野司令長官

「凄いわね。」

大田参謀長

「上海が瓦礫の山になっています。」

星野司令長官

「これは凄いわ。」

大田参謀長

「上陸部隊は楽でしょう。」

星野司令長官

「そうね。由佳もそう思うでしょ。」

由佳（長門の艦魂）

「そうですね。もしかしたら人1人いないかもしれせん。」

星野司令長官

「多分、そうなるわね。これほどの艦隊に攻撃を受ける都市は上海が始めてでしょうね。」

由佳

「良い記念です。」

星野司令長官

「確かに。歴史に名前が残るわ、『圧倒的な艦隊の攻撃を受け、消滅した都市上海』ってね。」

由佳

「フッフ、面白いですね。」

星野司令長官

「フッフ、その栄光を世界で始めて手にするんだから嬉しいはずよ。」

「

由佳

「そうですね。」

大田参謀長

「長官、航空隊の出撃命令を。」

星野司令長官

「分かったわ。それじゃ航空隊出撃。上海を壊滅せよ。」

空母部隊に出撃命令が下った。

第七独立機動艦隊旗艦イージス原子力機攻戦艦大和CIC

「リニアガン及びリニアカノン砲撃開始！！！！」

岸成華艦長の凜とした声が響く。

菅原司令長官

「上海が壊滅する。」

吉田参謀長

「そうですね。」

菅原司令長官

「崩壊するビル、逃げ惑う中国人、死ぬ。中国人は全員死ぬ。」

吉田参謀長

「あゝ」

岸艦長

「リニアガン及びリニアカノンを撃ち続けなさい。HELL砲発射用意。」

砲術長

「発射用意完了。」

岸艦長

「HELL砲発射!!!!!!」

第七独立機動艦隊の戦艦群・巡洋艦、駆逐艦群の砲撃は凄まじかった。

リニアガン・リニアカノンはもとい鳳火巡航ミサイルや烈火対艦ミサイルそして、HELL砲の攻撃だ。

上海の海岸線一帯は消滅し、全体は瓦礫の山だ。

早紀

「中国人なんて死ねば良いの。」

菅原司令長官

「その通り。」

岸艦長

「対地攻撃は着実に効果を上げつつあります。」

菅原司令長官

「分かったわ。」

早紀

「良い気味だ。」

菅原司令長官

「岸艦長、攻撃を続行。空母群にも継続的な攻撃を行うよう命令して。」

岸艦長

「了解。」

第八特務機動艦隊旗艦イージス原子力特装潜水戦艦高天原CIC

七海司令長官

「あうう……………攻撃開始です。」

徳田参謀長

「了解、攻撃開始！！！！」

七海司令長官

「……………ちゃんと、攻撃して下さいね。」

徳田参謀長

「分かっています。菅原司令長官に犯されるんですよ。」

七海司令長官

「あうう、だけど気持ち良いの。テクニックは凄いの。」

徳田参謀長

「……………」

七海司令長官

「……………早く作戦が終わってほしいの。」

徳田参謀長

「（少しで良いから作戦に集中してほしいです。何て言えないからな。）」

上海への攻撃は1600時に佳境を向かえた。

圧倒的な艦隊の攻撃で、上海は壊滅した。

上海防衛を担当する、陸軍・空軍は壊滅し上海を防衛する中国軍はなくなった。

圧倒的な艦隊・空母艦載機・日本連邦本土の空軍機の支援を受けて、1630時遂に上陸作戦が始まった。

原子力強襲揚陸艦はLCACで装甲車輛のピストン輸送を開始し、揚陸軍は水陸両用強襲車で上陸を開始した。

原子力強襲揚陸艦95隻及び海上機動要塞白鷺搭載の揚陸軍師団合計105個師団が上陸を始めた。

とてつもない数だ。

105個師団の上陸で、一気に北京を占領しようという考えだ。

1800時

インド・タイ陸軍が中国に侵攻を開始した。

中国軍は混乱に陥った。

上海には105個師団が上陸し、インド・タイ陸軍が侵攻してきたのだ。

中国軍も油断していた。

ヒマラヤ山脈があるから、それほど警戒していなかった。

インド・タイ陸軍の機甲師団がヒマラヤ山脈を越える事が出来たのも、中国軍が油断していたからだ。

中国はここに、上海からヒマラヤ山脈からの侵攻を受ける事になった。

中国政府は、香港停泊の天安機動艦隊にインド・タイ陸軍攻撃の命令を下した。

当初、天安機動艦隊は上海沖にいる日本海軍撃破の命令を出したが、彼我の戦力差は歴然としている。

このため、陸軍攻撃の命令を下したのだ。

危うし、インド・タイ陸軍。

中国艦隊絶滅作戦

中国艦隊の出撃は日本連邦の偵察衛星『天界』が、早速捉えた。

その情報は連合艦隊旗艦長門へと伝えられた。

日本連邦海軍連合艦隊旗艦イージス原子力機攻戦艦長門CIC

星野司令長官

「藤中総理から直接の命令よ。『誰でも良いから、あの艦隊を、絶滅』させて来て。』だって。」

大田参謀長

「それなら、第八特務機動艦隊が良いのではないのでしょうか。第八特務機動艦隊は神出鬼没の攻撃が得意ですから。」

由佳

「真桜さん（第八特務機動艦隊旗艦イージス原子力特装潜水戦艦高天原の艦魂）にですか。」

星野司令長官

「そうね。第八特務機動艦隊なら、丁度良いわ。七海さんに連絡して。」

大田参謀長

「了解いたしました。」

由佳

「真桜さん、頑張ってください。」

第八特務機動艦隊旗艦イージス原子力特装潜水戦艦高天原CIC

南艦長

「七海大将、星野連合艦隊司令長官から連絡です。『中国艦隊を絶滅させて下さいませ。』だそうです。」

七海司令長官

「あう……………今までは放置プレイだったのに次は言葉責め。」

南艦長

「どうしますか。」

七海司令長官

「……………出撃します。中国艦隊を絶滅させます。」

南艦長

「了解いたしました。」

七海司令長官

「中国艦隊を絶滅させれば、水香ちゃんにご褒美が貰えるかも。」

真桜

「全く、うちの長官は。」

徳田参謀長

「真桜様、それは言うてはいけません。」

真桜

「まあ、今までの長官で一番面白いから良いけど。」

南艦長

「七海大将、第七独立機動艦隊司令長官菅原大将より、お電話です。」

「

七海司令長官

「水香ちゃんから!?!」

七海司令長官は喜びながらスイッチを切り替えた。

CICの大型モニターに菅原司令長官が映し出された。

菅原司令長官

「優香ちゃん、げんきかい?」

七海司令長官

「水香ちゃん、元気よ。」

菅原司令長官

「フッフ、可愛いんだから。」

七海司令長官

「うう……………そんな事言わないで。」

菅原司令長官

「頑張ってるじゃない。後でいいことし・て・あ・げ・る。」

七海司令長官

「あう……………ありがとう。」

菅原司令長官

「フッフ、今日は激しくいくわよ。」

七海司令長官

「……………フッフ」

七海司令長官は想像したのか、嬉しそうな顔をしている。

これを見て、話が先に進まないと思った徳田参謀長が割り込んだ。

徳田参謀長

「菅原司令長官、早く話に入ってください。いちやつくのは後でも良いでしょう。」

菅原司令長官

「あら徳田ちゃん、言っじゃない。死にたいの?」

徳田参謀長

「いや、その。」

画面から菅原司令長官に睨まれ、隣では七海司令長官に睨まれている。

徳田参謀長の額には汗が浮き出していた。

徳田参謀長

「す、すいませんでした。お許しください。」

菅原司令長官

「フフフ、良いのよ。それじゃ本題に入るわね。」

七海司令長官

「分かりました。」

菅原司令長官

「優香ちゃんは今中国艦隊を絶滅させるために出撃するのよね。」

七海司令長官

「はい。」

菅原司令長官

「だから、私の艦隊の原子力潜水艦隠岐・佐渡・対馬を貸してあげようと思って。」

七海司令長官

「本当？」

菅原司令長官

「なあにその顔は、か〜わ〜い〜い。」

七海司令長官

「あう……………そんな事言わないでください。」

徳田参謀長

「菅原司令長官、本当ですか。」

菅原司令長官

「本当よ。高天原級しか魚雷発射管ないじゃない。だから貸してあげるのよ。」

七海司令長官

「ありがとう。」

菅原司令長官

「良いつて事よ。じゃ、頑張つてね〜。」

菅原司令長官は七海司令長官に投げキッスをすると、電話は切れた。

徳田参謀長

「長官、早速出撃準備を。」

七海司令長官

「……………分かったわ。高原・高海原・高陸原は上海空爆のため分離します。高原・高地原は私の艦についてくるよう命令して下さい。」

徳田参謀長

「了解。」

七海司令長官

「南艦長、潜航開始です。深度1800メートルに潜航。」

南艦長

「了解いたしました。潜航開始、深度1800メートル。」

航海長

「了解、潜航開始。」

第八特務機動艦隊の特装潜水戦艦は潜航を開始した。

その後に第七独立機動艦隊の原子力潜水艦隠岐級が続く。

6艦は集結すると、飛翔を始動させた。

転移場所は、中国艦隊近海。

第八特務機動艦隊（前書き）

北朝鮮のアホンだらのせいで、空母大和2010のんがややこしくなってもうた。

どないしてくれるねん。

かげで話がちょっと延びるけど。

まあ、そのお

第八特務機動艦隊

海中深く深度1800メートルを爾々と進む、6隻の戦闘艦。

3隻は潜水艦だが、残る3隻は潜水戦艦だ。

イージス原子力特装潜水戦艦高天原級。

これが日本連邦海軍の誇る潜水戦艦だ。

第八特務機動艦隊は第七独立機動艦隊の妹的な関係である。

この潜水戦艦と潜水空母の6隻が主力の第八特務機動艦隊は第二次世界大戦の末期に登場した。

当初、第八特務機動艦隊の編成目的は援英派遣だったが、帝國政府の方針転換で派遣は中止となった。

しかし、太平洋戦争終結後に連合艦隊・第七独立機動艦隊と共に、欧州へ遠征。

潜水能力を存分に生かし、ドイツのUボート及び輸送船破壊任務を行い、数百万トンの戦果を出した。

それ以後も、日本海軍の艦隊として戦果を出し続けた。

そして、この第三次世界大戦においても第八特務機動艦隊の活躍する場面が訪れた。

第八特務機動艦隊旗艦イージス原子力特装潜水戦艦高天原CIC

七海司令長官

「うう………他の皆さんは着いてきてますか？」

徳田参謀長

「はい、全艦着いてきています。」

真桜

「フッフ、中国艦隊見ておれ。」

七海司令長官

「……………今回はどうしよう。」

徳田参謀長

「我が高天原級と第七独立機動艦隊の隠岐級を分離してはどうでしょう。あちらは真正銘本物の潜水艦ですから中国艦隊前方に待機

させます。そして前方から雷撃を加えます。そこに我が艦隊が後方から雷撃を加えます。あまりひねった作戦ではありませんが、我が海軍の戦力ならこれくらい正面からぶつかっても楽勝ですよ。」

真桜

「フフフ、徳田ちゃんもやるわね。これならまだ許せるわ。」

徳田参謀長

「あつ、ありがとうございます。」

七海司令長官

「……………良かったですね。初めて褒められたんですもんね。」

徳田参謀長

「はい。とても嬉しいです。今までは、何かと殴る蹴るの暴行が当たり前でしたからね。」

真桜

「あら、また殴りたいの？今度は半殺しじゃすまないわよ。」

徳田参謀長

「いえ、遠慮します。」

真桜

「遠慮しなくて良いのよ。逝かしてあげるから。」

七海司令長官

「……………逝かしてもらいなさい。」

徳田参謀長

「す、すみませんでした。お許しください。」

徳田参謀長は2人に土下座した。

七海司令長官

「まあ、冗談はここまでにして作戦を他の艦に伝えないと。艦長。」

南艦長

「了解いたしました。各艦に連絡します。」

南艦長の指示で、各艦に作戦が伝えられた。

ここで説明するのも何だが、メッセージで数十件ほど聞かれているので答えない。

日本連邦軍の9割は女性で構成されている。

1割だけが男性だ。

これは日本連邦社会全てで言える事だ。

日本連邦のトップの、藤中早紀総理も女性であるし、世界一の会社鈴木商店の上戸美好CEOも女性だ。

全ては、女性の意志で決まる。

まあ、私の趣味が入ってますがお許しください。

さて、作戦だが。

第八特務機動艦隊の指揮下に入った原子力潜水艦隠岐級を敵中国艦隊前方5キロに転移させる。

その後、3キロまで引き付けてから雷撃を加える。

そして、中国艦隊後方から第八特務機動艦隊イージス原子力特装潜水戦艦高天原級が雷撃を加える。

雷撃は各艦1撃のみ。

イージス原子力特装潜水戦艦高天原級の魚雷発射管8門が3艦で24門。

原子力潜水艦隠岐級の魚雷発射管12門が3艦で36門。

合計60発の魚雷が中国艦隊に襲いかかるのだから、1撃で十分だろう。

これだけの攻撃なら、ひねった作戦を考えなくて良いわけだ。

中国艦隊絶滅の時間は刻一刻と迫っていた。

中国艦隊絶滅す（前書き）

どうも、上手く書けませんでした。

まだまだ勉強不足ですが、これからもよろしくお願
い
します。

中国艦隊絶滅す

第八特務機動艦隊旗艦イージス原子力特装潜水戦艦高天原CIC

七海司令長官

「……………さて、徳田さん。後の指揮は任せました。」

徳田参謀長

「了解しました。」

真桜

「優香、こんな若造に任せて良いのか？」

七海司令長官

「……………多分大丈夫だと思います。」

真桜

「うっん、心配だ。」

南艦長

「信じてあげましょうよ。」

七海司令長官

「……………南艦長、可愛い。」

南艦長

「そ、そんな。長官の方が可愛いです。」

七海司令長官

「あう……………そんないきなり。」

南艦長

「可愛いですよ。」

徳田参謀長

「第七独立機動艦隊潜水戦隊に連絡。『雷撃開始。』」

通信員

「了解、連絡します。」

高天原からの連絡を受けた隠岐級3艦は、雷撃を開始。

36発の850ミリ音響ホーミング魚雷を発射した。

36発の魚雷は一直線に中国艦隊に向かった。

中国艦隊旗艦原子力空母天安CIC

司令長官

「艦長、どう思う。」

艦長

「もはや我が国は四面楚歌、孤立無援ですからね。国家崩壊もカウ
ントダウンに入ったと言えます。」

司令長官

「艦長もそう思うか。私もそう思う。何せ我が国の西部は空白地帯
となった。インド・タイ連合陸軍に障害はない。一気に攻めてくる
だろうな。」

艦長

「大体、日本に喧嘩を売るのが間違いなのです。あの国は強すぎま
す。1艦隊だけで世界を敵に回せます。それが全兵力を投入してく
るんです。負けるに決まっています。」

司令長官

「そうだ、艦長の言う通りだ。やはり我が国は」

ドガアアアアン!!!!!!

突如、爆発音がした。

「何事だ!?!」

司令長官が聞く。

「大変です。前方を航行中の広州級が轟沈しました。」

「何だと？轟沈だと」

報告を聞き、愕然とする艦長。

「やはりそつだ。日本軍の攻撃だ。」

司令長官の言葉も虚しく、次々と他の艦も轟沈していく。

「広州級全4艦、蘭州級6艦。轟沈です。」

報告する声が、絞りだすように弱々しかった。

高天原CIC

徳田参謀長

「長官、敵中国艦隊は旗艦天安を残すのみです。」

七海司令長官

「潜水戦隊の皆さんには帰っても良いと伝えて下さい。」

通信員

「了解しました。」

真桜

「さて、残るは旗艦だけね。」

七海司令長官

「……………この空母もかわいそうに。24発の魚雷を受けて、轟沈するんですね。」

徳田参謀長

「しかたないです。」

真桜

「空母はどのような航行をしているの。」

徳田参謀長

「艦隊壊滅の被害を受け、Uターンを開始。香港へ向けて進路をとっています。」

真桜

「なら、計算通りに面と向かって勝負になるな。」

七海司令長官

「確かに。」

南艦長

「800ミリ音響ホーミング魚雷は全門装填完了しています。何時

でも発射出来ます。」

真桜

「仕事が早いね。」

南艦長

「海軍に入る前は『フクヤコウムテン』にいましたから。」

七海司令長官

「……………フクヤコウムテン。」

南艦長

「どうかしましたか？」

七海司令長官

「……………私の妹が社長。」

南艦長

「そうなんですか!？」

真桜

「凄くない。」

七海司令長官

「先代までは、やらなかったけど。妹は鈴木商店の傘下に入る事を決めたの。そのおかげで、急成長。鈴木商店の資本のおかげ。」

南艦長

「鈴木商店の傘下に入れば、倒産なんてありませんからね。」

真桜

「こりゃ凄い。私が竣工した頃は、まだ男性社会だったけど今は逆ね。日本社会の8割が、女性ね。軍に至っては9割、いやもう9割5分はいつてるわね。」

七海司令長官

「……………これこそが理想的な社会。男性は女性の奴隷となる。」

南艦長

「女性は子供を産むと言う、重大な機能がありますからね。」

七海司令長官

「男性は、100年以内に絶滅する。」

南艦長

「確かにそんな、論文が発表されましたね。現に出生率でも男性より女性の方が3倍も多いですからね。」

七海司令長官

「女性にもペニスが付き、男性は要らなくなる。けどそうならば二ユーハーフみたいな物になっちゃう。」

南艦長

「そうなれば、男性は重要になりセックス奴隷となるんですね。」

七海司令長官

「そう。限られた食料で飼育されて、精液を全て吸い取る。家畜となる。」

徳田参謀長

「（この現在でもそう言う事があるのに、未来はそれが普通になるのか。）」

真桜

「面白い。これからも未来が楽しみだ。」

徳田参謀長

「あの、そろそろ攻撃した方が良いのでは？」

七海司令長官

「それじゃ、家畜の意見を受け入れて攻撃開始。」

南艦長

「了解。全弾発射。」

シリンドリカルバウから魚雷が発射された。

中国艦隊旗艦天安CIC

「前方に魚雷！！！！その数24本。本艦直撃コースです！！！！回避不能！！！！」

絶望的な報告だった。

「もはや、これまで。」

司令長官の言葉に艦長が頷いた。

艦長

「いままでお世話になりました。」

司令長官

「なに、私こそ世話になった。ありがとう。」

艦長

「あの世でも会いましょう。」

司令長官

「ああ、勿論だ。あの世で会おう。後は北京級や香港級が標的になりながらも、頑張るだろう。」

もはや、回避も諦め完全に死を恐れていない。

死に行くものに、怖いものはない。

24本の魚雷が同時に命中した。

満載排水量6万トンの空母が一瞬だが、宙に浮いた。

そして、艦の中央からぼきりと真っ二つに割れた。

見事な轟沈であった。

高天原CIC

「敵艦隊旗艦天安轟沈。」

あっさりとした報告だった。

七海司令長官

「これで、敵は片付いたね。」

南艦長

「はい。」

七海司令長官

「やった。これで水香ちゃんから、褒美が貰える。」

徳田参謀長

「やれやれ。」

真桜

「それじゃ、上海に戻ろう。上陸作戦は続いているから。」

七海司令長官

「艦長、飛翔起動。上海沖に戻ります。」

南艦長

「了解しました。飛翔起動。」

第八特務機動艦隊は上海沖へと戻っていった。

藤中総理の自宅へ

2035年2月2日午前2時

藤中総理・辻大蔵大臣・中野総務大臣それに、天野国防大臣は藤中総理の自宅に向かっていた。

藤中総理の自宅は、播磨州兵庫県神戸市六甲山地一帯にある。

六甲山地一帯は鈴木商店が買い上げ、藤中総理の私有地となった。

そこには屋敷が1件と、陸上自衛隊・航空自衛隊の基地、空港、その他諸々の施設が建てられていた。

この六甲山地一帯は藤中総理の私有地となつてからは、男性立ち入り禁止となった。

女性だけしか、入る事が出来ない。

天野国防大臣は、初めて立ち入りを認められた。

しかし、空港からの道が長い事長い事。

すでに5キロ走ったが、一向に家に着かない。

窓から流れる風景は、基地や空港、その他諸々の施設だけだ。

天野国防大臣

「早紀総理、まだ着かないのですか？」

藤中総理

「まだよ。あと2キロ。」

天野国防大臣

「2キロですか!？」

辻大蔵大臣

「しかし、凄いわね。空港からも7キロあるなんて。」

中野総務大臣

「今は誰が屋敷に住んでるの？」

藤中総理

「美好ちゃんが住んでるわ。あの子、あの屋敷が好きだから。」

天野国防大臣

「1人で寂しいんじゃないですか？」

藤中総理

「大丈夫。メイドは100人、ボディガードが80人、調理師が200人いるから大丈夫。勿論、全員女ね。」

天野国防大臣

「……………380人も」

辻大蔵大臣

「みんな可愛い子ばかりなのよね。」

藤中総理

「そうよ。胸も大きいからフフフ。」

中野総務大臣

「将希ちゃん、もしその380人の中で1人とでも寝たら、分かっているわね。」

天野国防大臣

「も、勿論でございます。私は3人様の忠実な下僕です。そのような事はありません。」

藤中総理

「そうよ。やっと立場が理解出来たようね。偉いわ。」

辻大蔵大臣

「体で学ぶのが一番ね。」

中野総務大臣

「けど、その教え方が良いんだけどね。」

天野国防大臣

「ハハハ。」

そうこうしている内に、リムジンは屋敷に着いた。

天野国防大臣

「な、何て大きさ………」

辻大蔵大臣

「凄い。」

中野総務大臣

「これは本当に家？」

藤中総理

「家よ。この玄関から、右に1キロ左に1キロ。長さ2キロね。この玄関から反対側まで1キロ。地上4階地下2階、部屋数は………
…何部屋あるのかな？」

天野国防大臣

「自分の家なのに、部屋数が分からないんですか？」

藤中総理

「悪い？」

天野国防大臣

「いや、そんな事は。」

藤中総理

「そう言うのは言わない方が良いわよ。」

辻大蔵大臣

「それより、早く入りましょうよ。」

中野総務大臣

「中が早く見たいです。」

藤中総理

「分かったわ。それじゃ行きましょう。」

4人はリムジンから降りた所で話していたが、更に歩き始めた。

玄関までまだ800メートルもある。

屋敷のエントランス

メイド

「早紀陛下、お帰りなさいませ。」

藤中総理

「あら、新しい子ね。」

メイド

「は、はい。そうです。」

藤中総理

「フフフ、可愛い子ね。」

メイド

「あ、ありがとうございます。」

藤中総理

「フフフ。」

天野国防大臣

「しかし広いエントランスですね。」

辻大蔵大臣

「4階全部が、吹き抜けね。」

中野総務大臣

「奥が霞んで見えます。」

天野国防大臣

「それに、貴女は受付ですか？」

メイド

「は、はい。そうです。」

辻大蔵大臣

「家に受付があるなんて。」

中野総務大臣

「もはや、ホテルですね。」

藤中総理

「それは良いとして、美好ちゃんの所に案内して。」

メイド

「分かりました。」

メイドに案内されて、4人は奥へと進んでいった。

上戸美好の部屋

メイド

「美好様、早紀陛下とお連れの方をお連れしました。」

上戸CEO

「あら、ありがとう。」

藤中総理

「美好ちゃん。」

上戸CEO

「伯母さま。」

藤中総理

「調子良いわね。」

上戸CEO

「ありがとうございます。」

天野国防大臣

「早紀総理、なぜ自宅に？しかもこんな時間に。」

藤中総理

「ここで考えるのが、一番落ち着く。」

天野国防大臣

「そうですね。」

上戸CEO

「伯母さま、それに皆さん座ってください。」

辻大蔵大臣

「ありがとうございます。」

中野総務大臣

「それじゃ、失礼します。」

上戸CEO

「何か飲みますか？」

藤中総理

「コーヒーをお願い。みんな好きだから。」

上戸CEO

「それじゃ、コーヒーをお願いね。」

メイド

「分かりました。」

その後、メイドがコーヒーを持ってきてから5人で、今後の中国侵
攻作戦についての会議が始まった。

藤中総理の自宅へ（後書き）

次回は、5人の作戦会議です。

この会議で中国の未来が決まります。

中国の行く末（前書き）

皆様、お久し振りです。

色々あって、

更新出来ませんでした。がまた更新を再開させていただきます。

中国の行く末

4人による会議が始まった。

「さてと、本題に入れば中国をどうするかが、問題なの。」

藤中総理の言葉に上戸CEO・辻大蔵大臣・中野総務大臣・天野国防大臣は書類を見ながら、考え始めた。

「これによりますと、中国の首都北京を占領した後にインド・タイ陸軍及び満州皇国やロシア連邦の陸軍と共同で中国全土を占領する。その後、中国首脳を処刑して、中国を完全に支配下に置く。こうなっていますね。」

天野国防大臣が書類を見ながら言った。

「けど、これにはその後の処理について書いてないけど。伯母さま、どうなの?。」

上戸CEOが書類を机の上に投げつけながら聞いた。

「そうなの。その後の処理を考えてなかったのよ。中国という国をどうするかね。」

藤中総理はコーヒーを飲みながら答えた。

「伯母さま、それじゃあ中国の処理は何でもしていいのね。」

「そうよ、美好ちゃん。中国と言う国を消滅させれば良いから。」

「なら、私の会社で領土を買い取っても良い？」

「良いわよ。」

藤中総理の了承を得て、笑顔を見せる上戸CEO。

それに中野総務大臣が意見を述べる。

「確かにそれは良い考えです。しかし、1企業が国家の領土を買い取っても良いのでしょうか？」

「大丈夫ですよ。日本連邦の考えに逆らう国はいませんよ。あんな独裁国家をどうしようが、問題ないですよ。喜恵さんも考える事が可愛いですね。」

天野国防大臣の言葉に中野総務大臣が頬を赤くする。

「まあ、鈴木商店の買収に反対する国が出て、最悪日本連邦も共同で買収すると言えば良いでしょう。それくらいの予算は来年度予算案をいじくれば、どうにか出来ますから。」

「亜由美さん、軍事関連費は減らさないで下さい。」

「フッフ、50%もあるんだから1番に減らすわ。」

辻大蔵大臣に土下座する天野国防大臣を横目に見ながら、藤中総理

は結論を下した。

「それじゃ、中国は鈴木商店で買収。何かあれば国家として買い取る。」

「良いですね。美好ちゃんは中国をどうするの？」

「喜恵さん、良い質問です。我が社は中国を買収して、一大テーマパークにしようと思います。ホテルや遊園地・ゴルフ場・温水プール施設・ショッピングセンター・レース場・軍の演習場も建設しようと考えています。」

上戸CEOの言葉に天野国防大臣は辻大蔵大臣への土下座を止めて、上戸CEOへと目を向けた。

「美好さん、それは本当ですか？」

「勿論です、将希さん。我が国は世界一の軍事超大国と言うのに、演習場は国土の関係で狭くしか取れませんでした。そのため、満州皇国やアメリカ合衆国の演習場でないと最大射程での演習は出来ませんでした。今回、中国の領土に建設するのはアメリカ合衆国のヤキマ演習場以上の広さの演習場になる予定です。」

上戸CEOの言葉に、天野国防大臣は涙を流して喜んだ。

「亜由美さん、もし鈴木商店で買収出来なかつたら軍事関連費を削つても買収して下さい。ヤキマ以上の演習場が手に入るなら安い投資です。」

「フッフ、最初からそう言えば良いのよ。」

辻大蔵大臣は天野国防大臣の頭を撫でた。

「それじゃあ、中国の処理は決まったから次は来年度予算案に付いて話し合いましょう。」

藤中総理の言葉に、4人は書類を捲った。

「それじゃ、亜由美ちゃん説明して。」

「りょくかい。それじゃあ説明するわ。来年度2036年度の歳入から説明するね。」

辻大蔵大臣が説明を始めた。

2036年度

歳入：280兆8400億円

50%：石油資源及びメタンハイドレート資源利益
140兆4200億円

10%：国税（法人税・地価税）
28兆840億円

20%：武器輸出（個人用銃火器・車輛装備主砲）
56兆1680億円

15%：債権費（米英露等からの返済金）
42兆1260億円

5%：貸貸費（南米各国からの振込み金） 14兆420億円

歳出：280兆8400億円

50%：軍事関連費
140兆4200億円

5%：国家機関費
14兆420億円

10%：公共投資費及び国土保全費
28兆840億円

20%：産業経済費
56兆1680億円

20%：教育文化費
56兆1680億円

注：昨年度予算案では歳出の内、軍事関連費の20%が地方費であった。

しかし、藤中総理の連邦制導入により各州が独立して州の費用を集

めるため、軍事関連費に地方費を回した。

これにより軍事関連費が50%と、半分を占めるようになった。

「以上が来年度予算案の内訳ね。」

辻大蔵大臣の説明が終わった。

「ふうん。これなら特に問題無いわね。国会でも簡単に通るでしょ。」

藤中総理は再び、コーヒーを飲んだ。

「それじゃあ、会議は終わりですね。」

上戸CEOはそう言っていると、席を立った。

「美好さん、どちらへ?」

「天野国防大臣、後は頑張ってくださいね。」

上戸CEOは部屋を出ていった。

「頑張ってくださいって言うても、何を頑張るんだ?」

天野国防大臣はそう言うと、背後から狂喜に満ちた笑い声を聞いた。

「ヤバい。」

天野国防大臣はドアの方へ走っていき、開けようとしたが。

ガチャガチャ！！

「何故、鍵が閉まってるんだ。」

「将希ちゃん、何処へ行くの？」

「そんなに逝きたいの？」

「なら、逝かせてあげます。」

「ギヤアア~~~~」

3時間後、上戸CEOが部屋に入ると屍と化した天野国防大臣の姿があり。

ソファの上には、コーヒーを飲む3人の女性がいた。

「そんなに激しかったんだ。」

上戸CEOは天野国防大臣にそつと、毛布を被せた。

壮絶！！上海戦（前書き）

頑張って書いてみました。

どうでしょうか？

壮絶！！上海戦

2035年2月3日1830時

上海上陸に成功した日本連邦揚陸軍105個師団は、海岸線に橋頭堡を築いている。

凄まじい光景である。

海軍・海上自衛隊・同盟艦隊・空軍の攻撃により、上海周辺直径10キロは瓦礫の山と化している。

そんな所に、95式戦車をはじめとする、戦闘車輛が連ねていた。

日本連邦揚陸軍統合師団司令部

ここは、上陸した揚陸軍師団を束ねる司令部である。司令部の主である、揚陸軍統合師団司令長官新田京子大將は不機嫌そうに3D地図を眺めていた。

「何故だ。何故に敵は逃げる。」

新田大將は不機嫌そうに言った。

「長官、中国軍と我が軍の戦力は雲泥の差です。中国軍は戦力差を痛感し、撤退したのでしよう。」

副長官の中川翔子中將が答えた。

「張り合いが無いわね。」

新田大將は、コーヒーを一口飲んだ。

「そう言いますけどね。我が軍と中国軍の実力は……………」

「緊急警報、緊急警報。支配圏内に中国軍侵入。注意されたし、中国軍は歩兵に在らず。Xウイルス感染の、ゾンビ。繰り返します、敵はゾンビ。」

中川中將が答えていると、突如として警報が流れた。

「ね、しょこたん。敵はちゃんと攻めてきたでしょ。」

「のんびりしてる場合ですか！！ゾンビが攻めて来たんですよ。」

「分かってるわよ。現場は誰が警備してるの？」

「第七独立機動艦隊海上機動要塞白鷺の揚陸軍師団です。」

「しょこたん、それは良いわね。彼らは白鷺内でゾンビとの戦闘を経験してるわね。それじゃ早いわ、柳原中佐に命令よ。『早急なる

撃退を命令する。『分かった？』

「分かりました。今すぐ命令します。」

「それと、しよこたん。外の機甲師団にも命令よ。柳原中佐の師団への支援砲撃を行いなさい。」

「了解。柳原中佐へ殲滅命令。機甲師団へ支援砲撃命令。以上を下します。」

「任せたわしよこたん。」

新田大將はそう言うと、再びコーヒーを一口飲んだ。

支配圏内白鷺揚陸軍師団担当区域

「中佐、新田大將から命令です。」

軍曹が命令書を持ってきた。

「すまない。」

柳原中佐は命令書を読み始めた。

「軍曹、ゾンビの状況は？」

「現在、支配圏内に侵入した所で進軍を止めています。我々の駐留区域からは1キロ程です。」

「よし分かった。軍曹、進撃だ。」

「了解。」

「乗車〜」

柳原中佐の命令に全員が乗車する。

「中佐、全員乗車しました。」

「よし！！軍曹、進撃だ。」

柳原中佐の命令で、白鷺の揚陸軍師団が進撃する。

95式戦車120輜、20式装甲車150輜、88式295ミリ自走リニアガン170輜、380ミリ自走多連装ロケット・システム(MLRSS)のようなものです(150輜が進撃する)。

向かう先には中国ゾンビ軍団。

1900時

支配圏内外周

ゾンビ軍団が再び、進撃を始めた。

「中佐、発見しました。前方500メートルです。」

「よし。攻撃だ。歩兵は全員下車。機甲師団は砲撃開始だ。」

「了解。歩兵、全員下車。機甲師団は命令あれば砲撃開始だ。」

「撃て撃て!!！」

柳原中佐の命令で、攻撃が始まった。

ドガガガガガ!!!!

95式戦車の30ミリ重機関銃も攻撃をくわえる。

「撃て撃て!! 頭を狙え!! 頭を!!！」

柳原中佐の命令が飛ぶ。

柳原中佐の師団もそうであるが、日本連邦軍全ての銃火器及び車輛搭載の銃火器の銃弾は破壊力の強化が加えられた。

「中佐、敵の数が多過ぎます。」

「そうだな。よし、機甲師団に砲撃命令だ。それと統合師団司令部にも支援砲撃要請だ。」

「了解。」

柳原中佐の命令で、機甲師団は攻撃を始めた。

95式戦車の138ミリリアガンが砲撃を始め、88式295ミリ自走リアガンを砲撃を始める。

380ミリ自走多連装ロケットシステムからも各20発の380ミリロケット弾が発射される。

1910時

統合師団司令部

「長官、柳原中佐から支援砲撃要請です。」

「分かったわ。外の機甲師団に命令よ。砲撃開始。」

「了解。」

統合師団司令部に駐留している機甲師団も支援砲撃を開始した。

1915時

「中佐、敵は全滅しました。」

「よし。軍曹、前進だ。」

「了解。全車前進。」

柳原中佐率いる、揚陸軍師団はゾンビを全滅させ、前進を始めた。

1920時

「中佐、前方に敵です。見た事もないデカさです。」

「何だと？」

柳原師団の前に現れたのは3メートルは有ろうかという、人間のよ
うな物であった。

「ウガ」

前方の敵は微笑を浮かべると、両手の武器で攻撃を始めた。

ドガガガガ！！！！！

バシユ！！バシユ！！バシユ！！

「中佐！！奴はガトリングガンとミサイルランチャーを装備してい

ます！！」

「ああ！！そのようだな！！黙って撃て！！」

ドガガガガッ！！

柳原中佐は八式小銃を撃ち続ける。

軍曹も十式機関銃を撃ち続ける。

部下も淡々と銃を撃ち続ける。

ドガガガガッ！！！！

ポーン！！ポーン！！

八式小銃装備のグレネードランチャーも攻撃を加える。

「中佐！！全然効いてません！！」

「機甲師団の攻撃も効かないか。」

「どうしますか？」

「よし！！軍曹、統合師団司令部に航空支援要請だ。」

「了解！！連絡します。」

1928時

統合師団司令部

「長官、柳原中佐から航空支援要請です。」

「現状は？」

「連絡が繋がってます。」

「分かったわ。しょこたん、繋いで。」

「了解。」

「柳原中佐、聞こえる？」

『こんな物は生まれて初めて見ます！！大至急航空支援を頼みます。』

「……………」

『何者か分かりませんが、とんでもない物ですよ。』

「長官、連山戦術偵察機が1分後に到着します。」

1分後、連山戦術偵察機からの映像が届いた。

すぐに、大型液晶モニターに映される。

「何よ、あれは。」

「分かりません。長官、大至急空軍機の応援を。」

「分かったわ。しょこたん命令よ。攻撃部隊出動。正体不明の標的を攻撃しなさい。」

新田大将の命令で、空軍の雷電ステルス垂直離艦戦闘攻撃機が4機出撃した。

1930時

高度12000メートル

雷王早期警戒管制機内

「全機に告ぐ、至近距離での銃撃戦に備えよ。」

「一番近い機は？」

「雷電258番機です。」

「よし、雷電258番機を攻撃地点3へ。」

「雷電258番機を攻撃地点3へ。距離900メートル。」

雷電258番機

「現地に、友軍がいる。」

柳原師団

「こっちは師団で展開している、オレンジの煙だ!!」

柳原中佐から連絡が入る。

雷王早期警戒管制機内

「攻撃地点3、雷電258番機確認。攻撃開始。」

柳原師団

「西側から攻撃しろ！！障害物が無い。」

雷王早期警戒管制機内

「雷電258番機以下、4機攻撃態勢に入りました。」

柳原師団

「軍曹！！攻撃が来るぞ！！」

「了解！！敵をマークしろ！！」

軍曹は部下に命令を下した。

雷電258番機

「敵を捉えた。攻撃を開始する。」

ドガガガガッ！！！！

20ミリガトリングガンが攻撃を始めた。

そこへ、JDAM500X誘導爆弾も投下する。

柳原師団

柳原中佐の前では、膝を付いているが未だに息のある敵の姿があっ

た。

「あれだけ浴びて、何で倒れない。」

「58番機、50ミリレーザーガトリングガンを使え。浴びせろ！
！」

EX富嶽ステルス掃射機内

「地上部隊が50ミリレーザーガトリングガンでの攻撃を要請。」

「よし。攻撃開始だ。」

ブバアアアアアン！！！！

200門の50ミリレーザーガトリングガンが攻撃を開始した。

柳原師団

柳原中佐は、攻撃を受ける敵を眺めていた。

「中佐、これで敵も倒れたでしょう。」

「ああ、そうだな。」

掃射機の攻撃は終わった。

「よし。敵は死んだな。」

「中佐、これで一応戦いは終わっただけですね。」

「そうだ。後は陸軍特殊部隊群の仕事だ。俺達は戻るぞ。」

「了解しました。」

中国本土侵攻初の、ウイルス感染生物兵器との戦いに日本連邦軍は勝利を得たのだ。

新たなる危機

2035年3月16日

中国全土占領から10日が経過した。

先月3日のウイルス感染生物兵器を打ち負かし、進撃を開始した揚陸軍は2月19日に北京を占領した。

北京までのルートでは激しい抵抗があったが、北京はもぬけの殻であった。

後日、政府官庁を搜索すると政府は中東方面側の盟主である、サウジアラビアへと亡命した事が分かった。

陸軍空軍もパキスタン イランを経由、ペルシャ湾を渡りサウジアラビアへと集結した。

海軍はホーン岬をこえ、東回りでサウジアラビアへと集結した。

現在では、中国軍は中東連合軍に併合されている。

北京を占領し、反抗勢力の無くなった中国全土を占領するのはたやすしい事であった。

3月1日から日本連邦揚陸軍・陸軍・インド陸軍・タイ陸軍・満州皇国陸軍・ロシア連邦陸軍と共同で中国全土の占領を開始した。

そして3月6日に全土占領となったのである。

中国は日本連邦軍に占領されると、国家では無くなった。
植民地になり果てたのだ。

3月9日には香港がイギリスへと返還された。

3月10日には日本連邦政府が中国植民地権利を鈴木商店売却。

中国植民地は鈴木商店の所有地となった。

中国植民地買収の翌日、鈴木商店の上戸美好CEOが記者会見を開き、中国植民地をテーマパークにすることを発表した。

中国植民地はこの時から、『鈴木パーク』と呼ばれ名が変わった。

1 国家がテーマパークになると言う、人類史初の出来事であった。

そして、3月16日。

新たなる危機が迫っていた。

日本連邦首都東京市ヶ谷国防総省地下2階作戦会議室

「何と言う事だ。この映像？」

「海上機動要塞白鷺揚陸軍師団からの映像です。柳原中佐以下50名、仲山中佐以下30名、白石中佐以下50名。計130名は死亡しました。白鷺の揚陸軍師団は壊滅したと言って良いでしょう。」

天野国防大臣の問い掛けに、女性士官が答えた。

「と言う事は。」

「はい。またしても男は全滅しました。」

女性士官は笑いながら言った。

「第七独立機動艦隊は参謀長を除いて、全員女性になったか。海軍で男なのは参謀長と軍令部総長合わせて4人か。陸軍空軍揚陸軍は総長だけが男か。けど、総長は全員来月1日で定年だから……………」

「大臣、そんな事どうでも良いじゃないですか。女の方が強いんですよ。しかし、総理に知らせなくて良いのですか？」

天野国防大臣が頭を抱えていると、女性士官が尋ねてきた。

「本当だ！！車は用意してあるか？」

「もちろんです。」

「よし、それじゃ行ってくる。」

天野国防大臣は作戦会議室を慌てて出ていった。

「フッフ、慌てん坊ね。」

作戦会議室に残った女性士官達は、声を出して笑った。

国防総省の玄関に出ると、クラウンのリムジンタイプが停まっていた。

鈴木商店の上戸美好CEOが天野国防大臣にプレゼントした特注車だ。

その他にも、藤中総理・辻大蔵大臣・中野総務大臣にもプレゼントしてある。

そんなこんなで、天野国防大臣はクラウンに乗り込んだ。

「首相官邸に向かってくれ。急いでくれ。」

「分かりましたわ。」

運転手はそう答えると、車を走らせた。

天野国防大臣はすぐに、車内に設置されている電話に手を伸ばした。

「まーくん、どうしたの？」

「早紀総理、今すぐ亜由美大蔵大臣と喜恵総務大臣を首相官邸に呼んでください。見せたいものがあるんです。」

『亜由美ちゃんと喜恵ちゃんはここにいるわよ。なあと、婚約指輪』
『?』

「婚約指輪はまた今度渡します。確か式は再来月でしたね。」

『そうよ。楽しみね。』

「はい、楽しみです。って違いますよ。とにかく大変なんです。オペレーションルームに集まっています。お願いします。」

『分かったわよ。オペレーションルームね。何かは知らないけど、待ってるわ。』

「はい。あと4分25秒で着きます。」

『じゃあ待ってるわ。』

電話は藤中総理から切れた。

「よし、これで大丈夫。」

天野国防大臣は安堵のため息を吐いた。

首相官邸玄関

天野国防大臣の乗ったクラウンが到着した。

藤中総理の秘書がドアを開ける。

「国防大臣、ジャスト3分25秒で到着です。」

「私は昔から時間だけは正確でしたからね。」

「けど残り、50秒で地下5階のオペレーションルームに行きませんと。」

「大丈夫です。間に合います。」

天野国防大臣はそう言うと、中に入っていった。

首相官邸地下5階オペレーションルーム

「グハツ!!」

天野国防大臣はエレベーターを降りた途端、顔面を殴れた。

「18秒遅刻。」

「あと2秒で飛び膝蹴も出来たのに。」

「遅刻するなら、きっちり遅刻してください。」

「す、すいませんでした。」

天野国防大臣は顔面の痛みも忘れ、土下座を行った。

「さてと、まーくん。何かな？」

藤中総理が尋ねる。

「ああ、そうでした。まずはこれを見てください。君、これを映してくれ。」

天野国防大臣はフロッピーディスクを女性オペレーターに渡した。

女性オペレーターはフロッピーディスクをセットして、キーボードを操作する。

すると、大型液晶モニターに鈴木パークの地図が映しだされた。

「ご覧ください。ここが雲貴高原です。このツンイーと呼ばれる所に。切り替えて。」

天野国防大臣の言葉に、女性オペレーターは画像を切り替えた。

すると大型液晶モニターには洋館が映しだされた。

「このような洋館があります。ここに反抗勢力の残存がいる事が分かり、第七独立機動艦隊海上機動要塞白鷺の揚陸軍師団を派遣しました。柳原中佐、仲山中佐、白石中佐以下130名です。揚陸軍の男全てです。そしてこれがその時の映像です。」

天野国防大臣が喋り終わると、映像が映しだされた。

映像は兵士のヘルメットに備え付けられたもので、撮影したらしい。

『柳原中佐、準備完了しました。』

『よし。仲山と白石は？』

『仲山中佐は地下通路を見つけ、地下へ潜入しました。白石中佐は別の建物へ潜入しました。』

『よし、俺達はこの洋館だな。入るぞ。』

『了解。』

柳原中佐以下50名は洋館へと入っていく。

映像は洋館の中になった。

『エントランスか。』

『そのようですね。』

『よし、軍曹は周辺を搜索してくれ。俺は奥を調べる。半分付いてこい。』

映像も柳原中佐の後を付いていく。

この兵士も柳原中佐に付いていったのだろう。

最初の部屋に入る。

そこは食堂であった。

『調べる。』

柳原中佐の命令で、辺りが調べられる。

『変わったものは無いですね。』

『そうか、なら次の部屋だ。』

次の部屋は居間であった。

暖炉があり、火がついていた。

『中佐、暖炉が。』

『ああ、誰かいるな。』

『調べますか。』

『そうだな。調べた方がよいな。』

柳原中佐の命令で辺りが調べられる。

『何も無いですね。』

『ああ、何かあってもいいはずだ。見ろ、家具なんか使われた形跡が無い。』

『不気味ですね。』

『ああ、不気味だ。』

柳原中佐が答えた刹那。

ドガガガガ

『！？軍曹どうした！！』

無線から銃声が聞こえた。

『中佐、敵です。敵の攻撃です。しかも、奴ら……………』

『軍曹！！どうした！！』

『ギャアアアア』

『軍曹！！くそっ！！エントランスだ！！』

『了解！！』

柳原中佐は走りだした。

エントランスでの光景は……………

『何てこった。』

柳原中佐が嘆いた。

そこには肉片が散らばっていた。

『中佐、もしかしてこれは。』

『ああ、もしかするぞ。』

『！！？』

『おい！！後ろだ！！』

柳原中佐がカメラの兵士に叫ぶ。

兵士が振り返った瞬間、犬が飛びかかってきた。

『ギャアアアア』

兵士は絶命した。

首が取れたのだろうか、カメラには体が映っていた。

その奥からは、ゾンビが物凄いスピードで飛びかかってきた。

『撃て撃て!!』

ドガガガガ!!

『ギャアアアアア』

グシャ!!

鈍い音がして、映像が止まった。

オペレーションルームは静寂に包まれた。

最悪の事態であった。

洋館ではバイオハザードが発生していたのだ。

そんな中、口を開いたのは天野国防大臣であった。

「柳原中佐を襲ったのは、ケルベロスとクリムゾンヘッドと呼ばれるものです。」

天野国防大臣の言葉に、オペレーションルームに緊張が走る。

「将希ちゃん、それってまさか。」

「はい、早紀総理。アメリカの洋館事件と同じです。」

オペレーションルームは再び、静寂に包まれた。

「仲山中佐と白石中佐はどうなったの？」

辻大蔵大臣が尋ねた。

「仲山中佐のチームは館の地下で大蛇に襲われ、全滅。白石中佐のチームは別館の地下で大鯨に襲われ、全滅です。2チームの映像を見ますか？」

「もう、良いです。あんなえぐいのは見たくないです。」

天野国防大臣の問い掛けに、中野総務大臣が全力で拒否した。

「将希ちゃん、今後の作戦は？」

「海軍特殊強襲部隊群（解説参照）を投入して、洋館の全容を暴き破壊したいと思います。」

「そうね。ここが中国のオンブレラ研究所かも知れないしね。調査が必要なのは確かね。」

「けど、大丈夫なのか？投入した海軍特殊強襲部隊群も全滅するかも知れないのに。」

「大丈夫ですよ、亜由美さん。海軍はそんなやわじやないです。海軍特殊強襲部隊群は必ずや、作戦を成功に導きます。」

「分かったわ。将希ちゃんがそんなに自信があるなら作戦を許可するわ。目的は洋館の全容解明及びオンブレラ研究所調査。さあ、そうと決れば作戦開始よ。」

洋館調査は藤中総理の鶴の一声で決定された。

2035年3月17日

春嵐輸送ヘリコプター1機が、邪鬼Z戦闘ヘリコプター4機の護衛を付けて、洋館へと向かっていた。

5機は洋館から500メートル離れた駐屯地へと着陸した。

駐屯地司令部

海軍特殊強襲部隊群総長の倅田智恵子大佐は、部下の熊谷由紀子大尉と寺中彩子大尉、それに2人の男性隊員を引きつれて司令部に入った。

司令部には揚陸軍統合師団司令長官（第三次世界大戦終結まで、揚

陸軍統合師団司令長官の任務は続く）の新田京子大将と副長官の中川翔子中将が待っていた。

「海軍特殊強襲部隊群総長の倅田智恵子です。熊谷由紀子、寺中彩子他2名、ただ今到着しました。」

倅田大佐が挨拶をする。

「はい、ご苦労様。総長つて揚陸軍総長とか海軍軍令部総長とかの総長？」

「そうです。」

「ありゃま、トップがわざわざ陣頭指揮に？」

「そうです。」

「頑張つてね〜」

「ご期待に添えるように、頑張ります。」

倅田大佐は一礼すると、司令部を出ていった。

隊員も後を追いつける。

「しよこたん、大丈夫かな？」

「大丈夫だと思います。海軍特殊強襲部隊群は少数精鋭チームですからね。だから今回も5人で来たのでしょ。けど、あの男2人は

頼りなかったですから、死にますね。」

「まあ、男が死ぬなら良いけど。ところで、洋館周囲のケルベロス狩りは済んだ？」

「何とか、全滅させました。洋館周囲は制圧しましたが、内部は何とも言えません。」

「大丈夫よ。倅田ちゃんが何とかするわ。もし、全滅しても気化爆弾を落として終わりよ。」

「そうですね。」

2人は顔を見合わせて、笑った。

駐屯地駐車場

「装備は確かめた？」

倅田大佐が尋ねる。

「バッチリです。」

「忘れ物なし。」

熊谷大尉、寺中大尉が答える。

「あんた達！！返事をしなさい！！」

倅田大佐が怒鳴った。

「だ、大丈夫です。」

「OKです。」

「なら良いわ。それじゃあ装甲車に乗って。行くわよ。」

倅田大佐の命令で、装甲車に乗り込む。

全員が乗り込むと、装甲車は走り出した。

向かう先は、バイオハザードが発生した洋館。

倅田大佐達は生きて帰ってくる事が出来るのか？

―解説―

海軍特殊強襲部隊群

ブラックベレーより5年遅れて、設立された。

少数精鋭で、強襲攻撃を主任務とする。

警視庁は海軍特殊強襲部隊群をモデルにSATを設立した。

今回のような、調査が主任務の作戦に投入されたのは設立以来初めての事である。

新たなる危機（後書き）

次話もしくは次々話も、洋館事件となります。

バイオハザードは終結するのでしょうか？

洋館調査

倅田大佐率いる海軍特殊強襲部隊群は洋館前に到着した。

全員が20式装甲車から下車する。

「みんな降りたく？」

倅田大佐が声をかける。

「4名全員下車しました。」

代表で、熊谷大尉が返事をする。

「うん、分かったわ。それじゃありがとね。」

「はい、こちらこそ。頑張ってください。」

20式装甲車を運転していた女性士官に声をかける。

声をかけられた女性士官は喜んでいた。

何せ、海軍特殊強襲部隊群の総長に声をかけられたのだから。

「それじゃあ行くわよ。」

倅田大佐の命令で、洋館の中へと入っていった。

洋館エントランス

5人は洋館に入った。

エントランスには今でも、柳原中佐達の死体が……

無かった。

「倅田大佐、柳原中佐達はここで全滅したんですよね。」

寺中大尉が尋ねた。

「ええそうよ。ここでケルベロスとクリムゾンヘッドに襲われ、全滅したわ。と言う事は。」

「死体はここないと、おかしいんですね。」

熊谷大尉が言った。

「けどないですよ。死体なんて。」

「だから不気味なのよ。」

「倅田大佐、と言う事は柳原中佐達は……………」

「クリムゾンヘッドになった可能性が高いわね。」

「それじゃあ私達は。」

「あゝ、お姉様方。」

男性隊員が、怖ず怖ずと話かけてきた。

「なにかな？」

倅田大佐は笑顔で答える。

ただ、目は笑ってないが……………

男性隊員は会話を邪魔した事を後悔しながらも、自分の正当性を訴えるために口を開いた。

「廊下の奥からゾンビらしき物が、向かって来てます。」

男性隊員の言葉に女性3人は廊下の奥に目をやる。

もう1人の男性隊員は九式小銃を構え、射撃態勢に入っている。

確かに向かってくるのは、ゾンビであった。

「ゾンビね。」

「ゾンビですよね。」

「ゾンビ登場。」

「さっきから言おう言おうとしてたんですが……………」

「攻撃開始!!」

男性隊員の言葉を掻き消すように、倅田大佐の命令が飛ぶ。

男性隊員2人は九式小銃で攻撃を始め、熊谷大尉と寺中大尉は十一式機関銃で攻撃を始める。

倅田大佐は零式拳銃で攻撃を加える。

九式小銃と十一式機関銃は共に、八式小銃と十式機関銃の改良型である。

詳しい解説は、最後に。

「敵の数が多いわね。」

倅田大佐は、弾倉を新しく装填しながら言った。

弾倉装填まで、僅かに2秒だ。

流石は海軍特殊強襲部隊群の総長だ。

男性隊員も九式小銃に、あらたな弾倉を装填している。

その時間も4秒だ。

熊谷大尉と寺中大尉は、淡々と撃ち続ける。

「大佐。倅田大佐。」

「なに、由紀子ちゃん。」

「このままじゃ、弾薬の無駄です。早く蹴を付けないと。」

「そうね。男！！グレネードで攻撃よ。」

「良いんですか？」

「早くしなさい！！！」

「了解！！！」

男性隊員2人はグレネード攻撃を始めた。

「全滅したみたいね。」

倅田大佐が言った。

「そうみたいですな。」

「進むわよ。」

「了解。」

5人は警戒しながら、ゾンビの屍に近付いた。

「倅田大佐、これを。」

男性隊員の1人がペンダントを手渡した。

そのペンダントにはYANAGIHARAと掘られていた。

「これは。」

「柳原中佐のペンダントですね。」

「それじゃ、このゾンビは……………」

「揚陸軍師団の人達ですかね。」

熊谷大尉が沈痛な面持ちで答えた。

そんな中で、廊下の片隅にアタツシエケースがあるのを寺中大尉が見付けた。

それを倅田大佐に手渡す。

「何かしら。」

倅田大佐はアタツシエケースを開けた。

中には書類が入っていた。

それはこの洋館が、中国のオンブレラ研究所である事を証明するものであった。

「倅田大佐、これは。」

「ええこれで、この洋館の正体が分かったわ。」

「倅田大佐、紙切れが1枚ありますよ。」

熊谷大尉がそれを拾い、倅田大佐に手渡した。

その紙切れは柳原中佐の手紙だった。

『助けに来た者達へ、今すぐ逃げる。オンブレラ研究所の書類を持ってだ。地下研究所にはゾンビの大群や大蛇がいる。扉はロックしたがあと24時間保つかどうか怪しい。今すぐ逃げる。そして、気化爆弾を投下しろ。もはや白兵戦レベルでは抑えきれない。これしかない。頼んだ。』

5人を静寂が包み込む。

倅田大佐は重い口を開いた。

「由紀子ちゃん、柳原中佐達が殺られてから何時間経った？」

「32時間ぐらいですかね。」

「32時間!？」

「32時間!？」

「32時間!？」

「合わせて、96時間。」

「倅田大佐、ボケてる場合じゃないですよ。柳原中佐が言った24

時間のタイムリミットを過ぎてます……今すぐ逃げましょう。」

寺中大尉が声を荒げる。

「分かったわよ。逃げましょうか………」

倅田大佐がそこまで言った時、横の部屋から音がした。

「なに？」

熊谷大尉が十一式機関銃を構える。

男性隊員も九式小銃を構える。

その瞬間……!

ドガッ……!

「ギヤアアアアア」

男性隊員1人が大蛇に丸呑みされた。

「なっ……なに……!？」

倅田大佐が大声を出す。

「大佐……!これが大蛇では？」

「ええそうね。逃げるわよ……!」

倅田大佐の命令で全員がエントランスへ走る。

「早く、逃げるのよ。」

倅田大佐が熊谷大尉と寺中大尉を外に出す。

「さあ、あんたも。」

男性隊員に声をかける。

「いえ自分は、お姉様方の時間稼ぎをします。どうぞお逃げください。」

「なに言ってるの!!!逃げるのよ!!!」

「いえ大丈夫です。いままでありがとうございます。」

「っ!!!バカ!!!」

倅田大佐は洋館を出ていった。

男性隊員はドアの鍵を閉める。

そこへ大蛇が追い付いた。

「さあお前も、最後だ。ここは1時間後には気化爆弾で消滅するからな。」

男性隊員の顔にはうつすらと笑みがあった。

駐屯地司令部

倅田大佐と熊谷大尉・寺中大尉は駐屯地司令部に戻ってきた。

「あら、知恵子ちゃん。終わったの？」

新田長官はコーヒーを飲みながら、答えた。

「新田長官、これを。」

倅田大佐はアタッシェケースを中川副長官に手渡す。

中川副長官は中から書類を取出し、新田長官に手渡した。

「……………やっぱりオンブレラ研究所だったのね。」

新田長官は書類を捲りながら答えた。

「長官、これも。」

中川副長官は紙切れを新田長官に手渡す。

新田長官は紙切れを読んだ。

「倅田大佐、状況はどうだった？」

「最悪です。大蛇やゾンビの大群です。柳原中佐の遺言通り、気化爆弾による攻撃を進言します。」

「分かったわ。しよこたん、1番早く国防総省にこのアタツシエケースを送るにはどうする？」

「1番早いのは、EX富嶽ステルス輸送機に乗り、横田空軍基地へ行き、春嵐輸送ヘリコプターで国防総省のヘリポートへ直接着陸します。所要時間1時間だと思います。」

「それじゃ大至急、手配して。」

「了解しました。」

中川副長官は敬礼をして、アタツシエケースを持って司令部を出ていった。

「それじゃあ、逃げるわよ。」

「了解しました。」

駐屯地全体に新田長官の命令で撤退命令が下された。

駐屯地にいた揚陸軍1個師団はE×富嶽ステルス輸送機に乗り込み、続々と撤退していく。

新田長官と倅田大佐、それに熊谷大尉・寺中大尉もE×富嶽ステルス輸送機に乗り込み、離陸した。

ちなみに、1番最後である。

E×富嶽ステルス輸送機内

「長官、首相官邸オペレーションルームから連絡です。」

機長が新田長官に言った。

そのとたん、座席前に付いてあるテレビが切り替わった。

『京子ちゃん、撤退してるみたいだけど何かあったの?』

「はい。とんでもない事です。それより、うちのしよこたんはまだ

着いてませんか。」

『あっ、新田長官。』

テレビに中川副長官が現れた。

「良かった。無事に着いたのね。早くアタッシェケースを。」

『藤中総理、これを。』

中川副長官が藤中総理に書類を手渡す。

数秒間、静寂が包み込む。

『京子ちゃん、洋館はオンブレラ研究所だったのね。』

「そうです。それとしよこたん。」

『はい。藤中総理、これが柳原中佐の手紙です。』

『……………将希ちゃん、今すぐ飛べるのは飛鳥と富嶽どっち?』

『今すぐですと、那覇空軍基地のGZ飛鳥無尾翼全翼ステルス爆撃機ですね。』

『分かったわ。それじゃ、内閣総理大臣の命令よ。洋館を気化爆弾攻撃しなさい。』

『了解いたしました。オペレーターさん、那覇空軍基地に命令してください。内閣総理大臣と国防大臣の連名で、気化爆弾攻撃を命令

する。お願いします。』

『分かりました。』

「良かった。これで大丈夫です。」

『これで良かったのね。』

数分後。

「飛鳥通りすぎます。」

機長が言ったとたん、飛鳥が通りすぎた。

「これで、バイオハザードは終わったのね。」

新田長官は安堵のため息を吐いた。

GZ飛鳥無尾翼全翼ステルス爆撃機

「GX2トン気化爆弾投下!!」

機長が言ったとたん。

機体下部から10発のGX2トン気化爆弾が投下された。

凄まじい爆発がおこる。

何せ、気化爆弾は核兵器に次ぐ大量破壊兵器だ。

洋館は消滅した。

「51センチGBX5100超々重量徹甲爆弾投下!!」

地下研究所を破壊すべく、51センチGBX5100超々重量徹甲爆弾が投下された。

これは地下800メートルまで到達する事が出来る爆弾だ。地下研究所も破壊されただろう。

「攻撃完了。帰還する。」

バイオハザード終結。

オンブレラ完全崩壊。

日本連邦は人類史上最悪の会社を崩壊させた。

―解説―

九式小銃

全長1093ミリ

装弾数40発

口径6・4ミリ

重量約5キロ（40発弾倉装填）

グレネードランチャー・サイレンサー装備

発射モードを単発か3連発に切り替え可能。

580メートル程度までなら不自由を感じずに射撃が出来る。

十一式機関銃

全長1800ミリ

装弾数7350発（ベルト給弾式）

口径8・46ミリ

発射速度毎分1050発

重量8・3キロ（7350発装填）

5000メートルの射程がある。

零式拳銃

全長220ミリ

装弾数18発

口径9ミリ

サイレンサー装備可能

重量約3キロ

50メートルの射程がある。

タリム盆地の移動要塞

2035年3月20日

日本連邦首都東京市ヶ谷国防総省地下2階作戦会議室

「また鈴木パークか。」

天野国防大臣は、ため息を吐いた。

「その気持ちは私達も同じです。ですが、これ以上問題を増やさな
いために、早急に手を打つ必要があります。」

天野国防大臣に女性士官がはっきりと言った。

「……………そんなにはっきり言わなくても。そりゃ早く解決させたい
よ。」

天野国防大臣が不貞腐れたように答える。

「そんな事はどうでも良いですから、早く藤中総理に知らせに行っ
てください。」

「そうですよ。早く行ってください。」

「のんびりしてる暇は無いです。」

並々ならぬ殺気を感じたのか、天野国防大臣は慌てて椅子から立ち
上がった。

「そ、それでは、行ってまいります。」

天野国防大臣は女性士官達に、敬礼をすると作戦会議室を出ていった。

「全くあんな男と、よく結婚しよう何て思うわよね。頼りないのに。」

「けどその頼りなさが、可愛いんじゃない？」

「そうね確かに、可愛いわよね。」

「結婚式って呼ばれるのかな？」

「当たり前でしょ。国防総省全員を呼ぶみたいよ。」

「国防総省全員を呼ぶの！？」

「それだけじゃないわ。辻大蔵大臣と中野総務大臣も大蔵省・総務省全員を呼ぶみたいだわ。」

「何か桁違いに豪華な、結婚式になりそうね。」

「そうよ。藤中総理はあの鈴木商店の上戸CEOの伯母よ。鈴木商店が準備するんだから、凄いわよ。」

「藤中総理は確か、鈴木商店の相談役よね？」

「そうよ。上戸CEOの上ね。」

「じゃあ、天野国防大臣も鈴木商店の役員か何かになるのかしら？」

「どうかな？」

「なるんじゃない？」

「じゃあ鈴木商店の株式を何割か所有するわけ？」

「そうですね。そうしないと役員にはなれないわ。」

「けど鈴木商店の株式は………」

女性士官達の話は続きそうだ。

「ブエックションー!!」

天野国防大臣が盛大なくしゃみをした。

「将希ちゃん、風邪引いたの?」

「大丈夫ですよ、早紀総理。多分誰かが、噂でもしてるんでしょう。」

「そう。それじゃあ説明を再開して。」

「了解いたしました。」

天野国防大臣はそう言うと、説明を始めた。

「それでは、これをご覧ください。」

天野国防大臣の言葉で、大型液晶モニターに鈴木パークの地図が出てきた。

「このタリム盆地が問題です。これが偵察衛星天界が捉えた、昨年2200時の画像です。」

天野国防大臣の言葉で、画面が切り替わる。

「そしてこれが、明け方の0345時です。」

画面が再び切り替わると、そこには要塞のような物体が2つあった。

「何なのこれは？」

藤中総理が尋ねる。

「我が軍の移動要塞100式超戦車に、似たようなものと考えられます。」

天野国防大臣の言葉に、画面は拡大された。

「1つは全長6キロ・全幅2キロぐらいの移動要塞かと思われます。見る限りでは砲が1門に、機関砲が20門と思われれます。もう片方は、全長8キロ・全幅6キロぐらいの移動要塞だと思われれます。砲が16門確認され、対空ミサイルセルが20セル確認されます。ロケットランチャーも70基確認できます。」

天野国防大臣の話の聞くかぎり、2つの移動要塞は100式超戦車の小型版と言える。

「これについての、対処方法は？」

辻大蔵大臣が聞いた。

「移動要塞には移動要塞です。満州皇国とインド・タイ・マレーシアに配備してある、100式超戦車をタリム盆地に派遣します。200輜も差し向ければ、中国の移動要塞なんて消滅しますよ。」

「そうね。それじゃあさっさと解決して。美好ちゃんが心配してるわ。鈴木パークが完成しないって。」

「もちろんです。美好さんに損はさせません。早急に解決してみせます。」

「早く解決しなさいよ。」

「もちろんです。」

2035年3月21日

鈴木パーク旧ユイメン

満州皇国とインド・タイ・マレーシアから出撃した、移動要塞100式超戦車200輜は鈴木パークの旧ユイメンに集結した。

なお、移動要塞100式超戦車は今後は、鈴木パーク守備隊として活躍する予定だ。

その為、フィリピン・インドネシア・ブルネイ・パプアニューギニアの移動要塞100式超戦車は、鈴木パークに随時輸送予定だ。

その理由は単純明解。

中国が崩壊したからだ。

そもそも、移動要塞100式超戦車は中国軍機甲師団の連邦加盟国
侵攻を、1輜で足止めする事を目的で開発されたのだ。

その中国が崩壊した今、100式超戦車の存在意義は無くなった。

そこで、100式超戦車を鈴木パーク守備隊に配備する事になった
のだ。

なお、インド・パキスタン国境は日本連邦陸軍が最高警戒体制で駐
留している。

「さてと、進撃するわよ。」

100式超戦車統合戦車集団隊長の杉浦友香中佐が命令を下す。

「中国軍の移動要塞がどんなものか楽しみね。」

100式超戦車の車魂、涼子が笑いながら言った。

「目指すはタリム盆地。敵の移動要塞涼子ちゃんの前に、屈伏する
わ。」

杉浦中佐も笑いながら言った。

タリム盆地

中国軍の移動要塞虎頭と毛沢東は、タリム盆地に集結していた。

「紅上将、日本連邦軍の100式超戦車が向かっています。」

「そうか。出来れば戦いたくはないが。」

「紅、私も戦いたくない。」

「美鈴もそう思うか。」

「紅上将、どうしますか？」

「林中将、貴官の意見は？」

「形だけ戦って降伏しましょう。私も日本連邦との戦いは反対でしたから。」

「そうか。美鈴もそうか？」

「ええ、そうよ。」

「了解した。日本連邦とは形だけ戦って降伏だ。」

タリム盆地の移動要塞（後書き）

次回、好戦的な日本連邦軍と非戦的な中国軍の戦いです。

中国軍は非戦的だから勝負

は直ぐに終わるでしょう。

移動要塞決戦（前書き）

この小説は、架空戦記小説なのか、レズ小説なのか、たまに自分でも考える時があります。

この小説は何処へ行くのでしょうか？

こんな小説ですが、見捨てないで下さい。

移動要塞決戦

タリム盆地

100式超戦車統合戦車集団は中国軍移動要塞を捉えた。

100式超戦車CIC

100式超戦車は従来の戦車とは違い、CICまで設置されている。

何せ、全長10キロ・全幅8キロの移動要塞だ。

その分巨大な為、移動速度は28キロとなっている。

本来100式超戦車は侵攻用ではなく、防衛用である。

このような用兵思考は無かったが、今回はこのようにせざるを得ない。

「杉浦中佐、敵を捉えました。」

オペレーターがレーダーを見ながら言った。

「カメラの映像をモニターに出して。」

「モニター切り替えます。」

オペレーターの言葉に、モニターが切り替わった。

そこには、2輦の移動要塞が映し出されていた。

「涼子ちゃん、どう思う？」

杉浦中佐は、100式超戦車の車魂である涼子に尋ねた。

「……………腹立たしい。」

「？」

杉浦中佐は首を傾げる。

「私に似た奴が、この地球上にいる事が気に入らない。あんな奴は早く殺しましょ。」

「……………そうね。早く片付けちゃおうか。」

杉浦中佐はマイクを取った。

「全車輦に命令よ。陣形2にて最大速度で前進。敵移動要塞を殲滅するわよ。」

杉浦中佐の命令が飛ぶ。

なお、陣形2とはV字陣形の事である。

陣形2で進みV字の空間に敵を飲み込み、出口を塞ぐ。

O字のようにしてから、袋叩きにするのだ。

まあこれは、建前であり、本心は別にある。

今回の200輻の内、180輻は男だけが乗っている。

それらをV字の先に配置して敵の攻撃により、合法的に殺害するの
が、目的となっている。

この秘密命令を知っているのは、杉浦中佐と車魂の涼子だけである。

秘密命令を出した相手は、藤中総理である。

杉浦中佐と車魂の涼子は、藤中総理の考える『日本連邦女性帝國計
画』に賛同しており、この秘密命令を実行すべく働いている。

現在の日本連邦総人口は、2億1000万人。

その内女性の割合は98%で、2億580万人を占めている。

残りの420万人の男性で、20万人を合法的に殺害して400万
人を、奴隷又は家畜として扱うべきという恐るべき計画である。

この計画を発案したのは、藤中総理。

それに、辻大蔵大臣と中野総務大臣が賛同。

鈴木商店の上戸CEOも賛同しており、手始めに鈴木商店の男性社員を抹殺し始めている。

この計画は主要連合国でも進められている。

地球上の男性の命運は、尽きようとしていた。

中国軍移動要塞虎頭CIC

中国軍の移動要塞虎頭もカメラで日本連邦陸軍の移動要塞を捉えていた。

「紅上将、日本連邦陸軍の移動要塞を捉えました。」

副司令官の林中将が、紅上将に言った。

「そうか。状況は。」

「現在100式超戦車は、陣形2にて前進中です。このままですと包囲され、袋叩きにあいます。」

「……いくら降伏するとは言え、袋叩きはキツいな。」

「なら、どうするの。日本連邦陸軍と戦うの？」

「紅上将。如何しますか？」

「攻撃するしかない。」

紅上将の言葉で、CIC全体に緊張がはしる。

「紅ちゃん、攻撃しちゃうの？」

「ああ。それしかない。それに、我が国への核攻撃への復讐だ。」

「しかし紅上将。日本連邦は自国領である、南米大陸が核攻撃を受けてます。我が国に非があるのでは？」

「そうよ紅ちゃん。日本連邦の核攻撃は、報復攻撃としての大義名分があるわ。祖国中国は、間違いを犯したのよ。」

林中将と車魂の美鈴は、日本連邦の核攻撃を報復として認めている。

紅上将は、日本連邦の核攻撃に正当性はないと思っている。

しかし、紅上将・林中将は知日派でもあり紅上将に至っては、20歳の頃には日本連邦への留学経験がある。

紅上将・林中将は開戦当初から、日本連邦との戦いは反対だった。

これは車魂の美鈴にも当てはまり、日本連邦との戦いを残念に思っ

ている。

「日本連邦の核攻撃で、俺の家族は死んだんだ。せめて、これだけは認めてくれ。」

紅上將は頭を下げた。

林中將と美鈴は、顔を見合わせた。

そして美鈴は、紅上將に近付くと両手に手を添えた。

「一回だけよ。」

美鈴は微笑みながら、紅上將に言った。

「分かった。」

紅上將は、頭を上げると命令を下した。

「攻撃用意!!!」

紅上將の命令で慌ただしく、攻撃準備にはいる。

「攻撃準備完了!!!主砲目標に照準ロック完了!!!」

林中將が言った。

「40センチ荷電粒子砲発射!!!」

紅上將の命令で主砲が放たれた。

「ゴメンね。100式超戦車の車魂。」

美鈴の目には涙があった。

100式超戦車CIC

「敵移動要塞、発砲!!!」

オペレーターが叫ぶ。

杉浦中佐はマイクを取ると、スイッチを切り替えて話始めた。

切り替えた先は20輦の女性だけが乗る100式超戦車であった。

「今すぐ、前進を止めて!!!全速後退よ!!!」

命令を受けた20輜は、後退を始めた。

100式超戦車CIC

一方こちらは、男だけが乗る100式超戦車。

「大尉！！中佐直属の戦車集団が後退します！！！」

「フンツ！！所詮は女だ、女が戦争の指揮官をやれる訳が無い。怖くなって逃げ出したんだろうよ。」

「大尉！！敵の攻撃来ます！！！」

「なに、心配するな。そんな攻撃なんか、電磁装甲で防げる……………」

大尉が笑いながら言ったその時。

ドガアアアアン！！！！！！

100式超戦車180輛は中国軍移動要塞虎頭の、40センチ荷電粒子砲の攻撃を受け、消滅した。

100式超戦車CIC

「キヤアン!!」

車魂の涼子が悲鳴をあげたため、杉浦中佐が振り替える。

「涼子ちゃん!!大丈夫?」

「イヤッ!!見ないで!!」

涼子は俗に言う、うつぶん態勢を取っていた。

「車魂はその車輛全体の魂として宿るから、車輛が破壊されれば少しずつダメージを受けるのね。それが今回は涼子ちゃんが着てる、服に被害が出たと。フッフ、良い体。」

杉浦中佐は口からでた、涎を拭いていた。

対する涼子は、その豊満な乳房を両手で隠し、下半身は片足を持ち上げて、太股で隠している。

全裸ではなく服が破れているだけなので、余計に官能的である。

「フッフ、涼子ちゃん。女だけなんだから、隠さなくて良いのよ。」

杉浦中佐が涎を垂らしながら、涼子を捕食しようとして近づく。

「イヤッ！！目が、目がイッてる！！」

「大丈夫よ。涼子ちゃんもイカしてあげるから。」

涼子は壁に追い詰められた。

「フッフ、もう逃げられない。」

「やめて！！」

「かゝわゝいゝい。」

「助けて！！」

涼子の乳房に、杉浦中佐の涎だらけの手が触れようとした瞬間。

「中佐！！まだ戦闘は終わっていません。」

オペレーターが大声で、怒鳴った。

「……………そうね。」

杉浦中佐は正気を取り戻した。

「早く終わらせないとね。」

杉浦中佐は、涼子の手を取った。

「な、何ですか？」

怯えた目で、杉浦中佐を見る。

「何もしないわよ。ただ、私の膝の上に座ってくれば良いから。」

杉浦中佐はそう言って、司令官席に座る。

「分かりました。」

涼子は杉浦中佐の膝に座った。

「フッフ、甘いわ。」

「イヤッ!!止めて下さい!!」

杉浦中佐は涼子の体を、足で挟んだ。

そして、その巨乳を揉み始めた。

「アアン。」

甘い声が漏れる、涼子。

「フッフ、可愛い。」

杉浦中佐は、左手で涼子の巨乳を揉みながら、右手でマイクを取る。

「みんな、まずは小さい方の移動要塞を攻撃するわよ。」

杉浦中佐の命令で全車輛が攻撃態勢に入る。

「中佐、全車輛攻撃準備完了です!!!」

オペレーターが杉浦中佐に、伝えた。

「フッフ、分かったわ。攻撃開始よ!!!」

「ッアン!!!」

杉浦中佐の声と、涼子の甘い声で攻撃が始まった。

中国軍移動要塞虎頭CIC

「紅上将！！リニアガン攻撃です！！」

林中将が言った瞬間、隣を走っていた毛沢東が爆発した。

45センチリニアガン20発と295ミリリニアガン600発の直撃を受け、毛沢東は大爆発を起こし消滅した。

「も、毛沢東消滅！！」

オペレーターが叫ぶ。

「消滅！？」

「……………違う！！全員何かに掴まれ！！」

うろたえる林中将を尻目に、紅上将が叫んだ。

次の瞬間。

ドガアアアアン！！！！

虎頭に強烈な振動が襲い掛かった。

「大丈夫か？」

紅上將が大声を出す。

「大丈夫です。」

「うう、体が重い。」

「美鈴!!!」

紅上將は、倒れた美鈴を抱き起こした。

「美鈴!!!」

「だ、大丈夫よ。体が重たいけど。」

「そうか。」

「林中將、ホバリングシステム機能停止しました!!!」

「なに!?!」

オペレーターの言葉に、林中將は叫んだ。

「紅上將。もはやこれまでかと。」

「そうだな。荷電粒子砲が5分に1発だからな。」

「紅ちゃん、終わりにしましょう。」

「美鈴。そうだな、もう終わろう。戦いは終わった。オペレーター、100式超戦車に降伏すると伝える。」

「……………」

「どうした？」

「紅上将。通信機が大破しました。通信手段はありません。」

「何だと…！」

「紅上将…！100式超戦車が、我々を包囲しています。」

レーダー員が叫ぶ。

「完全に包囲されました。真っ直ぐこっちに向かってます…！」

「くそっ…！」

100式超戦車CIC

「杉浦中佐、包囲完了しました。」

「フッフ、ありがとう。」

杉浦中佐はオペレーターに礼を言う。

礼を言われたオペレーターは、複雑だ。

礼を言われるのは嬉しいが、今の状況は……

「アアン!!」

「気持ち良い？」

「ハ、ハイイツ!!」

「耳たぶも美味しいわ。」

「アアン!!」

こんな状況だ。

しかし作戦遂行中は、杉浦中佐の命令が絶対だ。

何をしていようが、命令を出せる状況であれば部下は従わなければいけない。

「それじゃ、突撃よ。」

杉浦中佐の命令で、待機していた1個大隊が敵の移動要塞に突撃を開始した。

中国軍移動要塞虎頭CIC

「紅上将！！敵の陸軍が突撃してきました！！」

「こちらの旅団はどうした？」

「2個旅団共に、毛沢東の下敷きとなり全滅です。」

「乗員は？1950名が乗っているだろう。」

「死亡です。CICがこの虎頭の中で頑丈な部分ですので、CICの20名だけが生きています。」

「紅ちゃん、もう終わりね。」

「ああ、そうだな。これで……………」

紅上將が話していると、突如日本連邦陸軍が突入してきた。

「撃て!!」

ドガガガガガガッ!!!!

「止める!!止める!!」

紅上將が叫ぶ。

しかし日本連邦陸軍は攻撃を続ける。

「グハッ!!」

林中將が倒れた。

「林!!」

紅上將が林中將に駆け寄る。

「林!!大丈夫か?」

「紅……上將、もう無……理で……す。」

「大丈夫だ!!」

「今ま……で、あ……りが……とっ……げ……い……ました。」

林中將はそう言うと、息耐えた。

「紅勇虎上将だな。」

日本連邦陸軍の女性隊員が尋ねた。

「そうだ。」

はっきりと、大声で肯定した。

「射殺しろ。」

女性隊員の命令で、紅勇虎上将に銃撃が加えられた。

「これで私は、日本連邦のものね。」

移動要塞虎頭の車魂美鈴は、笑った。

100式超戦車CIC

「杉浦中佐、中国軍移動要塞の車魂です。」

女性隊員が美鈴を連れてきた。

「涼子ちゃん、お友達になれそうね。」

「ハイ。そ、そうですね。」

車魂の美鈴は、その光景に見とれていた。

「ああ、あなた名前は？」

杉浦中佐が美鈴に尋ねる。

「み、美鈴です。」

「美鈴ちゃんね。」

「はい。」

「結構な巨乳ね。」

「えっ!？」

「いらっしやい。」

「いや〜」

美鈴も杉浦中佐の膝の上に座らされた。

涼子と美鈴の巨乳を、力任せに揉み続ける。

「アアン。」

「アンツ！！」

「フフフ、可愛い。」

杉浦中佐の目は完全にイッている。

移動要塞対決は、100式超戦車の勝利となった。

中国軍の移動要塞虎頭は、乗員は射殺され、日本連邦陸軍に鹵獲された。

なお、虎頭の上に乗っていた毛沢東は、リニアガンの砲撃で粉々に破壊された。

虎頭は修理と改装を受け次第、鈴木パーク防衛100超戦車統合戦車集団に編入される。

鈴木パークはこれにより、敵勢力は排除された。

銃声無き欧州戦（前書き）

サブタイトルの意味が分からない方は、本文を良く読んでください。

銃声無き欧州戦

2035年3月25日

日本連邦中は、ニュース番組から目が離せないでいた。

事の発端は、昨日の夕方である。

共産党政権が樹立されたフランス・ドイツでの、国民によるデモである。

共産党政権樹立後、早々に中東方面側の支援を表明したフランス・ドイツ両国であったのだが。

日本連邦軍の攻撃により、中華人民共和国は崩壊。

地球上から、中華人民共和国は消滅した。

さらに日本連邦は、国際動物学会に中華民族の絶滅種登録を行わせた。

中東方面側を支援すれば、祖国も日本連邦によって崩壊させられる。

それなら、早急に連合側へ復帰するべきだ。

そう考えたのである。

ドイツはG8参加国であったが、今だとG8降格で済むと考えて行動している。

国民によるデモが、政府を動かしたのは今日の明け方である。

フランス・ドイツ両国は、政府内会議及び両国首脳会談により今後の対応について検討中である。

結論は正午に出すと言っていたが、正午を過ぎても未だに結論は出されていない。

日本連邦首都東京霞ヶ関首相官邸

応接間には藤中総理以下、天野国防大臣・辻大蔵大臣・中野総務大臣が待機している。

「……………まゝだ」

「そうですね。しかし総理、良いんですか？フランス・ドイツの降伏を認めて。」

天野国防大臣は、藤中総理に疑問を投げ掛けた。

「良いのよ。たまたま共産党政権が樹立されて、それが降伏するって言っているんだから。もとの連合国に戻るのよ。」

「これで欧州まで、遠征しなくてすみましたね。」

「大蔵省としても、無駄な歳出を無くす事が出来て良かったわ。」

中野総務大臣と辻大蔵大臣は、本気で安心している。

まあ、確かに欧州遠征はいきなりだったので、無駄な歳出が増える所だった。

「総理では、今後の敵は中東方面側だけと言う事になりますね。」

「そうなるわね、将希ちゃん。真の敵は中東ね。」

「しかし敵は中東だけなのかな。」

「どうしました？喜恵さん。」

「最近ですけど、AUが中東方面側に接近しているんですよ。」

「確かにそんな情報がありましたね。CIAでも情報を掴みました。しかし、中東方面側とAUは最終調整に入っていると思われるので、もはや交渉決裂を待つしかありません。」

「……………将希ちゃん」

「はい？」

3人の怒気に天野国防大臣は情けない声をあげる。

「何の為のCIAなのかな？」

「いや、その。」

「日本連邦の国益を、秘密裏に守るのがCIAの仕事でしょう。」

「はい、そうです。」

「怠慢ですか？」

「ま、まさか。」

「私は日本連邦内閣総理大臣よ。」

「そうですね。」

天野国防大臣の額からは、もはや滝のように汗がながれている。

「何時でも、好きなように出来るのよ。」

「……………」

「喜恵ちゃんは、総務大臣よ。死刑にも出来るのよ。」

「は、はい。」

「いくら将希ちゃんが、国防大臣と言っても最高司令官は私なんだからね。分かった？」

「はい！！」

天野国防大臣は最敬礼を3人にした。

そこへ、藤中総理の秘書官が慌てて入ってきた。

「藤中総理、フランス・ドイツ両国の結論が出ました。」

秘書官はそう言うと、テレビの電源をいれた。

『それでは、生中継です。』

アナウンサーが言うと、画面が切り替わった。

フランス・ドイツ両首脳が、演説台に立っている。

『我がフランス及びドイツ政府は、連合国側に降伏します。』
フランス大統領が話し始めた。

『日本連邦軍の侵攻により中華人民共和国は消滅しました。我が国も中東方面側を支援していれば、遠くない未来に消滅されたでしょう。そこで、フランス・ドイツは連合国側に降伏します。我々共産

党政権は総辞職して、民主主義政権が復活します。もちろん、我々は政治犯として逮捕されます。なお中東方面側であったトルコ及びアルゼンチンも、連合国側に降伏すると言っ連絡を受けました。日本連邦政府の判断を待ちます。」

結局、フランス大統領が話すだけで終わった。

『生中継でお送りしました。これにより藤中総理の判断次第で、フランス等の運命が決ります。現時点で、藤中総理は発言していません。』

そこで、秘書官はテレビの電源を切った。

「総理、如何しますか？」

秘書官が藤中総理へ質問する。

「降伏を認めるわ。」

「了解いたしました。それでは、至急会見場を準備いたします。」

「分かったわ。将希ちゃんに任せるわ。」

藤中総理の言葉に、秘書官と天野国防大臣が驚いた。

「何も驚かないで良いわよ。将希ちゃんは、内閣では2番目に重要な大臣よ。副総理みたいなもんよ。私の代わりに会見するのは、当然よ。」

「わ、分かりました。」

天野国防大臣は、渋々了承した。

秘書官は事の結末を見ると、会見場の準備を始めた。

それから1時間後。

天野国防大臣による記者会見が始まった。

「藤中総理は、フランス・ドイツ・トルコ・アルゼンチンの降伏を認めると言う事です。制裁としては。ドイツをG8から降格させ、フランスを国際連邦常任理事国から降格させる。アルゼンチンの国家常駐税を倍にする。以上です。」

天野国防大臣の発言に、記者が質問する。

「国防大臣、ドイツが抜けたらG7になるのですか？」

「いいえ。ドイツの代わりに、神聖イスラエル神国がG8に加盟し

ます。」

「では、国際連邦常任理事国は？フランスの代わりに何処か違う国が入るのですか？」

「国際連邦常任理事国は、我が日本連邦・アメリカ合衆国・イギリス・ロシア連邦・神聖イスラエル神国の5カ国になります。」

「では、フランス・ドイツが降伏した事により、欧州戦が終結。アルゼンチンが降伏した事により、南米領での戦いが終結するのですね。」

「そうなりますね。」

「アルゼンチンの国家常駐税を倍にする件ですが、大丈夫ですか？」

「大丈夫です。払えないのなら、アルゼンチン国民を南極大陸へ叩きだします。そもそも、人の土地に居候しておきながら、宣戦布告するのが間違いです。」

天野国防大臣がそこまで言った時、藤中総理の秘書官が会場に入ってきた。

秘書官は天野国防大臣に耳打ちする。

「皆さん、もう一つお知らせです。ブラジルが中立を宣言しました。アルゼンチンが降伏した事により、第三次世界大戦は中立として、国内復興を行うとの事です。」

天野国防大臣は、早口で話し終えた。

「それでは、会見を終わります。」

フランス・ドイツ・トルコ・アルゼンチンはその後、民主主義政権が樹立された。

これにより、中東方面側へ宣戦布告。

世界は、連合国側と中東方面側へ完全に2分されたかにみえた。

しかし、28日。

驚くべきニュースが、再び世界を駆け抜けた。

AU（アフリカ連合）が中東方面側に付いたのだ。

そして中東方面側は、連合国側にある提案をした。

3ヶ月の休戦案であった。

銃声無き欧州戦（後書き）

意味は分かりましたでしょうか？

戦争が起こる事なく、欧州戦が終結したと言っ事です。

3ヶ月休戦協定成立

2035年3月28日

AUと結託した中東方面側は、連合国側に対して3ヶ月休戦案を提示してきた。

休戦案提示の理由は、吸収した元中国軍とAU軍との合同演習のためだろう。

吸収した元中国軍とAU軍を合わせると、中東方面側の軍は凄まじいものとなった。

しかし凄まじいものにはなったが、共同作戦が行えるような状況ではない。

掻き集めただけの、烏合の衆同然な有様だ。

そこで、連合国側に3ヶ月休戦案を提示し、合同演習を行おうという考えだろう。

しかしそれを、藤中総理が認めるかどうか。

いくら何でも、それは認めないだろう。

日本連邦首都東京霞ヶ関首相官邸

「良いわよ認めるわ。」

藤中総理のすつとんきょうな言葉に、天野国防大臣は口を大きく見開いた。

「まあ、中東方面側にAUが付いても何も問題はないしね。」

「確かにその通りですね。我が軍と中東連合軍の軍事力は雲泥の差ですからね。」

「そう言う事よ将希ちゃん。あなたは認めたくないと思うけど、私達3人は認めるのよ？それとも何か？私達3人に齒向かうのかな？」

藤中総理の言葉に、天野国防大臣は殺意を感じた。

「いや、まさか。そんな訳ないですよ。私は早紀総理・亜由美大蔵大臣・喜恵総務大臣の意見に賛成です。齒向かうだなんて、そんなハハハ。」

天野国防大臣は必死である。

「で、認めてあげるって言うてるのに、向こうは何も連絡してこな

「いじゃない。」

「大丈夫ですよ、早紀総理。正午に連絡を入れると、その時に詳しい休戦案を言うとの事です。」

「将希ちゃん、もう正午よ?。」

「えっ!?!本当ですか亜由美さん!?!。」

「そうよ。正確には、12時1分14秒よ。」

「大変だ!?!ちょっと失礼します!?!。」

天野国防大臣はそう言うと、慌てて応接間を出ていった。

「まったく……………」

「情けない。」

「まあ、そこが可愛いんですけどね。」

3人の美女はそう言うと笑った。

30分後

天野国防大臣が慌てて、応接間に戻ってきた。

「休戦案の内容を言いますと、1つだけです。『3ヶ月間の双方による軍事行動の停止。』これだけです。」

天野国防大臣は、書類を読みながら言った。

「本当にこれだけ？」

「そうです、早紀総理。中東方面側はそれだけの条件で良いと。」

「それならば是非も無いわ。休戦案承認よ。」

「確かにこれだけの条件なら、承認出来ます。」

「私も承認します。」

「決まりよ。休戦案承認、3ヶ月の休戦よ。」

休戦案は承認された。

日本連邦の独裁的な判断だったが、連合国各国も部隊再編を行えるため3ヶ月休戦協定を結んだ。

なお、休戦協定は即日施行された。

これにより連合国側と中東方面側は、7月1日まで休戦する事になった。

連合国艦隊に至っても同様で、休戦の間は本国へと帰還させている。

日本連邦は律儀に休戦協定を守るようである。

この休戦協定は、国民にも支持された。

人類史上最大とも言える、大戦争に一時期の休戦期間が成立したのである。

国民も暫くの間は、安心出来るであろう。

と言っても、戦場は今後は遠く、中東とアフリカとなる。

国民に直接関わるような被害は、無くなるはずだ。

ICBMが飛んでこなければの話ではあるが。

3ヶ月休戦協定成立（後書き）

次回から10何話ほど、戦争から離れます。

内閣改造が行なわれたり、上戸CEOの卒業式が行なわれたり、憲法改正や結婚式、海軍の演習等々

第1次藤中改造内閣成立

2035年4月1日

この日、ニュース番組では内閣改造のニュースで持ちきりであった。事の発端は、先日の事である。

藤中総理はいきなり、内閣改造を明言したのだ。

明日には改造内閣の閣僚を発表するとも、宣言した。

その為、ニュース番組は朝からその事だけを、報道していた。

日本連邦首都東京霞ヶ関首相官邸

藤中総理は、総理執務室で役職決めに翻弄していた。

「めんどくさっ!」

藤中総理はそう言うと、コーヒーを一口飲んだ。

「内閣改造何て、言わなければ良かった。」

藤中総理が言った時、扉をノックする音が聞こえた。

「早紀総理、入りますよ。」

天野国防大臣であった。

「亜由美さんと喜恵さんも、来てますよ。」

天野国防大臣の背中から、辻大蔵大臣と中野総務大臣が顔を出す。

「丁度良かったわ。役職決めを手伝って。」

「もとより、そのつもりで来ました。」

「早紀総理1人だと、しんどいですからね。」

「私達も手伝います。」

「ありがとうございます。」

藤中総理は3人を抱き締めた。

「次は環境大臣だけど、誰が良い？」

藤中総理が書類を捲りながら、3人に聞いた。

「この人はどうですか？」

「喜恵ちゃん、その子はダメよ。巨乳馬鹿よ。」

「じゃあ、この子は？」

「その子良いわね。」

「昔、大蔵省で金融局長をやっていたからね。」

「じゃあ、亜由美ちゃんの知り合い？」

「はい。」

「決まりね。この子が環境大臣。」

「次は、国家公安委員長ね。」

「早紀さん、生田さんを推薦します。」

「どうしたの？喜恵ちゃんの知り合い？」

「はい。」

「私も賛成よ。早紀ちゃん、恵ちゃんにしましょ。」

「そうね。国家公安委員長も決まりね。」

（さつきから、話しに入れてもらえないのは気のせいかな？しかも、女性しか選んでないような。）

天野国防大臣は、コーヒーを飲みながら3人が勝手に決めるのを見守るだけだった。

同時刻生田恵実家

「恵さん、内閣改造ですがどうなるんですかね。」

二宮がテレビを見ながら言った。

「どうなるのかしらね。けど、内閣は変わっても私の行雄ちゃんへの愛は変わらないわよ。」

生田はそう言つと、二宮の腹の上に乗った。

「め、恵さん？」

「大丈夫よ。ちょっと食べるだけだから。本番は夜だけど、味見しないかね。」

生田はそう言つと、腹の上から降りて、二宮をお姫様抱っこした。

「さあ、ベットに行くわよ。」

「た、助けて〜」

二宮の叫び虚しく、ベットに投げ付けられ、生田が飛び掛かってきた。

「さあ、楽しみましょう。」

「せ、やめて……………」

生田と二宮の姿は、布団の下へと消えた。

1時間後

「　　」

「あら、電話ね。」

生田は布団から出てくると、受話器を取った。
見事な乳房が眩しい。

『も〜しも〜し。』

藤中総理の声であった。

「そ、総理。」

生田は立ち上がった。

『フッフ、驚いたみたいね。』

「は、はい。」

『電話の内容分かる？』

「いいえ。」

『いまニュースで、内閣改造の事言ってるでしょ。』

「はい。朝からそれだけですな。」

『それで、恵ちゃんに吉報よ。』

「?」

『恵ちゃんを、国家公安委員長に任命するわ。』

「ええっ!!!本当ですか?」

『そうよ。本当よ。それだけど、今から首相官邸に来れるかしら?』

「はい!!!分かりました。」

『フッフ、待ってるわね。』

電話は藤中総理から切れた。

生田は、興奮していた。

念願だった、国家公安委員長に任命されたのだ。

生田は早速、スーツに着替え始めた。

ブラジャーを着け、パンティーを履き、カッターシャツを着る。

黒い編みタイツを履き、スカートを履く。

そして、上着を羽織った。

生田は、部屋を出る前に未だに気絶している二宮にキスをし、それから出ていった。

午後3時

首相官邸で記者会見が行われた。

藤中改造内閣の閣僚名簿が読み上げられるのだ。

「皆さん、それでは改造内閣の閣僚を発表します。」

記者会見が始まった。

「それではまずは、国防大臣。まあ皆さん予想出来てるわね、天野将希よ。」

藤中総理が名前を言うと、天野国防大臣が入ってきた。

どうやら、1人ずつ入ってくるようだ。

「次は大蔵大臣、辻亜由美。」

辻大蔵大臣が入ってくる。

「総務大臣、中野喜恵。」

中野総務大臣が入ってくる。

生田恵実家

「。」。」

気絶していた二宮が目を覚ました。

「あれ、恵さんがいない。」

二宮が辺りを見回していると、テレビから驚くべき事が聞こえた。

『国家公安委員長、生田恵。』

「恵さん!?!」

二宮はテレビに食らい付く。

「め、恵さんだ!?!」

確かに生田であった。

その艶やかな姿に、二宮は鼻息を荒くする。

「恵さん!?!綺麗です!?!美しいです!?!恵さんは女神だあ!?!」

午後5時

暁美女帝の内閣成立許可を受け、第1次藤中改造内閣は正式に成立した。

第1次藤中改造内閣

第115代内閣総理大臣
藤中早紀

国防大臣
天野将希

大蔵大臣
辻亜由美

総務大臣
中野喜恵

経済産業大臣
宮崎真香

文部科学大臣

吉野千里

厚生労働大臣

秋山好香

法務大臣

内田優子

農林水産大臣

今野幸江

環境大臣

友崎和美

国土交通大臣

麻田桃香

大日本帝國連邦共栄大臣

木崎衣世

宮内大臣

伏見宮千恵美内親王

CIA長官

花木藍子

国家公安委員長

生田恵

海軍軍令部総長

市ヶ谷紗耶香大将

陸軍参謀総長

桐島美貴子大将

空軍統合総長

新野美雪大将

揚陸軍総長

佐野亜弥大将

国際連邦大使

水木鈴子

上戸CEO卒業式

2035年4月3日

藤中内閣閣僚は、上戸CEOの卒業式に出席した。

藤中改造内閣成立から2日経過したが、まさか卒業式出席が初仕事とは思っていなかっただろう。

しかし、今や日本連邦は藤中総理により、私的に保有されていると言っても過言ではない状況にある。

それに、世界1の金持ちである上戸CEOの卒業式に出席する事が出来るため、喜んでいる閣僚がいるのも事実だ。

藤中総理達は、政府専用機で播磨州兵庫県神戸市へと向かった。

現在は、新神戸国際空港から上戸CEOの高校へと向かっている。

その光景は、凄まじいものであった。

黒塗りの政府公用車が車列を作って、走るのもそうであるが、護衛が凄い。

陸軍の95式戦車や20式装甲車が政府公用車の周囲に展開し、空軍の陣風戦闘機が上空で警戒飛行を続ける。

そのような光景が、上戸CEOの高校に着くまで見られた。

播磨州兵庫県神戸市県立高校

政府公用車の車列は、上戸CEOの高校へと到着した。

特別高等警察が藤中総理以下、閣僚の周囲を囲む。

「みんな降りたわね。」

藤中総理が声を掛ける。

「それじゃ、行くわよ。」

藤中総理達は卒業式の行われる、講堂へと向かった。

卒業式会場

卒業式とは思えないほど、豪華な装飾品が講堂に飾られていた。

県立高校とは名ばかりで、実体は鈴木商店の影響が強い。

CEOが高校に通っており、その伯母で尚且つ鈴木商店相談役が総

理大臣であるため、当然であろう。

そんな中で、在校生は席に着き、卒業生も入場してきた。

上戸CEOは、ソファーに座っている。

他の生徒や先生・校長までパイプ椅子なのに、贅沢なもんだ。

「日本連邦内閣総理大臣が入られます。」

教頭の言葉に、全員が立ち上がった。

講堂の扉が開き、藤中総理が入ってきた。

その後ろから、辻大蔵大臣や中野総務大臣が入ってくる。

天野国防大臣は、最後に入ってきた。

顔がポコポコに腫れているのは気のせいか？

政府公用車の内で何があったのか？

「美好ちゃん。卒業おめでとう。」

藤中総理は上戸CEOの元へ駆け寄った。

「伯母さま、わざわざありがとうございます。」

「良いのよ。可愛い美好ちゃんの卒業式よ。出席しないとね。」

「ありがとうございます。」

「もう、堅苦しいのは無しよ。」

藤中総理はそう言っていると、上戸CEOの頭を撫でた。

その後、卒業証書が1人1人に手渡され、国歌斉唱と万歳三唱で卒業式は終わった。

卒業式は終わったが、藤中総理達が来ているので、藤中総理が演説する事になった。

藤中総理は壇上に立ち、話し始めた。

「みんな、卒業おめでとう。これでみんなも社会の1員ね。卒業後の進路希望を見せてもらったけど、半々ね。半分は就職で、もう半

分が軍に入るみたいね。就職も良いわよ。けど、その8割が鈴木商店に就職するみたいね。けど鈴木商店グループに就職しなくても、日本全国の会社は殆どが鈴木商店傘下に入ってるから、どうやっても鈴木商店に関係する所なのよね。美好ちゃんの部下になるのね。就職するまでは、同級生だけど就職したら美好ちゃんは、雲の上の人になるからね。簡単には会えなくなるわ。官僚に就職した人が少ないのは悲しいわね。まあ、自由だから良いけど。もう半分は、軍に入るけど。海軍が多いわね。その次が空軍で、揚陸軍・陸軍となるわね。海軍に入るなら、海軍兵学校に2年・国防大学校に1年で入れるわ。他の3軍も各兵学校に2年・国防大学校に1年で入れるわ。日本連邦は、頭が悪くて・体力が無くても軍に入れるわ。実力主義だからね。体力は兵学校で鍛えられるはずだから大丈夫。国防大学校で、各配備希望の軍局で戦術や戦略を学ぶ事になるわ。いまあそこで、ボケっとしている将希ちゃんも、元海軍大将だからね。あんな子でも、大将になれるのよ。頼りなさそうだけど、戦術・戦略・指揮力で勝てるのはいなかったわ。まあ、典型的な軍事馬鹿ね。

藤中総理の言葉に、天野国防大臣は照れている。

「仕事も実力主義だから。エリートが上司なわけないわ。頭が良くても、バカはいるからね。みんなも、勉強ばかりやらずに人間性を高めるように。人間は、勉強が全てじゃないわ。勉強が出来なくても、人を思いやる心や助け合う心があれば良いの。それを忘れないでね。」

藤中総理は一礼すると、あいさつを終えた。

次は、天野国防大臣がマイクの前に立った。

「皆さん、卒業おめでとう。4年間の高校生活はどうだったかな？鈴木商店の美好ちゃんがいいたから、いろいろ豪華だったと思うけど。ちよつと、男性生徒立ってくれるか？」

天野国防大臣の言葉に、4人が立ち上がった。

「少ないな。女性296人に対して男性4人。女男共学だよね？うん、そうだよ。それなのに、男性4人とはな。どうかね？襲われたか？」

天野国防大臣の言葉に4人の男性生徒は、一様に頷く。

「……………そうか。もはや今の時代、男に生まれたらレイプされるのは当然だな。今や男性出生率は100万人に1人とも言われている。何故こうなったのか。自然の摂理に逆行している。これはもはや、世界規模で起こっている。男性は絶滅へのカウントダウンに入ったのだらう。男性諸君、もはや女性に服従するしか男が生き残る道はない。自然には逆らえない。男性は女性に服従しろと言う事だ。見えざる手が、そうさせているのだらう。女性に服従しろ、とな。4人とも、これからもしかしたらもっと大変な事になるかもしれんが、頑張ってくれ。」

天野国防大臣のあいさつは終わった。

上戸CEOの卒業式は、無事に終わったのである。

―解説―

特別高等警察

内閣府管轄の国家公安委員会の部局。

要人警護を任務とする。

諸外国で言う、SPやシークレットサービスにあたる。

万歳三唱

基本的に万歳三唱は、陛下を讃えるものである。

そのため、『暁美女帝陛下万歳』と言う。

国防大学校

国防総省付属する。

各兵学校で軍事訓練を受け、その後国防大学校で戦術・戦略・指揮力を学ぶ。

日本連邦軍は実力主義のため、幹部養成の学校ではない。

各兵学校2年・国防大学校1年の過程を経て、軍人になれる。

4年間の高校生活

1958年の教育基本法改正による。

従来の6・3・3教育から、4・4・4教育に改正。

この時、高校教育も義務教育化がなされた。

上戸CEO卒業式（後書き）

次回は……

分かりません。

女王閣議

2035年4月5日

首相官邸の閣議室では、藤中改造内閣成立以後、初となる閣議が開かれた。

「憲法にはつきりと、男性は女性の奴隷であると書いた方が良くしらね？」

「それは良い考えです。男性は女性の奴隷にするべきです。」

「いえ、奴隷だと人間です。人間性を否定して、家畜にするべきです。」

「私は奴隷で良いわよ。セックス奴隷ね。」

「けど家畜で、飼育・調教をした方が良くいんじゃない？」

「この際男は、国が管理して全国の女性に家畜として渡したら良いと思います。」

2時間前からこんな話しが続いている。

天野国防大臣は、それを黙って聞いているしか出来なかった。

少し前に、意見を言おうとしたが全員に殴り倒された。

そのため、天野国防大臣はおとなしく座っているしかなかった。

まさに日本連邦は、女性により操られている。

サブタイトルは、そういう意味で『女王閣議』としたのである。

「それじゃ、将希ちゃんに聞いてみましょうよ。」

「良いですね。」

「聞いてみましょう。」

天野国防大臣は、慌てて顔を上げた。

「な、何でしょうか？」

「ねえ、将希ちゃん。」

藤中総理は、天野国防大臣の耳元で囁き始めた。

「将希ちゃんなら、分かるわよね。奴隷になるか家畜になるか。」

他の閣僚は、天野国防大臣の全身を舐め始めた。

服も脱がされた。

宮内大臣の、伏見宮千恵美内親王は笑いながら、見ている。
各4軍の総長と国家公安委員長は、閣議には参加しない。

「返事はどうしたの？」

「あつ、そ、その。」

藤中総理は耳を舐め始めた。

「へ・ん・じ・は？」

「い、嫌です。」

天野国防大臣が、震えながら言った。

「何て言ったのかな？」

藤中総理は、舐めるのを止めて天野国防大臣を見つめる。

「嫌です!! 奴隷にも家畜にもなりたくないです!!」

「そう。」

「……………」

天野国防大臣は、返事を待つ。

「みんな、やっちゃんいなさい!!」

藤中総理の号令で、舐めるのを止めて、思いつきり噛み付いた。

「ギャーーーーー」

天野国防大臣は、悲鳴を上げた。

「うるさいわね。」

「ッ!？」

藤中総理は、天野国防大臣の喉に噛み付いた。

天野国防大臣の全身から、血が滝のように流れる。

ソファアは天野国防大臣の血により、真っ赤に染められていく。

「ふう。」

藤中総理は、ようやく口を離した。

他の大臣も口を離す。

その口は、血で真っ赤になっていた。

「フッフ、将希ちゃんの血は美味しいわ。」

藤中総理は、唇に付いた血を舐めた。

「さ、早紀……そ……うり。」

天野国防大臣は、最後の力を振り絞って声を出した。

「フッフ、何かな？」

「な、な……り……ます。」

「何に？」

「ど、奴隷で……も……家畜でも。」

「それじゃ、賛成するのね。」

天野国防大臣は頷いた。

「みんな、聞いた？奴隷1号が賛成したわ。憲法に明記するわよ。」

藤中総理は宣言した。

「やった〜、これで憲法改正は決まりですね。」

「男は奴隷になるわね。」

各大臣は、喜んでいる。

「……………やっぱり止めましょ。」

藤中総理は、そう言った。

「今のままでも、男は奴隷みたいなものだから明記する必要はないわ。みんなも、家で男を飼育してるわよね？」

藤中総理の言葉に、全員が頷く。

「それで良いじゃない。家畜みたいなもんよ。私も亜由美ちゃんと喜恵ちゃんの3人で、将希ちゃんを調教するんだから。」

「そうですね。それで良いですよ。」

中野総務大臣が頷きながら答えた。

他の大臣も反対しない。

「決まり。現状を永久維持ね。女性は男を飼育しても良い。最低3人で1人の男を飼育する。こう憲法に加えましょ。」

藤中総理が言った。

「どうやら決まったようですね。」

伏見宮千恵美内親王が立ち上がりながら言った。

「はい。決まりました。」

藤中総理が答える。

「それでは私は、暁美女帝陛下に御報告に参ります。暁美女帝陛下も賛同なさるでしょう。」

「ありがとうございます。」

藤中総理以下、大臣も頭を下げた。

天野国防大臣は、薄れゆく意識の中で思った。

（吸血された意味は何だったのか？）

天野国防大臣の意識は、闇の中に落ちた。

女王閣議（後書き）

いやはや、凄い事になって来ました。

男が女性に飼育されるんですからね。

まあ、私のプライベートも彼女さんに飼育されてるような状況ですからね。

憲法改正の内容も違う所でしたが、話しを書き換えられました。こんな内容になりました。

けど、逆らえないんですね。

頑張つてこの内容で、憲法改正を続けたいと思います。

女性には逆らえない007

日本連邦憲法施工

2035年4月6日

この日衆議院本会議にて、改正憲法案の審議が始まった。

8時50分

衆議院本会議場

議員達は既に本会議に入り、藤中総理が来るのを待っている。

現在、衆議院の議員数は500人。

自由党が150人であり、その次が民間党の130人。220人が、藤中総理率いる無党派である。

国会議員で唯一の男性議員は、天野国防大臣だけである。

それ以外は、藤中総理により追放された。

8時55分

大臣が衆議院本会議へと、入ってきた。

内閣閣僚は、議員より1段高い閣僚席に座る。

最後に天野国防大臣が、ふらつきながら入ってきた。
輸血しながら、本会議に挑むようだ。

8時58分

「日本連邦総理大臣が入られます。」

衆議院議長の子葉に、議員は立ち上がった。

そこに、藤中総理が颯爽と入ってきた。

そして藤中総理は、総理大臣席に座る。

それを確認して、閣僚も座る。

最後に衆議院議長と議員が座る。

9時00分

「それでは只今より、衆議院本会議を始めます。」

衆議院議長の宣言により、衆議院本会議が始まった。

日本連邦の国会は、会期は決まっておらず、内閣総理大臣の意思によって決まる。

事実上会期は、365日である。

連邦制導入以後、議員の選出方法は変化した。

地方自治は、各州の州知事及び州議員が行うため、国会議員は本当の意味で国民の代表となった。

国会議員は各選挙区で立候補するのではなく、日本連邦国会議員として立候補する。

連邦制導入前は、各選挙区の住民が投票して決定していたが、広く日本連邦全土から投票を行うのだ。

投票は各州で行われ、立候補者は直接投票される。

衆議院議員の定数は500人であるため、上位500人が当選する事になる。

無駄話が過ぎた。

本会議に話しを戻す。

「それでは、藤中総理より改正憲法案について、説明してもらいま

す。」

衆議院議長の言葉に、藤中総理は立ち上がった。

そして演壇の前に立つ。

生中継も始まり、藤中総理は話し始めた。

「本日提出するのは、『日本連邦憲法改正案』です。現在我が国は、総人口2億1千万人。そのうち98%2億580万人が女性です。男性420万人は、女性に飼育されセックス奴隷のようになっていきます。男性とセックスしたくない女性には、人工受精により妊娠する事になります。しかし男性は、生まれる確率は低い。そこで、憲法に『男性は女性が飼育する』と明記し、男性管理社会の確立を行うおうではありませんか。男性社会は、完全に終わりを告げるのです。これからは女性が、支配するのです。それを日本連邦憲法に明記し、新しい時代を切り開いていきましょう。世界で1番に完全な女性社会を確立し、世界各国もそれに習うよう要請する。世界は女性のものである。」

藤中総理は、声高々に宣言した。

本会議場は、拍手の嵐に包まれた。

反対を唱える勢力などいない。

男性議員は、天野国防大臣1人だけだ。

その天野国防大臣は、完全な藤中総理・辻大蔵大臣・中野総務大臣

の奴隷だ。

反抗する気すら無い。

「『日本連邦憲法改正案』に賛成者は、ご起立を願います。」

衆議院議長という言葉に、議員全員が立ち上がった。

「全員起立。よって、『日本連邦憲法改正案』は可決されました。」

『日本連邦憲法改正案』は可決された。

その後は早かった。

即日可決された『日本連邦憲法改正案』は、国民投票が行われた。

2035年4月10日

運命の国民投票が行われた。

結果は、言うまでもなく賛成多数で可決。

投票率100%で、

賛成・2億895万票

反対・105万票

投票率100%は、日本連邦は選挙に参加するのを法律により決めている。

違反した者は、罰金100万又は懲役5年の実刑となる。

ようは、白紙でもいいから投票しろと言う事だ。

投票する事に意味がある。

この夏の8月30日。

選挙権のある方は、是非とも投票へ！！

日本の未来を決める選挙です。

マニフェストを見て、自分の意思で投票して下さい。

国民投票の結果を受け、日本連邦憲法は即日公布。

2035年5月1日

日本連邦憲法が施工された。

日本連邦憲法施工（後書き）

次回は、日本連邦憲法全文を書きます。

日本連邦憲法

日本連邦憲法

公布・2035年4月10日

施工・2035年5月1日

前文

日本連邦国民は、正当に選挙された国会における代表者を通じて行動し、私達と私達の子孫の為に、大日本帝國連邦各国と諸外国との協調による未来永劫の繁栄と、我が国全土にわたって女性のみの自由をもたらし、政府の意思を尊重する。その為に主権が女性にのみ在ることを宣言し、この憲法を確定する。

日本連邦国民は、平和を愛する国民の公正と信義に信頼して、私達の安全と生存を確固たるものにするに決意する。私達は平和を維持し、世界に平和をもたらす事を宣言する。

日本連邦は、全世界の平和・全世界の平定を望み、日本連邦に齒向かうものに対しては、鉄槌を下す事を宣言する。

日本連邦国民は、国家の名誉・国家の威信にかけ、全力をあげてこの目的を達成する事を誓う。

第1章 女帝陛下

第1条 女帝陛下の地位

女帝陛下は、日本連邦の象徴であり日本連邦国民統合の象徴である。

第2条 帝位の継承

帝位は、女帝陛下の指名で行われる。

内閣総理大臣・国会は、陛下のご意志に介入する事は出来ない。

第3条 女帝陛下の権利

女帝陛下は、日本連邦の事実上の最高権力者である。女帝陛下は、国政・内政全てに介入する権利を持っている。

第4条 女帝陛下の任命権

女帝陛下は、内閣総理大臣・最高裁判所長官の任命権を持つ。

第5条 女帝陛下の国事行為

女帝陛下は、全ての国事に関する行為を行う。

第6条 帝室の財産

帝室の財産には国会は関与出来ない。

女帝陛下のご意志による。

第2章 戦争

第7条 日本連邦の戦争

日本連邦国民は、世界平和を誠実に希求する。
その為、世界平和を脅かす輩には日本連邦4軍の総力をあげて、その輩を消滅させる。

日本連邦軍は世界に君臨する最強の軍として、世界の平和を維持する。

第8条 軍備の保有

前条の目的の為に、日本連邦は海軍・空軍・陸軍・揚陸軍を保有する。

これは独立国家として、当然の事である。

第3章 国民の権利及び義務

第9条 国民の要件

日本連邦国民たる要件は、法律でこれを定める。

第10条 基本的人権

日本連邦は、女性にのみ人権を認める。
男への人権は認めない。

これは未来永劫、定められたものである。

第11条 自由・権利の保持

日本連邦憲法が女性に保障する自由及び権利は、女性だけのものとし、未来永劫に保持するものとする。

第12条 個人の尊重

日本連邦国民女性は、個人として尊重される。
生命及び自由・幸福追求に対する国民の権利について、女性のみ最大の尊重を必要とする。
男には、その必要が無い。

第13条 女男関係

全て女性は、男の上位に立つ。
女性は人種・信条・社会的身分・政治的・経済的に上位に君臨する。

第14条 貴族の禁止

貴族の制度は認めない。

第15条 公務員の地位

全て公務員は、女性の奉仕者であり、男の奉仕者ではない。

第16条 請願権

女性は、損害の救済・公務員の罷免・法律・命令又は規則の制定・廃止又は改正その他の事項に関し、請願する権利を有し、女性はかかる請願をした為にいかなる差別待遇も受けない。

男には請願権を一部たりとも認めない。
請願した場合は、一生の差別待遇を受ける。

第17条 国及び公共団体の賠償責任

女性は、公務員の不法行為により、損害を受けた時は法律の定めるところにより、国及び公共団体にその賠償を求める事が出来る。
男は自己責任である。

第18条 男支配

男は女性に支配され、服従しなければいけない。
男の人権・自由・個人としての尊重は認めない。
女性は、男を飼育する事が出来る。
男に拒否権は無い。
拷問又は虐待・暴行により男が死んだ時、それは男の罪となる。
女性は男に対し、拷問・虐待・暴行・レイプ・奴隷的待遇・飼育・殺害等を行っても良い。
これは国家が保障する。

第19条 思想及び良心の自由

思想及び良心の自由は、女性に対し認める。
男は飼い主の思想及び良心に従わなければいけない。

第20条 信教の自由

信教の自由は、女性に対して保障する。
いかなる宗教団体も、国からの特権を受けたり政治上の権利を行使

してはならない。

第21条 集会・結社・表現の自由、通信の秘密

集会・結社及び言論・出版その他一切の表現の自由を保障する。

男は集会・結社及び言論・出版その他一切の表現の自由を認めない。

第22条 居住・移転及び職業選択の自由

女性は公共の福祉に反しない限り、居住・移転及び職業選択の自由を有する。

男は飼い主に服従し、行動する。

第23条 学問の自由

学問の自由は、女性にのみ保障する。

第24条 家族生活における女性の尊厳

婚姻は女性の意思だけで成立し、女性が男を支配又は飼育する権利を得る。

男に拒否権は無い。

第25条 生存権・国の社会的使命

全て女性は、健康で文化的な最高の生活を営む権利を有する。

国は女性の生活部面について、社会福祉・社会保障及び公衆衛生の向上と増進に努めなくてはならない。

第26条 教育を受ける権利

全て女性は、法律の定めるところによりその能力に応じて、教育を受ける権利を有する。

女性は、義務教育及び大学校で学ぶ権利を有する。

男に教育を受ける権利は無い。女性に飼育されるため、日本語が喋れれば良い。

しかし必要に応じて、女性が教育する事も可能である。

第27条 勤労の権利及び義務・勤労条件の基準・男の労働

全て女性は、勤労の権利を有し、義務を負う。

賃金・就業時間・休息その他の勤労条件に関する基準は、法律でこれを明確に定める。

また女性は、男に仕事を任せる事も可能である。

男は女性に命令を受ければ、絶対に働かなくてはいけない。

これによる男の過労死は、自己責任である。

第28条 勤労者の団結権

勤労者の団結する権利及び団体交渉その他の団体行動する権利は、

女性にのみ保障する。

男には認めない。

第29条 財産権

女性の財産権は、これを侵してはならない。

財産権の内容は、公共の福祉に適合するようつに、法律でこれを定める。

私有財産は国家の正当なる補償の下に、これを公共の為に用いる事が出来る。

男の私有財産所有は認めない。

第30条 納税の義務

国民は、法律の定めるところにより、納税の義務を負う。

第31条 法定の手続の保障

女性は法律の定める手続によらなければ、その生命若しくは自由を奪われ、又はその他の刑罰を科せられない。

第32条 裁判を受ける権利

女性は裁判所において、裁判を受ける権利を国家が保障する。
男には権利は無い。

第33条 逮捕の要件

女性は現行犯として逮捕される場合を除いては、権限を有する司法官憲が発し、尚且つ理由となつてゐる犯罪を明示する令状によらなければ、逮捕されない。
男は令状云々関係無く、逮捕される。

第34条 抑留・拘禁の要件、不法拘禁に対する保障

女性は理由を直ちにに告げられ、尚且つ直ちに弁護人に依頼する権

利を与えられなければ、抑留又は拘禁されない。

女性は正当な理由が無ければ、拘禁されず要求があれば、その理由は直ちに本人及びその弁護人の出席する公開の法廷で示されなければならない。

第35条 住居の不可侵

女性はその住居、書類及び所持品について、侵入・捜査及び押収を受ける事のない権利は、第33条の場合を除いては正当な理由に基づいて発せられ、尚且つ捜査する場所及び押収する物を明示する令状がなければ、侵されない。
男にはそれを認めない。

第36条 拷問及び残虐刑の禁止

公務員による女性への拷問及び残虐な刑罰は、絶対にこれを禁ずる。男へは許可する。

第37条 刑事被告人の権利

全て刑事事件においては、女性被告人は公平な裁判所の迅速な公開裁判を受ける権利を有する。

女性被告人は、いかなる場合にも資格を有する弁護人を依頼する事が出来る。

第38条 自己に不利益な供述・自白の証拠能力

女性は自己に不利益な供述を強要されない。

強制・拷問若しくは脅迫による自白又は不当に長く抑留若しくは拘禁された後の自白は、これを証拠とする事が出来ない。

女性は自己に不利益な唯一の証拠が、本人の自白である場合には、有罪とされ又は刑罰を科せられない。

男については、強制・拷問・脅迫による自白は有力な証拠とする。

第39条 遡及処罰の禁止・一事不再理

女性は実行の時に適法であった行為又は既に無罪とされた行為については、刑事上の責任を問われない。

また同一の犯罪について、重ねて刑事上の責任を問われない。

男は問われる。

第40条 刑事補償

女性は抑留又は拘禁された後、無罪の裁判を受けた時は、法律の定めるところにより、国にその補償を求める事が出来る。

第4章 国会

第41条 国会の地位・立法権

国会は、国権の最高機関であつて、国の唯一の立法機関である。

第42条 国会及び委員会開催目録

国会及び委員会を開催する時は、必ず最初に国歌斉唱を行わなければならない。

第43条 衆議院の組織

衆議院は、日本連邦女性を代表する選挙された議員で組織する。
衆議院の議員定数は、法律でこれを定める。

第44条 議員の資格

衆議院の議員の資格は、法律でこれを定める。

第45条 衆議院議員の任期

衆議院議員の任期は4年とする。
但し、解散の場合には、その期間満了前に終了する。

第46条 選挙に関する事項

選挙区・投票方法・議員の選挙に関する事項は、法律でこれを定める。

第47条 議員兼職の許可

議員は議員としての仕事以外に、1つは職業を兼職出来る。

第48条 議員の歳費

議員は法律の定めるところにより、国庫から相当額の歳費を受ける。

第49条 議員の不逮捕特権

議員は法律の定める場合を除いては、国会の会期中逮捕されず会期前に逮捕された議員は、議院の要求があれば会期中釈放しなければならない。

第50条 通常国会

国会の常会は365日。

内閣総理大臣の号令で、召集される。

第51条 衆議院の解散

衆議院が解散された時は、解散の日から40日以内に、衆議院議員の総選挙を行い、その選挙の日から30日以内に、国会を召集しなければならぬ。

第52条 資格争訟の裁判

衆議院はその議員の資格に関する争訟を裁判する。
但し議員の議席を失わせるには、出席議員の3分の2以上の多数による議決を必要とする。

第53条 定足数

衆議院はその総議員の3分の1以上の出席がなければ、議事を開き議決する事が出来ない。

第54条 会議の公開

衆議院の会議は、公開とする。
但し出席議員の3分の2以上の多数で議決した時は、秘密会を開く

事が出来る。

第55条 会議録

衆議院はその会議の記録を保存し、秘密会の記録の中で特に秘密を要すると認められるもの以外は、これを一般に公表しなければならない。

第56条 表決の記載

出席議員の5分の1以上の要求があれば、各議員の表決は、会議録に記載しなければならない。

第57条 役員を選任

衆議院は各々その議長その他の役員を選任する。

第58条 議院規則・懲罰

衆議院は各々その会議その他の手続及び内部の規律に関する規則を定め、また院内の秩序を乱した議員を懲罰する事が出来る。

第59条 法律案の議決

法律案はこの憲法に特別の定のある場合を除いては、衆議院で可決した時法律となる。

第60条 議院の国政調査権

衆議院は各々国政に関する調査を行い、これに関して証人の出頭及び証言並びに、記録の提出を要求する事が出来る。

第61条 閣僚の議院出席の権利

内閣総理大臣その他国務大臣は、衆議院の議席を有する有しないと関わらず、何時でも議案について発言するために議院に出席する事が出来る。

第5章 内閣

第62条 行政権

行政権は内閣に属する。

第63条 内閣の組織

内閣は法律に定めるところにより、その首長たる内閣総理大臣及びその他国務大臣でこれを組織する。

第64条 国会に対する責任

内閣は行政権の行使について、国会に対し責任を負う。

第65条 内閣総理大臣の指名

内閣総理大臣は、国民による直接選挙によって、国民に指名される。

第66条 国務大臣の任命権

内閣総理大臣は国務大臣を任命する。

国会議員と民間・軍から選べる。

第67条 国務大臣の罷免権

内閣総理大臣は、任意に国務大臣を罷免する事が出来る。

第68条 内閣総理大臣の権限

内閣総理大臣は国会の法案に拒否権を持ち、各大臣・副大臣・事務次官・各局長の任命・罷免権を持つ。

日本連邦4軍も内閣総理大臣の指揮下にある。

第69条 法律の署名

法律は全て主任の国務大臣が署名し、内閣総理大臣が連署する事を必要とする。

第70条 政令の署名

政令は全て主任の国務大臣が連署し、内閣総理大臣が連署する事を必要とする。

第71条 国務大臣の特典

国務大臣はその在任中、内閣総理大臣の同意がなければ訴追されない。

第6章 司法

第72条 司法権

全て司法権は、最高裁判所及び法律の定めるところにより、設置する下級裁判所に属する。

第73条 特別裁判所の禁止

特別裁判所はこれを設置する事が出来ない。
行政機関は、終審として裁判を行う事が出来ない。

第74条 裁判官の独立

全て裁判官は、その良心に従い独立してその職権を行い、この憲法及び法律にのみ拘束される。

第75条 最高裁判所の規則制定権

最高裁判所は訴訟に関する手続・弁護士・裁判所の内部規律及び司法事務処理に関する事項について、規則を定める権限を有する。

第76条 裁判官の身分保障

裁判官は裁判により、心身の故障のために職務を執ることが出来ないと決定された場合を除いては、公の弾劾によらなければ罷免されない。

裁判官の懲戒処分は、行政機関がこれを行う事は出来ない。

第77条 法令審査権と最高裁判所

最高裁判所は一切の法律・命令・規則又は処分が憲法に適合するかしないかを決定する権限を有する終審裁判所である。

第78条 裁判の公開

裁判の対審及び判決は、公開法廷でこれを行う。
また裁判は、テレビ中継を行う。

第7章 財政

第79条 財政処理の基本原則

国の財政を処理する権限は、国会の議決に基づいてこれを行使しなければならぬ。

第80条 課税

新たに租税を課し、又は現行の租税を変更するには、法律又は法律の定める条件による事を必要とする。

第81条 国費の支出

国費を支出するには、国会の議決に基づき事を必要とする。

第82条 予算

内閣は毎会計年度の予算を作成し、国会に提出し、その審議を受け議決を経なければならない。

第83条 予備費

予見し難い予算の不足に充てる為、国会の議決に基づいて予備費を設け、内閣の責任でこれを支出する事が出来る。

第84条 帝室財産

帝室財産は、独立したものとする。
女帝陛下のご意志により、自由に使える。
内閣・国会が関わる事は出来ない。

第85条 決算検査

国の歳入歳出の決算は、全て毎年会計検査院がこれを検査し、内閣は来年度にその検査報告と共に、これを国会に提出しなければならない。

第86条 会計検査院

会計検査院の組織及び権限は、法律でこれを定める。

第87条 財政状況の報告

内閣は、国会及び国民に対し、定期的に少なくとも年1回、国の財政状況について報告しなければならない。

第8章 地方自治

第88条 地方自治

地方自治は各州の州知事及び州議員の下で行われる。国が介入する事は出来ない。

第9章 改正

第89条 改正の手續・公布

この憲法の改正は衆議院の総議員の3分の1以上の賛成で、国会がこれを発議し国民に提案してその承認を経なければならぬ。この承認は、国民投票において3分の1以上の賛成を必要とする。

第10章 最高法規

第90条 基本的人権の本質

この日本連邦憲法が、日本連邦女性に保障する基本的人権は、人類の多年にわたる自由獲得の努力の成果であつて、これらの権利は、過去幾多の試練に堪え、現在及び将来の女性に対し、侵す事の出来ない永久の権利として信託されたものである。男は永久に人権を奪い、女性の支配下に置く。

豪華結婚式（前書き）

はっきり言って、読まなくても何も影響は無いです。10000字も無いですから。

じゃあ何故投稿したかと言われると、ただ単に胸のモヤモヤを取りたかっただけです。

豪華結婚式

2035年5月3日

帝國ホテルを貸し切って、藤中総理達4人の結婚式が行われた。

上戸CEOが帝國ホテルを買い上げた為、貸し切りでは無く事実上
上戸CEOの個人保有ホテルとなったのだ。

結婚式式場

桁違いに豪華な結婚式が始まった。

出席した人数は、1万人近くに昇る。

国防総省・大蔵省・総務省の官僚を呼んだ。

さすがに全員は無理だったため、各局代表だけとなった。

しかし国防総省には、CIAと国家国土安全保障局が傘下に入り、
大蔵省には国税庁・金融庁、総務省には消防庁・公害等調査委員会
がある。

代表だけでも1万人となった。

「私天野将希は、日本連邦憲法第3章第18条に従い、藤中早紀様・辻亜由美様・中野喜恵様に支配され、服従する事を誓います。」

いま天野国防大臣が、誓いを述べた。

会場からは拍手が起きる。

「それでは、誓いのキスを。」

司会役の上戸CEOが言った。

「4人でどうするんですか？」

天野国防大臣が質問する。

「私が唇で。」

「私達は頼つぺたよ。」

「ンムツ!？」

3人は天野国防大臣にキスをした。

「さあ皆さん、4人は晴れて結ばれました。天野国防大臣は3人の忠実な、奴隷となったのです。天野国防大臣は一生、調教されていきます。」

上戸CEOが高々と宣言した。

「さあ皆さん、ごゆっくりご賞味ください。一流料理人達で作った料理です。お楽しみください。」

「将希ちゃん、食べましょ。」

藤中総理達が天野国防大臣を呼んでいる。

「はい。」

天野国防大臣は、藤中総理達の所に駆け寄った。

そこで天野国防大臣は、心の中で誓った。

(早紀様・亜由美様・喜恵様に、一生奴隷として服従する。)

彼の顔には、笑顔が溢れていた。

豪華結婚式（後書き）

次回から数話程、第七独立機動艦隊に話しが移ります。

停戦が成立してますから、

艦内生活を書くぐらいですが。

第七独立機動艦隊の日常

2035年5月4日

第七独立機動艦隊は、柱島泊地に停泊していた。

海上機動要塞白鷺は、硫黄島の特別工廠で点検補修を行っている。

午前6時

第七独立機動艦隊全艦及び旗艦イージス原子力機攻戦艦大和に起床の艦内放送が流れた。

水兵や下士官・士官達は、この放送で起きる。

長官や参謀長・艦長等幹部は、6時〜7時までに起きれば良い。

長官以外は真面目に、6時に起きている。

午前7時

水兵達が甲板清掃とラジオ体操を終え、朝食を摂るために食堂に集まり始めた頃。

長官室では、2人の女性が目を覚ました。

長官室

「優香ちゃん、いま何時？」

「……7時2分26秒。」

「じゃ、起きなきゃね。」

「……眠い。」

「それじゃ、起こしてあげる。」

2人は熱いキスを交わした。

この2人は、第七独立機動艦隊司令長官菅原水香大将と第八特務機動艦隊司令長官七海優香大将である。

2人は5月1日に、結婚した。

日本連邦は女性の同性結婚を認めている。

子供が欲しい場合は人工受精による妊娠が、適当に男を監禁してレイプする。

5月1日の日本連邦憲法施工から、男へのレイプ・監禁・暴行は急

激に増加している。

人権も何もかも否定されているため、仕方ないと言えば仕方ない。

午前7時30分

七海優香大将をイカせた菅原水香大将は、長官室を出た。

向かう先は、幹部専用食堂。

艦の人員でも、司令長官・参謀長（もちろん、2人は旗艦にしかないが）・艦長・副長・各科の長しか使えない。

下士官や水兵は食堂を使用する。

幹部専用食堂に菅原水香大将が入ると、参謀長の米倉紗綾中将と艦長の岸成華少将が食事中であった。

「長官、おはようございます。」

2人が食事を中断し、立ち上がって敬礼した。

「もう2人共、食事中は私が来ても挨拶は無しって言ったじゃない。」

菅原長官が答礼する。

2人はそれを受け、手を下ろした。

「すみません。ですが、1日は挨拶から始まりますから。」

米倉参謀長が答えた。

米倉紗綾中將は、吉田前参謀長の後任として配属された。

日本連邦憲法施工により、男は職場から追放された。

「まあね。紗綾ちゃんの言う通りよ。」

「ありがとうございます。」

米倉参謀長は頭を下げた。

「それより長官、どうぞ。」

岸艦長がテーブルを指差しながら言った。

そこには朝食が準備されていた。

「日本食万歳ね。」

菅原長官はそう言うと、席に着いた。

「さあ、2人も。」

米倉参謀長と岸艦長も席に着く。

「さてと、いただきます……」

「水香ちゃん。」

七海優香大将が走って、幹部専用食堂に入ってきた。

「私を忘れちゃ、いやよ。」

七海長官は、菅原長官の頬にキスをした。

「もう、優香ちゃん。そんな事してたら、食べちゃうわよ。」

「そんな事言わないで。」

七海長官はそう答えると、席に着いた。

「どござ、優香長官。」

岸艦長が言つと、朝食が運ばれて来た。

「さてと、それじゃあ皆食べましょうか。」

「」「」「」「」「」

4人は朝食を食べ始めた。

午前8時

国旗と艦隊旗の掲揚が行われた。

当然の事ながら、国歌と共に。

「みんな、今日も1日頑張つてね。今日の訓練が停戦明けの戦争に役立つわ。けどね、無理をしないでね。」

菅原長官の演説後、各員は訓練に入る。

午前8時15分

「ほら、頑張つて。」

藤林雪江伍長は、ペースの落ちてきた女性達に声をかける。

「伍長……もうダメです。」

「走りなさい！！襲うわよ。」

藤林伍長の言葉に、女性達は力を振り絞って走り続ける。

大和級は全長580メートルの巨艦であるため、艦を1往復走るだけで1キロ以上もある。

これを3往復であるため、3キロは走る事になる。

「みんな、頑張るのよ。走り終わったら、売店で何でも買ってあげるから。」

藤林伍長の言葉に、彼女達はもはや表情で反応するしか、体力が無かった。

（もうちょっと、根性を出して欲しいけどね。）

藤林伍長は心の中で、そう嘆いた。

イージス原子力機攻戦艦大和艦橋

「情けない。」

大和の艦魂早紀は、そう嘆いた。

午前の流れ

イージス原子力機攻戦艦大和艦橋

大和の艦魂早紀は、訓練の光景を見ていた。

「まあ、3キロはしんどいわね。」

早紀は笑いながら言った。

「ここにいたの、みんな集まってるわよ。」

武蔵の艦魂、亜由美が呼びに来た。

「分かったわ。」

2人は、転移した。

イージス原子力機攻戦艦大和第3会議室

この会議室は、艦魂専用の会議室である。

会議室に転移した早紀と亜由美は、席に着いた。

室内には、第七独立機動艦隊の艦魂全員が集まっていた。

「さてと。定例会議だけど、重大な事は演習に真剣に取り組ませる
って事よ。」

早紀の言葉に、全員が頷いた。

「休戦協定は、7月でご破算となるわ。そうならば、最終決戦へ一
直線よ。」

「姉の言う通り。最近は少し、弛んできている。貴様達も、自艦の
乗員を厳しく鍛えるように。」

亜由美が全員に言った。

貴様と言う言葉だが、元々は尊敬語である。

近世中期までは、目上の人に対する敬称だ。

これから、もしも貴様と言われたら、相手にありがとうと言った方が
良いと思います。

なお、お前も尊敬語となる。

おんまえと言ひ、とても名前で呼ぶのを恐縮する時に言ひ。

お前の本当の尊敬語は、御前様である。

お前も御前様も、尊敬する言葉なのでこれもまた、使われたら相手が尊敬してくれている事になる。

感想にこの2つの言葉を使う輩は、本当の意味を知らないのである。
う。

情けない話しである。

「亜由美ちゃんも言ったけど、自艦では厳しく鍛えるようにしてね。
水香ちゃんも認めてくれたから。」

早紀はそう言ひ、全員を見回した。

「それじゃこれ以上話す事は無いから、終わりにするわね。」

早紀の言葉に、他の艦魂達は転移した。

午前9時

会議を終えた早紀は、長官室にいた。

早紀だけでなく、米倉参謀長と岸艦長もいた。

4人は、『マリオパーティー29』をやっていた。

「ちょっと、そこでスター取らないでよ！！私ともう少しで行けたのに。」

「すみません。ハプニングマスに止まったので。」

米倉参謀長に岸艦長が謝っている。

「私はスター10個あるからね。」

「……」

1番の早紀と、ビリの菅原長官の明暗が分かれた。

「こうなりゃ、決闘よ。」

「分かりました。受けて立ちます。」

50ターンの長丁場を征するのは、誰か？

午前10時30分

訓練を終えた林伍長は部下達とともに、売店に来ていた。

艦内には4カ所の売店がある。

その4カ所で1番大きい売店に来ていた。

「伍長、本当に何でも良いんですか？」

部下が林伍長に尋ねた。

「もちろんよ。何でも買って良いわよ。」

林伍長の言葉に、女性達は選り始めた。

林伍長は、ゲームコーナーへと向かった。

（確か、大戦略の新作が出たはず。）

林伍長は目を見開いて探す。

（あつたー！！）

ソフトを手に取る。

（新作は、日本連邦軍の兵器が全て出てるのよね。）

林伍長は、レジへと向かった。

「伍長。これで良いですか？」

振り向くと、手にカゴを持っていた。

その中には、大量の菓子類が入っていた。

「……良いけど。貴女達、それ全部食べるの？」

「「「もちろんですー！！」「」「」

「分かったわ。」

林伍長はソフトをレジ係に渡した。

部下達もカゴを渡す。

「16300円になります。」

「……………」

「伍長？」

「ああ、はい。」

林伍長は2万円札を渡した。

「3700円のお返しです。ありがとうございました。」

「ありがとう。」

林伍長は袋を受け取った。

部下達も袋を受け取る。

「伍長、ありがとうございました。」

「……………」

「まあ良いわ。気にしないで。」

林伍長は笑いながら答えた。

「さあ部屋に戻りましょう。」

「了解！」「」「」

林伍長達は、自室へと戻っていった。

まだまだ1日は、始まったばかりだ。

午前の流れ（後書き）

あと、3話ぐらいですか。

昼休み（前書き）

日本のため私は命を捧げる。

あなたはこう言えますか？

昼休み

午後12時

第七独立機動艦隊の各艦に、ブザーが鳴り響く。

昼食の時間である。

食事の時間になると、誰しも嬉しくなるものである。

それは艦隊司令長官であっても、変わり無い事だ。

大和後部甲板

艦隊司令長官の菅原水香大將は、七海優香第八特務機動艦隊司令長官を待っていた。

「早くこないかなあ〜。」

菅原長官は、空を見上げた。

すると、1機の飛行機が空を飛んでいた。

「麗菜ちゃん、まだ飛んでたのね。」

菅原長官は溜め息を吐きながら、言った。

そう言っていると、その飛行機は垂直に着陸し始めた。

その飛行機こそ、大和級が20機搭載している、『雷電ステルス垂直離艦戦闘攻撃機』である。

「あつ、長官!!!」

雷電ステルス垂直離艦戦闘攻撃機隊長の松井麗菜少佐は、機体から降りると敬礼をした。

「麗菜ちゃん、まだ飛んでたの?」

「はい。気分転換に。」

「フフフ、まあ良いわ。早くお昼を食べなさい。」

「了解しました。失礼します。」

松井少佐は敬礼をして、艦内へと向かって行った。

「フッフ、可愛いんだから。」

そこへ、高天原からの彗星哨戒ヘリコプターが後部甲板に着艦した。

「水香ちゃん!!!」

「優香ちゃん!!!」

2人は抱き合い、キスを交わした。

「寂しかったよ。」

「私もよ、優香ちゃん。」

「さあ、お昼を食べようよ。」

「分かったわ。行きましょう。」

2人は士官専用食堂へと向かった。

食堂

「貴女本当に、大丈夫？」

「す、すいません。」

水兵が立ち上がり、頭を下げる。

「まあ良いわ。それじゃあ説明してあげる、座って。」

岸艦長は水兵達を座らせた。

「それじゃあまずは、リニアガンね。正式名称はEML（電磁投射砲）よ。リニアガンはレールガンの改良強化版になるわ。通称リニアガンは、伝導体製の2本のレールの間と同じ伝導体製の弾体を挟み、電流と磁場との相互作用で発生するローレンツ力によって弾体を加速させて発射する装置だわ。リニアガンは初速が13・5キロあって、着弾時の終速が8・5キロにもなるわ。通常の火砲と違って装薬の爆発による振動の影響が無いから、極めて正確に目標に着弾するわ。着弾誤差は10センチも無いわ。」

「確かあれですよね。2010年にレールガンが実用化され、2018年にリニアガンが開発されたんですよね。」

1人の水兵が思い出したように言った。

「そうよ。それじゃあ次は、電磁カタパルトとリニアカタパルトの

説明ね。」

岸艦長は再び、説明を始めた。

「まずは電磁カタパルト。EMALS (ElectroMagnetic Aircraft Launch System) と呼ばれるわ。レールに機体と繋がったシャトルと異なる電極を流す事によって、シャトルを走らせる仕組みになってるわ。圧力蒸気を溜め込む必要にあつた蒸気式と異なり、スイッチだけで電気を送る事が出来るから、これまでよりリアクションタイムが短くなり、重量の異なる発艦機をより短い時間で発艦させる事が出来るようになったわ。リニアカタパルトは簡単で、電磁カタパルトの改良強化版だわ。電磁カタパルトは2010年の実用化、リニアカタパルトは2015年に第七独立機動艦隊と第八特務機動艦隊用に開発されたわ。」

「なぜリニアカタパルトは第七独立機動艦隊と第八特務機動艦隊用なんですか？」

1人の水兵が質問した。

「答えは簡単よ。第七独立機動艦隊と第八特務機動艦隊の運用する機体の機体重量が、連合艦隊のそれと違って重たいから。そのぶんパワーが必要になったわ。」

質問した水兵は、ふんふんと頷いた。

「最後にHEL砲。これはHighEnergy Laserの略よ。これは高エネルギーレーザーミサイル迎撃砲よ。核融合炉からの電力を使ってレーザーを発生させるわ。これは2005年に実用化されたわ。原発防御用迎撃砲として開発されたけど、世界にそんな度

胸のある国はいなかったから配備は中止されたわ。そこで第七独立機動艦隊と第八特務機動艦隊用に、配備されたわ。もしかしたら今後は連合艦隊各艦にも配備されるかもね。」

岸艦長はそう言うと、鯨肉の唐揚げを1つ口に入れた。

なおこの世界では、捕鯨禁止など行われていない。

かつてはグリーンピースと言うふざけた環境保護団体が捕鯨船に対して、妨害活動を行っていたが日本連邦はグリーンピースを海賊と断定。海軍が出るまでもなく、連邦商路護衛艦隊を派遣して対応した。

「そうですね。早い時期にそうなるかもしれませんね。」

水兵が答えた。

「さあ、難しい話はここまでよ。ご飯が不味くなるわ。」

岸艦長は再び、食べ始めた。

士官専用食堂

「優香ちゃん、あ〜ん。」

「……………美味しい。」

2人は口移しで食べている。

「愛してるわ。優香ちゃん。」

「……………私もよ。」

2人は再びキスを交わした。

昼休み（後書き）

色々言われたので各種兵器について説明させていただきました。

その他の兵器も何時か

1日の終わり

午後1時

昼食の時間を過ぎると、再び訓練が始まる。

午後3時

高度18000メートル

「梓ちゃん！！そんな事じゃ、私に勝てないわよ！！」

『うう、すいません。』

高木梓大尉が泣きながら、返事をする。

「まあ良いわ。けど貴女は実戦なら、2回は撃墜されてるわよ。」

松井少佐は、目の前の液晶ディスプレイを見ながら言った。

そこには確かに『タカギ2』と赤文字で表示されていた。

『ですが隊長、隊長と私では実力が違い過ぎます。敵が相手なら、私でも楽に勝てます。』

「そっ？なら、もう1回いくわよ！...」

松井少佐はそう言うと、速度を最大（マッハ2・8）まで上げた。

『は？はい！！』

高木大尉も慌てて巡航速度（マッハ1・5）から最大速度まで上げる。

「ロックオン。」

『無理ですよお、隊長。あの状況からもう1回だなんて。』

高木大尉が涙声で叫ぶ。

「ギヤーギヤーギヤーギヤー煩いわよ！！今夜覚悟しなさいよ！！」

『ああん！！もう落とされた！！』

「フッフ、もう終わりましたよ。」

『分かりました。』

2機は母艦への帰路についた。

午後6時

夕食の時間となる。

食堂

「今日はカレーね。」

藤林雪江伍長が受け取りながら言った。

「今日は金曜日ですからね。それに我が艦隊のカレーは、連邦軍でも有名ですしね。」

部下もカレーを受け取りながら言った。

「確かにね。このカレーなら毎日でも、飽きないからね。」

「そうですね。」

藤林伍長は、そう言いながら席に着いた。

「いただきまあす。」

「」「」「いただきまあす。」「」「」

藤林伍長達は、夕食を食べ始めた。

士官専用食堂

菅原水香長官達も、夕食を食べ始めた。

「優香ちゃん、あ〜ん。」

「……………美味しい。」

七海優香長官は満面の笑みを見せる。

「かあ〜わ〜い〜い。」

「んむ!?!」

菅原長官は七海長官にキスをした。

「もう。食べてる時は食べる事に集中しようよ。」

「はあ〜い。」

菅原長官は手を挙げて返事をした。

「今日も1日、無事に終わって良かったわ。」

「良かった良かった。明日も無事に頑張ろう！」

2人はビールグラスで乾杯した。

午後10時

消灯の時間となった。

兵員室

藤林雪江伍長は部下とベットのの中に入っていた。

「フッフ、緊張しないで良いわよ。気持ち良いから。」

「ン！！」

「気持ち良くなるわよ。」

レイプだな。

士官室

松井麗菜少佐は、高木梓大尉を自室に迎え入れていた。

士官になると、1人1人に個室が与えられる。

大和のような巨艦だから成せる業である。

「梓ちゃん、覚悟出来てる？」

「は、はい。」

「フフフ、いただきまあす。」

これもレイプだな。

長官寝室

長官には長官執務室と長官寝室がある。

寝室には専用の浴室もある。

長官は特別なのである。

その長官寝室に、2人の長官がいた。

「水香ちゃん、早くしようよ。」

「フッフ、分かったわ。」

2人は熱いキスをした。

これから2人の激しい夜が始まる。

……結局はこうなるのね。

第七独立機動艦隊の1日はこうして終わるのである。

1日の終わり（後書き）

次回からどう話を進めるかが、問題です。

中東連合

2035年5月10日

中東連合。

この国家連合は日本連邦を盟主とする、連合国に齒向かう唯一の存在である。

しかしその唯一の国家連合も、休戦協定により命脈を保っている
しか、言い様がない。

だが、そんな中東連合にも味方をする勢力がいた。

イルカイダとAU（アフリカ連合）である。

イルカイダは元々は中東連合が支援していたから味方をするのは、
当然である。

AUに至ってはまさに、意味が理解出来ない。

今更ながら中東連合の味方をすると言う事は、旧中国と同じ運命に
なると言う事である。

なお旧中国、鈴木パークの対応は順調に進んでいる。

中国人男は、北京裁判により全員死刑にされた。

これは少数民族も例外では無かった。

これは鈴木パークに住んでいた者だけではなく、世界各地の中国人男も死刑の対象となった。

中国人女性に対しては創氏改名と、歴史教育を徹底して行っている歴史教育はアメリカが主導した自虐教育ではなく、今まで植え込まれた反日教育からの脱却を狙ったものである。

これは当然と言えば当然だが、中国人女性にとっては複雑であった。理由は簡単。

祖国は消滅し、植民地……………

いや、鈴木商店・上戸CEOの私有地となったからだ。

こんな状況で三國志や清朝の歴史を教えられ、中国は素晴らしい国だったと言われても、今や私有地に転落した祖国にどうして忠誠を誓えるか。

これなら自虐教育を教えられた方が良いと、考え始めている女性もいる。

まあ鈴木パークの話は置いて、中東連合の話に戻る。

中東連合は実は、凄まじい軍拡を行っていた。

それに加え、旧中国軍の残存兵力も合同している。

国防総省の報告書には、『中東連合側は休戦協定施工前より、120%上昇した』と記されていた。

しかし所詮は中東連合の軍拡である。

国防総省の報告書には更に、こう記されていた。

『……………以上の観点から、中東連合側の軍拡には何ら脅威は無い。連邦と中東連合の兵力格差は7対3である。連邦は全力を出さずとも、中東連合に必ず勝利するだろう。』

しかし、樂觀視するのは非常に危ない。

戦争と言うのは、油断ならないものである。

しかし今の日本連邦には『無敗軍事超大国』という誇りがある。

1人の死者も被害も出さずに、戦争に勝てると信じている。

現に今までそうであった。

しかし、今回はそうはいかないようである。

日本連邦の油断が、ある所でツケを払わされる事になるのだ。

中東連合（後書き）

今回は一気に進み、休戦協定失効です。

これにより、再び戦いが始まります。

銀龍葬送

2035年7月5日

3ヶ月休戦協定失効から、4日経過したこの日。

日本連邦中を悲報が駆け巡った。

鈴木商店私設軍海上自衛隊連邦商路護衛艦隊所属・イージス原子力空母邪龍級15番艦銀龍が沈没したのだ。

銀龍沈没地点は、インド洋セーシェル諸島の北1000キロ。

銀龍の護衛艦、火龍級フリゲート10隻も沈没した。

総排水量180600トン。

被害金額1兆4200億円。

死者5600名（乗員5000名・レイプ用の男奴隷600名）。

『無敗軍事超大国』という自信が連邦軍全体を油断させており、それが連邦商路護衛艦隊所属の銀龍沈没という悲劇を招いたのだ。当然ながら、首相官邸では緊急閣議が開かれた。

日本連邦首都東京首相官邸閣議室

この閣議には上戸CEOも参加した。

自宅から自家用機で駆け付けたのだ。

「……………油断が招いた悲劇ね。」

藤中総理にしては珍しく、意気消沈した声だ。

「はい。そう言うしかないです。非常に残念です。」

天野国防大臣も沈痛な面持ちで答えた。

「被害金額は1兆4200億円。死者5600名。この内600名はレイプ用の男奴隷だから、死んでもよかったけど。イージス原子力空母銀龍だけならず、火龍級フリゲート10隻の合計11隻が一瞬で撃沈された。最悪よ。」

上戸CEOはそう言うと、頭を抱えた。

「11隻を一瞬で撃沈した兵器は分かったの？」

辻大蔵大臣が天野国防大臣に聞いた。

「これが天界が捉えた画像です。」

天野国防大臣は立ち上がり、液晶モニターに画像を映した。

「マダガスカル島のマロモコトロ山です。」

「それが？」

藤中総理以下、全員に天野国防大臣は睨まれた。

「……………」

天野国防大臣は額の汗をハンカチで拭くと、再び話し始めた。

「マロモコトロ山の中腹を注目して下さい。拡大すると。」

天野国防大臣はリモコンを操作する。

画像が拡大された。

「ご覧下さい。巨大な砲が設置されています。」

「あっ！！」

中野総務大臣が驚きの声をあげる。

「我々は中東連合を甘くみていたようです。推定ですが、この砲は大和級の185センチリアカノンに匹敵するかも知れません。しかも11隻を一瞬で撃沈したとなると、砲弾は気化砲弾と思われません。」

天野国防大臣の言葉に、藤中総理の顔が険しくなる。

「大和級と同じリニアカノンが、マダガスカル島のマロモト口山に配備されてるの？」

「残念ですが、早紀総理。マダガスカル島だけではありません。アフリカ全土にも配備されています。この画像をご覧ください。」

天野国防大臣がリモコンを操作する。

画像が次々と変わっていく。

確かにその画像には、リニアカノンが映っていた。

「今後の侵攻作戦も、練り直さなくてはなりません。空襲作戦でリアカノン破壊出来れば良いのですが。」

天野国防大臣はそう言うと、席に着いた。

「そうね。今後の侵攻作戦は練り直さないと、大変な事になるわ。将希ちゃん。」

「は、はい！！早紀総理、何でしょうか？」

「今すぐ国防総省に戻って、侵攻作戦を練り直すのよ。」

「はい。」

「21時までには官邸に帰ってくるのよ？分かった？」

「了解いたしました。」

天野国防大臣はそう言うと、閣議室を出ていった。

「地球上で唯一仕事に就けている男。それが将希ちゃんね。」

「休戦中に、世界各国でも憲法改正が行われて、男は奴隷になったからね。」

「みんな日本連邦に追い付け、追い付けて頑張ってるからね。」

「日本連邦は世界一の大国として、今後とも君臨するわ。」

藤中総理はそう言い切った。

「それじゃあ、伯母さま。私は本社に戻るわ。色々やることがあるから。」

「分かったわ。それよりも美好ちゃん、ゴメンね。銀龍を沈める事になって。」

「しょうがないわよ。伯母さまのせいじゃないわ。悪いのは中東連合よ。」

「フッフ、ありがとう。」

「うん。それじゃ、バイバイ。」

上戸CEOも閣議室を出ていった。

「さてそれじゃ、閣議を終わりにしましょう。」

閣議は終わった。

人間の方では、一応解決した銀龍沈没だが。

艦魂の方では、驚きが広がっていた。

「早紀江ちゃんが死んだ？」

一番驚いているのは、大和の艦魂早紀であった。

登場人物紹介（前書き）

一度削除した登場人物紹介をもう一度投稿します。

プロフィールを書かずに、役職・名前だけで紹介します。

登場人物紹介

日本連邦

政府関係者

第115代内閣総理大臣

藤中早紀

国防大臣

天野将希

大蔵大臣

辻亜由美

総務大臣

中野喜恵

外務大臣

葛野梓

経済産業大臣

宮崎真香

文部科学大臣

吉野千里

厚生労働大臣

秋山好香

法務大臣
内田優子

農林水産大臣
今野幸江

環境大臣
友崎和美

国土交通大臣
麻田桃香

大日本帝國連邦共栄大臣
木崎衣世

宮内大臣
伏見宮千恵美内親王

C I A長官
花木藍子

国家公安委員長
生田恵

国際連邦大使
水木鈴子

日本連邦海軍

軍令部総長

市ヶ谷紗耶香大将

連合艦隊司令長官

星野曜子大将

連合艦隊参謀長

雨宮瞳中将

海軍特殊強襲部隊群総長

倅田智恵子大佐

海軍特殊強襲部隊群隊員

熊谷由紀子大尉

海軍特殊強襲部隊群隊員

寺中彩子大尉

第七独立機動艦隊

司令長官

菅原水香大将

参謀長

米倉紗綾中将

海上機動要塞白鷺司令官

黒田博子大将

海上機動要塞白鷺参謀長

伊藤美夏少将

イージス原子力機攻戦艦大和艦長

岸成華少将

イージス原子力機攻戦艦武蔵艦長

青山穂花大佐

イージス原子力機攻戦艦信濃艦長

中村仁美大佐

イージス原子力機攻戦艦近江艦長

水野亜美大佐

イージス原子力機攻戦艦尾張艦長

青木恵大佐

イージス原子力空母大和改艦長

菅野栄子大佐

イージス原子力空母大和改轟天ステルス戦闘機隊隊長桜木愛中佐

イージス原子力空母大和改轟天ステルス戦闘機隊隊員京本有加少佐

イージス原子力空母大和改轟天ステルス戦闘機隊隊員折原明美少佐

イージス原子力空母大和改海王ステルス攻撃機隊隊長平野由希中佐

イージス原子力空母大和改海王ステルス攻撃機隊隊員吉沢明歩少佐

イージス原子力空母大和改海王ステルス攻撃機隊隊員麻美保奈美少佐

イージス原子力空母大和改嶺花ステルス電子攻撃機隊隊長
有本真雪中佐

イージス原子力空母武蔵改艦長

黒木琴江大佐

イージス原子力空母信濃改艦長

佐藤莉奈大佐

イージス原子力空母海神艦長

米沢彩奈大佐

イージス原子力空母風神艦長

西澤万里子大佐

海上機動要塞白鷺揚陸軍機甲師団師団長（揚陸軍統合師団司令長官）
新田京子大將

海上機動要塞白鷺揚陸軍歩兵師団師団長（揚陸軍統合師団副長官）
中川翔子中将

イージス原子力機攻戦艦大和
藤林雪江伍長

イージス原子力機攻戦艦大和雷電ステルス垂直離艦戦闘攻撃機隊隊長
松井麗菜少佐

イージス原子力機攻戦艦大和雷電ステルス垂直離艦戦闘攻撃機隊隊員
高木梓大尉

第八特務機動艦隊

司令長官

七海優香大将

参謀長

松島美奈子中将

イージス原子力特装潜水戦艦高天原艦長
南佳奈美大佐

日本連邦陸軍

参謀総長

桐島美貴子大将

100式超戦車統合戦車集団隊長

杉浦友香中佐

日本連邦空軍

統合総長

新野美雪大将

日本連邦揚陸軍

總長

佐野亞弥大将

鈴木商店

CEO

上戸美好

私設軍海上自衛隊連邦商路護衛艦隊司令長官

藤原友里特務大将

私設軍海上自衛隊連邦商路護衛艦隊參謀長

中野麻衣特務中将

ジャパンタイムズ

編集長

二宮行雄

登場人物紹介（後書き）

第1話と第2話を加筆修正しました。

早紀江の死

第七独立機動艦隊旗艦イージス原子力機攻戦艦大和第1会議室

鈴木商店私設軍海上自衛隊連邦商路護衛艦隊所属・イージス原子力空母邪龍級15番艦銀龍が撃沈された事により緊急会議が召集された。

会議室に集まった艦隊幹部達は、一様に緊張した面持ちであった。

司令長官の菅原水香大将も普段と違い、暗い表情だ。

参謀長の米倉紗綾中將が席から立ち上がった。

「お気持ちは分かりますが、そろそろ会議を始めたいと思います。」

「銀龍がね……………」

菅原水香大将は先程からそれを、繰り返し喋っている。

「……………それでは本題に入ります。藤中総理はこの度の銀龍撃沈に対して、徹底抗戦を宣言しました。中東・アフリカ遠征では、凄まじい戦いになると思います。皆さんも気を引き締めて頑張ってください。」

米倉参謀長はそう言うと、頭を下げた。

「なに、任せなさい。今回は私達も手伝う事もあるから。」

海上機動要塞白鷺司令官黒田博子大將がコーヒーを飲みながら言った。

菅原長官が驚いて参謀長の伊藤美夏少將に目を向けると、そうだと
言わんばかりに頷いた。

「それは有り難いです。白鷺が支援してくれたら、えげつない戦果
をあげれます。」

「それは良いとして、中東・アフリカ遠征は何時になるのですか？」

イージス原子力機攻戦艦武蔵艦長の青山穂花大佐が質問した。

「良い質問ね。」

菅原長官は伊藤参謀長に大型液晶モニターを操作させた。

大型液晶モニターには中東・アフリカ方面の地図が映し出された。

「マダガスカル島を拡大して。」

菅原長官の指示で、伊藤参謀長は地図を拡大した。

「マダガスカル島のマロモコト山中腹を見て。」

更に拡大されたマロモコト口山中腹には、巨大な砲塔が映し出された。

「国防総省からの連絡によると、これは私達大和級の185センチリニアカノンと同じ物みたい。」

菅原長官の言葉に会議室は騒然とする。

「しかも、これはアフリカ全土にも配備されてるみたい。国防総省ではこれまでの作戦計画を白紙撤回して、新たに作戦計画を立て直すみたい。」

伊藤参謀長は大型液晶モニターの電源を切った。

「と言う事で、作戦は暫く無いです。」

菅原長官はそう言うと、席に着いた。

「失礼します。」

そこへ食堂の給仕係が昼食を持ってきた。

メインディッシュは神戸牛の300グラムステーキで、それにエビフライ3尾・各種刺身の盛り合わせ・ポテトサラダ・漬物、そしてご飯と味噌汁。

簡単な定食である。

それが各人の前に置かれた。

「じゅっくりとぞ。」

給仕係はそう言うと、会議室を後にした。

「それでは皆さん、会議は後にして食べましょう。」

菅原長官の言葉に、各人は食べ始めた。

第3会議室

第1会議室では人間が会議を行っていたが、ここでは艦魂の会議が行われていた。

「……………早紀江ちゃんが、殺された。」

大和の艦魂早紀は、先程からそればかりを繰り返している。

「許さない。早紀江ちゃんを殺した奴は八つ裂きよ。」

「お姉ちゃん。」

妹で信濃の艦魂喜恵が声をかけた。

「どうしたの？」

「大丈夫かなあ〜って。」

喜恵は笑いながら言った。

「大丈夫よ。大丈夫。」

早紀も笑いながら答えた。

しかし、目は笑っていないかった。

「姉に1つだけ、言っておく。戦争に私情を持ち込むな。」

武蔵の艦魂亜由美が無表情で言った。

「大丈夫よ。私は日本連邦海軍の元帥なのよ？公私混同何かしないわ。」

「それなら良いが。」

亜由美はそれを聞くと、コーヒーを一口飲んだ。

「早紀江さんを殺した犯人は分かったんですか？」

雪風の艦魂由美が質問した。

「国防総省から衛星画像が届いたわ。」

潜水艦の艦魂舞・乱・華が衛星画像写真を全員に配った。

「マダガスカル島のマロモコトロ山中腹に、私達の搭載する185センチリニアカノンと同じ物があるわ。」

「確かに。」

最上の艦魂望が言った。

「なに、案ずるな。妾も作戦に協力しよう。妾ならそのリニアカノン攻撃に、耐えられるだろう。」

白鷺の艦魂刑部が突拍子もなく言った。

「刑部さん、本当ですか？」

早紀が驚いた声をあげた。

「勿論よ。任せなさい。」

刑部はそう言うと、侍従の阿久里が入れた宇治茶を飲んだ。

「ありがとうございます。」

早紀が頭を下げた事により、他の艦魂も頭を下げた。

「なに、早紀ちゃんの助太刀よ。早紀江ちゃんを殺した奴は八つ裂きにするんでしょ？」

「はい。」

「協力するわ。」

「ありがとうございます。」

早紀は再び、頭を下げた。

「まあまあ、そんなに頭を下げないで。」

「はい。」

「阿久里。」

刑部は阿久里に合図した。

すると艦魂全員の前に、料理が出現した。

「早紀江ちゃんのお別れ会でもしましょう。」

「分かりました。」

早紀はそう答えると、酒類を出現させた。

「それでは早紀江ちゃんの死を偲んで、乾杯。」

刑部の音頭で、お別れ会が始まった。

作戦立案

午後6時

日本連邦首都東京市ヶ谷国防総省5階第1会議室

第1会議室では、国防総省の主要スタッフ300名が集まり、会議が行われていた。

当然ながら会議の内容は、藤中総理の命令による『中東・アフリカ侵攻作戦の再検討』である。

「……………以上の観点から、今回の銀龍空母護衛群撃沈の要因をあげます。第1に、『上海上陸作戦』が無計画な、その場しのぎ的作戦であった事。第2に、この『上海上陸作戦』を成功させた事による、連邦全体の優越感。ようは敵側を見下し過ぎたのです。」

中佐の階級章を付けた、女性士官は説明を終えると、席に着いた。

「そこまで頭ごなしに、言わなくても……………」

国防総省の長として一応、上座に座る天野国防大臣であるが、2時間間にわたる報告（実際は怒られてるだけ）で狼狽していた。

「確かにそうだと思うけど……………」

「大臣は悔しくないんですか？」

事務次官（大佐の階級章を付けた軍人である）が、怒りを抑えた声で言った。

「そりゃ悔しいよ。私だって腐っても国防大臣です。連邦の国防を担う者として、銀龍空母護衛群の撃沈は悔しいです。」

天野国防大臣の言葉は、小さい声であったが、はっきりとした口調であった。

「それなら前回の結果を踏まえて、国民に優越感を与えない対策を考えるのです！！」

「……………了解致しました。」

天野国防大臣はただただ、答えるだけであった。

「……………それでは、本格的な作戦会議を始めたいと思います。」

大臣秘書官が司会を行い、会議が本格的に始まった。

午後9時

既に会議が始まって3時間が経過したが、未だに結論は出ていない。

途中カツ丼が夕食として出され、30分休憩となったのだが、会議は空転していた。

「夜絶濃鏡を使用するのは、単純過ぎます。連邦は世界に冠たる軍事超大国です。そんな戦略レーザー兵器を簡単に使用するのには、バカが行う事です。」

「バカだと!? 貴女はふざけているんですか!!! 巨乳バカは、戦争を語るな!!!」

「きよ、巨乳バカですと!!! 貧乳のカチカチ頭が!!!」

「乳デカ女が煩いです!!!」

2人だけの言い合いが、会議に参加している全員を巻き込んで、胸の話となってしまった。

(話の軸が、変わったような)

天野国防大臣はその光景を見ながら、心の中で呟いた。

しかし、それだけで何も出来なかった。

「貧乳が見栄を張るんじゃないわよ!!」

「この忌々しいデカ乳が!!」

ついには乱闘になってしまった。

もはや止めようがない。

天野国防大臣は、ふと腕時計を見た。

「しまった!!」

叫び声が、会議室全体に響いた。

女性達は、天野国防大臣を睨んだ。

「もう9時を過ぎてる!!」

(9時までには官邸に帰ってくるのよ?分かった?)

藤中総理の言葉が、天野国防大臣の頭の中に過る。

「ヤバイ!!帰らないと!!」

天野国防大臣は机の上にある書類を、アタッシェケースに入れた。

「皆さん、会議の続きは明日と言う事で。今日は解散です!!」

それだけ言うと、天野国防大臣は会議室を飛び出していった。

「あの表情だと、助からないわね。」

「そうね。明日の顔が楽しみだわ。」

「もしもの時は、事務次官が大臣代理と言う事で。」

不思議な事に乱闘は収束し、和気藹々と天野国防大臣の悲劇を予想していたのであった。

首相官邸2階応接間

掛け時計は午後9時30分を示していた。

約束した時間から30分を過ぎている。

応接間に居る3人の女性達……否、3匹の獣達の目付きは逝っていた。

確実に生きた者の目付きではない。

「いい度胸じゃない。」

「確かに。」

「帰ってきたら、たっぷり可愛がってあげる。」

明らかに感情のこもっていない、冷たい声である。

「寝かさないわよ。」

藤中総理は天野国防大臣に死刑を下した。

応接間入り口の扉

天野国防大臣は応接間から聞こえる会話に、入るべきか入らざるべきか悩んでいた。

（入ったら殺される。確実に精気を奪われる。）

ここで入らなければ、余計に殺られるのだが、そんな事を考える暇はなかった。

（覚悟を決めよう。）

天野国防大臣は意を決して、扉を開いた。

「「「死ね〜！！」」」

その後一晩中、天野国防大臣の叫び声が首相官邸に、響いたと言われている。

作戦立案（後書き）

第七独立機動艦隊は、これが今年最後の更新です。

今年もこの小説を読んでいた、読者様お一人お一人に、感謝致します。

来年もどうか、よろしくお願いいたします。

G8サミット（前書き）

皆様、明けましておめでとうございます。

今年初の更新です。

書き方も変更致しました。他にありましたら、よろしくお願ひします。

本年もよろしくお願ひします。

G8サミット

2035年7月10日

日本連邦首都東京帝国ホテル

帝国ホテル周辺は記者で溢れかえっていた。原因は簡単。帝国ホテル8階大会議室でG8サミットが行われているからだ。第三次世界大戦真っ只中の世界において、G8は『主要先進国』の意味ではなく、『主要連合国』の意味に変わった。要は経済でも軍事でも、主要国は変わらないと言う事なのである。

帝国ホテル8階大会議室

大会議室では、円卓に沿って首脳が座っていた。議長は日本連邦総理大臣藤中早紀である。サミットが始まってから数分で、白熱した議論が行われていた。

「それでは貴女の国は連合国を離脱したいのですか？」

「誰もそう言っていないです。しかし我が国の経済も苦しいのです。」

「尚更離脱したら良いわ。」

白熱した議論はアメリカ合衆国大統領キャランカレンとオーストラ

リア大統領エスメラルダアンヌの2人によるものだ。理由はアンヌ大統領がオーストラリアの中立を要請した事に、カレン大統領がキレたのである。

「主要先進国の1カ国ですが、不景気で中立を要請するのは申し訳ありません。しかし戦争継続は難しいです。」

アンヌ大統領が申し訳なさそうに、小さい声で言った。それにイギリス首相キャトラルパトルが、口を開いた。

「それならそれで、良いんじゃないですか。無理に戦って、国家が破綻しましたでは済まないですからね。」

「確かに。無理して、戦争に協力するもんじゃないです。」

神聖イスラエル神国首席ミラルダがパトル首相の意見に賛同した。

その隣で、イタリア首相ニコールズザンヌとカナダ首相マクネルキヤシーも頷いた。しかしロシア連邦大統領リュドミラアンリは、違った意見のようだ。

「自国の経済を優先させて日本連邦と決別中立する。国家破綻を覚悟で日本連邦に味方する。2つに1つ、国家の命運を分ける決断よ。」

「……………」

アンリ大統領の言葉に、アンヌ大統領は黙り込んだ。藤中総理も未だに、黙っている。

「も、もちろん日本連邦とは仲良くしていきたいです。ですが、我が

国の経済も大事です。」

「いくら？」

藤中総理が呟いた。

「えっ!？」

「いくら払えば良いのかしら？」

「払うとは？」

「貴女の国を買いましょう。2000ぐらい？」

藤中総理の言葉に、会議室は騒然とする。さらりと国家買収を言い出したのである。南米全域を買収した日本連邦が新たに、オーストラリアに手を出した。確かにオーストラリアは石油・石炭・ボーキサイト・レアメタル等々、埋蔵量は世界有数のものである。買収して日本連邦領にするメリットは多い。しかし費用は何処からだすのか？

「一般会計は無理だから、特別会計から出すしかないわね。」

「特別会計から？」

「一般会計280兆8400億円は使い道が決まってるから、特別会計330兆円は結構自由に使えるからね。200じゃ足りないかしら？」

藤中総理の勝ち誇った笑みに、アン又大統領は戸惑った。確かに日本連邦領になるのは楽である。賃貸費を支払っていれば、国家は安泰である。しかし経済的・軍事的全てにおいて、日本連邦に追従するしか道はないのである。

「確かにそれは最も良いアイデアです。しかしこれを私1人だけで、

判断するのは無理です。帰国して、議会で話し合う必要があります。

「そう。帰国次第、早急に決めるようにね。」

「分かりました。」

アン又大統領はそう言って頷いた。

「それじゃ、次の話に移りましょう。」

藤中総理の言葉に、首脳達は書類を見る。サミットはまだ始まったばかりである。

午後9時

首相官邸2階総理執務室

サミットを2時間前に終えた藤中総理は、共同声明と写真撮影を終えて首相官邸に戻ってきた。戻ってきて早々の行動は、天野国防大

臣を殴り倒すであった。天野国防大臣は突然の出来事に、未だに床にへたりこんでいる。

「何が、『帰国して、議会で話し合う必要があります』よ。大統領のくせに、頼りないわ。」

「確かに頼りないわね。情けない。」

「私は特別会計でオーストラリアが本当に、買収出来るか心配です。」

藤中総理の言葉に、辻亜由美財務大臣と中野喜恵総務大臣が答えた。普通に見れば女性3人が、話をしているだけだが、影の薄い男が床に蹲っている。

「大丈夫。反対する奴はいないでしょ。」

「もしいたら？」

「問題無し。いたら消すだけよ。」

藤中総理が再び、恐ろしい事を言った。その目は確実に逝っている。辻財務大臣と中野総務大臣の目も、逝っている。少し前から3人も、おかしい。上戸美好CEOも異変が見られる。天野国防大臣はその4人の変化を感じ取っていたが、何一つ思い当たる節が無い。ただ1つあるとすれば、4人が数ヶ月前に点滴を受けた事だ。しかしそれも『疲労解消』と言う藤中総理の説明に、天野国防大臣も納得した。そして天野国防大臣も点滴を受けた。しかしそれだけである。まさか点滴が関係しているとは思わない。天野国防大臣がその真相を知るのには、大分あとになってからである。

「反対する者は消せば良い。反対する国も消せば良い。日本連邦が世界に君臨すれば、平和になるわ。100年後も200年後もね。」

「その頃には死んでますけどね。」

藤中総理の言葉に、天野国防大臣が食って掛かった。途端に藤中総理の目付きが変わった。

「今すぐに殺してあげようかしら？」

「い、いえ！！」

「黙ってなさい。」

「分かりました！！」

天野国防大臣は震え上がった。しかし藤中総理の目付きは変わらない。辻財務大臣と中野総務大臣の目付きも藤中総理と同じようになった。

「な、何ですか？」

天野国防大臣は後退りしながら言った。3人は手に手に木刀を持っており、目付きは更に逝っている。

「やっぱり将希ちゃんが、悲鳴を上げてるのが気持ち良いわ。」

「心地よい悲鳴を聞かせて。」

「泣き叫び、血に塗れたその姿が堪らないです。」

そう言いながら詰め寄ってくる3人に、天野国防大臣は死を覚悟した。しかし壁に追い込まれてしまった。

「お、お許しを！！」

「嫌。泣き叫ぶ声、血に塗れたその姿。全てが私達のものなの。将希ちゃんを生かすも死なすも、私達次第。生き長らえたければ、私

「達任せなさい。」

「分かりました。」

天野国防大臣は涙を流しながら、覚悟を決めた。

4人の夜は始まったばかりであった。

午前の出来事（前書き）

帝國超大戦は、暫しお待ちください。

全く内容が思いつきません。

名前だけ出した兵器の性能も考えていませんので、考えないといけません。

もし帝國超大戦を読まれている方がいれば、暫しお待ちください。

午前の出来事

2035年7月11日午前5時

日本連邦首都東京首相官邸2階寝室

天野国防大臣は床の上で目覚めた。

「うっ!!」

度が過ぎた愛情表現を3人から受けた天野国防大臣の背中では傷だらけとなっていた。痛みを堪えながら、床から起き上がった。愛情表現を受けたベットを見ると、3人の女性が寝息をたてながら寝ていた。

「どうやって床に落ちたんだ？」

天野国防大臣はそう言いながら、首を傾げた。確かに床に落ちる状況ではない。しかしそれが落ちていたのだ。謎である。

「まあ良いでしょう。とにかく、コーヒーと新聞だ。」

そう言うと、寝室を出ていった。

天野国防大臣は着替えを終えるとソファに腰を下ろした。そしてコーヒーを一口飲むと、鈴木新聞の1面から読み始めた。

『難航する作戦会議』

見出しはこうであった。写真も会議冒頭の場面と、国防総省の2枚が添えられていた。

『銀龍撃沈による作戦会議は今日で6日目を迎える。国防総省では未だに、結論を出す事なく、議論が続いている。しばしば1つの議案について、賛成反対に分かれて乱闘が起こっている。天野国防大臣はただただ見ているしか出来ないという。この事に対して藤中総理は、記者会見でこう述べた。『まあ良いじゃない。連邦4軍の将兵の安全を確保しながらの作戦なの。あの子は優しいからね。死者が出ないような作戦を考えてるのよ。現に中国侵攻作戦では死者は出てないからね。男は知らないわよ？将希ちゃん以外はね。』一方天野国防大臣は、記者会見でこう述べている。『焦らないでゆつくりしましょう。敵が体制を整えるのなら、それでこつちが楽しめるだけですから。』連邦の総理と国防大臣が言っているから大丈夫である。』

天野国防大臣はそこまで読むと、コーヒーを一口飲み、2面を読み始めた。

『連邦がオーストラリアを買収すると宣言してから一夜明けた。経済危機に陥ったオーストラリアを救う理由で買収するわけだが上手

くいくのか？これに辻大蔵大臣は記者会見でこう述べた。『総理の判断に私は従うまでです。オーストラリア買収に関する予算は、一般会計ではなくて特別会計から出します。独立行政法人から反対が出ればそれで結構。総理に歯向かう覚悟があるのか、と言う事です。』辻大蔵大臣は、はつきりと宣言した。これによりオーストラリア買収は決定であろう。後は国会で可決させるのみである。』

ここまで読んだ時、寢室の扉が開いた。中野総務大臣が起きてきたのだ。

「喜恵さん、おはようございます。」

天野国防大臣は立ち上がり、挨拶をした。時計は7時をまわっていた。

「おはよう、将希ちゃん。」

「よく眠れましたか？」

「将希ちゃんこそ。心地よい悲鳴だったけど。」

「ハハハ、大丈夫ですよ。慣れましたから。」

「そう。それじゃ、もう1回する？」

中野総務大臣はそう言うと、木刀を構えた。

「コ、コーヒーを持ってきますね！！！」

天野国防大臣はそう言うと、応接間を飛び出していった。

「可愛いですね。」

5分後

天野国防大臣は頬を腫らしながらコーヒーを飲んでた。ソファーでは藤中総理・辻大蔵大臣・中野総務大臣がコーヒーを飲んでいる。

「私と亜由美ちゃんのコーヒーを持ってこないなんて、良い根性してるじゃないの。」

「……すみません。」

「謝ってすむ問題かしら？」

「た、多分。」

「あら？歯向かうの？」

藤中総理はそう言いながら立ち上がると木刀を構えた。

「すみません！！気のすむままに、殴って下さい！！」

「フッフ、遂にMに目覚めたわね。」

「覚悟しなさい。」

「朝からですが、気持ち良くしてあげます。」

「ありがとうございます。」

天野国防大臣は幸せな笑みをみせた。

午前11時

その頃第七独立機動艦隊では……

特別企画

異次元首脳会談

某時空間

作者「さあ、始めました！！異次元首脳会談です！！早速、お3人方に自己紹介をして頂きましょう。」

「日本連邦第115代内閣総理大臣藤中早紀です。」

「大日本帝國第92代内閣総理大臣綾崎若菜です。」

「大和帝國第190代内閣総理大臣麻美香織です。」

藤中総理「作者、異次元首脳会談を召集した理由は？」

作者「……第七独立機動艦隊の続きが思い付かないからです。」

藤中総理「貴様、そんな理由で連邦四軍の最高司令官を呼び出したのか？私達は戦時中だぞ？」

綾崎総理「私達も中東への対応に頭を悩ませています。派兵するか否かの重大な決断を迫られているんです！！」

麻美総理「これから陛下と謁見し、オセアニア侵攻作戦を命令する所です。緊急事態なんですよ！！」

作者「す、すいません。」

作者はそう言うと、3人に頭を下げた。

藤中総理「しかし、これは良い機会だと思う。異次元ながらも、3ヶ国は似た者同士。」

綾崎総理「確かに。」

麻美総理「国名は大和帝國なれど、似た者同士ですね。」

作者「そうなんです。だからお3人方で、会談でもしてもらいました。なんなら異次元軍事同盟を結んで頂ければ、私の力で異次元空間を行き来出来るように致します。」

藤中総理「異次元空間を行き来出来るの？」

作者「私は恐れ多くも、貴女様方の創造主です。私の一存で、何でも致しましょう。」

綾崎総理「それじゃ、寿司を出して。」

作者「良いですよ。」

作者が手を叩くと、3人の前に寿司が出現した。

麻美総理「なるほどね。こりゃ大したもんよ。」

作者「お褒めいただき、感激です。」

綾崎総理「食べて良いのよね？」

作者「もちろんでございます。会談は食事をしながらに致しましょう。」

ようやく会談が始まるのであった。

作者「それでは、次は国家形態の違いを話し合います。」

藤中総理「国家形態の違い……」

綾崎総理「違いは明確なんじゃないんですか？」

藤中総理「と言つと？」

綾崎総理「私達と香織さんの所は、帝國主義です。早紀さんの所は、一応民主主義じゃないですか。」

藤中総理「確かに一応の、民主主義ね。」

麻美総理「私達は既に政党政治を廃止しましたからね。」

藤中総理・綾崎総理「政党政治を廃止!?!」

麻美総理「はい。皇紀2676年……西暦2016年ですね……に国会で可決しました。政党は解散し、『帝國政治指導会』を設置しました。」

藤中総理「私達の国も大日本帝國時代に、『大政翼賛会』があつたけどそんなやつなの?」

麻美総理「まあ、そう捉えて頂ければ簡単です。」

綾崎総理「私は分からないんですけど……」

藤中総理「若菜さんの所はどういった歴史なの?」

綾崎総理「私達の歴史は、世界初の政党政治を確立し、それから2000年までこのかた政党政治一筋です。」

藤中総理「たいしたもんね。」

麻美総理「ずっと、政党政治なんですか?」

綾崎総理「陛下が事実上帝國の最高権力者だから、政党政治だろうが無政党政治でも関係無いです。」

藤中総理「まあそれもそうよね。」

麻美総理「私と若菜さんの所は帝國主義で、早紀さんの所は民主主義。けど3ヶ国ともに、陛下が事実上帝國の最高権力者と言う事は同じですね。」

綾崎総理「3ヶ国の接点があつたわね。」

作者「それでは3ヶ国の接点が見付かつた所で、次の話に移ります。次は、それぞれの国家領土・軍備です。」

藤中総理「まずは私ね。日本連邦領土は、まずは本土の列島。樺太・朝鮮半島・台湾島・トラック諸島・マリアナ諸島、そして南米大陸全土。これが日本連邦の領土よ。」

綾崎総理「南米大陸全土!？」

麻美総理「何時占領したんですか？」

藤中総理「南米大陸は占領したんじゃないわよ。買収したのよ。」

綾崎総理・麻美総理「買収!？」

藤中総理「かつてアメリカのリーマンブラザーズって言う会社の倒産から始まった、第二次世界恐慌があつたのね。その時に南米各国は国家財政が殆ど破産したの。そこで南米大陸を買収して、南米各国は賃貸の形で生き残ってるわ。」

綾崎総理「国家が賃貸……」

麻美総理「規模が違いますね。」

藤中総理「いま、オーストラリアの買収も計画中よ。だからオーストラリア大陸も領土に入るわ。」

麻美総理「賃貸の国は何で賃貸料を払ってるんですか？」

藤中総理「その国からでる資源とかね。」

綾崎総理「もし賃貸料を払えなかったら。」

藤中総理「南極大陸に国民全てを叩きだすだけよ。」

綾崎総理・麻美総理「……………」

藤中総理「そうだ！！忘れてたけど、中国も領土に入ってたんだっ
たわ。」

綾崎総理「中国もですか？」

藤中総理「ええ。正確には、姪っ子の私有地だけどね。」

麻美総理「あの国を私有地に……………」

藤中総理「今は独立してるけど、アメリカも私達が占領してた時期
があるのよ？ハワイもね。」

麻美総理「私達の歴史と真逆です。」

綾崎総理「真逆？」

麻美総理「はい。かつて大和帝國が日本と言っていた時、アメリカに70年弱にわたって占領されていきました。」

藤中総理・綾崎総理「アメリカに占領！？」

麻美総理「はい。大東亜戦争で完敗し、原爆を2発落とされた日本はアメリカに降伏しました。それからアメリカ主導のGHQに占領され、日本は骨抜きにされました。日本国憲法という『日本占領基本法』を押し付けられました。この日本占領基本法第9条には、こう書かれていました。『第9条・戦争の放棄、戦力及び交戦権の否認。1・日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と。武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。2・前項の目的を達する為、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。』こんな内容です。」

藤中総理「馬鹿な！！軍隊は国家を守る為に保有するものよ！！それを保持しないって！？国際紛争を解決する手段に武力を使わないって、自分の国が攻撃を受けても話し合いで解決するの？」

麻美総理「いえ、『自衛隊』と言う組織を保有していました。」

綾崎総理「自衛隊？守るだけ？」

麻美総理「はい。守るだけです。」

藤中総理「まさか、敵が攻撃してきて初めて反撃出来る何て、ふざ

けた考えじゃないでしょうね。」

麻美総理「そのまさかです。自衛隊は敵からの攻撃を受けてから、初めて反撃出来るんです。専守防衛です。」

綾崎総理「それこそ自殺行為じゃない！もしもその攻撃が核攻撃ならどうするの？」

麻美総理「それでも同じです。核ミサイル等は、日本の領海・領空に入って攻撃目標が日本だと分かったら、迎撃出来ます。」

藤中総理「けどその頃には、核ミサイルは最終段階に入ってるから迎撃は無理じゃない。」

麻美総理「そう言う事です。」

綾崎総理「よくそんなので、敵が攻めて来なかったわね。」

麻美総理「一応、アメリカと日米安全保障条約を結んでましたから。日本が攻撃を受けたらアメリカが反撃してくれますから。」

藤中総理「情けない国ね。」

綾崎総理「堕ちたもんね。」

麻美総理「はい。」

作者「さあさあ、そんな暗い話はそこまでにして。藤中総理、軍備

の説明を。」

藤中総理「そうですね。日本連邦四軍は現在、世界最強の軍隊として君臨しているわ。」

綾崎総理「連邦四軍ですか？」

麻美総理「海軍・空軍・陸軍は解りますが、もう一つは何ですか？」

藤中総理「もう一つは、揚陸軍よ。敵前上陸専門の軍隊。」

綾崎総理「なるほど。」

麻美総理「解りました。」

綾崎総理「次は私の国を説明しますね。大日本帝國領土は本土の列島・樺太・朝鮮半島・台湾島・トラック諸島・マリアナ諸島。こんなもんですね。」

藤中総理「だいたい私の国と同じね。」

綾崎総理「そうですね。私の国も一応、ハワイを占領していましたし。」

麻美総理「軍備はどうなんですか？」

綾崎総理「軍は、大日本帝國四軍ね。海軍・空軍・陸軍そして、陸

戦隊ですね。陸戦隊は一応海軍傘下です……」

藤中総理「四軍全て、世界最強なの？」

綾崎総理「海軍・空軍・陸戦隊は自信を持って世界最強と言えます。しかし陸軍は、ソ連・ドイツ・イタリア・アメリカに勝てるかどうか……」

麻美総理「確か綾崎総理の世界は、冷戦中でしたよね。」

綾崎総理「中東で火遊びが始まったけどね。」

藤中総理「大丈夫よ。私達と同じで、第三次世界大戦に突入するわよ。」

麻美総理「私達の世界では、第三次世界大戦は核戦争になりましたから。綾崎総理、気を付けて下さい。」

綾崎総理「核戦争！？……気を付けるわ。」

藤中総理「大変だったわね。」

麻美総理「世界中に核放射能が拡散しましたからね。」

綾崎総理「………それじゃ、最後は麻美総理よ。」

麻美総理「解りました。それでは大和帝國の領土を説明しますね。本土の列島を含め、台湾島だけです。」

藤中総理・綾崎総理「それだけ!?」

麻美総理「……はい。お2人の話を聞いてると、言いにくかったです。」

藤中総理「まあまあ、領土はいくらでも増えるわよ。」

綾崎総理「そうです。いくらでも増えますよ。」

麻美総理「はい。いま、オセアニア侵攻作戦を計画中です。オセアニア地方を大和帝國領土に組み込めます。」

藤中総理「その意気よ。頑張つて。」

麻美総理「ありがとうございます。」

綾崎総理「応援してるわ。」

麻美総理「はい。」

藤中総理「それで、軍の方は?」

麻美総理「大和帝國四軍は、海軍・空軍・陸軍と、騎兵隊です。」

綾崎総理「騎兵隊!?馬に乗ってるの?」

麻美総理「違いますよ。名前は騎兵隊ですが、敵前上陸専門ですよ。」

藤中総理「なるほど。これまた3ヶ国に接点があったわね。」

綾崎総理「事実上、四軍を保有していると。」

麻美総理「不思議なもんですね。」

作者（そりゃそうでしょ。私が3ヶ国全て考えたんですから。）

作者「それでは最後に、4ヶ国の永遠の発展を願って、乾杯しましょう。」

藤中総理「気が利くわね。」

綾崎総理「4ヶ国？」

麻美総理「作者さんの日本も入ってるんでしょ。」

綾崎総理「なるほどね。」

作者「それでは、日本連邦・大日本帝國・大和帝國・日本の永遠の発展を祈って、乾杯！！」

藤中総理・綾崎総理・麻美総理「」「乾杯！！」「」

異次元首脳会談閉幕

特別企画

異次元首脳会談（後書き）

次回から本編に戻ります。

愛ゆえに(前書き)

サブタイトルのサブタイトルは、『作者壊れる』です。

……大丈夫だよね？

これくらいなら、15禁でいけるよね？

これからたまに、こんな話が出てくるかも。

愛ゆえに

午前11時

硫黄島特別工廠

現在ここには、第七独立機動艦隊及び第八特務機動艦隊・海上機動要塞白鷺が停泊していた。

……否、硫黄島特別工廠に停泊しているのは海上機動要塞白鷺だけである。その白鷺内部のドックに第七独立機動艦隊及び第八特務機動艦隊が停泊している。

今回は第七独立機動艦隊でちょっとした出来事が……

第七独立機動艦隊旗艦超弩級イージス原子力戦艦大和幹部食堂

大和のみならず、第七独立機動艦隊・第八特務機動艦隊・海上機動要塞白鷺には幹部や各科の担当スタッフを除いて、内地に帰還していた。硫黄島から本土へは海底リニアが敷設されており、僅か10分弱での帰還が可能となっている。

そんな静まり返った艦内で、2人の長官は昼食を食べていた。

「あぁくん」

「あぁくん」

「美味しい？」

「美味しい。」

第七独立機動艦隊司令長官菅原水香大将の言葉に、第八特務機動艦隊司令長官七海優香大将は笑顔で答えた。何時まで経ってもラブラブな2人である。

「水香ちゃん……」

「なあに？」

「こ、今晚も……」

七海長官は体をくねらせながら、上目遣いで菅原長官に寄り添った。

「何かしら？」

「だから……」

「フフフ。」

菅原長官は笑いながら、七海長官の胸を揉んだ。

「あっ!?!」

「可愛い、食べちゃいたい。」

菅原長官は胸を揉みながら、七海長官に囁いた。

「本当は嬉しいんですよ？」

「こ、こんな時間から……」

「誘惑したのは、優香ちゃんの方からよ？」

「あっ!?!」

耳たぶを菅原長官に舐められ、七海長官は体を震わせた。

「敏感ね。」

「やつ!!そんな!?!と、こ……」

菅原長官は右手で胸を揉みながら、左手で七海長官の割れ目を擦った。

「!?!そこは……」

「フッフ、優香ちゃんのこと。期待で濡れてる。」

「ああ!?!」

菅原長官は右手を動かして、七海長官の胸の突起を摘んだ。

「んあ!?!」

七海長官は体を震わせて、大きく反応した。菅原長官は突起を強弱をつけて、刺激を与え続けた。

「あつ、あつ!?!んあ!?!水香ちゃん」

「気持ち良い?」

菅原長官の言葉に、七海長官は大きく頷いた。

その間にも七海長官は菅原長官からの刺激を、全身を使って受けとめている。

「1回位イッてもらわないとね。」

菅原長官はそう言いつつ、七海長官の胸に吸い付いた。

「んあ！！み……か！？だ、ダメ！！！」

言葉とは裏腹に、七海長官は菅原長官に抱き付いていた。菅原長官は胸から口を離して、優しく七海長官を床に寝転ばせた。

「フフフ」

「ああ！！！」

菅原長官は微笑むと、再び七海長官の胸に吸い付いた。もう一方の胸も菅原長官は激しく揉み始めた。

「ああ！！あつ！？……そ、そこは！！やっ！！！」

菅原長官は吸うのを止めると、七海長官の突起を舐め始めた。固くなった突起を舌を使い、巧みに刺激を与えていく。

「み、水香ちゃ、んあ！！やっ！？ダメ！！ああ！！！」

七海長官は体を震わせて、刺激を受けとめる。しかし菅原長官が、突起を甘噛みし始めたので遂に限界が訪れた。

「あつ！！水香ちゃん！！ああ！！ダメ！！……あつ！！だめだめだめ！！だめええええええええ！！！」

七海長官は叫びながら体をより一層震わせた。その声を聞いた菅原長官は、名残惜しそうに胸から口を離した。

「優香ちゃんのおっぱい、美味しい。」

「ああ。」

七海長官は肩で息をしながら、菅原長官を見つめていた。

「……………」

「……………」

無言で2人は見つめ合う。菅原長官は無言で、七海長官に唇を押し付けた。

「んっ！！」

ビックリした表情を見せた七海長官に、菅原長官は唇を離した。

「いきなりビックリしますよ。」

「優香ちゃんが、可愛いからよ。」

菅原長官はそう答えると、再び唇を押し付けた。舌を七海長官の中に入れようとしますが、七海長官は固く口を閉ざしていた。それに負けず唇を抉じ開け、歯茎を舐め回した。

七海長官は口を固く閉ざしていたが、少しずつそれも開きかけてきた。菅原長官は我慢出来なくなり、七海長官の突起を摘んだ。

「！？」

七海長官は目を見開き驚いた。その為口の力が揺るんだ。それを菅原長官は見逃さなかった。菅原長官の舌は難なくと七海長官の口内に侵入し暴れ始めた。

七海長官は菅原長官の手を握り締めて、それを受け入れた。貪るように2人の舌は、絡み合っていた。

数分してから菅原長官は唇を離した。2人の唇からは、唾液の糸が伸びていた。

「……………」

「気持ち良かった？」

「気持ち良い。」

2人は抱き付き合った。

「まだまだ激しくするわよ。」

菅原長官は七海長官の胸を揉みながら呟いた。

七海長官は嬉しそうに頷いた。

首都東京国防総省5階第1会議室

さて2人の長官が、愛を確認し合っている頃。国防総省5階の第1会議室には、国防総省主要スタッフ300名が激論を交わしていた。未だに結論が出る事無く、ただただ言い合っているのだ。

「日本連邦の威信に関わるのよ？我が国の為なら、同盟国にも協力

してもらうのが筋でしょ。」

「確かにそうでしょう。しかし同盟国であって、隷属国ではありません。」

「我が国の軍事力に対抗する、自殺願望がそれらの国に有るのですか？」

事務次官の言葉に、補給局長が黙り込んだ。

天野国防大臣はその光景を、コーヒを飲みながら眺めていた。

（女性は怖い。）

そう心の中で呟くと、天野国防大臣は再びコーヒを飲んだ。会議の冒頭は天野国防大臣も参加する姿勢を見せていたが、秘書官はそれを無視して大臣以外を指名していた。そして発言を許されても一言ごとに10の質問が飛んでくる為、天野国防大臣は静観を決め込んだのである。

さて、事務次官と補給局長が言い合っている原因は、未だに結論の出ない『アフリカ侵攻作戦』にある。事務次官は『侵攻作戦に同盟軍を全面に押し出せ』と主張し、補給局長は『同盟軍は連邦4軍の側面支援を主任務として、副主任務で作戦参加を要請するべき』と主張している。これが先程の言い合いに繋がるのであった。

「日本連邦の戦力を持つてすれば、アフリカなど楽勝よ。」

「その油断が、銀龍撃沈に繋がったんです。まだ分かりませんか？」

「あんな物、沈んでも良いではないですか。ハリボテみたいな民間

企業の傭兵艦隊が、海軍ごっこをしているからこんな事になるのよ。

「今や連邦商路護衛艦隊は、我が国のみならず大日本帝國連邦加盟国の海運業全体の守護神です。それに連邦商路護衛艦隊は、そこにお座りの天野国防大臣の愛すべき奥様方の1人である、藤中総理の姪であります上戸CEOの鈴木商店の重要な中核企業であります。事務次官は先程公然と、連邦商路護衛艦隊批判をなさいました。と言う事は上戸CEOを批判し、果ては鈴木商店相談役の藤中総理まで批判した事になります。事務次官。首を差し出した方が、宜しいのでは？」

補給局長の思わぬ反撃に、事務次官は狼狽した。

「わ、私は……」

明らかに焦っている。補給局長を追い込むつもりが、何時の間にか立場が逆転していた。事務次官は冷静に、自分が言った事を整理し始めた。

(……………)

思い出せば思い出す程、最悪の言葉しか浮かび上がらない。事務次官の顔は蒼白になり、膝も震えていた。

「どうしました、事務次官？今更ながら怯えてるんですか？」

「そ、それは……」

「強気な事務次官も今回ばかりは、弱気ですね。」

バーン！！

その時、会議室の扉が勢い良く開いた。颯爽と会議室に入って来た一人の女性。

「あ、そ、そんな……」

「……………」

「早紀さん！？」

天野国防大臣が叫んだ。

「将希ちゃん、頑張ってる？」

そうである。藤中総理が国防総省に来たのである。

「どうしてここに？」

「私を甘くみないで欲しいわね。事務次官！！」

「はい！！」

鋭い眼光に、事務次官は硬直した。

「美好ちゃんを馬鹿にしてくれたわね。」

「……………」

「目障りだわ。」

藤中総理はそう言いながら事務次官の前に立った。

「覚悟は出来てる？」

「か、覚悟と、いい、ますと……？」

「死ね!!」

バキッ!!

鈍い音がし、事務次官の首が有らぬ方向に曲がっていた。会議室は一瞬にして静粛に包まれる。

「さ、早紀さん？」

「何かしら？」

満面の笑みで振り向いた藤中総理に、天野国防大臣は苦笑いを浮かべるしかなかった。

「補給局長。」

「はい!!」

急に呼ばれた補給局長は、飛び上がった。その顔は恐怖で震えていた。

「貴女を……」

「お、お許し下さい!!」

補給局長は土下座した。

「……」

「総理!!」

「事務次官に任命するわ。」

「えっ!？」

予想外の言葉に、頭を上げた新事務次官。天野国防大臣もキョトン

としていた。

「事務次官が居なくなつたからね、貴女が事務次官よ。」
「ありがとうございます!!!」

事務次官は頭を下げた。

「貴女名前は？」

「吉原です。吉原恵津子と言います!!!」

「吉原恵津子……。近いうちに大佐へ昇格するから、頑張つてね。」

「はい!!!総理の為に全身全霊努力します!!!」

吉原事務次官は再び頭を下げた。

「さ、早紀さん？」

「何かしら？」

天野国防大臣が怖ず怖ずと藤中総理に声を掛けた。

「何も殺す事、なかつたんじゃないですか？」

「何故かしら？」

「何故つて……」

天野国防大臣は目をキョロキョロとさせている。

「大臣と事務次官は、何回か寝た事があるんですよ。」
「寝た？」

吉原事務次官の言葉に、藤中総理が天野国防大臣を睨んだ。

「私は無罪です！！私は犯されたんです！！」

「ふん。」

「すいませんでした！！」

「まあ良いわ。許すか殺すかは私達が決めるからね。」

「……」

「楽しみね。」

「……はい。」

天野国防大臣の顔は真っ青であった。

「恵津子ちゃん、そのゴミ処分しといて。」

藤中総理の指差す先は、前事務次官の遺体であった。

「了解いたしました。」

「じゃあ皆、この子連れて帰るけどヨロシク。」

「分かりました！！」

スタッフ全員が返事した為、会議室が微かに振動した。天野国防大臣は藤中総理に腕を握り締められて、会議室を出ていった。

「それでは、会議を再開します。」

秘書官は何事も無かったように宣言した。

愛ゆえに（後書き）

『15禁』『ガールズラブ』の看板を掲げていたのに、大した描写が無かったので書かせていただきました。

架空戦記作家にあるまじき描写であるのは、百も承知です。しかし作者はそんな人間ですので、悪しからず。

次回こそ、話は普通に戻り、動き始めます。

判決

午前11時30分

首相官邸2階応接間

天野国防大臣は正座で床に座っていた。その周りには修羅と化した女性3人が足を組み、天野国防大臣を見下ろしていた。

「将希ちゃん、恵津子ちゃんが言ってた事を説明してちょうだい。」
「……はい。」

天野国防大臣は獣に追い詰められた動物のような目をしながら、弱々しく返事をする話始めた。

「彼女に犯されたのは良く分からないんです。気付いたら犯されていた……そう言う事なんです。」
「嘘はいけないわよ。」
「グハッ!!」

藤中総理は椅子から立ち上がり、天野国防大臣の腹部を蹴った。

「ほ、本当です!!私は犯されたんです!!」
「黙りなさい!!」
「!?!」

今度は顔面を殴られた。

「私達もね、将希ちゃん。本当の事を言えばいたぶるだけなのよ。」

けどね？将希ちゃん。嘘を吐けば、半殺し……もしかしたら殺しちゃうかも。」

「……………」

藤中総理の言葉に天野国防大臣の顔色が変わった。

「そうよ。嘘を言わない事よ。」

「死にたくなければ。」

辻大蔵大臣と中野総務大臣も立ち上がって天野国防大臣に詰め寄った。その言葉には怒気が含まれていた。

「……………」

「……………」

天野国防大臣は小さな声で呟いた。

「そう。犯されたの。」

「犯されたんですか。」

「逆レイプ。」

「……………」

3人は天野国防大臣を睨み付けている。

「なぜ拒否しなかったのかしら？」

藤中総理が椅子に座りながら聞いた。辻大蔵大臣と中野総務大臣も椅子に座った。

「そ、それは……」

「答えなさい。」

「……」

天野国防大臣は黙って俯いてしまった。

「詰め寄られたから、拒否出来なかった。そうでしょ？」

「！？違います!!」

「凶星ですね。」

中野総務大臣が指を指しながら言った。

「将希ちゃん、学生の頃から女性に弱いですからね。」

「今になっても、そんな弱い所があつたとはね。」

辻大蔵大臣と中野総務大臣は溜め息を吐きながら呟いた。

「あのくそ女にも誘惑されたのね？」

「……… しませんでした!!」

天野国防大臣は土下座した。藤中総理は天野国防大臣の頭を踏みつけた。

「他に言う事は無いのかしら？」

「申し訳ありません!! 私をお好きなようにして下さい!!」

天野国防大臣は更に頭を床に付けた。

「フッフ、良く言ったわね。」

「体を献上するとは。」

「なら、奴隷として調教するまで。」

3人は満面の笑みを浮かべながら、鞭や木刀を持ってくるのであった。

午前5時30分

サウジアラビア首都リヤド首相官邸地下迷宮

数千キロ離れた日本連邦で天野国防大臣が犯されている頃、サウジアラビアの首相官邸地下迷宮には悲鳴が響き渡っていた。

「ギャアアアアアア！！！！！」

「ハアツ！！ハアツ！！ハアツ！！！」

男は悲鳴が聞こえても立ち止まらず、ただひたすら走り続けていた。しかしいくら走っても出口に辿り着く事は無い。地下迷宮に連れ込まれたらそれが最後、生きて地下迷宮を抜け出す事は出来ないのだ。

「ハアツ！！ハアツ！！……………クソツ！！！」

奥の曲がり角から、女性が表れた。男はそれにより再び走り出した。

「フッフ、みいゝつけた。」

女性は尋常じゃない速度で走って来た。

「来るな!!来るな!!」

「ひつどおゝい。私がそんなに嫌いなのか？」

「死ねっ!!独裁者が!!」

男は振り向きながら叫んだ。

「…………お前が死ぬ。」

女性はそう言うと、男のアキレス腱を切断した。

「ギヤアアアアア!!」

男は悲鳴をあげながら倒れた。

「フッフ、もう走れないわよ。」

「…………逃げる。」

這いつくばりながらも、男は腕だけで逃げようとしていた。

「…………」

グサッ!!

「ギヤアアアアア!!」

女性は無言で男の太股を突き刺した。

「萌えるわね。」

女性は涎を拭きながら呟いた。

「ッ！！独裁者が何だつてんだ！！……どうせお前なんか日本に負けるんだ！！」

「残念。私は日本連邦に負ける気なんて更々無いわ。」

「悪は滅びるんだ！！貴様は日本に処刑されるんだ！！覚悟しろ！

！」

「……死ぬ。」

「ガハッ！！」

女性は男の心臓を突き刺した。

「良いわ。この血が流れ、苦痛に歪む顔。興奮しちゃう！！」

そう言いながら心臓を取り出した。

「美味しそう！！」

「はい。この『家畜』の心臓は美味でございますよ。」

背後からもう一人女性が表れた。

「メリス、貴女も食べる？」

「バーバラ様、宜しいのでしょうか？」

「良いのよ。」

「有り難き幸せでございます。」

メリスは頭を深く下げた。

「フッフ、可愛い。」

バーバラと呼ばれた女性、サウジアラビア首相は今日も日課の『家畜狩り』を終えたのである。

判決（後書き）

これからちよくちよく、中東連合にも視線を向けたいと思います。

連邦商路護衛艦隊（前書き）

今回は今更ながら、連邦商路護衛艦隊についての説明です。

連邦商路護衛艦隊

午後1時30分

播磨州兵庫県神戸市淡路島特別工廠

淡路島は鈴木商店傘下の『日本海運警備保障会社』が買収し、全土が連邦商路護衛艦隊の基地として機能していた。インド洋セイシエル諸島沖に沈んだ『銀龍空母護衛艦隊』もこの淡路島から出撃した。その『銀龍空母護衛艦隊』を復活させるべく、淡路島特別工廠では建造作業に取り掛かっていた。

『日本海運警備保障会社保有の私設軍、海上自衛隊連邦商路護衛艦隊……この連邦商路護衛艦隊と言う名前は通称である。正式名称は「日本及び連邦加盟国の商路を護衛する特別立法に基づく特務艦隊」と言う。……は現在では世界第2位の戦力を有するに至っている。アメリカ合衆国海軍・イギリス海軍、世界各国の海軍を凌ぐ戦力である。この戦力を有しているのは理由がある。それには「日本連邦海軍連合艦隊」と「日本海運警備保障会社保有・海上自衛隊連邦商路護衛艦隊」の関係を復習する必要がある。連合艦隊と連邦商路護衛艦隊はお互いに持ちつ持たれつの関係である。連合艦隊は「敵艦隊及び敵国家の殲滅」、連邦商路護衛艦隊は「商船護衛」がそれぞれ目的である。お互いの不得意とする分野を任せる事で効率の良い国家戦略が可能となる。連合艦隊はその礼として新型艦の竣工と同時に、旧型艦の設計図を連邦商路護衛艦隊に横流しするのだ。その

設計図を連邦商路護衛艦隊は独自に改良し、建造するのである。それが何故、世界第2位の戦力を有するようになったのか？それは2025年立案の「12艦隊計画」による。12艦隊計画は連合艦隊は更に飛躍させる艦隊整備計画であった。これまでも1歩先行く海軍を2歩も世界よりも先行させたのである。この為当然ながら12艦隊計画の完了と共に、旧型艦の設計図は連邦商路護衛艦隊に横流しされる。これを独自に改良した結果、世界各国の海軍よりも1歩先に進んだ艦隊となったのである。これが連邦商路護衛艦隊が世界第2位の艦隊を有するようになった真相である。』

石本雪美著

『日本海運警備保障会社の全容』より抜粋

『日本連邦商路護衛艦隊。もはやこの艦隊は「護衛艦隊」とは呼べなくなつた。「日本連邦商路侵略艦隊」と表記したほうが良い。国家が民間企業に海運警備を委託させるとは世も末である。「日本海運警備保障会社」は鈴木商店傘下企業でも、1・2を争う高収益企業である。もはや資本主義・拝金主義の鬼と化した鈴木商店とそのCEO及び相談役は、日本連邦を滅ぼす元凶となっている。早急に対応を考えないと手遅れとなってしまう。国家を発展させる総理が拝金主義会社の相談役となっている。早急にどちらかの役職を辞任する事をオススメする。これには国民にも責任がある。そのような女を総理に担ぎ上げた責任だ。しかし今時なつては手遅れとなつてしまった。日本連邦のトップとなり、鈴木商店のトップとなつた女

に齒向かえる人間などいない。最終的にその女は世界制覇を目指すだろう。その時には私達はその女に洗脳され、全てが手遅れとなる。国民よ！！今こそ立ち上がれ！！あの女は媚薬を使つて、私達を洗脳しようとしている！！危険思想を持つ女を叩き潰すのだ！！」

東京旭日社編集

『週間旭日』より抜粋

東京旭日社はこの週刊誌を発行した事により、関係者全員が藤中総理の命令により秘密裏に処刑された。

作戦決定（前書き）

更新再開します。

作戦決定

2035年7月15日午前9時

日本連邦首都東京国防総省5階第1会議室

会議室は強烈な緊張感に包まれていた。その理由は単純明解である。遂に藤中総理達が作戦立案に介入を始めたのだ。遅々として進まぬ作戦立案に、藤中総理の怒りは限界点まで溜まっていた。それが昨夜に爆発したのである。天野国防大臣の顔面に有る傷痕が、昨夜の惨劇を無言で示していた。

「将希ちゃん、早速会議を始めて。」

「わ、分かりました。」

天野国防大臣はビクビクしながら、秘書官に会議開始を命じた。

「それでは作戦会議を開始します。それでは事務次官、どうぞ。秘書官の言葉に吉原事務次官が立ち上がった。」

「昨夜までの作戦の青写真を説明します。これまでの計画によりますと、敵の海軍戦力を壊滅させる事を第1目標とします。その後、アフリカ大陸全土へ空襲を敢行。そして上陸作戦を開始します。鈴木パーク守備隊の100式超戦車統合戦車集団も中東に侵攻させます。」

簡単な青写真を説明すると、吉原事務次官は席に着いた。藤中総理

は腕を組んだまま、吉原事務次官を睨んだ。押さえ付けられた巨乳が艶めかしい。

「何故、夜絶濃鏡と核兵器を使わないの？」

「そ、それは……」

吉原事務次官は目を逸らした。それに答えたのは補給局長だった。

「その作戦は散々議論しました。しかしそれは馬鹿が提案する内容です。日本連邦軍たるもの、正々堂々と正面から当たるべきです。」

「……馬鹿？」

補給局長の言葉に藤中総理が首を傾げながら尋ねた。しかしその目は、完全に逝っていた。

「……誰が馬鹿なのかしら？」

「貴女です！！」

補給局長はビシッ、っと藤中総理に指を差した。

「フッフ、亜由美ちゃん、喜恵ちゃん。聞いた？」

「ええ、聞いたわ。」

「聞きました。」

辻大蔵大臣と中野総務大臣が笑いながら頷いた。

「将希ちゃんも聞いたわよね？」

「も、勿論です。」

藤中総理は天野国防大臣の顎を擦りながら聞いた。それに対して天

野国防大臣は、目をトロンとさせながら返事をした。
こりゃ完全に洗脳されてますな。あの幸せそうな顔を見れば分かる。
他の閣僚も藤中総理に反対しないから………藤中独裁政権ですな。

「良い度胸じゃない。貴女、覚悟出来てる？」

「…何の覚悟ですか。」

立ち上がって聞いた藤中総理に、補給局長は怖じ気ついた。

「死ぬ覚悟よ。」

「!?!」

パン

補給局長が避ける間も無く、藤中総理の放った銃弾は補給局長の肩
間に命中した。突然の出来事に会議室は凍り付いた。

「何か文句でも？」

藤中総理は零式拳銃を天野国防大臣に手渡すと、会議室の参加者全
員に聞いた。

「恵津子ちゃん。」

「はい!!」

再び訪れた危機に、吉原事務次官は背筋を伸ばした。

「中東・アフリカ侵攻作戦を発表するわ。」

「はい!!」

「夜絶濃鏡によるアフリカ大陸全土空襲。富嶽及び飛鳥も空襲に参

加。連合艦隊・第七独立機動艦隊・第八特務機動艦隊・連合国艦隊による上陸作戦を敢行。アフリカ大陸全土を占領し、中東を孤立させて侵攻する。文句有る？」
「有りません！！ねっ、皆？」

吉原事務次官は参加者全員に聞いた。それには全員が一様に頷いた。

「決まり。何でこんな簡単な事に時間が掛かったのかしら？」
「……いえ、その。」

天野国防大臣は藤中総理のみならず、辻大蔵大臣と中野総務大臣にも睨まれ背を丸めた。

「やっぱり、もう少し絞めた方が良かったわね。」

「左腕が良いかしら？」

「あそこも潰しましょうか？」

「……お任せします。」

天野国防大臣は小さく呟いた。会議室は未だに凍り付いていた。

「皆に言っておくわ。私達4人はね、神経が何本かぶっ飛んでるの。中学生の頃にバスの横転事故でね。助かったのは私達4人だけ。それで私と亜由美ちゃん、喜恵ちゃんは人を殺そうが傷付けようが何にも感じないわ。そして将希ちゃんは殴られようが刺されようが何にも感じないのよ。つまりは無感症ね。けどねここから面白いの。将希ちゃんには殴ったり傷付けたりするのが物凄い快感なの。で、将希ちゃんには私達3人に苛められるのには痛みも、何もかも感じるのね。まあ将希ちゃんは別にして、何が言いたいかって事だけど。此処に居る貴女達全員を殺しても、私達3人は何にも感じないのよ。」

「

藤中総理の言葉に、何人かが気絶した。

「じゃ、そう言う事だね。私達は帰るわね。」

藤中総理は天野国防大臣の首根っこを掴むと、辻大蔵大臣と中野総務大臣を引きつれて会議室を出ていった。

突然の出来事に、呆然としていた吉原事務次官は我に返った。

「とにかく、そのゴミを片付けて。」

吉原事務次官は近くの部下に補給局長の死体を片付けさせた。

「今から全員で、藤中総理の発表した作戦を詳細に仕上げるわよ。」

「了解！！」

会議室には再び活気が戻った。

本会議（前書き）

もはや私の技量では藤中総理・辻大蔵大臣・中野総務大臣の3人は操作不能です。

覚醒し暴走を始めた3人は何処へ行くのか？

世界征服………宇宙征服でもしでかすかも、知れませんが、この小説だけ、書く速度が違いますからね。

3人に操られてる!!!!!!

本会議

午前11時30分

国会議事堂本会議場

国防総省での会議を終えた藤中総理達4人は、休む暇も無く本会議を召集。議題内容は驚くべきものであった。

「我が国に存在する自由党・民間党に解散命令を出し、両党の議員は辞職してもらいます。」

藤中総理の言葉に議員達は驚きの声をあげた。特に自由党・民間党議員達は口々に「独裁政治だ!!」と叫んでいた。

「黙りなさい!!」

藤中総理の一喝に、議員達は黙った。

「もはや貴女達は必要無いのです。連邦の国庫を減らす金食い虫、害虫は一匹残らず駆逐します。それとも何？私の提案に賛同頂けないのかしら?」

「賛同出来るか!!」

「独裁者!!」

「閣僚は総理の提案に反対しなかったのか!!」

議員達の野次は閣僚へも向けられた。しかし総理も閣僚達も全く気にしていない。天野国防大臣に至っては、目をハートマークにして

藤中総理を見つめていた。もはや性奴隷と化した男に反対する理由はないだろう。他の閣僚達も特に政党が無くなる事で問題が起きる事は無い、と言う理由で反対していない。藤中総理率いる無党派議員も特に反対していない。

「貴女達には国家反逆罪の容疑があります。」

再び議員達は驚きの声をあげた。自由党・民間党の両党議員にとっては寝耳に水であろう。そんな容疑をかけられる理由が無い。何せ今は戦時中であり、しかも第三次世界大戦と来た。こんなタイムイングで国に齒向かう訳が無い。

「捏ち上げだ!!」

「私達を陥れる気か!!」

「正に独裁政治!!」

「証拠を見せなさい!!」

「良いでしょう。入ってきなさい。」

藤中総理の言葉に、本会議場の扉が開いた。其処から入って来たのは自由党の幹事長であった。

「彼女が証言してくれます。」

藤中総理はそう言うと、席に戻った。代わりに演壇に立ったのが自由党幹事長であった。

「自由党党员は全員、藤中内閣殺害を行おうとしていました。此れに民間党も乗っかっての一大国家反逆計画です。私は恐れ多くも内閣総理大臣である藤中早紀様に逆らおうとは考えられませんでした。その内閣に入られているお一人お一人にもです。私は腹を括って総

理にこの計画の全容をお話したのです。」

「この裏切り者!!」

「そんな嘘がよく言えるな!!」

「金でも貰って、嘘を言ったんだろ!!」

議員達は必死になって叫んでいた。何せ共産党と社民党の前例がある。彼女達は全員処刑された、と言う噂が流れているのだ。必死になるのも当然であろう。

「私は悲しいです。自らの罪を棚に上げて、非難するのですから。」

自由党幹事長はそう言うと、無党派議員達の席に歩いていった。そして再び藤中総理が演壇に立った。

「彼女は自由党を離脱しました。さて、もう良いでしょ?」
パチツ!!

藤中総理が指を鳴らすと、本会議場にブラックベレーが入ってきた。

「両党議員は国家反逆罪で逮捕する!!」

「独裁者!!」

「何時か身を滅ぼす事になるぞ!!」

数々の野次が飛び交う中、両党議員達は逮捕され本会議場から連れ出された。残されたのは藤中総理以下閣僚達と無党派議員、そして告発した元自由党幹事長である。

「それじゃ、議案の投票をしましょう。」

藤中総理の言葉に議長は怯えながら頷いた。

午後2時

首相官邸2階応接間

「今日の国会は驚きの連続でした。まずは自由党・民間党による国家反逆計画。この国家反逆罪を藤中総理は見逃さず、ブラックベレーを投入して全員を逮捕しました。これにより自由党・民間党解散命令は全会一致で可決され、政党は日本連邦から消滅。藤中総理は戦時内閣強硬法の発動を宣言し、「連邦翼賛会」の設立を発表しました。総裁には藤中総理、幹事長には辻大蔵大臣、政調会長には中野総務大臣が就任。天野国防大臣は3人の手先となって動き回る事になります。そして連邦翼賛会は直ぐ様次の法案の審議に入りました。オーストラリア買収に関する……………」

「消します。」

天野国防大臣はそう言うと、テレビの電源を切った。

「オーストラリア買収が無事決まりましたが、200兆円で大丈夫ですかね？」

天野国防大臣はソファーに座る3人の美女尋ねた。

「大丈夫よ、将希ちゃん。200兆円払うのはポーズなの。」
「ポーズ何ですか？」

藤中総理の言葉に天野国防大臣はすっとんきょうな声をあげた。

「ポーズに決まってるでしょ、国を買収するのよ。買収されて主権が日本連邦の連邦領にオーストラリアは成るのよ？」

「はい……………」

辻大蔵大臣の話に天野国防大臣は首を傾げながら答えた。

「まだ分からないんですか？主権が無い領土が200兆円貰っても使い道が無いんです。はっきり言えば200兆円を元手にオーストラリアを開発するんです！！」

業を煮やした中野総務大臣が声を張り上げながら言った。

「なあゝる。」

天野国防大臣は納得したように頷いた。

「開発の為の初期投資何ですね。どう開発するんですか？」

「まだ白紙状態ね。一応国防総省でも基地建設や演習場建設の計画を考えなさい。」

「任せてください。」

「可愛いわね。」

藤中総理の言葉に辻大蔵大臣と中野総務大臣は頷いた。

「将希ちゃん、貴男は私達とずっと一緒よ。100年後も200年後も、未来永劫一緒よ。私達4人を引き裂く者の存在はいない、存在しても消す。」

「愛は永遠。永遠に愛し続け、互いを求め合う。」

「この幸せを分かち合えるのは私達4人だけ。他の誰にも邪魔はさせない。」

何時しか3人は立ち上がり、天野国防大臣を取り囲んでいた。

「い、如何なさい……ましたか？」

「何も無いわよ。ただ将希ちゃんの泣き声が聞きたいだけ。」

藤中総理は天野国防大臣の耳元で囁いた。その艶めかしい声は脳にクリティカルヒットし、天野国防大臣は足から崩れ落ちた。

「さあ、楽しみの時間よ。」

「血を垂れ流し、」

「泣き叫ぶ将希ちゃんの姿、」

「」「興奮するわ!!!!」「」

「!?!」「」

いきなり嘔み付いてきた3人に天野国防大臣は声も出せなかった。

「(ヤンデレどころじゃ無い。)」

甘美な誘惑に陥れるられた天野国防大臣は、底無しの快樂の渦にその身を委ねた。

その頃サウジアラビアでは……

サウジアラビア内閣閣議

午前3時45分

サウジアラビア首都リヤド首相官邸地下2階国家戦略作戦室

ややこしい名前だが、つまりは日本連邦のオペレーションルームと同じである。

「日本連邦の動きはどうなの？」

サウジアラビア首相バーバラは国防大臣に尋ねた。

「はい、日本連邦は余裕綽々のようです。」

国防大臣はリモコンを操作し、液晶画面を切り替えた。

「海軍は全艦隊が帰港しており、統合艦隊も帰港しています。」

液晶画面には衛星画像が映し出された。尚、『統合艦隊』とは連合艦隊の中東連合側の呼び方である。

「鈴木商店の私設艦隊は活発に亜細亜海域を走り回っています。AUが沈めたのは1個艦隊だけです。根本的に私設艦隊の息の根は止められていません。」

AUが勝ち取った大金星は、中東各国にも轟いていた。何せ世界第二位の海軍と言われる鈴木商店の私設艦隊、海上自衛隊連邦商路護

衛艦隊の1個艦隊を全滅させたのである。その戦果は大きい。しかし鈴木商店傘下の日本警備保障株式会社が保有する軍事力は、生半可な規模では無い。優に1中流国の軍事力を凌いでいる。そんな武力を有する『警備員』も相手にしなければ成らない中東連合・AUは対策を急いでいた。

「陸軍・空軍は鈴木パークと改名された中国に、一部駐留しています。この駐留部隊はそのまま基地が完成すると同時に、配備されると予想されます。」

「日本連邦としての動きは無いのかしら？」

バーバラ首相は外務大臣に質問の矛先を向けた。

「日本連邦は藤中の独裁を推し進めるのに、力を注いでいます。抵抗勢力は完全に駆逐され、連邦翼賛会が成立しました。もはやあの国は藤中と辻・中野に私的に所有されている、と言っても過言では無いでしょう。」

「国民はどうしているの？」

財務大臣が外務大臣に質問した。

「国民は完全に掌で遊ばれています。強烈な藤中の決断力を国民は逆に評価しています。次期侵攻計画の議論が国防総省で紛糾している時も藤中は一言で纏めました。連邦翼賛会もオーストラリア買収も同じです。」

「国民を掌で遊んでいるのはこちらも同じよ。要は日本連邦に動きは無い、そう言う事？」

「はい。」

外務大臣はそう言いながら頷いた。

「あの国は世界に冠たる軍事国家よ。あらゆる軍事力を有し、敵対する輩は手加減する事無く滅ぼした。虐殺擬いの攻撃も躊躇なく行って来たわ。何せ世界初の核攻撃をアメリカに対して行った国だからね。そんな国と戦争を行う訳だから、当然覚悟はしたわ。だけど戦争は始めたからには、勝たなければ意味が無い。今回の戦争もそう。無敗の国日本連邦と、私達は存亡をチップに賭けて戦うの。私達が日本連邦を主力とする連合国に勝利し世界を統一させるか、日本連邦が強大な軍事力を背景に私達を叩き潰し世界を統一するか。そのどちらかであり、それ以外に無いの。この戦争は地球上から陣営に分けた対立を、世界統一へ向けた方向に向ける為の戦争なの。勝った方が地球を統一する権利を有し、宇宙への進出を許される。日本連邦は月へ進出して基地を建設してるけどね。けど世界統一戦争に間違いは無いわ。世界各国はそれぞれ信じた国家を盟主に頑張っている。連合国は日本連邦を、中東連合は私達サウジアラビアを。私達はその信頼を現実の物にしなければならぬ。必ずや日本連邦・連合国に勝利し、世界を統一させると。」

バーバラ首相の言葉に、閣僚達は大きく頷いた。彼女達も気合を入れ直した。今迄よりも桁違いに強大で破壊神・終末の悪魔等々、数多くの別名を冠する日本連邦が相手なのである。生半可な気持ちで戦うと本当に抹殺される。今更ながら彼女達は現実を、バーバラ首相の言葉で思い出した。

真実を求めて

2035年7月18日午前9時

日本連邦首都東京霞ヶ関日本連邦中央情報捜査局地下3階資料室

日本連邦の対外情報を捜査し、場合によっては工作員を派遣して対象を暗殺する諜報機関となっている。何せ世界に冠たる軍事超大国の諜報機関である為、諜報活動は非常に活発だ。

その諜報機関の資料室ともなれば資料は膨大な量になる。あまりにも量が多過ぎて探しだすにはパソコンに求める情報を打ち込んで、資料の場所を表示してもらいそこへ行かないといけない。

そんな資料室の人目に付かない隅のほうに天野国防大臣が「1人」で居た。これは異常な光景である。平時も当然ながら戦時の真つ只中に、副総理の立場にある日本連邦ナンバー2の国防大臣が1人で行動しているのだ。これは何か1人で行動しなければならない事態が発生したのかもしれない。そうでもなければ1人で行動する訳が無い。

天野国防大臣は壁にもたれかかると、資料棚を横目で見た。棚と棚の間は高く、ファイルを置いててもファイルの天辺と棚の間は、5センチ程空いていた。その隙間の向こう側、資料棚の反対側に女性が同じようにもたれかかっていた。

「大臣、極秘情報を入手しました。」

聞こえてきたのは、明らかに藤中総理の声ではない。しかし女性の緊張感と話の内容から考えると、浮気相手では無いようだ。まあ天野国防大臣に浮気をする勇氣も度胸も理由も無いだろう。仮に浮気をしたとしても浮気相手は藤中総理・辻大蔵大臣・中野総務大臣の

手によって惨殺され、天野国防大臣は3人によって暴行を受けた後、
精気を奪われるまでレイプされるだろう。

「私の予感は何？」

「当たってました。」

「……そうか。」

天野国防大臣は落ち込んだ口調で答えた。

「これが詳しい報告書です。」

女性はそう言うと分厚い書類を隙間から差し出した。天野国防大臣はそれを受け取ると、上着の内ポケットから封筒を取り出した。

「ありがとうございます、これが報酬の1億円の小切手だ。」

女性は封筒を受け取ると中から小切手を取り出した。

「うわあ、こんなに0の多い小切手なんて初めて見ました。」

「それに見合うだけの危険な依頼をこなしてくれたんだ。当然だよ。」

天野国防大臣はうつすらと笑みを浮かべながら、女性に語り掛けた。

「それでは私はこれで戻ります。大臣、これからどうしますか？」

「私の奥さん達が計画した陰謀を暴いてみせるよ。」「解りました。頑張ってください。」

「ありがとうございます。君もこれから注意して行動してくれ、私のせいで君は命を狙われるかもしれない。」

「大丈夫です。安心して下さい。」

「そうか、なら気を付けて。」

「それでは。」

女性は足早に、しかし足音を発てずに去って行った。残った天野国防大臣は書類に目を通し始めた。

天野国防大臣の言った『奥さん達が計画した陰謀』とは、常々天野国防大臣が疑問に思っていた事である。それは今回の同時多発テロについてである。世界一の防空態勢を誇る日本連邦空軍も民間機は捕捉するだけの任務となる。その商業活動を逆に利用される形となり、同時多発テロが発生した。内閣総理大臣の命令が無ければ空軍は民間機を撃墜出来ない。しかしそれは間に合わなかった、というのが現在の通説である。だが天野国防大臣はこの同時多発テロに陰謀めいた物を感じていた。そしてそれを解明する為、自分の指揮下にあり尚且つ諜報活動が出来るとの理由からCIAが選ばれた。国防総省の傘下にある為、天野国防大臣も指揮権があると言っているのである。そして先程の女性（CIAでも1、2を争う工作員である）に極秘調査として依頼したのだ。その結果が分厚い書類に書かれている。

「……やはりそうか。」

天野国防大臣は報告書をざっと読み終わると、深い溜め息と共に呟いた。

天野国防大臣が感じていた陰謀めいた物、それは的中していた。藤中総理は上戸CEOに命じ傘下企業の『日本航空株式会社』のN-777を遠隔操作出来るように細工をしたのだ。その飛行機は同時多発テロ当日に予定通り離陸し、突如として遠隔操作されそれぞれの目標に激突した。そして藤中総理はそれら一連のテロをイルカイダの犯行と断定、それを支援する国々も糾弾し国連総会で制裁決議を可決。現在の第三次世界大戦となった。全ては仕組まれていたのだ。しかも辻大蔵大臣・中野総務大臣も事態を知っておきながら藤中総理の計画に賛同。姪の上戸CEOに至っては喜んで計画に賛同した。何せ戦争が起きれば儲かるのだから当然であろう。そしてこの戦争により藤中内閣の支持率はうなぎ登りに上昇。完全に国民の信頼を勝ち取った。それが先日の連邦翼賛会発足にも繋がった。つまりこの戦争で日本連邦は完全に藤中総理の支配する私物となったのだ。現在の暁美女帝陛下は政治に対して完全不介入を明言しており、軍事にも不介入を決定している。日本連邦の象徴を自負しているのだ。これにより事実上藤中総理が日本連邦の支配者となったのである。それに辻大蔵大臣・中野総務大臣も片棒を担ぎ、上戸CEOも経済界を牛耳る支配者として協力した為、この4人の統治・支配が完成した。そして日本連邦軍は世界を統一すべく、中東・アフリカへ総攻撃を計画中である。

つまりは藤中総理の独裁を『世界制覇』と言う支配者なら誰もが夢見る形へと成し遂げようとしていた。

「だが此れをもう阻止する手は無いだろう。」

天野国防大臣はそう小さく呟くと、資料室を後にした。

連邦中央情報捜査局駐車場

天野国防大臣に書類を渡した女性は足早に自分の車へと向かっていった。ポケットにはあの小切手が入っており、女性はそれをポケットの上から確かめた。天野国防大臣からは鈴木銀行で引き出した後、直ぐに高飛びする事を言われていた。藤中総理の陰謀を暴く為、極秘情報を入手した事がバレると確実に命を狙われる、と天野国防大臣は危惧しており高飛びを進めた。そこで彼女は姉の住んでいる台湾州台湾へ行こうと決めた。

女性は車の鍵を開け、乗り込んだ。そしてエンジンを点けようと鍵を差し、捻った。

しかしエンジンか掛からなかった。

「何で!？」

彼女はそう言いながら何回もエンジンを点けようとした。だが一向にエンジンは点かない。

車を諦めた彼女は降りようと、ドアを開けようとしたが

ガチャガチャ

ドアは開かなかった。

「何だよー!!」

彼女は全てのドアへ飛び付いたが、全てのドアが開かなかった。そこで窓ガラスを割って脱出しようと彼女は、思い切り窓ガラスを殴ったが窓ガラスはびくともしなかった。

「何で……」

窓ガラス位割る力はある筈だが、窓ガラスはびくともしなかった。そう、まるで防弾ガラスのように。

「まさかね。」

彼女はそう言いながら零式拳銃を胸ポケットから出すと、窓ガラスへ向けて発砲した。

ビシッ

窓ガラスは割れる事無く、少しひび割れしただけであった。

「何で……」

彼女は頭を抱えた。そこで携帯電話の存在を思い出し、電源を入れた。

しかし待ち受け画面の左上に表示されていたのは、『圏外』の赤文字であった。

「そんな!?!」

彼女は絶句した。こんな東京のど真ん中で圏外なんてあり得ない。彼女は必死に携帯電話を振ったりしながら、電波を求めた。

その時、カーナビの画面が点いた。

エンジンを掛けていないのにカーナビが点く訳が無い。彼女は不思議な事もあるんだな、と思いながらカーナビの画面を見た。

『とんでもない事をしでかしたわね。』

「!?!」

彼女の心臓が恐怖のあまり縮こまった。

声は明らかに藤中総理の声であった。

『私を甘く見たわね。牝豚の1匹が色々かき回っている事はとっくにお見通しゆ。将希ちゃんが指示を出した事もね。』

カーナビの画面に藤中総理が現れた。彼女の額には汗が噴き出ていた。

『貴女のせいで彼女は罪も無いのに死ぬ事になったわ。貴女の大好きなお姉さんだったのにな。』

藤中総理がそう言うと、カーナビの画面は切り替わった。

「いやあ~~~~」

彼女はその映像を見ると泣き叫んだ。

映像には腹を切り裂かれ、心臓から胃・腸等臓器を引き裂かれ、両手両足を切断され乳房も切断され殺害された姉の無惨な姿が映し出

された。

『可哀相に泣いて命乞いをしていたわ。』

藤中総理がそう言うと、再び画面が切り替わり映像が映し出された。それは彼女の姉が全裸にされ泣き叫びながら、必死に命乞いをする姿が映されていた。

『助けて下さい！！助けて下さい！！命だけは！！』

映像は彼女の姉が殺害されていく様子が映されていた。

「悪魔！！独裁者！！あなたなんか殺してやる！！お姉ちゃんの仇よ！！牝豚はあんたよ！！クソババア！！」

姉を殺された事に怒り心頭の彼女は藤中総理に罵声を浴びせた。

『死ぬのは貴女よ。』

「えっ……」

藤中総理はそう呟くと何かのスイッチを押した。するとカーナビの右上にカウントダウンが表示された、それは僅か1分をカウントダウンし始めた。

『将希ちゃんにもしつかりとお仕置きしないとね。それじゃ、あの世でお姉ちゃんと楽しみなさい。牝豚が。』

藤中総理がそう言い終えると映像は消えた。しかしカウントダウンは続いていた。

「早く逃げないと!!」

彼女は有りつたけの弾丸を窓ガラスに撃ち込んだ。しかし窓ガラスはひび割れするだけだった。

『そつだ、言い忘れてたけど。』

再びカーナビに藤中総理が映し出された。

『貴女の車は私の用意した車に入れ替えたから。窓ガラスは防弾ガラスにして、一度乗ると内側からは開けられないようにしているわ。それから携帯電話の電波も通さないから。爆弾もあるからね。バイバイ。』

藤中総理がそう言つと、次こそ映像は消えた。

「……もう無理ね。」

彼女は全身の力を抜き、座席にもたれ込んだ。カウントダウンは残り10秒となっていた。

「お姉ちゃん、今逝くよ。」

彼女がそう言つると同時に、

ドガアアアアン

車は大爆発を起こした。

爆発で吹き飛んだ肉片や金属片が降り注ぐ中、一枚の紙切れがふわふわと落ちてきた。

少し焦げていたが1億円の小切手であった。

国防大臣の受難

午後1時

首相官邸2階応接間

「……………」

天野国防大臣は床に正座させられていた。藤中総理と辻大蔵大臣・中野総務大臣はソファーに足を組んで座っている。そして上戸CEOも東京に来ており、ソファーに座っていた。

「将希ちゃん、私達は悲しいわ。」

「残念よ。」

「信じたくない。」

「将希さんには知って欲しくありませんでした。」

4人は思い思いの言葉を口にした。

「私は真実を知りたかった。真の第三次世界大戦勃発の経緯を知りたかったのです。」

天野国防大臣は自分の目の前に置かれた書類を見つめながら答えた。そしてその目からは涙が溢れていた。天野国防大臣が国防総省に戻ろうと地上まで戻って来た時に、爆発を知ったのである。それを瞬時に天野国防大臣は諜報員が暗殺されたと判断した。

「何が悲しいの？将希ちゃんがそんな事をしなければ彼女は死ななかつたのよ？」

「早紀さん達は悪魔です！！何も殺す事は無かつたはずですよ！！…」

…いいえ、自らの国民をも殺す何て鬼畜の成せる事です!!」

天野国防大臣は涙を流しながら言った。

「言ってくれるじゃない。」

藤中総理はソファー立ち上がると、天野国防大臣に近付くと思いきり腹を蹴った。

「グハツ!!」

「誰が悪魔ですって?」

藤中総理は天野国防大臣の髪の毛を掴むと耳元で囁いた。

「…藤中総理達です!!」

「ふん。」

「そう。」

「私も?」

「悲しいです。」

そう口々に言うと、辻大蔵大臣・中野総務大臣・上戸CEOは寝室へ入って行った。藤中総理は天野国防大臣を床に叩きつけると、手足を縛り上げた。そして口をガムテープで塞いだ。

「逃げちゃダメよ。」

藤中総理もそう言うと、寝室へ入って行った。

「(逃げないと!!)」

天野国防大臣はもぞもぞと体を動かしながら扉へと向かった。

「何してるの？」

「!？」

藤中総理の声に天野国防大臣は首を向けた。そして藤中総理の持っている物に目を見開いた。

「大丈夫よ。サイレンサーを付けているから。」

藤中総理はそう言うと、不敵な笑みを浮かべた。藤中総理達は九式小銃を持っていた。

「弾倉はちゃんと40発入っているわよ。」

辻大蔵大臣は安全装置を外すと天野国防大臣の足を撃ち抜いた。

「……」

天野国防大臣は歯を食い縛って痛みを耐えている。

「早い。」

「ゴメン。」

藤中総理が辻大蔵大臣に注意した。

「それじゃ皆、構えて。」

藤中総理の言葉に3人は九式小銃を構えた。

「（殺される!!!）」

天野国防大臣は目を閉じた。

「発射!!!」

パスパスパスパス

藤中総理の合図で全員が引き金を引いた。弾は天野国防大臣に吸い込まれ、あらゆる場所を撃ち抜いた。そして1発が眉間を撃ち抜き、天野国防大臣の意識は深い闇に沈んだ。

「目を開けなさい。」

「……ん？」

藤中総理の言葉に、天野国防大臣は目を開けた。

「……早紀さんにそっくりな天使。」

「何寝呆けてるの!!!」

バシッ!!!

「痛い!!!」

藤中総理は思いっきり天野国防大臣の頬を殴った。

「痛い……って事は死んでないし、夢でも無い？」

「そうよ。将希ちゃんには死んでないわよ。……いいえ、正確には『死ねない』のよ。絶対に。」

「死ねない!？」

天野国防大臣はそう言いながら飛び起きた。

「やっと起きた。」

「漸くですか。」

「少し心配しました。」

辻大蔵大臣・中野総務大臣・上戸CEOが思い思いの事を口にした。

「早紀さん!! 『死ねない』とはどういう事ですか!! 教えて下さい!!」

天野国防大臣は藤中総理の肩を掴んで尋ねた。

「点滴したでしょ?この前に。」

「……………しました。」

「それよ。原因は。」

「点滴がですか!! ……イタタタ」

天野国防大臣は叫んだ。しかしとてつもない頭痛に顔をしかめた。

「ダメよ、まだ『脳が再生した』ばかりだから。」

「脳が再生!! ……」

再び叫んでしまった天野国防大臣は頭を押さえてしゃがみ込んだ。

「そうよ、脳が再生したのよ。」

「細胞が再生させたのよ。」

「だから何をしても大丈夫です。」

「私の傘下企業が発明した新薬です。此れで私達は不老不死を手に入れました。もう死ぬことはありません。」

「……」

天野国防大臣は呆然と、4人を見つめた。

「不老……不死？」

「そう。死にもしない、何処を撃たれても、斬られても必ず再生する。」

藤中総理は天野国防大臣を抱き締めると耳元で囁いた。

「だからもう私達の愛は永遠なのよ。」

「はい。もう何でも良いです。皆さんに着いていきます。」

天野国防大臣ははつきりと答えた。

「その前に、私達を悪魔って言った事の代償を体で払ってもらわないとね。」

藤中総理の言葉に、天野国防大臣は逃げようと扉へ向かった。

「カハッ!？」

しかし首を引っ張られ、床に倒れこんだ。

「また首輪を……」

「だって将希ちゃんは私達の性奴隷みたいなものよ？」

「首輪は当然。」

「可愛いわよ。」

「今日は私も参加します。私も悪魔呼ばわりされたんだからね。」

「ハハ、ハハハ。」

天野国防大臣はただただ、薄い笑みを浮かべるしか無かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7946f/>

第七独立機動艦隊～威風堂々!!世界の覇者～

2011年10月2日20時06分発行